北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 徳丸高堰Ⅱ遺跡
# 徳丸仲田Ⅲ遺跡
# 西善尺司Ⅲ遺跡
# 下増田常木Ⅱ遺跡
# 下増田越渡Ⅳ遺跡

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 徳丸高堰（とくまるたかぜき）Ⅱ遺跡
# 徳丸仲田（とくまるなかだ）Ⅲ遺跡
# 西善尺司（にしぜんしやくじ）Ⅲ遺跡
# 下増田常木（しもますだつねぎ）Ⅱ遺跡
# 下増田越渡（しもますだこえど）Ⅳ遺跡

1999

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 序

北に赤城山、西に榛名山、南西に妙義山の上毛三山がそびえ、その赤城山と榛名山の裾野の間を南北に利根川が流れる、水と緑のあふれた地に前橋市はあります。

前橋は古代よりの文化に富んだ地で、東国の奈良と称されています。今から二万八千年前の旧石器から９基を数える国指定の古墳、関東の華とうたわれた前橋城、明治からの発展を物語る群馬県庁などの近代化遺産を始めとして多くの文化財があります。

自然環境に恵まれたこの地では、人々が古代から生活を営んできた跡が市内いたるところに見られます。古代東国の中心地としての生産力のある土地とも言え、埋蔵文化財の宝庫ともいえます。古代の遺跡の発掘調査による歴史を変える発見が毎年のようにあり、本年の発掘調査でも貴重な資料を得ることができました。

前橋市南部地区は市内でも従来遺跡のあまりない地区と言われてきましたが、古代から近世の遺跡が近年の調査で次々と発見されています。縄文時代草創期の土器が徳丸仲田遺跡より発見されるなど、地域の歴史を変える貴重な遺跡も見つかっています。

この前橋南部地区より東部に横断して建設される北関東自動車道はそのほとんどが遺跡地であり、前橋市ではその市事業地である側道部分の発掘調査を実施しました。平成10年度は古墳時代から平安時代の水田跡や住居の跡が発見されました。

前橋南部・東部地区にとっての始めての発見も多く、前橋市の歴史を解明する貴重な資料を得ることができました。発掘調査は今後も続きますが、また新たな発見が期待されます。

発掘調査にあたりまして、ご協力をいただきました北関東自動車道対策室、県文化財保護課、県埋蔵文化財調査事業団、地元関係者、酷暑のなか調査に従事されました皆様方に感謝とお礼を申し上げます。

平成11年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団
団長　渡辺勝利

# 例　言

1．本書は北関東自動車道側道道路改良事業に伴い、記録保存のために事前調査された徳丸高堰Ⅱ遺跡、徳丸仲田Ⅲ遺跡、西善尺司Ⅲ遺跡、下増田常木Ⅱ遺跡、下増田越渡Ⅳ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長　渡辺勝利）が受諾したもので、発掘調査は委託を受けた山武考古学研究所が埋蔵文化財発掘調査団の指導のもとに実施した。

3．発掘調査は平成10年４月23日より平成11年３月19日の間に実施した。

4．遺跡の区割りは埋蔵文化財発掘調査団の指導により、本文掲載の表（表２）の通りに行われている。

5．遺跡の所在地および調査面積・担当者は、以下の通りである。

| 遺　跡　名 | 所　在　地 | 調査面積 | 調査担当者（山武考古学研究所） |
|---|---|---|---|
| 徳丸高堰Ⅱ遺跡 | 前橋市徳丸町68-1他 | 1,218m$^2$ | 千葉孝之 |
| 徳丸仲田Ⅲ遺跡 | 前橋市徳丸町75-1他 | 3,402m$^2$ | 千葉孝之　矢島博文　野平仲一　大越直樹　長谷川秀久 |
| 西善尺司Ⅲ遺跡 | 前橋市西善町1,166他 | 370m$^2$ | 大越直樹　矢島博文　千葉孝之 |
| 下増田常木Ⅱ遺跡 | 前橋市下増田町1,541-1他 | 614m$^2$ | 近藤晋一郎 |
| 下増田越渡Ⅳ遺跡 | 前橋市上増田町1,535他 | 2,449m$^2$ | 山崎悟　近藤晋一郎　高階敏昭 |

6．本書の編集は千葉孝之・近藤晋一郎・間宮正光・大賀健が行ない、文責は以下の通りである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| Ⅰ | 序章 | 第１章 | 宮内　毅 |
| | | その他 | 千葉孝之　高階敏昭　大賀　健 |
| Ⅱ | 徳丸高堰Ⅱ遺跡 | 遺構・遺物 | 千葉孝之　間宮正光 |
| Ⅲ | 徳丸仲田Ⅲ遺跡 | 遺構・遺物 | 千葉孝之　間宮正光 |
| Ⅳ | 西善尺司Ⅲ遺跡 | 遺構 | 千葉孝之　間宮正光 |
| | | 遺物 | 松田政基 |
| Ⅴ | 下増田常木Ⅱ遺跡 | 遺構 | 近藤晋一郎 |
| Ⅵ | 下増田越渡Ⅳ遺跡 | 遺構 | 近藤晋一郎 |
| | | 遺物 | 松田政基 |

7．本調査において得られた図面・写真等の記録類、及び遺物は、前橋市教育委員会で保管している。

8．調査に際しては下記の諸機関にご指導・ご協力をいただいた。

群馬県教育委員会、前橋市北関東自動車道対策室、前橋市教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団、新成田総合社、㈱東日本重機、須賀工業㈱、前橋文化財研究所、開成測量㈱、Ｊ・Ｔ空撮、降龍山善昌寺

9．発掘調査及び整理調査参加者

青木集一　青木貞子　赤星惇子　石井百々子　石関博　石関道子　石田満理　糸井栄子　糸井重信　糸井政子　糸井ふみ　伊藤順子　今井弘子　今泉郁美　宇津木明子　梅山淳　江頭宏枝　江口弘子　大賀良助　大澤義雄　大山敬子　落合高男　小野里岩雄　小野里みと　小野沢昌子　鎌塚重治　神山祐吉　木村春代　斉藤明　板垣てる子　桜井れい　佐々木房子　佐野勝次郎　島田儀一郎　新保富恵　新保昌子　末廣弘子　須藤和春　高橋由治　都丸主女作　角田玉雄　中川宗彦　奈良あい子　萩原専一　萩原真理子　萩原洋子　羽鳥繁夫　羽鳥なを　原嶋サイ子　半澤利江　蛭川富太郎　藤曲ひろ子　星美和　堀越道男　堀越律子　丸山保治　室田毅　室橋美智子　横田義雄

# 凡　例

1．挿図中に使用した北方位は座標北である。

2．挿図に建設省国土地理院発行１／2.5万地形図（前橋・高崎・大胡・伊勢崎）と前橋市都市計画課発行の１／2,500原形図『73・74・75・76』、明治21年陸地測量部発行１／20,000地方迅速図（伊勢崎町・倉賀野驛）を使用した。

3．遺跡の略称は以下の通りである。

徳丸高堰Ⅱ遺跡　10G-26

徳丸仲田Ⅲ遺跡　10G-27

西善尺司Ⅲ遺跡　10G-28

下増田常木Ⅱ遺跡　10F-4

下増田越渡Ⅳ遺跡　10F-5

4．各遺構の略称は次の通りである。

Ｈ－住居跡　Ｄ－土坑　Ｉ－井戸　Ｋ－掘立柱建物跡　Ｗ－溝

道－道路状遺構、　Ｐ－柱穴　Ａ－畦畔　堀－堀　竪－竪穴状遺構　方周－方形周溝墓

5．掲載した遺構・遺物の縮尺は以下の通りである。

遺跡位置図　1/50,000・1/25,000　調査区区割り図　1/2,500　遺跡全体図　1/300

各遺跡別調査区位置図・調査区区割り対比図　1/3,000

土層堆積模式図　1/20・1/30・1/80

遺構実測図　1/60、1/160

遺構セクション図・エレベーション図　1/30・1/60・1/80

遺物実測図　土器・土製品・鉄製品　1/3　古銭　1/1

石器・石製品　1/3（石鏃1/1）

6．掲載したスクリントーンは以下を示す。

…調査区
平成９年度

…調査区
平成10年度

…畦畔

…焼土

…軽石
As-B

…９世紀前半
洪水層

…軽石
Hr-FA

…軽石
As-C
（下増田常木Ⅱ遺跡では Hr-FP）

…内面黒色
処理

…灰釉
施釉範囲

7．遺物観察表の計測値（　）は推定復元値を示す。

8．以下のテフラは略号を使用する。

浅間Ｂ軽石……As-B　浅間Ｃ軽石（４世紀前半）……As-C

榛名二ツ岳渋川テフラ（６世紀初頭）……Hr-FA

# 目　次

序
例言
凡例
目次

Ⅰ　序章
第１章　調査に至る経緯……１
第２章　遺跡の地理・歴史的環境……１
第３章　調査の方法
第１節　遺跡および調査地区の呼称……７
第２節　調査の方法……８

Ⅱ　徳丸高堰Ⅱ遺跡
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡……９
第２章　調査の経過……11
第３章　標準堆積土層……12
第４章　遺構と遺物
第１節　Ｂ区北側道……13
第２節　Ｃ区北側道……15
第５章　まとめ……16
写真図版

Ⅲ　徳丸仲田Ⅲ遺跡
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡……17
第２章　調査の経過……19
第３章　標準堆積土層……21
第４章　遺構と遺物
第１節　Ａ区北側道……23
第２節　Ｃ区北側道……24
第３節　Ｃ区南側道……24
第４節　Ｄ区北側道……26
第５節　Ｄ区南側道……26
第６節　Ｅ区北側道……27
第７節　Ｅ区南側道……27
第８節　Ｆ区北側道……27
第９節　Ｆ区南側道……28
第10節　Ｇ区北側道……28
第11節　Ｈ区北側道西地区……28
第12節　Ｈ区北側道東地区……28
第５章　まとめ……31
写真図版

Ⅳ　西善尺司Ⅲ遺跡
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡……33
第２章　調査の経過……35
第３章　標準堆積土層……35
第４章　遺構と遺物……35
第５章　まとめ……37
写真図版

Ⅴ　下増田常木Ⅱ遺跡
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡……39
第２章　調査の経過……41
第３章　標準堆積土層……41
第４章　遺構……42
第５章　まとめ……42
写真図版

Ⅵ　下増田越渡Ⅳ遺跡
第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡……43
第２章　調査の経過……45
第３章　標準堆積土層……47
第４章　遺構と遺物
第１節　Ａ区北側道……49
第２節　Ｂ区北側道……49
第３節　Ｃ区南側道……60
第４節　Ｄ区北側道……65
第５節　Ｄ区南側道……67
第６節　Ｅ区北側道……67
第７節　Ｇ区北側道……67
第５章　まとめ……70
写真図版
抄録

# 挿図目次


Ⅰ　序章
第１図　遺跡の位置と路線内の遺跡……2
第２図　徳丸高堰・徳丸仲田・西善尺司遺跡の位置（迅速図）……3
第３図　下増田常木・下増田越渡遺跡の位置（迅速図）……3
第４図　調査区区割り対比図(1)徳丸高堰遺跡……4
第５図　調査区区割り対比図(2)徳丸仲田遺跡……折図1
第６図　調査区区割り対比図(3)西善尺司遺跡……5
第７図　調査区区割り対比図(4)下増田常木遺跡……6
第８図　調査区区割り対比図(5)下増田越渡遺跡……折図2

Ⅱ　徳丸高堰Ⅱ遺跡
第９図　周辺の遺跡……9
第10図　調査区位置図……10
第11図　標準堆積土層……12
第12図　Ｂ区北側道全体図……折図3
第13図　Ｃ区北側道全体図……折図4
第14図　Ｂ区北側道１・２号堀……14
第15図　Ｂ区北側道出土遺物……15

Ⅲ　徳丸仲田Ⅲ遺跡
第16図　周辺の遺跡……17
第17図　調査区位置図……18
第18図　標準堆積土層……20
第19図　Ａ区北側道全体図……22
第20図　Ａ区北側道１号溝……23
第21図　Ｃ区北側道全体図……折図5
第22図　Ｃ区南側道全体図……25
第23図　Ｄ区北側道全体図……折図6
第24図　Ｄ区南側道全体図……折図7
第25図　Ｅ区北・南側道全体図……折図8
第26図　Ｆ区北・南、Ｇ区北側道全体図……折図9
第27図　Ｈ区北側道西地区全体図……29
第28図　Ｈ区北側道東地区全体図……30
第29図　Ｈ区北側道東地区３号溝……30
第30図　出土遺物……30
第31図　本遺跡と力丸城の位置……32
第32図　本遺跡検出の中世館跡配置図……32

Ⅳ　西善尺司Ⅲ遺跡
第33図　周辺の遺跡……33
第34図　調査区位置図……34
第35図　標準堆積土層……35
第36図　西地区・東地区全体図……36
第37図　１号堀平面図・断面図……38
第38図　７号土坑・同出土遺物、１号溝出土遺物……38

Ⅴ　下増田常木Ⅱ遺跡
第39図　周辺の遺跡……39
第40図　調査区位置図……40
第41図　標準堆積土層……41
第42図　全体図……折図10

Ⅵ　下増田越渡Ⅳ遺跡
第43図　周辺の遺跡……43
第44図　調査区位置図……44
第45図　標準堆積土層……47
第46図　Ａ区北側道全体図……48
第47図　Ｂ区北側道全体図(1)……50
第48図　Ｂ区北側道１・２号住居跡、41号土坑……52
第49図　Ｂ区北側道７・８・10号住居跡……53
第50図　Ｂ区北側道出土遺物(1)……54
第51図　Ｂ区北側道出土遺物(2)……55
第52図　Ｂ区北側道出土遺物(3)……56
第53図　Ｂ区北側道出土遺物(4)……57
第54図　Ｂ区北側道全体図(2)……58
第55図　Ｂ区北側道1･2号掘立柱建物跡、10･11･13号溝……折図11
第56図　Ｂ区北側道大溝・同出土遺物……59
第57図　Ｃ区南側道全体図(1)……60
第58図　Ｃ区南側道１号井戸・同出土遺物……61
第59図　Ｃ区南側道３・４・５号住居跡・同出土遺物……62
第60図　４号住居跡出土遺物、30号土坑・同出土遺物……63
第61図　Ｃ区南側道全体図(2)……63
第62図　Ｃ区南側道１号方形周溝墓……63
第63図　Ｄ区北側道全体図……64
第64図　Ｄ区北側道６号住居跡・同出土遺物……65
第65図　Ｄ区南側道、Ｅ区北側道全体図……66
第66図　Ｇ区北側道出土遺物……68
第67図　Ｇ区北側道全体図(1)……折図12
第68図　Ｇ区北側道全体図(2)……折図13
第69図　遺構外出土遺物……69

# 表　目　次

Ⅰ　序章
表１　前橋管内北関東自動車道路関連遺跡一覧…２
表２　地区別遺跡呼称一覧……７

Ⅱ　徳丸高堰Ⅱ遺跡
表３　１・２号堀計測表……15
表４　遺物観察表……15

Ⅲ　徳丸仲田Ⅲ遺跡
表５　遺物観察表……31
表６　畦畔走向一覧……31
表７　溝走向一覧……31

Ⅳ　西善尺司Ⅲ遺跡
表８　遺物観察表……38
Ⅴ　下増田常木Ⅱ遺跡
Ⅵ　下増田越渡Ⅳ遺跡
表９　Ｂ区北側道住居跡一覧……51
表10　Ｃ区南側道住居跡一覧……61
表11　遺構一覧表……70
表12　Ｂ地区遺物観察表(1)……71
表13　Ｂ地区遺物観察表(2)……72
表14　Ｃ地区遺物観察表(1)……72
表15　Ｃ地区遺物観察表(2)……73
表16　Ｄ地区遺物観察表……73
表17　Ｇ地区遺物観察表……73
表18　遺構外遺物観察表……73
表19　遺構外遺物観察表……74

# 写真図版

Ⅱ　徳丸高堰Ⅱ遺跡
図版１　１　Ｂ区北側道全景
　　２　同　中世面１号堀
　　３　同　中世面２号堀
　　４　出土遺物
図版２　１　Ｃ区北側道全景
　　２　同　弥生時代以前面１号溝
　　３　同　As-B 下面土坑
　　４　同　As-B 下面ピット群
　　５　基本堆積土層

Ⅲ　徳丸仲田Ⅲ遺跡
図版３　１　Ａ～Ｆ区全景
　　２　Ａ区北側道 As-B 下面全景
　　３　同　As-C 混下面全景
　　４　同　As-C 混下面１号溝
　　５　同　弥生時代以前面全景
図版４　１　Ｃ区北側道 As-B 下面全景
　　２　同　As-B 下面畦畔
　　３　同　As-B 下面水田
　　４　同　As-B 下面ピット群
　　５　同　As-C 混下面全景
　　６　同　As-C 混下面１号土坑
　　７　同　弥生時代以前面全景
　　８　同　弥生時代以前面２号溝
図版５　１　Ｃ区南側道 As-B 下面全景
　　２　同　As-B 下面１号畦畔
　　３　同　２号畦畔
　　４　同　３号畦畔
　　５　同　As-C 混下面全景
　　６　同　As-C 混下面ピット
　　７　同　As-C 混下面２号溝
　　８　同　弥生時代以前面全景
図版６　１　Ｄ区北側道 As-B 下面全景
　　２　同　As-B 下面２号畦畔
　　３　同　FA に被覆された帯状遺構
　　４　同　FA 土層断面
　　５　同　As-C 混下面全景
　　６　同　As-C 混下面１号畦畔
　　７　同　弥生時代以前面全景
　　８　同　弥生時代以前面３号溝
図版７　１　Ｄ区南側道 As-B 下面全景
　　２　同　As-B 下面２号畦畔
　　３　同　As-C 混下面全景
　　４　同　As-C 混下面１号溝
　　５　同　As-C 混下面２号溝
　　６　同　弥生時代以前面全景
　　７　同　弥生時代以前面溝
　　８　同　弥生時代以前面溝土層
図版８　１　Ｅ区北側道 As-B 下面全景
　　２　同　As-B 下面２号畦畔
　　３　同　As-B 下面工具痕
　　４　同　As-C 混下面全景
　　５　同　As-C 混下面１号溝
　　６　同　As-C 混下面１号土坑
　　７　同　弥生時代以前面全景
図版９　１　作業風景
　　２　Ｅ区南側道 As-B 下面全景
　　３　同　As-B 下面１号畦畔断面
　　４　同　As-C 混下面全景
　　５　同　弥生時代以前面全景
　　６　Ｆ区北側道 As-B 下面全景

7　同　弥生時代以前面全景
8　同　弥生時代以前面１号溝
図版10　1　Ｆ区南側道 As-C 混下面全景
2　同　As-C 混下面土坑
3　同　弥生時代以前面全景
4　同　弥生時代以前面小掘込み
5　Ｇ区北側道 As-B 下面全景
6　同　As-C 混下面全景
7　同　あえぼり跡（昭和40年以前）
8　同　弥生時代以前面全景
図版11　1　Ｈ区北側道西地区 As-B下面全景
2　同　As-B 下面１号竪穴状遺構
3　同　As-B 下面１号畦畔・２号畦畔
4　同　As-C 混下面１号畦畔
5　Ｈ区北側道東地区中世館跡検出面全景
図版12　1　Ｈ区北側道東地区中世館跡検出面全景
2　同　中世館跡検出面３号溝
3　同　中世館跡検出面４号溝
4　同　旧石器時代試掘坑
5　作業風景
6　実測風景
7　出土遺物

Ⅳ　西善尺司Ⅲ遺跡
図版13　1　遺跡全景（空撮）
2　遺跡全景（空撮）
図版14　1　西地区 As-C 混下面１号堀全景
2　同　As-C 混下面全景
3　同　弥生時代以前面７号土坑
4　同　旧石器時代試掘坑
5　作業風景
6　調査前風景
7　出土遺物

Ⅴ　下増田常木Ⅱ遺跡
図版15　1　遺跡遠景（矢印部分）
2　近世面２号溝全景
3　同　土層堆積状況
4　同　３号溝土層堆積状況
5　同　５・６号溝全景
図版16　1　近世面４～６号溝全景
2　同　１号道路状遺構
3　９世紀前半洪水層下面１号畦畔
4　同　１号畦畔土層堆積状況
5　同　１・２号畦畔
6　同　１・２号畦畔
7　同　３号畦畔
8　同　１・２・３号畦畔

Ⅵ　下増田越渡Ⅳ遺跡
図版17　1　遺跡遠景
2　Ａ区北側道 As-B 下面全景
3　同　As-B 下面1･2号溝
4　同　９世紀前半以降大溝
5　同　As-B 下面　Ａ区北トレンチ
図版18　1　作業風景
2　Ｂ区北側道　As-B 下面14～16号溝
3　同　１号住居跡
4　同　遺物出土状況
5　同　カマド近景
6　同　２号住居跡
7　同　カマド近景
8　同　７号住居跡
図版19　1　Ｂ区北側道８号住居跡
2　同　遺物出土状況
3　同　９号住居跡
4　同　10号住居跡
5　同　41号土坑
6　同　９世紀前半以前面１号掘立柱建物跡
7　同　10･11号溝（道路状遺構）
8　同　９世紀前半以降大溝
図版20　1　Ｃ区南側道全景
2　同　１号井戸跡
3　同　遺物出土状況
4　同　２号井戸跡
5　同　土層堆積状況
6　同　３号住居跡・５号土坑
7　同　４号住居跡
図版21　1　Ｃ区南側道５号住居跡
2　同　１号方形周溝墓
3　同　土層堆積状況
4　Ｄ区北側道 As-B 下面全景
5　同　６号住居跡
6　同　９世紀前半洪水層下面全景
7　同　９世紀前半洪水層下面水口
8　同　As-C 混下面全景
図版22　1　Ｄ区南側道９世紀前半洪水層下面全景
2　同　As-C 混下面全景
3　Ｅ区北側道 As-B 下面全景
4　同　As-B 下面４号溝土層堆積状況
5　同　９世紀前半洪水層下面全景
6　同　土層堆積状況
7　同　As-C 混下面全景
8　同　As-C 混下面畦畔
図版23　1　Ｇ区北側道 As-B 下面基本堆積土層
2　同　As-B 下面畠跡
3　同　As-C 混下面水田跡
4　同　水口
5　同　水田跡
6　同　As-C 混下面15号溝
7　同　As-C 混下面畦畔
8　同　As-C 混下面水田跡
図版24　Ｂ区１・２号住居跡出土遺物
図版25　Ｂ区７～10号住居跡・41号土坑・大溝、Ｃ区30号土坑・井戸・Ｇ区畠出土遺物
図版26　遺構外出土遺物

# Ⅰ 序　章

## 第１章　調査に至る経緯

北関東自動車道に係わる埋蔵文化財発掘調査は、群馬県埋蔵文化財調査事業団により平成７年度から行われている。本市においても、本線北側および南側に側道の建設を予定しており、本線同様、埋蔵文化財包蔵地における工事であり事前の記録保存の発掘調査を行うこととなった。

このため、本市では平成９年度から前橋市北関東自動車道対策室より、発掘調査の依頼を受けて側道の調査を開始した。横手湯田遺跡を始め計４遺跡の調査が行われ、貴重なデータを得ている。

今年度の発掘調査は平成10年４月６日付で前橋市長萩原弥惣治より前橋市教育委員会あてに北関東自動車道側道道路改良事業に伴う本発掘調査の依頼がなされた。前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団はこれを受託し、４月21日に両者の間で本発掘調査の委託契約が締結された。

その後、前橋市埋蔵文化財発掘調査団は本発掘調査の委託契約を４月23日付で山武考古学研究所と締結し、発掘調査は前橋市埋蔵文化財発掘調査団の指導のもと、平成11年３月19日までの調査期間で実施された。

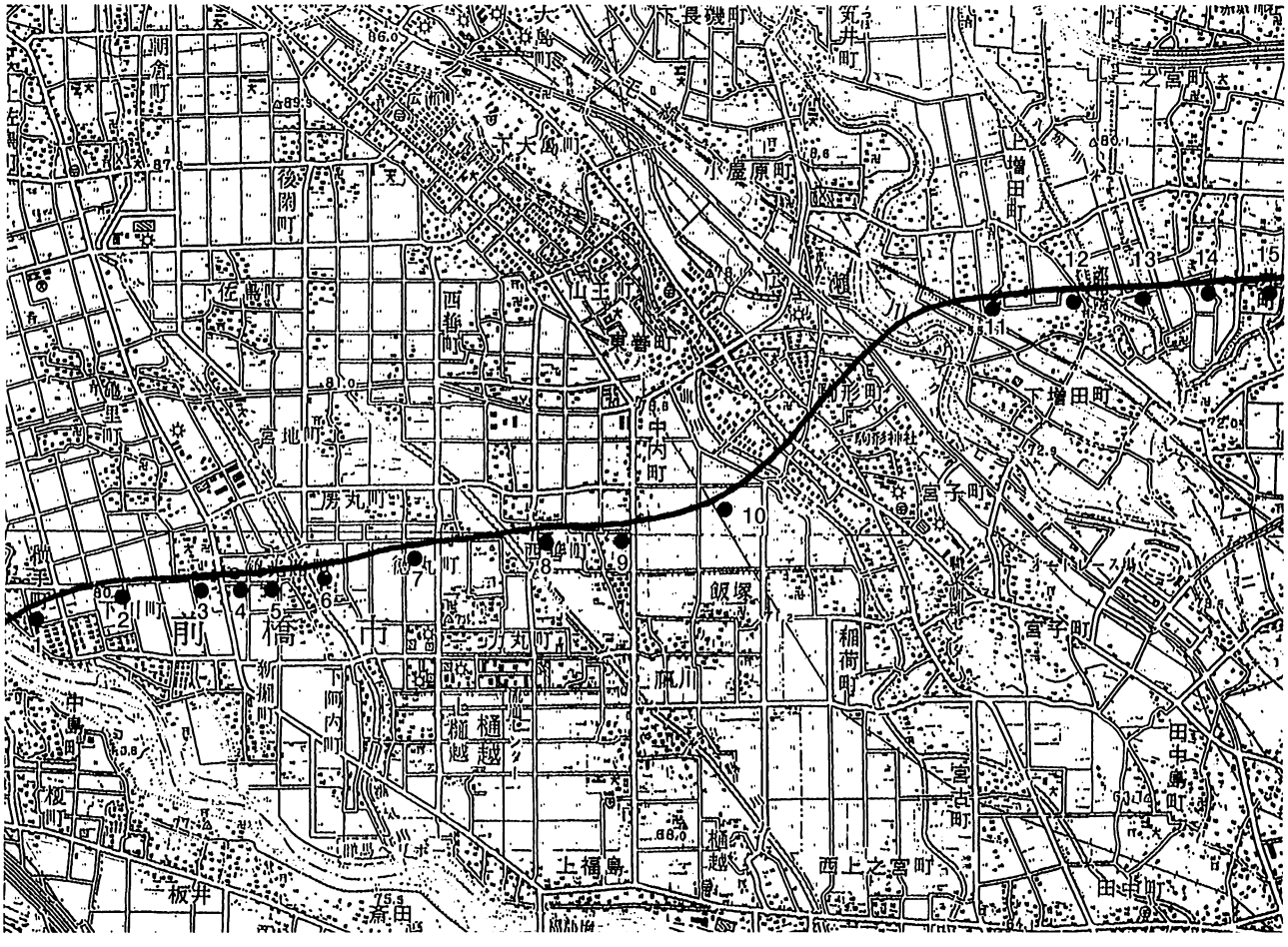
## 第２章　遺跡の地理・歴史的環境

前橋市は背後に赤城山、榛名山がそびえ、前方には関東平野が広がり、山間部と平野部の境に位置している。市域を地形的に区分すると、赤城山麓一帯に広がる大間々扇状地（赤城火山斜面）、赤城山麓端部から前橋市街地の北部に広がる河成段丘、旧利根川流路の広瀬川低地帯、南部を中心に広がる前橋・伊勢崎台地の４つにおおむね区分される。現利根川は前橋・伊勢崎台地の中央を縫うように北西より南東方向に流下している。

大間々扇状地は赤城山の噴火に伴う火山砕屑岩層堆積からなり、広域にわたり緩傾斜を形成している。また、この傾斜面には多くの小河川が南流する。そして、この傾斜面の端部と、旧利根川により形成された完新世の河成段丘上には旧石器時代より中・近世にわたる多くの遺跡が点在している。広瀬川低地帯では、前橋台地と大間々扇状地とを分断するように、北西～南東方向へ帯状に広がっている。関東ローム層の堆積がほとんど見られず、かつて利根川が運搬してきた沖積砂礫物が厚く堆積している。そのため、遺跡が希薄であるという見解が一般的であったが、近年の発掘調査の結果、低地帯にも各時代にわたり遺跡が点在していることが明らかとなった。さらに、前橋・伊勢崎台地上には広瀬川低地帯を挟む河成段丘上と同様に、多くの遺跡が展開することが知られているが、これまで縄文時代以前の遺跡についての検出例は極端に少なかった。しかしながら、前橋市総社町高井桃ノ木遺跡の調査では、縄文時代前期末より中期初頭の一括資料が確認され、今回の北関東自動車道関連の調査でも縄文時代草創期の資料が検出されるなどその数は徐々に増えている。

今回の北関東自動車道側道および同道路改良事業に伴う発掘調査は、第１図に示す通り前橋管内では15遺跡に及ぶ。この４区分される市域を東西に横断し、市の西端より東端までの広範な範囲で線状に実施されている。また、第２・３図に示す迅速図で見ると、基本地形の変化はないものの、周辺環境の変貌は著しい。

本報告に掲載する徳丸高堰遺跡(6)・徳丸仲田遺跡(7)・西善尺司遺跡(8)の３遺跡は、旧利根川流路である広瀬川低地帯とその西側に広がる前橋・伊勢崎微高地上に、下増田常木遺跡(12)・下増田越渡遺跡(13)の両遺跡はこの広瀬川低地帯と大間々扇状地とが接する河成段丘上に立地している。



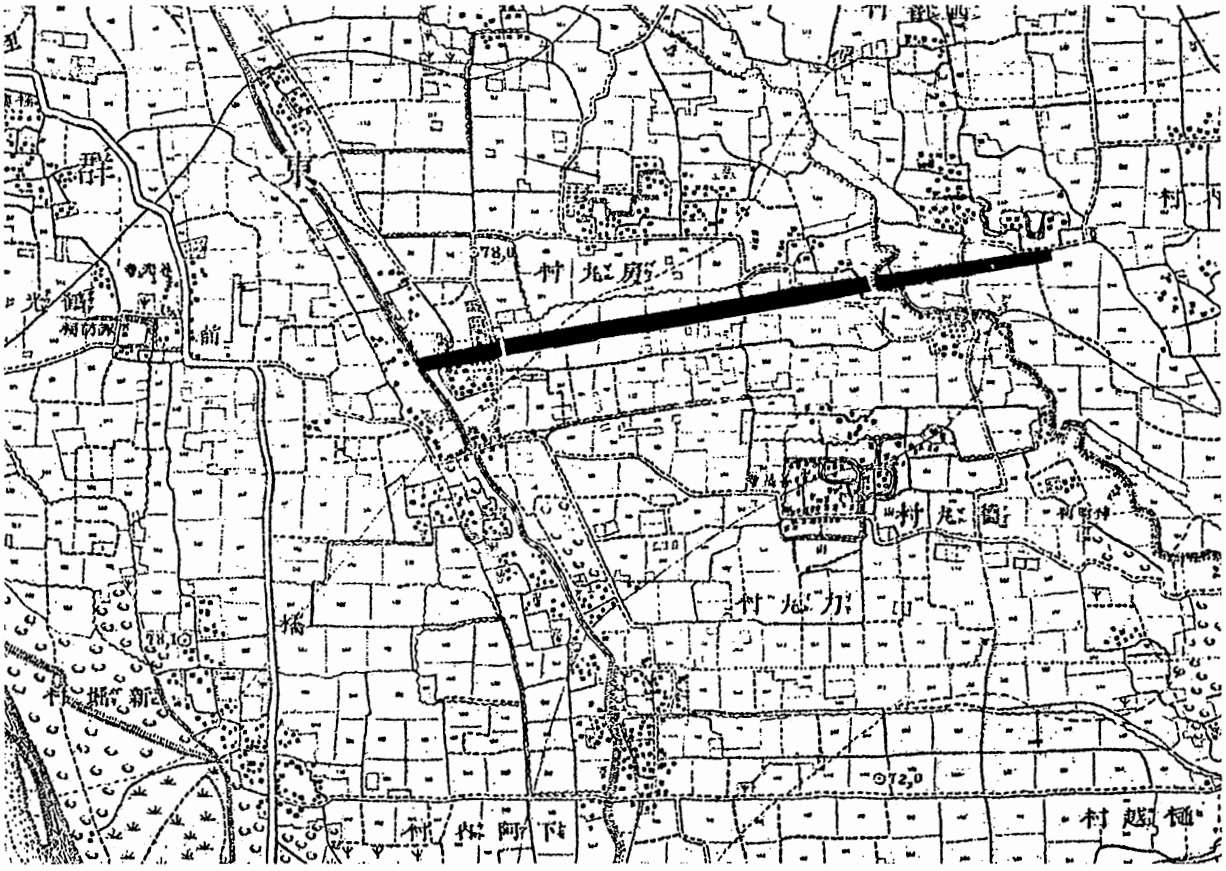

（国土地理院作製５万分の１『高崎』・『前橋』）

1000m　0　1000　2000　3000

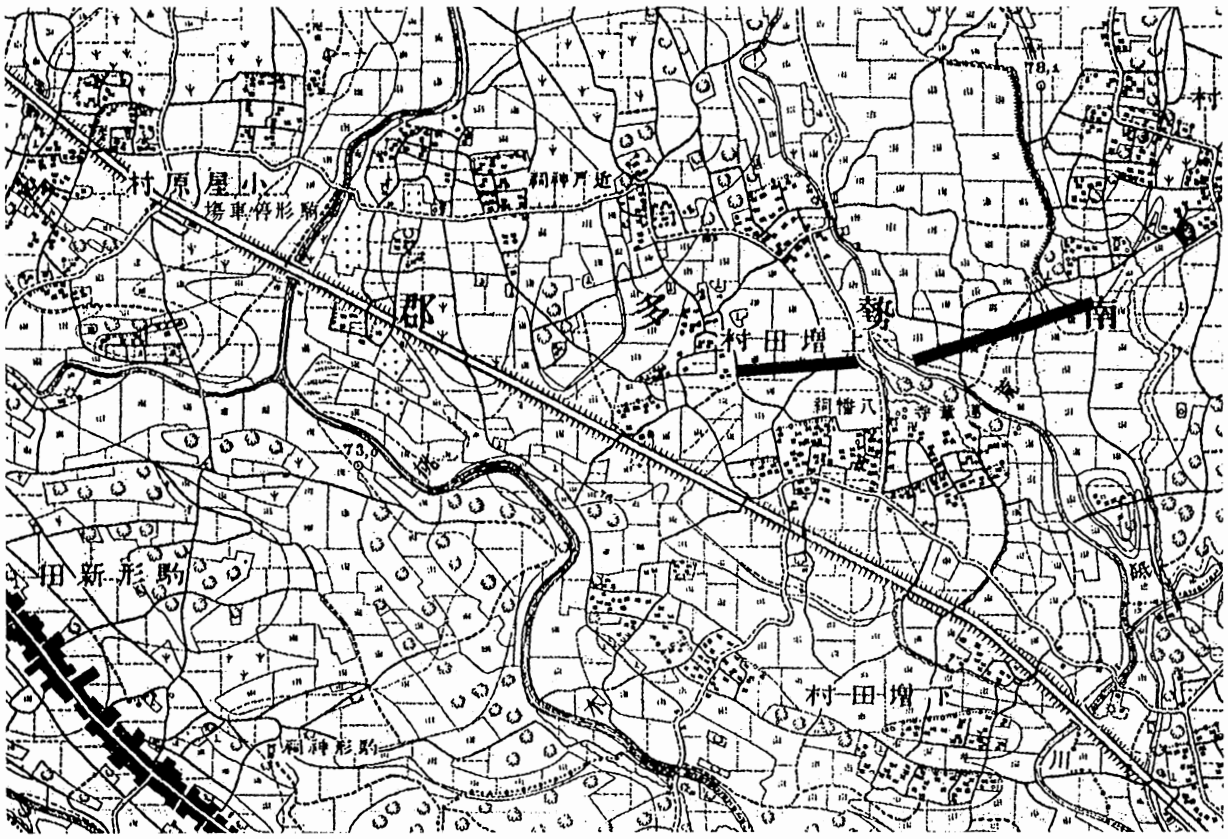
第１図　遺跡の位置と路線内の遺跡

表１　前橋管内北関東自動車道路関連遺跡一覧

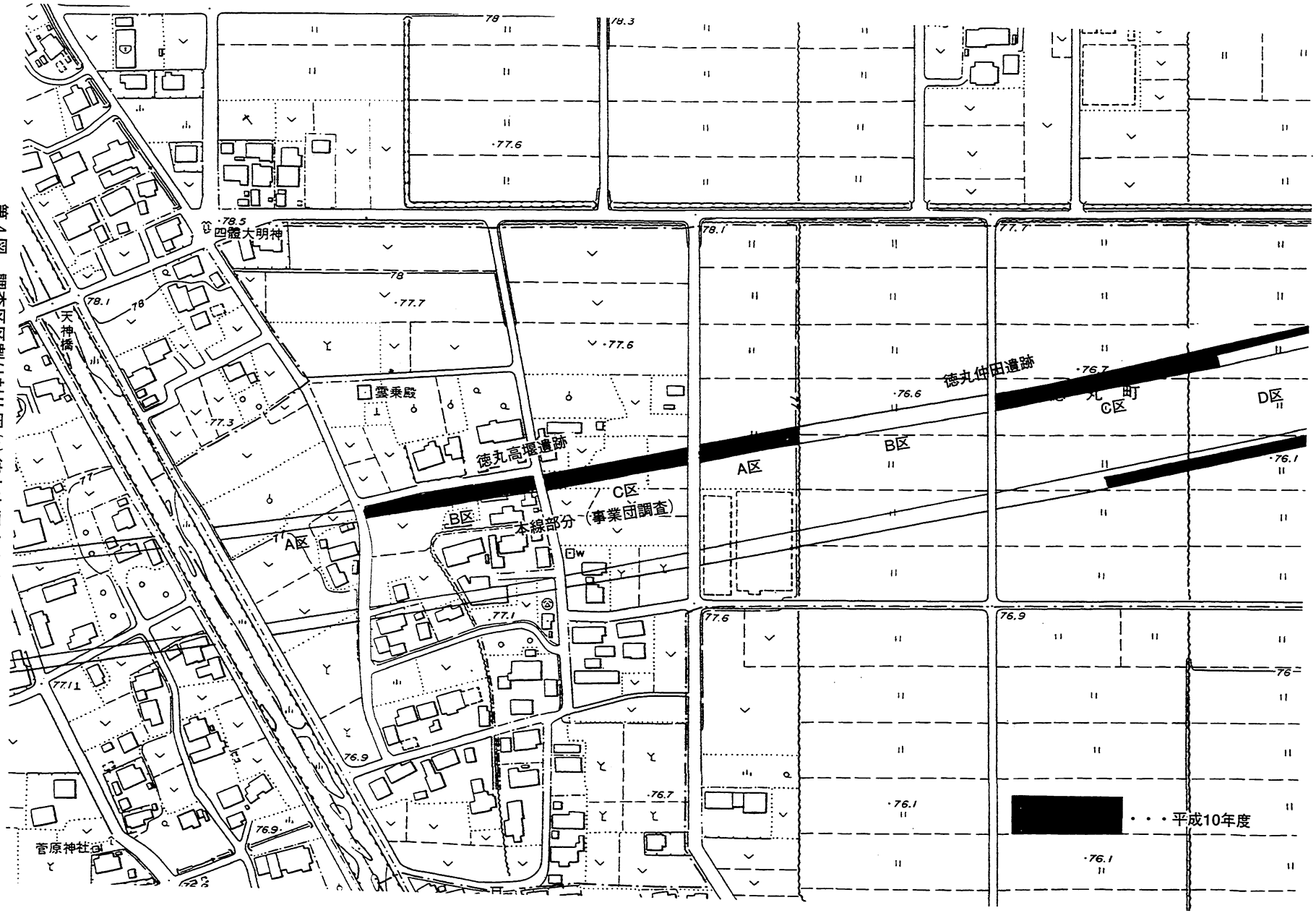
| | 遺跡名 | 調査年度 | 遺跡の概要 | 備考 |
|---|---|---|---|---|
| 1 | 横手井戸南遺跡 | 平成10年度 | 古墳時代～近世の集落と水田・畠 | |
| 2 | 横手湯田遺跡 | 平成８～10年度 | 古墳時代～中・近世の水田と畠及び集落・墓 | ９年度側道調査報告既刊 |
| 3 | 村中遺跡 | 平成10年度 | 古墳時代～近世の集落と水田 | |
| 4 | 西田遺跡 | 平成９・10年度 | 古墳時代～平安時代の水田と集落・墓 | |
| 5 | 鶴光路榎橋遺跡 | 平成９・10年度 | 古墳時代～中・近世の水田と集落・館 | |
| 6 | 徳丸高堰遺跡 | 平成10年度 | 古墳時代～中・近世の集落と水田・館 | 10年側道部分調査本報告 |
| 7 | 徳丸仲田遺跡 | 平成９・10年度 | 縄文時代～中・近世の水田と集落及び畠 | 10年側道部分調査本報告 |
| 8 | 西善尺司遺跡 | 平成９・10年度 | 古墳時代～中・近世の集落・水田・館・墓 | 10年側道部分調査本報告 |
| 9 | 中内村前遺跡 | 平成９・10年度 | 古墳時代～中・近世の集落・館・水田 | |
| 10 | 前田遺跡 | 平成９・10年度 | 古墳時代～近世の集落と水田 | |
| 11 | 上増田島遺跡 | 平成10年度 | 近世の集落 | |
| 12 | 下増田常木遺跡 | 平成８・10年度 | 弥生時代～中・近世の集落と水田 | 10年側道部分調査本報告 |
| 13 | 下増田越渡遺跡 | 平成８～10年度 | 古墳時代～中・近世の集落と水田及び畠 | 10年側道部分調査本報告 |
| 14 | 萩原遺跡 | 平成８～10年度 | 縄文時代～中・近世の集落と水田 | |
| 15 | 荒井大田関遺跡 | 平成８年度 | 古墳時代～中・近世の水田と集落 | |



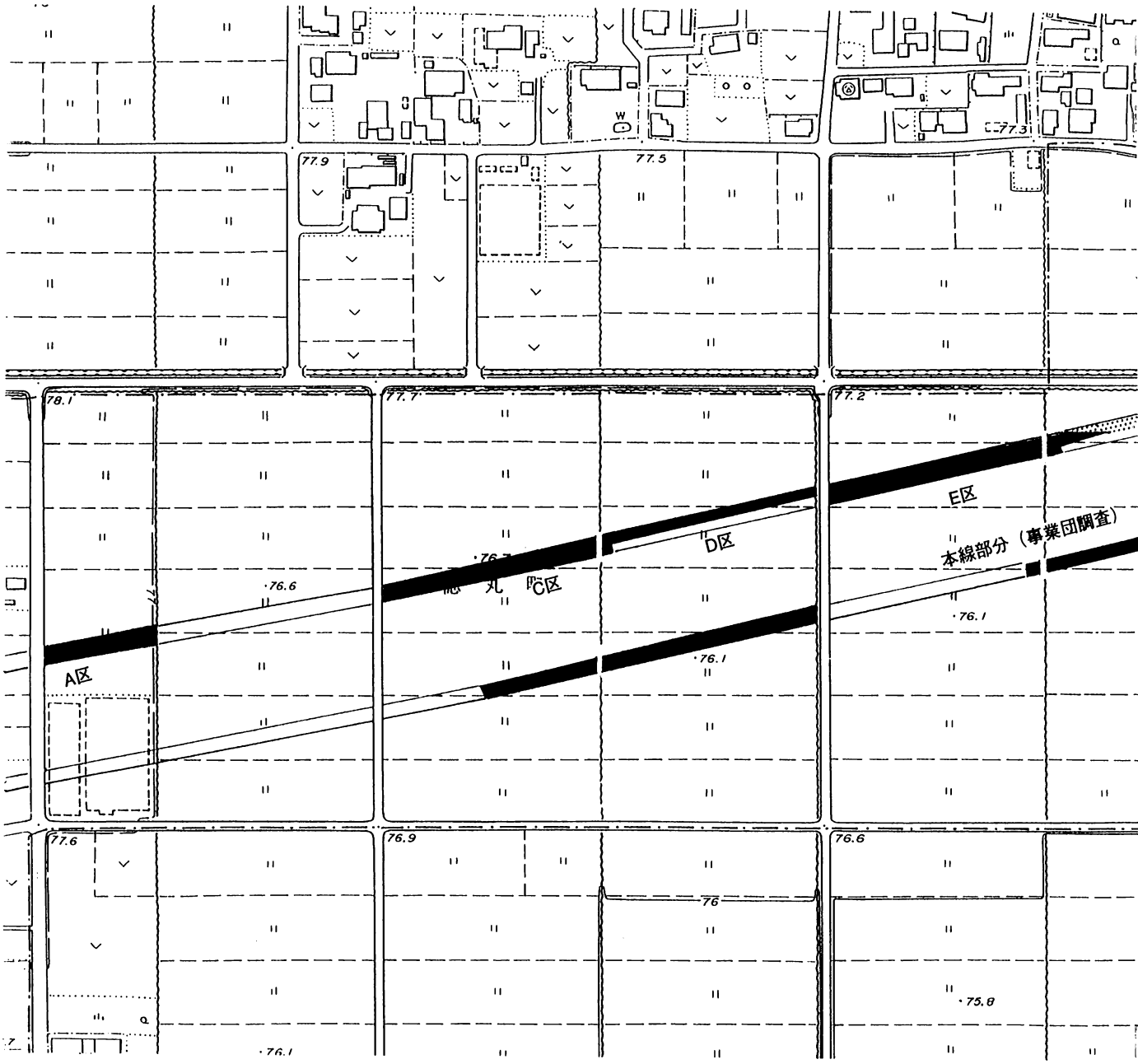

第２図　徳丸高堰・徳丸仲田・西善尺司遺跡の位置（迅速図１：20,000倉賀野驛）



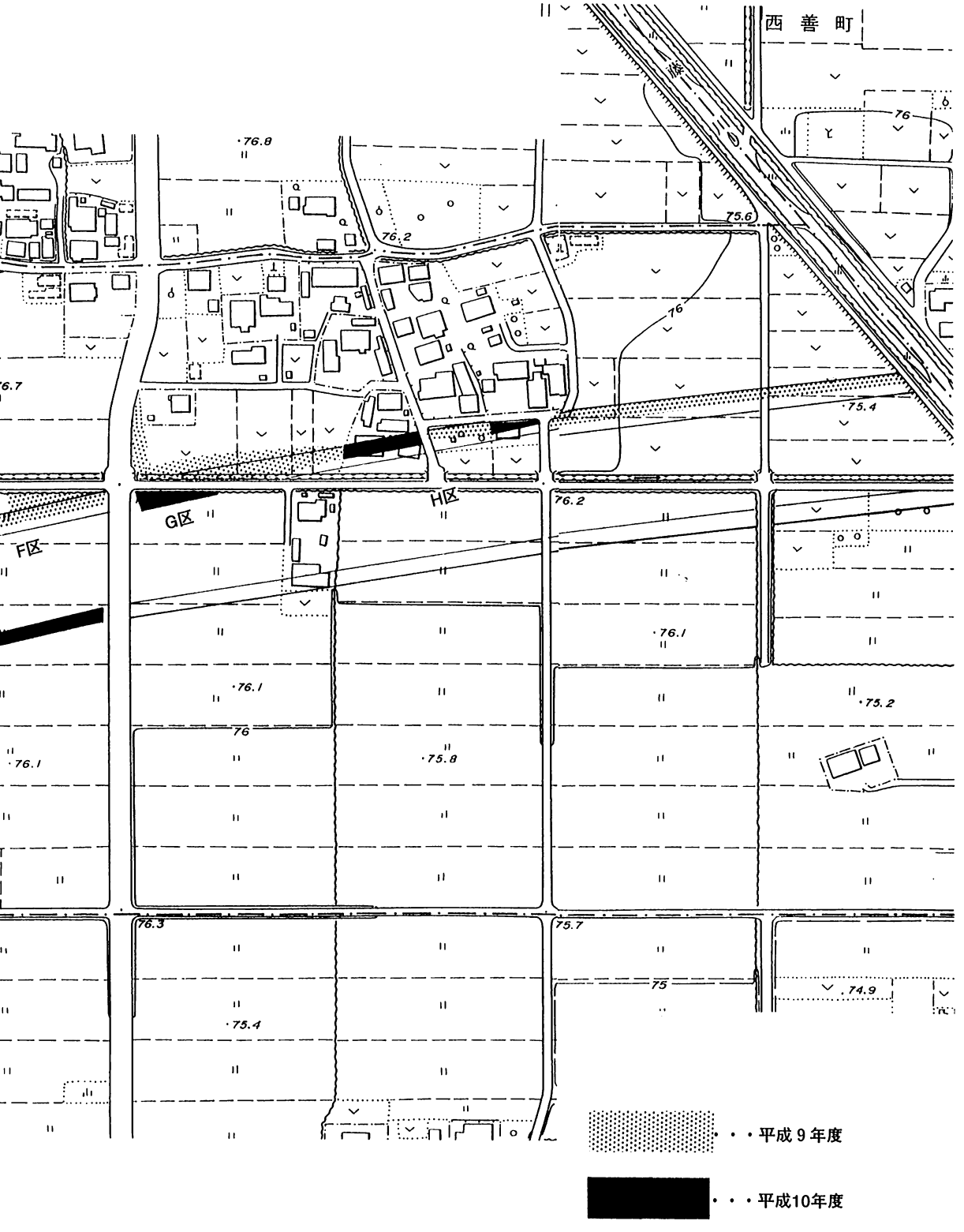

第３図　下増田常木・下増田越渡遺跡の位置（迅速図１：20,000伊勢崎町）



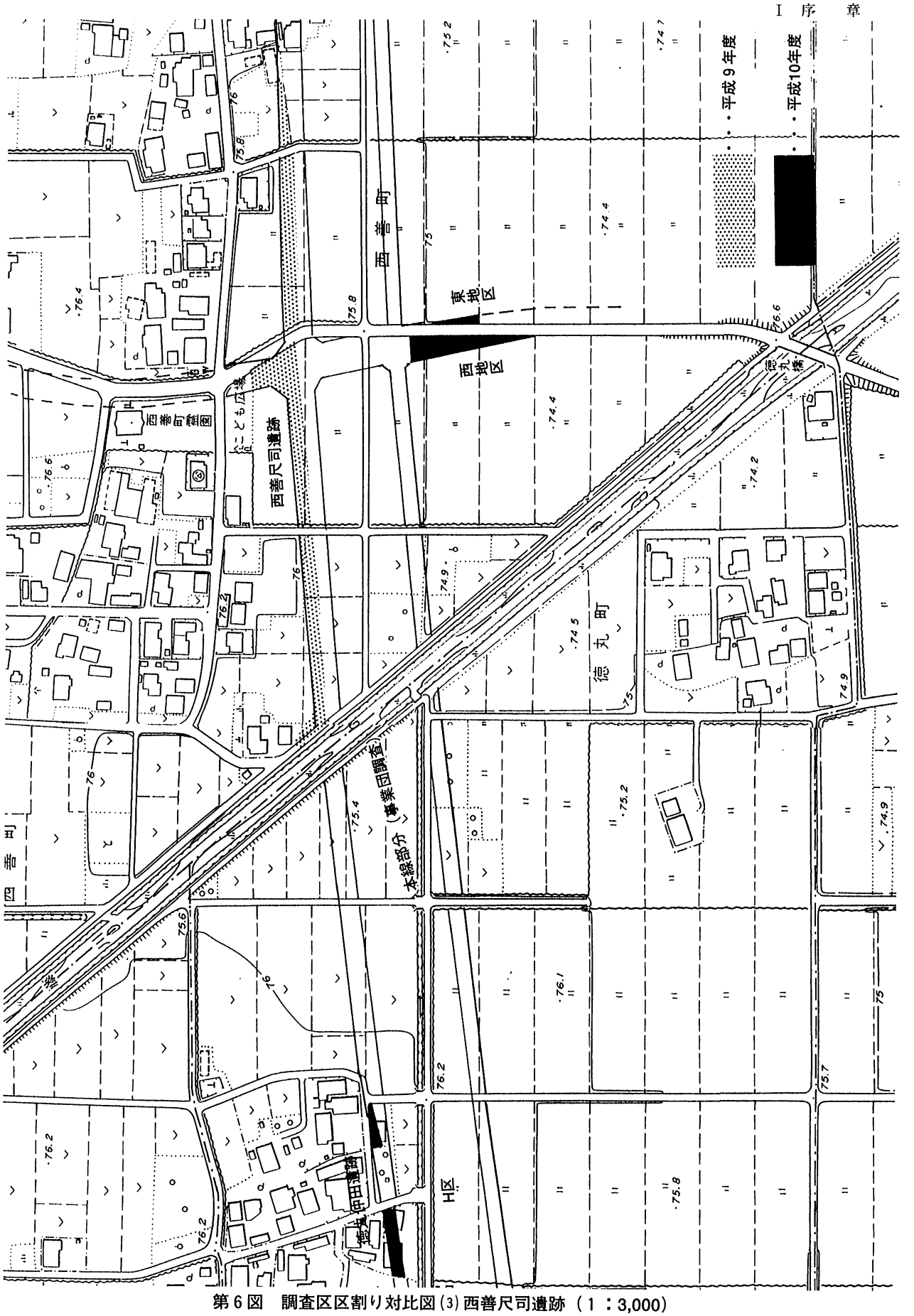

第４図　調査区区割り対比図(1)徳丸高堰遺跡（１：3,000）



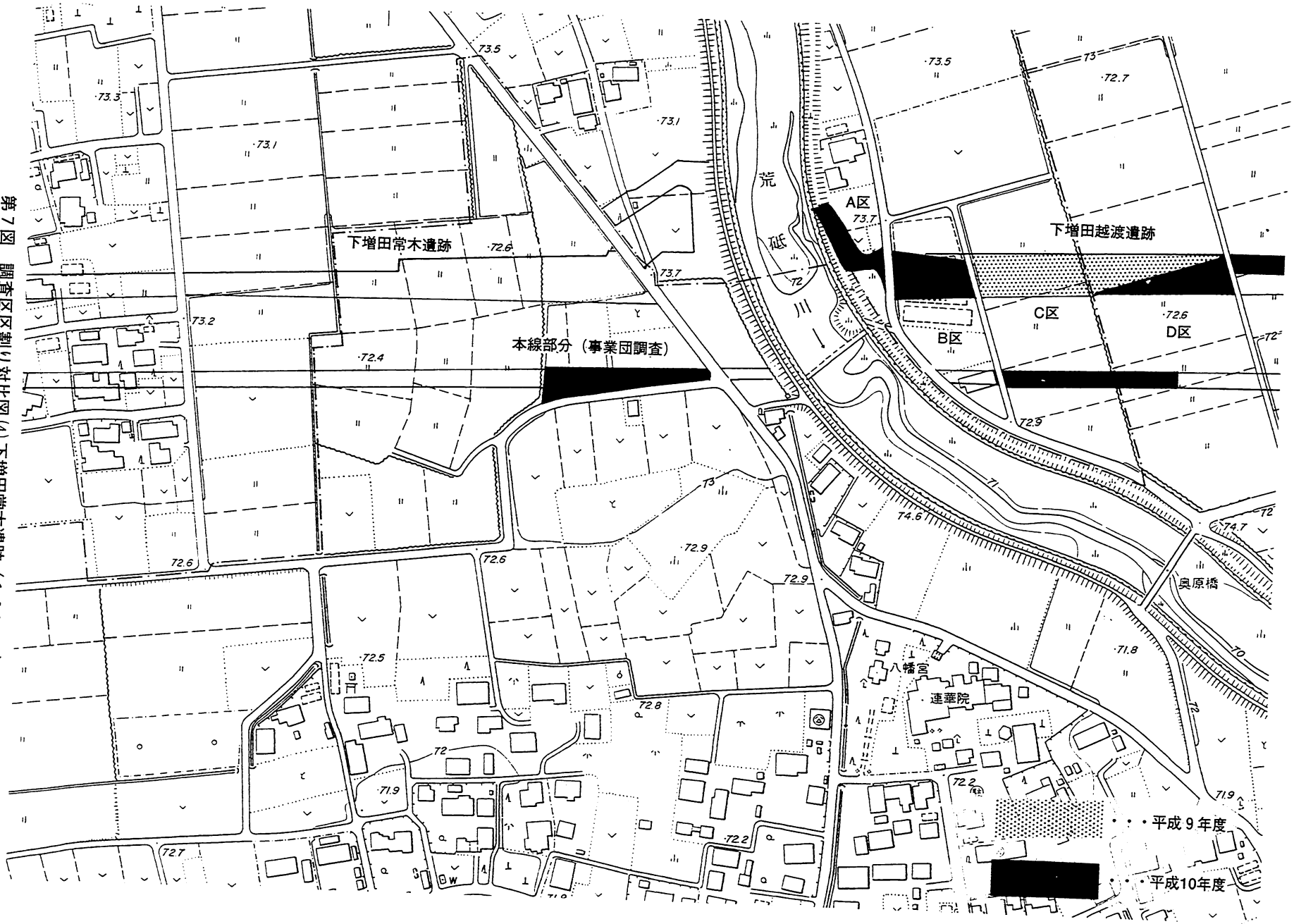

第５図　調査区区割り対比図(2)徳丸仲田遺跡



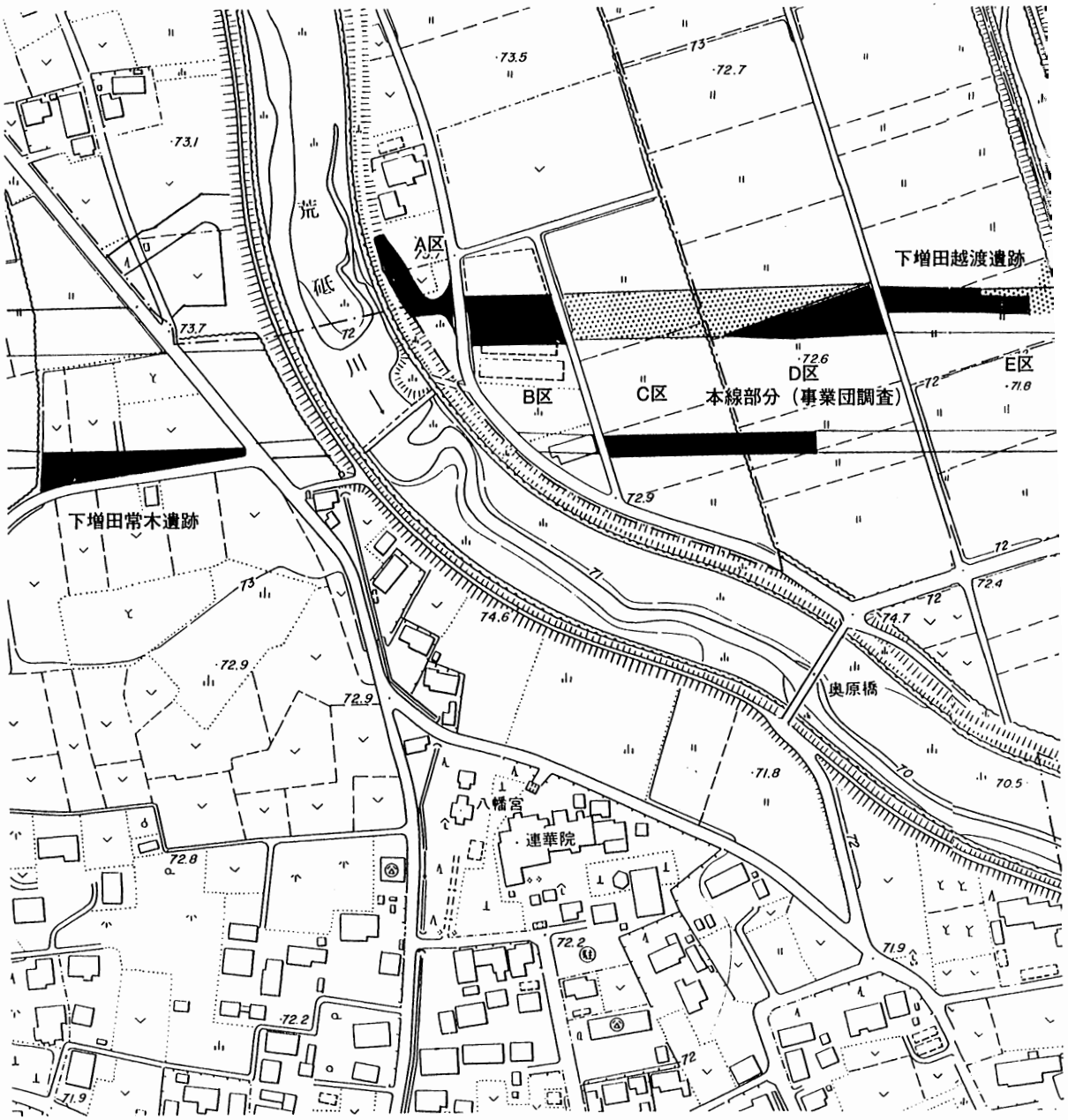

（１：3,000）　折図１



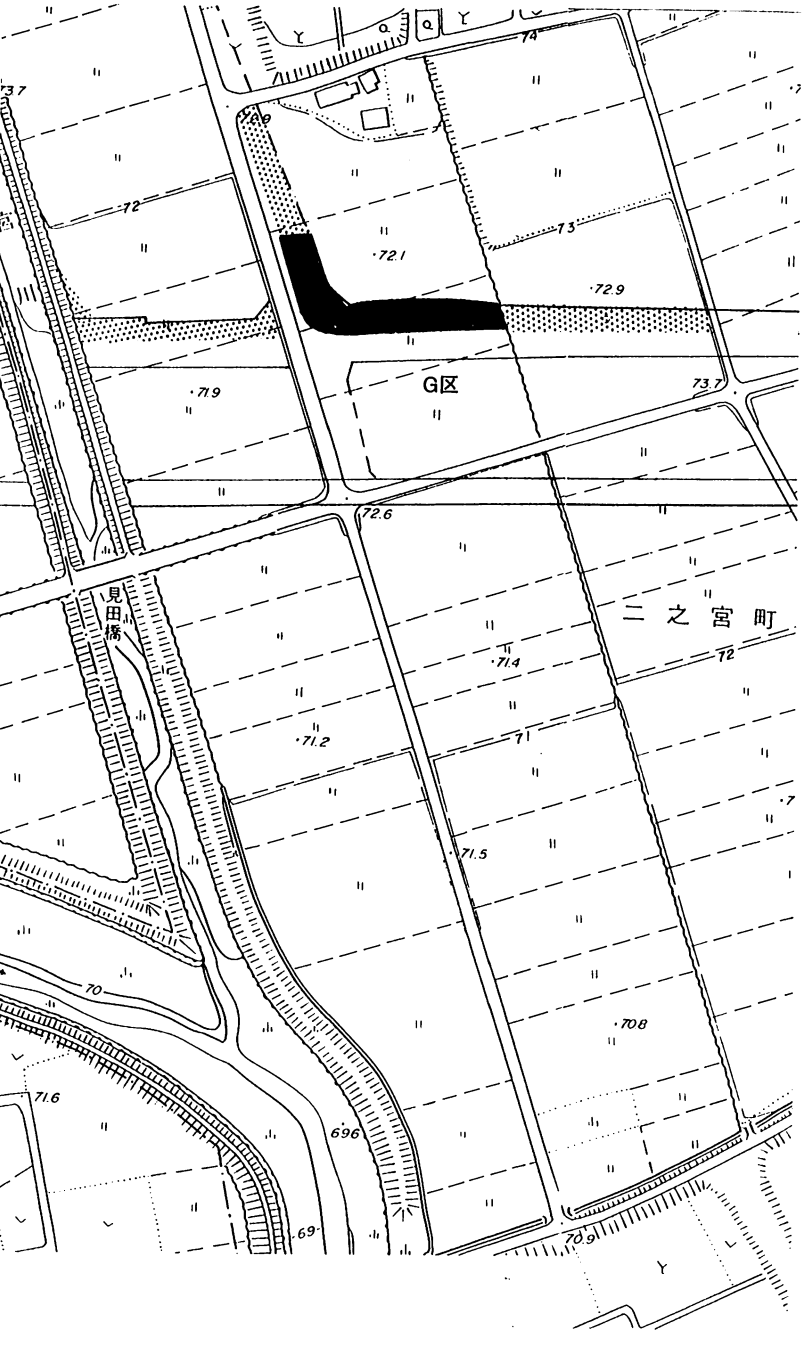

第6図　調査区区割り対比図(3)西善尺司遺跡（1：3,000）




第７図　調査区区割り対比図(4)下増田常木遺跡（１：3,000）




第８図　調査区区割り対比図(5)下増田越渡遺跡（１




・・・平成９年度

・・・平成10年度

3,000）　折図２

# 第3章　調査の方法

## 第1節　遺跡および調査地区の呼称

### ①　遺跡の呼称

徳丸高堰遺跡、徳丸仲田遺跡、西善尺司遺跡、下増田常木遺跡、下増田越渡遺跡の5遺跡は、いずれも各々単一遺跡であり、Ⅰ、Ⅱ・・等と本来は区分されるものではない。しかしながら、前橋市教育委員会の指導により、調査および整理の便宜を図る為に、県埋蔵文化財調査事業団が行った本線部分をⅠ区（下増田越渡遺跡はⅠ・Ⅱ区)、前橋市埋蔵文化財発掘調査団が実施した側道部分を調査年度毎にⅡ区～Ⅳ区（下増田越渡遺跡はⅢ・Ⅳ区）と以下の様に区分・呼称している。

**表2　地区別遺跡呼称一覧**

| 遺跡名 | 調査年度 | 調査主体 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 徳丸高堰遺跡 | 平成10年度 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 本線 |
| 徳丸高堰Ⅱ遺跡 | 平成10年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　B・C区 |
| 徳丸仲田遺跡 | 平成9・10年度 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 本線 |
| 徳丸仲田Ⅱ遺跡 | 平成9年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　A～E区（18工区～21工区） |
| 徳丸仲田Ⅲ遺跡 | 平成10年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　A・C・D・E・F・G・H区 |
| 西善尺司遺跡 | 平成9・10年度 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 本線 |
| 西善尺司Ⅱ遺跡 | 平成9年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　A～D区 |
| 西善尺司Ⅲ遺跡 | 平成10年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 取りつけ道路部分　西地区・東地区 |
| 下増田常木遺跡 | 平成8・10年度 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 本線 |
| 下増田常木Ⅱ遺跡 | 平成10年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道 |
| 下増田越渡遺跡 | 平成8・9年度 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団 | 本線　Ⅰ(A・B・C・D区)、Ⅱ(H·I区) |
| 下増田越渡Ⅲ遺跡 | 平成9年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　C～H区 |
| 下増田越渡Ⅳ遺跡 | 平成10年度 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 | 側道　A・B・C・D・E・G区 |

### ②　調査区域の呼称

今回、前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施した各遺跡（側道部分）は、調査年度毎に第4～8図に示す通り現道および現水路を基準として細かに区分される。その為、調査の便宜を図る目的で側道部分を西側よりA・B・・H、又本線部分を境に北側を北側道、南側を南側道とそれぞれ呼称した。

また、検出された遺構名も各調査区域毎に付して調査を進めた。したがって、連続する調査区域で同一遺構でありながら遺構番号が異なる場合も生じている。これらの遺構については各説明の中で同一遺構であることを述べている。

尚、県事業団並びに市教育委員会実施遺跡とは文化層および遺構の確認面について御指導を賜り、統一を図るよう努めた。しかし、同調査区は未報告であり、検出遺構に関する呼称の統一は行われていない。

## 第２節　調査の方法

### ①　遺構検出作業

遺構の検出作業は、各地区別の各文化層の埋没状況を確認した上で、表土層および遺構確認面上部までの土層を重機により除去した。また、第１面の調査終了後、第２面以下（最大５面調査）の掘り下げも同様に重機によった。その後、鍵層を慎重に除去し遺構の検出を行った。

各文化層において遺構の有無が確認できない場所や、平面的に遺構を把握することができない場合等は、状況に応じてサブトレンチを設定し、確認を行ないつつ表土（各文化層までの土層）除去作業を実施した。尚、標準堆積土層は調査区と区域外を隔する壁で実施している。

### ②　遺構調査

遺構の掘り下げに当たっては、半截若しくはベルトを設定し、土層を観察した後に完掘した。出土遺物については、遺構外出土遺物はグリッド毎に一括して取り上げを行った。遺構内出土遺物については、まとまりのある資料については、状況に合わせた出土状況図を作成し取り上げを行い、また、その他の細片については遺構内一括で取り上げを行った。

### ③　測量

調査グリッドの基準点測量は、北関東自動車道本線建設事業の基準点測量で用いられたトラバースを使用して行い、調査区域全体に国家座標系第Ⅸ系に合わせて10m 方眼のグリッドを設定した。このグリッドは当初、各遺跡ごとに設定を行ったが、調査地区の細分割により同一名称のグリッドが数多く設定され、整理に混乱をきたす状況が予測された為に、グリッド表記をやめて南東角の座標値で行うこととした。

水準点は公共水準を用い、調査区の各所にＢ．Ｍを設定し、測量の便宜を図った。

各遺構の測量に当たっては、埋没状態の観察等、遺構の全貌が把握できるよう記録した。

遺構の平面実測図は各文化層毎に航空測量を基本とし、状況に併せて平板による地上測量も実施した。航空測量、平板測量共に1/40縮尺で地区別の個別測量を行い、その後、同図を縮小編纂して1/200の遺跡全体図を作成した。

尚、各遺構のセクション図、エレベーション図は１／20の縮尺で、遺物出土状況の個別実測についても同様に１／20の縮尺で作成した。

### ④　写真撮影

遺跡の全景写真は一部を除き、各文化層毎に航空写真撮影を実施した。航空写真撮影は６×６cm 白黒、およびカラースライドフィルムにより実施した。

各遺構の写真撮影は各調査の段階毎に遺構の状況が把握できるように実施した。使用したカメラは小形カメラ３台で、使用フィルムは白黒35mm、カラースライド35mm、カラー35mm の３種類である。

尚、重要遺構については、遺構の詳細が明確に把握できるよう撮影した。

### ⑤　安全対策

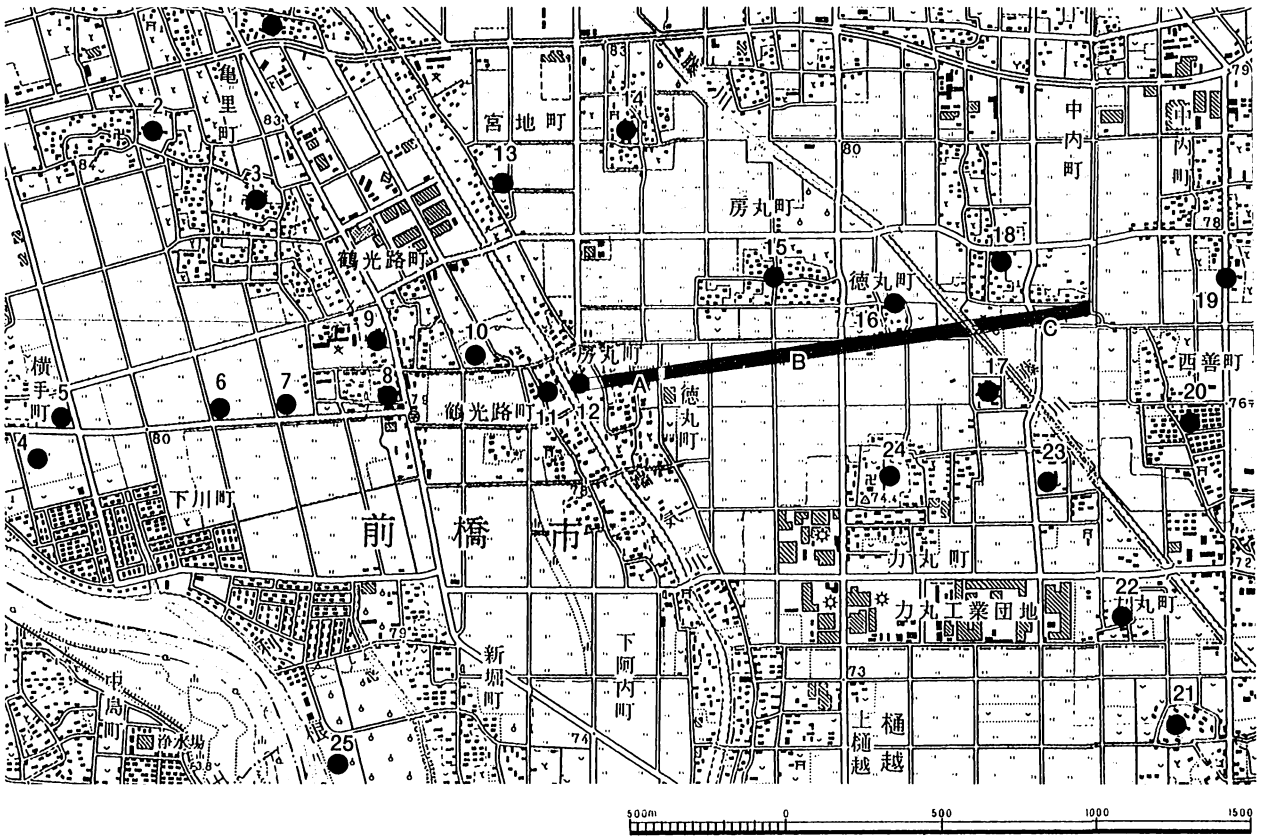
調査区には、調査を実施していることを明示し、関係者以外の立入を禁止する為に、調査区の周囲に単管パイプを２m 間隔で打ち込み、三重のロープで囲い、要所には立入禁止の看板を設置した。

その他、夜間の侵入を禁止する為に赤色灯を点灯させ、安全の確保につとめた。

# Ⅱ　徳　丸　高　堰　Ⅱ　遺　跡

## 第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡

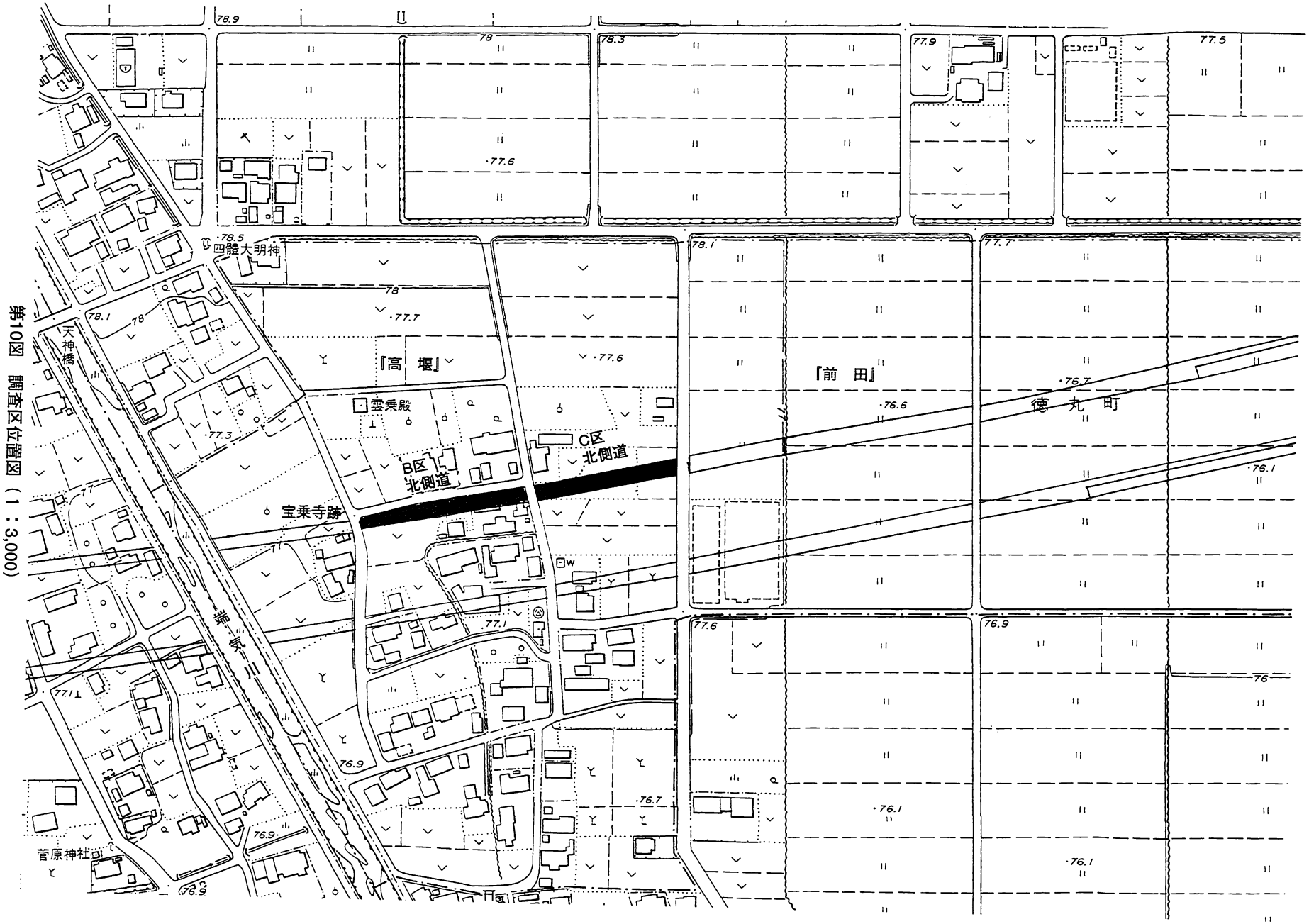
徳丸高堰Ⅱ遺跡の所在する徳丸町は前橋市の南部にあたり、JR 前橋駅の南東約6.5km に位置している。遺跡地の北1.0km には県道高崎駒形線が東西に走り、西0.8km に鎌倉期以降の古道に沿っているといわれる県道前橋玉村線が南北に走る。本遺跡の所在する徳丸町および周辺の下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・西善町・中内町は、低地上に水田・畑が広がり、微高地上には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の群馬郡徳丸村地味の項には「黒埴ニシテ赭色ヲ帯ヒ膏脂アリ水利便ニシテ諸種ニ適ス但東西河畔ノ地砂壤ニシテ桑柘ニ宜シ」と記され旧状を伝える。




（国土地理院２万５千分の１『前橋』『大胡』『高崎』『伊勢崎』）

A　徳丸高堰遺跡　　B　徳丸仲田遺跡　　C　西善尺司遺跡
1．宿阿内城（亀里阿内城）跡　2．亀里（天神）矢島百石屋敷跡　3．成菩提山光明院極楽寺　4．井戸南遺跡　5．横手宮田遺跡　6．横手湯田遺跡　7．鶴光路練引遺跡　8．鶴光路（村中）環壕遺構群　9．雲上山善光寺　10．西田遺跡　11．鶴光路桜橋遺跡　12．宝乗寺跡　13．宮地中田遺跡　14．東宮地環壕遺構群　15．房丸東環壕遺構群　16．徳丸東（縫田）環壕遺構群　17．徳丸東（後）環壕遺構群　18．旧西善環壕遺構群（須田屋敷）19．中内村前遺跡　20．横堀環壕遺構群　21．中樋越環壕遺構群　22．東力丸（宮田）環壕遺構群　23．東力丸（藤川）環壕遺構群　24．力丸城跡・降龍山善昌寺　25．新堀城跡

第９図　周辺の遺跡




第10図　調査区位置図（1：3,000）

本遺跡の周辺を概観すると、西2.7km に利根川が南流し、周辺に、端気川・藤川などの小河川が南東へ流下する。現在では河川改良事業・圃場整備事業により改良が行われ、一面に重畳たる穀倉地帯が広がりをみせ、旧地形を読み取ることは難しい。これまで実施された調査からは、低地上に浅間山噴火の影響のみられる古墳時代前期および平安時代後期の水田が営まれており、現在に至るまで生産行為がなされたことが推測されている。さらに端気川および藤川沿いの微高地上では同時期の集落、中世館跡および環濠屋敷跡が展開する。特に本遺跡の位置する三丸地区（徳丸・力丸・房丸地区の通称）や鶴光路、西善地域周辺は、中世以降の城館跡（宿阿内城・力丸城・新堀城など）、環濠屋敷跡および寺社（成菩提山光明院極楽寺・雲上山善光寺・降龍山善昌寺など）が数多く確認される地域である。三丸地区（徳丸・力丸・房丸）は、すべて地区名に「丸」が使用されている。この「丸」は中世館等を示すもの、あるいは荘園制の単位などの諸説があり、詳細は不明であるものの、中世期において一つのまとまりを示すものであると推測される。

本遺跡は、前橋市徳丸町小字『高堰』に所在し、東側に徳丸仲田Ⅲ遺跡が位置する。また本遺跡Ｂ区北側道以西は微高地上に、Ｃ区北側道以東（徳丸仲田Ⅲ遺跡を含む）は低地上にそれぞれ立地している。

## 第２章　調査の経過

９月　下旬　平成10年度徳丸高堰Ⅱ遺跡の発掘調査を開始する。
　　Ｃ区北側道の調査区設定、表土除去を行う。
　　Ｃ区北側道、As-B 下面調査を行う。
　　Ｃ区北側道、As-C 混土層下面調査を行う。
　　Ｃ区北側道、弥生時代以前面調査を行う。
10月　上旬　Ｃ区北側道、As-B 下面調査を行う。
　　Ｃ区北側道、As-C 混土層下面調査を行う。
　　Ｃ区北側道、弥生時代以前面調査を行う。
　　Ｃ区北側道の発掘調査を終了する。
　　中旬　Ｃ区北側道にテントを設営する。
　　下旬　Ｂ区北側道の産業廃棄物撤去および搬出を行う。
　　Ｂ区北側道、中世面調査を行う。
11月　上旬　Ｂ区北側道、中世面調査を行う。
　　Ｂ区北側道、弥生時代以前面調査を行う。
　　Ｂ区北側道の発掘調査を終了する。
　　Ｃ区北側道に設置したテントおよびトイレ・発掘器材等を撤去する。
　　Ｂ区北側道およびＣ区北側道に設置した安全対策器材を撤去する。
　　Ｂ区北側道の調査終了をもって平成10年度徳丸高堰Ⅱ遺跡の発掘調査を終了する。

## 第３章　標準堆積土層

本遺跡調査によって検出された文化層は、中世面の第１面、浅間Ｂ軽石下面の第２面、浅間Ｃ軽石混土層下面の第３面、弥生時代以前面の４面に分けられる。本遺跡で確認された鍵層は浅間Ｂ軽石層、浅間Ｃ軽石混土層であった。以下はＢ区北側道、Ｃ区北側道で観察したもので、本遺跡の層序を示すものである。

Ⅰ　暗褐色土層　現耕作土。しまり、粘性ともに弱い。

Ⅱ　灰色土層　旧耕作土。しまりはあるが、粘性は弱い。

Ⅲ　浅間Ｂ軽石堆積層　天仁元年（1108年）降下浅間Ｂ軽石堆積層。（上面が第１面　中世面であるが、上層は撹乱を受けている）

Ⅳ　黒色土層　（上面が第２面　浅間Ｂ軽石下面）
しまり、粘性ともにあり。

Ⅴ　灰褐色土層　しまり、粘性ともにあり。白色軽石（浅間Ｃ軽石）を少量含む。
（下面が第３面　浅間Ｃ軽石混土層下面）

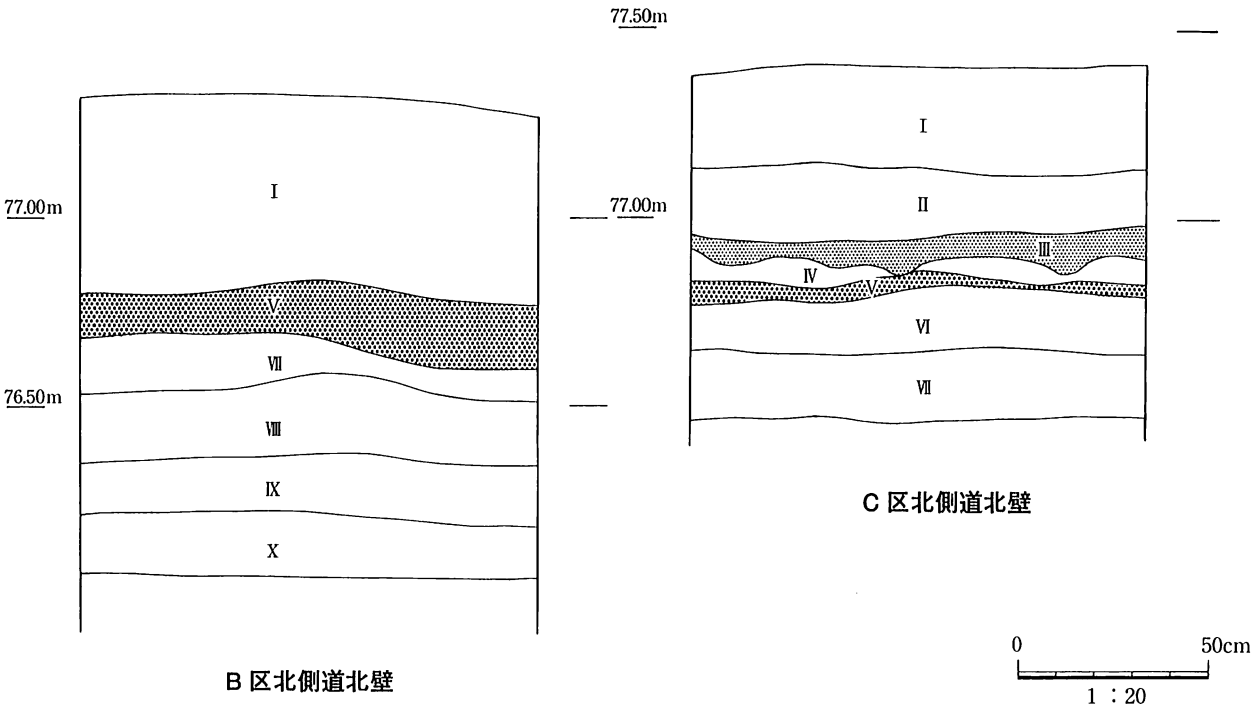
Ⅵ　黒灰色土層　しまり、粘性ともにあり。

Ⅶ　濃灰色土層　しまり、粘性ともにあり。

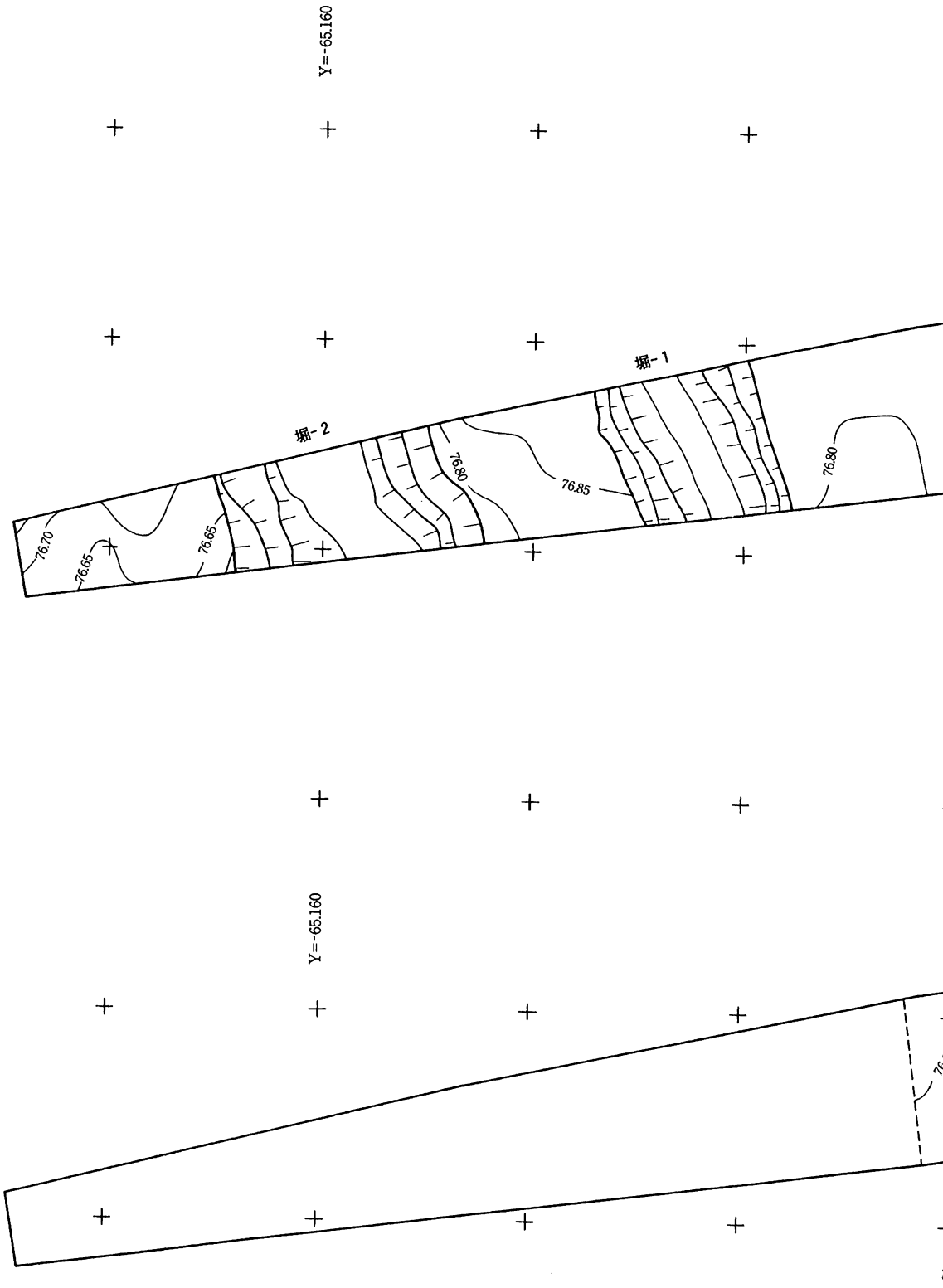
Ⅷ　灰色土層　しまり、粘性ともにあり。砂質。
（下面が第４面　弥生時代以前面）

Ⅸ　灰白色土層　しまり、粘性ともにあり。シルト質。

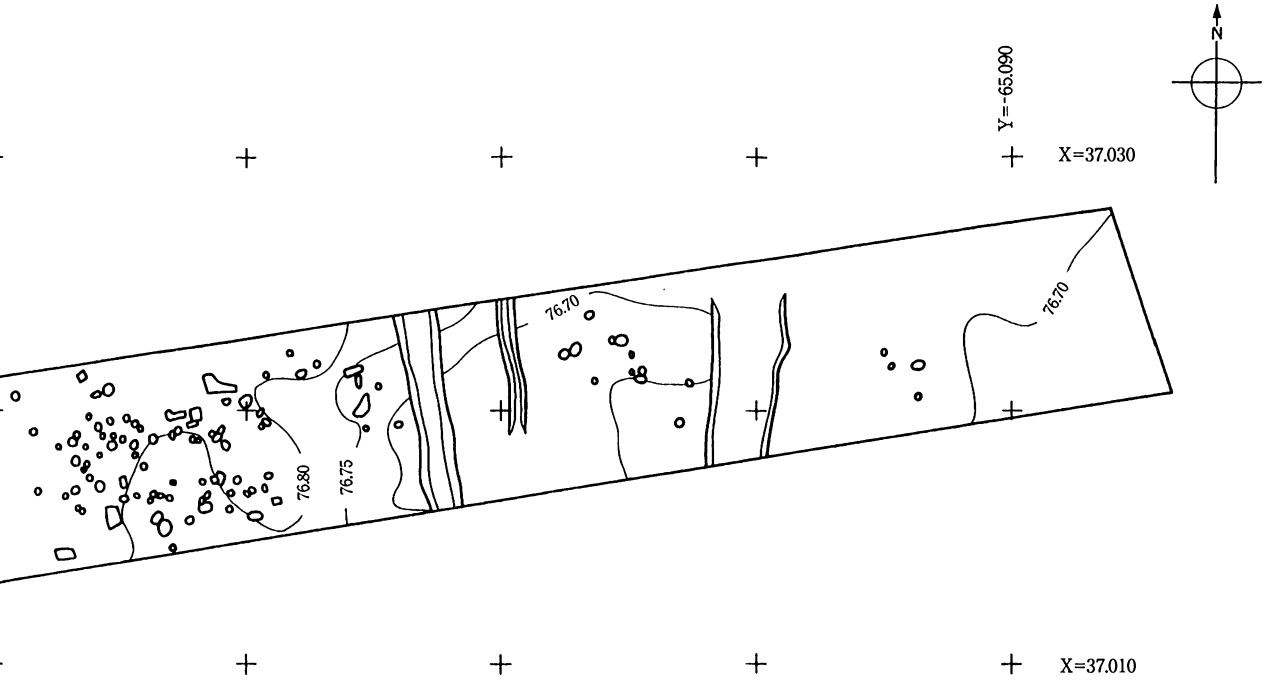
Ⅹ　黒灰色土層　しまり、粘性ともにあり。



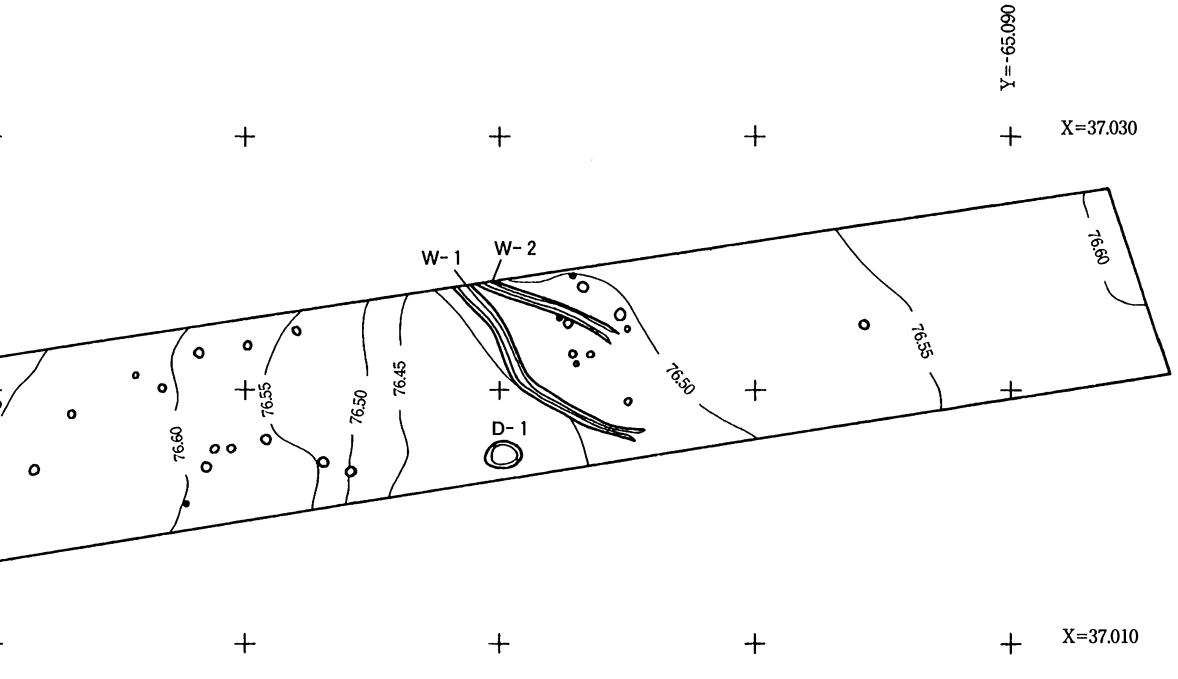

第11図　標準堆積土層




第12図　B



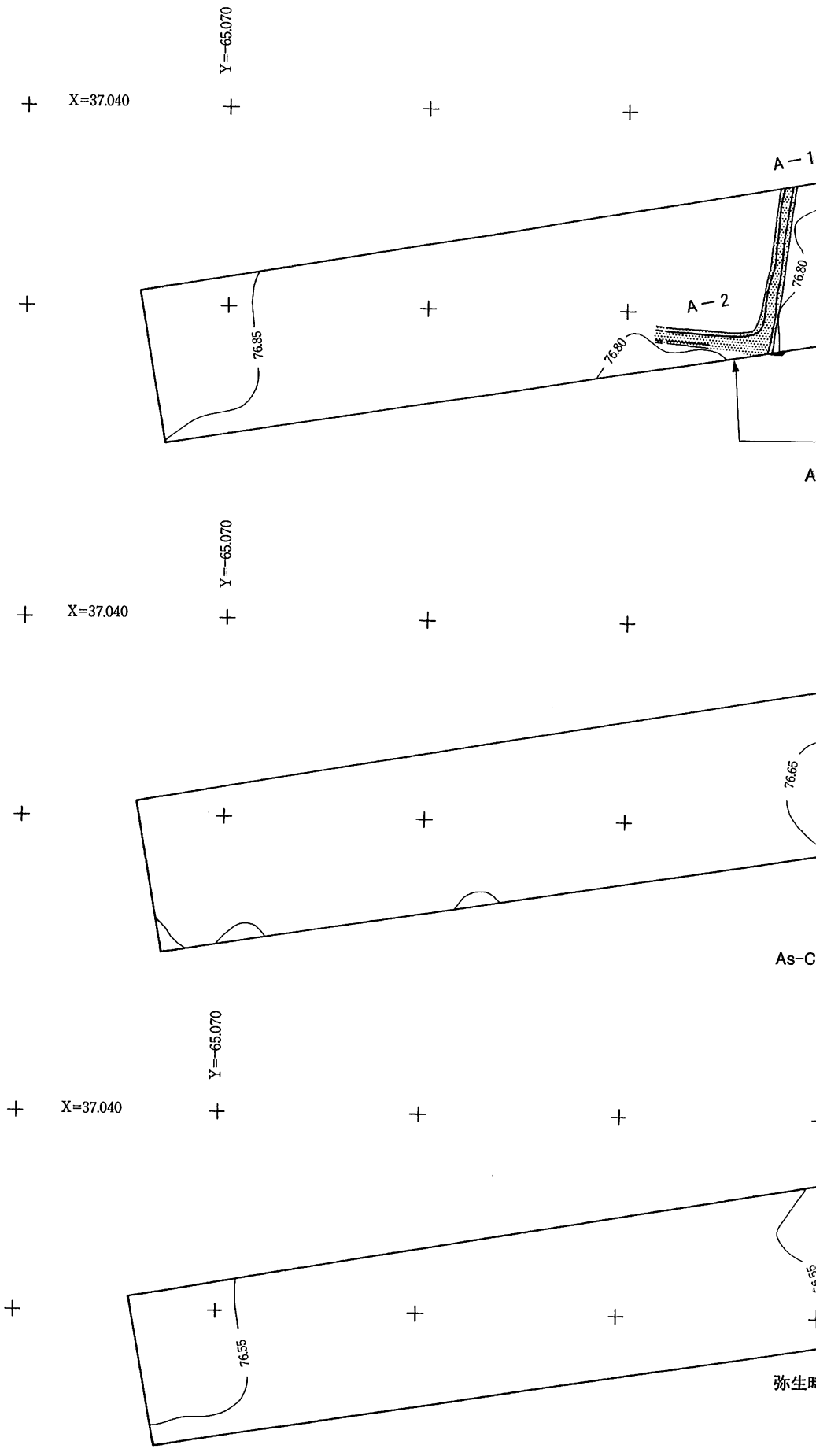

中世面



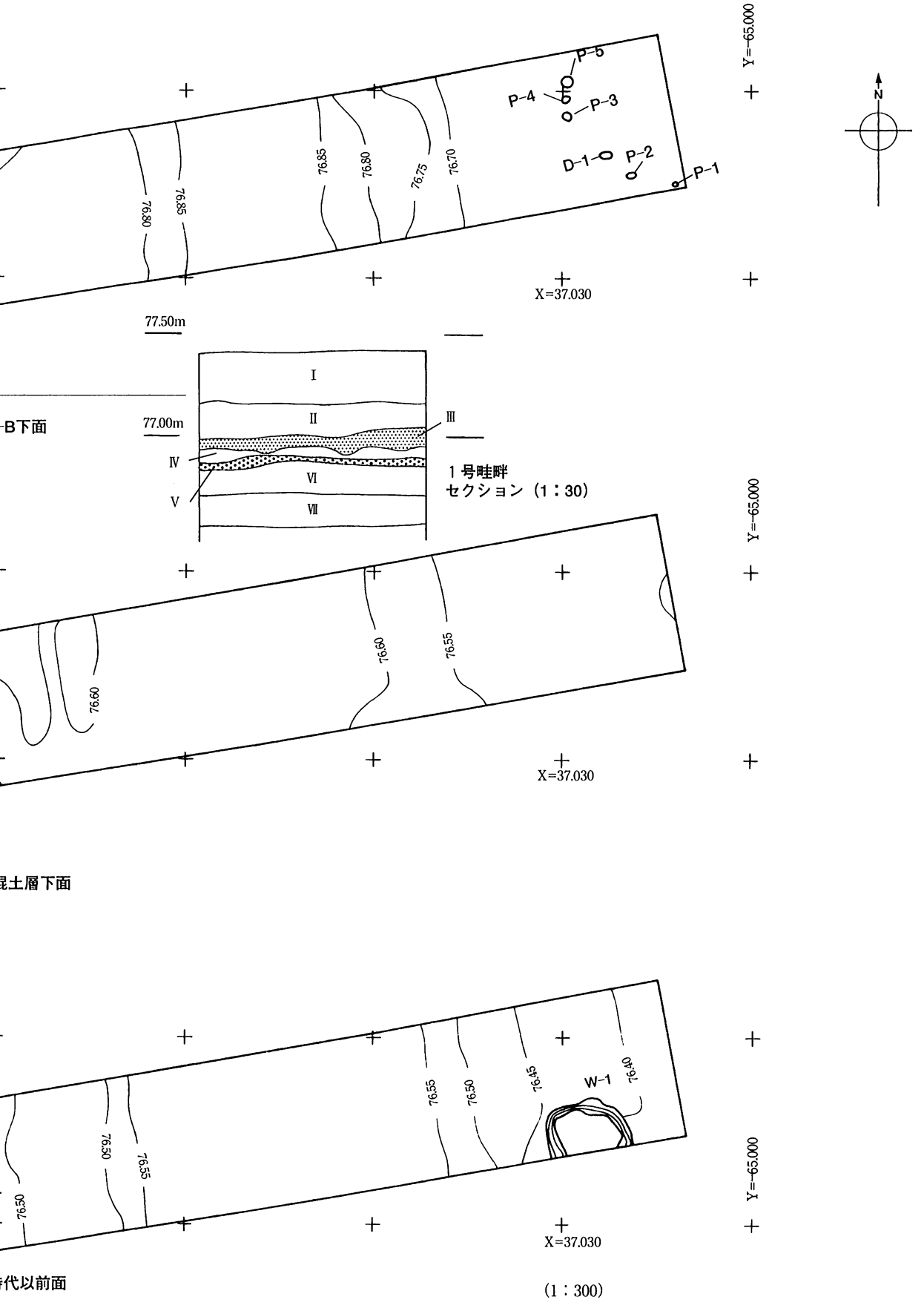

弥生時代以前面

(1：300)

区北側道 全体図　折図 3


Y=-65.070
X=37.040
A－1
A－2
76.85
76.80
76.80
A
Y=-65.070
X=37.040
76.65
As-C
Y=-65.070
X=37.040
76.55
76.55
弥生時

第13図　C区北



Y=-65.000
P-5
P-4
P-3
D-1
P-2
P-1
76.80
76.85
76.85
76.80
76.75
76.70
X=37.030
77.50m
77.00m
I
II
III
IV
V
VI
VII
1号畦畔
セクション（1：30）
-B下面
Y=-65.000
76.60
76.60
76.55
X=37.030
混土層下面
76.50
76.50
76.55
76.55
76.50
76.45
W-1
76.40
Y=-65.000
X=37.030
時代以前面
(1：300)


測道全体図　折図 4

# 第４章　遺構と遺物

## 第１節　Ｂ区北側道

### 第１項　概要

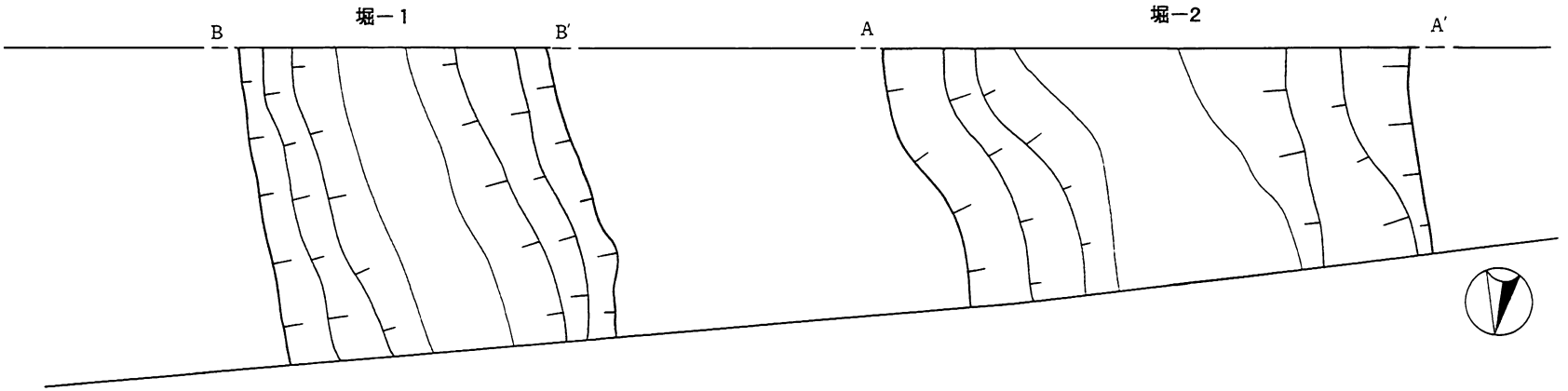
本調査区は小字『高堰』に位置する。小字『高堰』が示すように、西方200m に端気川が南流し、樋越堰が設けられ、本区は微高地に立地する。調査区西側には天台宗に属する宝乗寺が位置し、本線部分の発掘調査により方形に巡らされた環濠を持つ寺院であることが明らかになっている。同寺は開基・開山および創建年代は不明であるが、江戸時代元禄期には既に存在し、文政期には無住の寺となっていたといわれ、跡地には北関東自動車道の工事直前まで住僧墓碑が６～７基、不動堂が現存し、北関東自動車道工事の際に、不動堂の解体を行い、住僧墓碑を徳丸町雲乗殿（小字『高堰』）に移転している。墓碑には「（梵字）　大徳□譽□□□」、「（梵字）　／　權大僧都法印辯海　／　行年　六十　／　施主　」「享保四　／　天眞大阿闍梨法印起慶　／　二月朔日　」「宝暦　／　權大僧都法印誠昌　十月廿三日　」「　（宝筐印塔）　」の銘がみられ（移転前の状況で判読できる限りをここに示した）、不動堂には「徳丸村」「正徳五年」などの銘がある鰐口が掲げられていた。

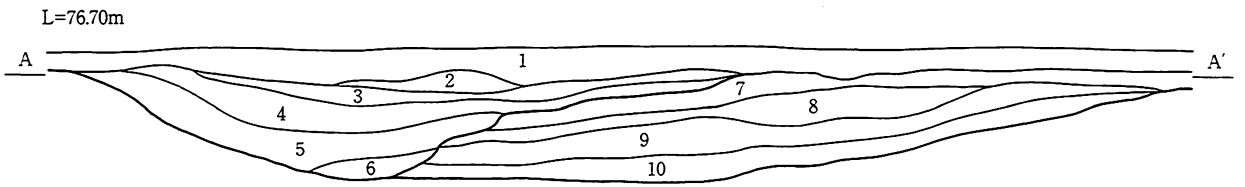
本調査区において確認された文化層は２面である。第１面は中世館跡検出面、第２面は弥生時代以前面である。１面は堀２条、溝３条、土坑12基、２面は溝２条、土坑１基、ピット15基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

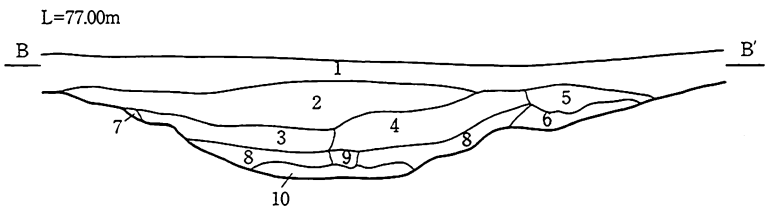
### 第２項　中世面

中世面は微高地上に立地する。本区は既存の家屋や畑地により、東側の大部分は攪乱を受けているため、浅間Ｂ・Ｃ軽石の残存は、著しく不良であった。本検出面東側より、近代～現代の家屋に伴う掘り込み多数と、土坑12基、溝３条がみられたが、いずれも近代以降の攪乱を多く受けているため、本区東側の弥生時代以前面より上層では、遺構の明確な時期およびその性格をとらえることはできなかった。しかし、西側は、浅間Ｂ軽石、浅間Ｃ軽石の残存は不良であったものの、中世館跡の堀が２条検出されている。

**１号堀・２号堀**　X=37,010、Y=-65,140で検出されている。１号堀は、調査区を南北（N26°W）に縦断し、検出長7.30m、上端幅6.94～7.34m、下端幅1.50～2.00m、深さ1.05～1.65m を計測し、断面形状は逆台形を呈する。覆土中より中世（14・15世紀代）の羽口および火舎が出土している。２号堀は、調査区を南北（N26°W）に縦断し、検出長5.50m、上端幅10.40～11.90m、下端幅5.40～6.00m、深さ1.07～1.44m を計測し、断面形状は逆台形を呈する。土層断面により堀埋没後に上端幅3.60m、下端幅1.50～2.00m、深さ0.50～0.60m の溝が再掘削（若しくは改修）された形跡がみられ、本遺跡付近一帯に確認されている環濠屋敷との関係が指摘される。出土遺物は埋没後の再掘削を受けない堀底部より、角閃石安山岩を材質とする五輪塔火輪部（梵字などの刻なし）が１点出土している。出土した五輪塔火輪から推定する空・風輪の規模は、輪（幅21cm）の空・風輪接続孔（径７cm）からほぼ幅14～15cm に推定復元される。以上のことより、少なくとも空・風輪が小さい古い段階のものではなく、鎌倉時代中期に成立し、鎌倉末～室町時代にかけて盛行する正形五輪塔以降のものと考えられる。１号堀・２号堀（再掘削）は、同一の走向（N26°W）、同規格（上端幅、深さなど）を示し、ほぼ同時期に機能した遺構と推測され、これらはいわゆる二重堀であったと考えられる。さらに本遺跡１号堀および２号堀は、南隣接地である本線部分へ続くことが確認され、本遺跡Ｂ区西隣に位置する方形に巡らされた環濠を持つ宝乗寺（天台宗）との関連が注目される。




0　2m

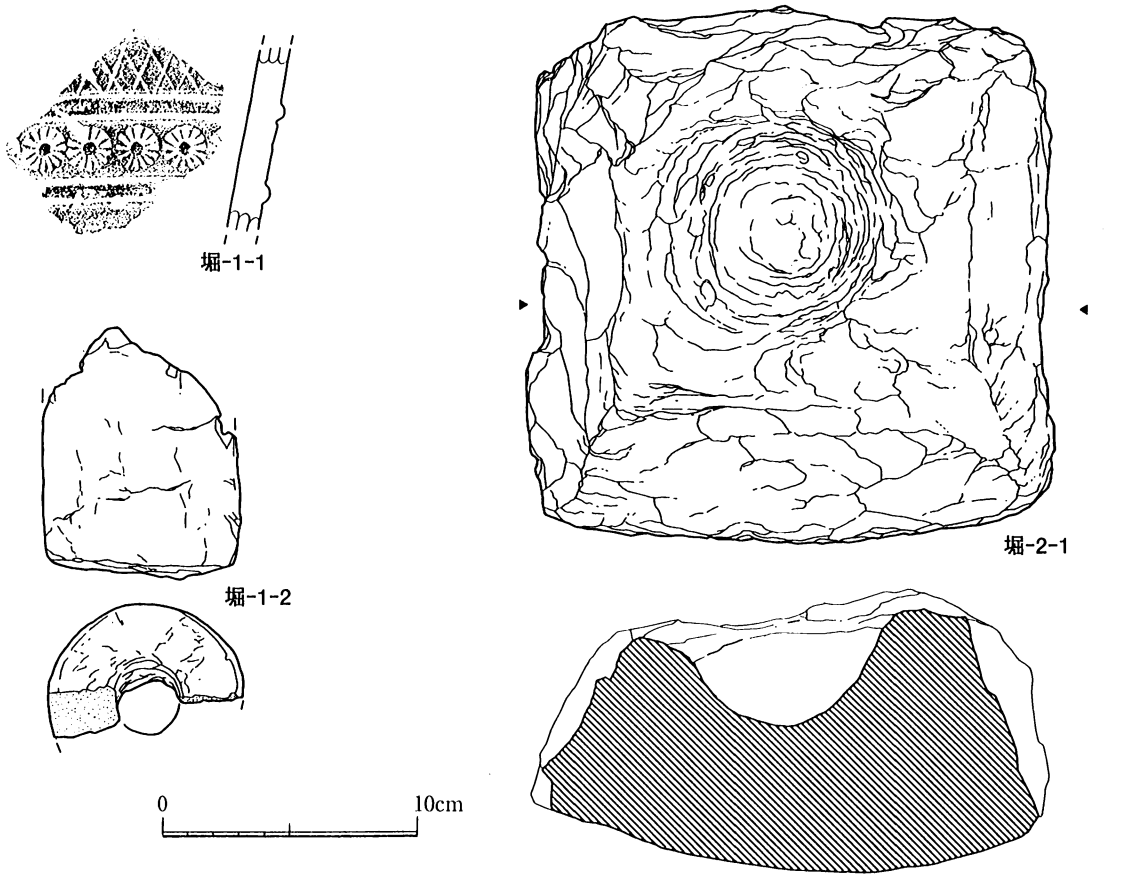
堀－1

1．表土（黒褐色土）　植物の根多量、白色軽石（φ1～3mm）少量含む。（疎密激しい）粘性弱くしまり弱い。
2．灰褐色土　白色軽石（φ1～2mm）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
3．暗灰褐色土　白色軽石（φ1mm以下）少量含む。粘性ありしまり弱い。
4．明灰褐色土　礫（φ3～5cm大）多量、黒色土塊（φ1cm）多量に含む。（疎密激しい）粘性あり。しまり弱い。
5．灰褐色土　礫（φ1～2cm大）少量含む。（疎密激しい）粘性弱くしまり弱い。
6．淡灰色土　シルト土を含む。粘性あり。しまりあり。
7．灰白色粘質土　礫（φ5～7cm大）多量に含む。粘性あり。しまりあり。
8．淡黒灰色土　砂成分多量、酸化鉄成分多量に含む。粘性ややあり。しまりあり。
9．灰色土　黒色土塊（φ1cm）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
10．淡黒灰色土　砂成分多量に含む。粘性強くしまりある。

堀－2

1．表土（黒褐色土）　礫（φ1～3mm）多量礫（φ1cm以下）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
2．灰白色土　礫（φ1～5mm）多量、シルト土少量、炭化物（φ1cm以下）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
3．灰白色土　礫（φ1～3mm）多量、砂成分多量、炭化物（φ2～3mm）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
4．灰褐色土　白色軽石（φ1～2mm）少量、炭化物（φ1cm以下）少量、黒色土塊（東側に多量）含む。粘性弱くしまり弱い。
5．黒褐色土　砂成分多量、炭化物（φ1cm以下）少量含む。粘性弱くしまり弱い。
6．灰白色土　礫（φ1～3cm）少量、砂成分多量に含む。粘性あり。しまりあり。
7．淡黒褐色土　白色軽石（φ1～3mm）多量、礫（φ3mm～1cm）多量、砂成分少量含む。粘性弱くしまり弱い。
8．褐灰色土　礫（φ5mm～7cm）多量、砂成分多量、炭化物多量、赤色礫少量、流木の枝含む。土師器片少量出土。粘性弱くしまり弱い。
9．暗灰褐色土　シルト土含む。粘性弱くしまりあり。
10．灰褐色土　砂成分少量含む。粘性弱くしまりあり。

第14図　B区北側道1・2号堀




第15図　B区北側道出土遺物

**表3　1・2号堀計測表**

| | 走　向 | 上端幅 | 下端幅 | 深　さ | 断面形 | 出土遺物 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1号堀 | N26°W | 6.94～ 7.34m | 1.50～ 2.00m | 1.05～1.65m | 逆台形 | 羽口・火舎 | |
| 2号堀 | N26°W | 10.40～11.90m | 5.40～ 6.00m | 1.07～1.44m | 逆台形 | 五輪塔火輪 | 埋没後再掘削有 |

### 第3項　弥生時代以前面

本遺構面からは、溝3条、土坑1基、ピット15基が検出された。B区北側道より検出された1号溝、2号溝は、堆積状況より調査区北側で分岐した可能性があり、ともに南流していたことが判明した。土坑1基、ピット15基の性格は不明である。

**表4　遺物観察表**

| 遺構 | 遺物番号 | 器　種 | 計　測　値 | 遺 存 率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1号堀 | 1 | 土師質<br>火　舎 | ……・……<br>…… | 破　片 | 胴部は半截竹管状の工具で突帯状に区画される。上位はヘラ状工具による斜格子、下位は菊花状スタンプを連続に施文される。 | ①細かな石英、長石、褐色粒<br>②にぶい赤褐色<br>③未還元 | 埋没土 |
| | 2 | 土師質<br>羽　口 | 外径：7.5<br>内径：2.5 | 基部1/2 | 径2.5cm の棒状工具に粘土を巻きつけ、それを引き抜いた痕跡が観察される。大型の羽口。 | ①角閃石、褐色粒、褐色粒多<br>②明赤灰色　③酸化 | 埋没土 |
| 2号堀 | 1 | 五輪塔<br>火　輪 | 長さ：21.4<br>幅　：21.0<br>厚さ：12.0<br>重さ：3.7kg | 火輪部完存 | 火輪部のみの出土である。側面は鑿状工具で面取りし、部分的にその痕跡が観察される。空・風輪部の接続に上部に深さ3cmの孔を穿ち、火輪部の四隅はわずかに反る。 | ④角閃石安山岩 | 埋没土 |

## 第2節　C区北側道

### 第1項　概要

本区は小字『高堰』に位置し、B区北側道の東隣にあたる。本区は東に隣接する徳丸仲田Ⅲ遺跡と同様、

低地上に立地する。

本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は畦畔２条、土坑１基、ピット５基、３面は溝１条、２面は確認面は存在していたものの遺構は確認されなかった。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

**第２項　浅間Ｂ軽石下面**

本文化層では、畦畔２条、土坑１基、ピット５基が検出された。畦畔は、南北（N10°E）に走る１号畦畔および東西（N90°E）に走る２号畦畔がほぼ直交し、南北方向畦畔の走向は、東隣の徳丸仲田Ⅲ遺跡Ａ区北側道の畦畔５条・溝２条の走向（N９～16°W）に近く、徳丸仲田Ⅲ遺跡とほぼ同規格の条里水田が広がっていたものと推測される。しかし、畦畔残存部分より１区画面積の算出に至るまでの情報は得らなかった。また土坑１基、ピット５基についての性格は不明である。

**第３項　浅間Ｃ軽石混土層下面**

浅間Ｃ軽石混土層の堆積については、明瞭に確認されたものの同層直下における遺構は検出されなかった。

**第４項　弥生時代以前面**

本区より検出された１号溝は内径2.5mの弧状に巡る。性格について不明であるが、東隣する徳丸仲田Ⅲ遺跡Ａ区北側道検出の不明遺構と同様、溜井などの機能を担う可能性が考えられる。

## 第５章　まとめ

本遺跡からは、中世面、浅間Ｂ軽石下面、浅間Ｃ軽石混土層下面、弥生時代以前面の計４面の遺構確認面が検出された。中世面からは堀２条、土坑12基、溝３条、浅間Ｂ軽石下面からは畦畔２条、土坑１基、ピット５基、弥生時代以前面からは溝３条、土坑１基、ピット15基がそれぞれ検出されている。また、浅間Ｃ軽石混土層下面からは遺構の検出はみられなかった。

本遺跡では、中世館跡と環濠を巡らせた寺院が近接している特徴がみられ、また中世面の堀からは環濠屋敷の溝へと改修が指摘されるなどの成果があった。本遺跡中世面よりは、平行する同規格の堀が２条検出されており、これらは同時期の構築と推定され、中世館の二重堀であったと考えられる。堀の形状は浅く、防護としての機能は劣るものであるが、端気川等の地形や、生産域の掌握、さらに幹道の想定路等の諸条件を考慮した立地であると想定される。本遺跡の所在する徳丸町および付近の力丸町、房丸町（通称『三丸地区』）、西善町、鶴光路町付近に営まれた環濠屋敷は、力丸城や宿阿内城、新堀城、極楽寺や善光寺を中核にしており、その多くは室町時代以降の力丸氏の力丸城移住、和田氏の新堀城移住等の時期に環濠屋敷の前身が築造されたと考えられている。また、本遺跡のような屋敷と寺社を環濠で巡らす配置は、県道前橋玉村線（本遺跡西方0.8km）沿線の極楽寺・善光寺付近の環濠屋敷、寺社配置との類似性がみられる。県道前橋玉村線〔六供－亀里－鶴光路－新堀〕は、鎌倉期以降の古道に沿っているといわれ、付近の微高地上には、源頼朝・義経などの伝説がみられる。中でも、極楽寺・善光寺は徳丸高堰Ⅱ遺跡に近く、建久年間に、源頼朝が母（伝承では『常盤御前』。通説では熱田大宮司一族『由良御前』）のために建立・再興した伝説が存在し、極楽寺には『常盤御前』墓所が伝えられている。建久年間前後には、由良御前ゆかりの人物が上野介・上野国守護に任命されている点は、この地域の開発に重要な意味を持つもので、特に寺社建立には、付近の整備、経済基盤の確保が伴ったと考えられ、隣接する玉村御厨（現在の佐波郡玉村町付近）の成立（長寛年間）後の建久年間には既に現在の鶴光路・徳丸付近の再整備がなされたものと想像される。今回の調査は部分的なものであったが、これら文献史料を断片的であるが、補足する資料が得られている。

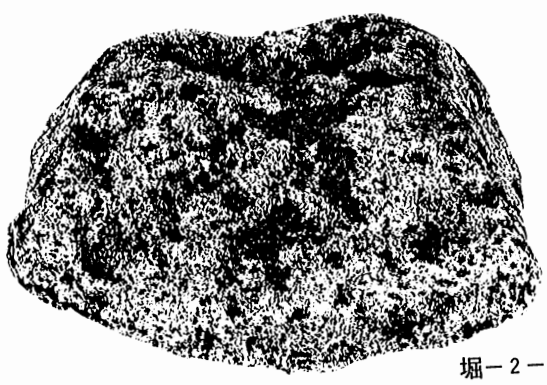
1　B区北側道全景

2　同　中世面1号堀

3　同　中世面2号堀

堀－1－1

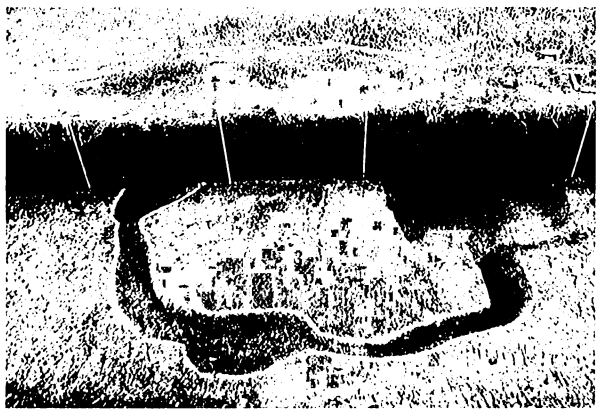
堀－1－2



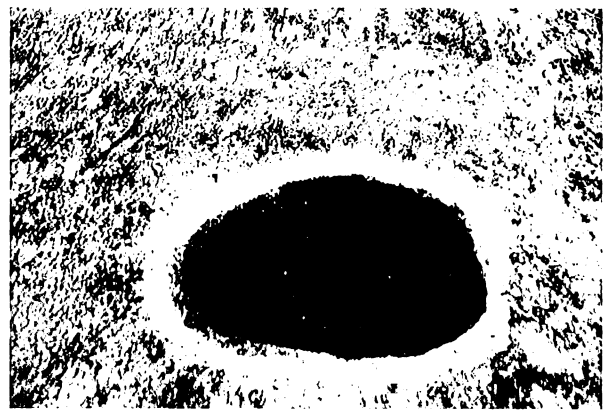
堀－2－1

4　出土遺物

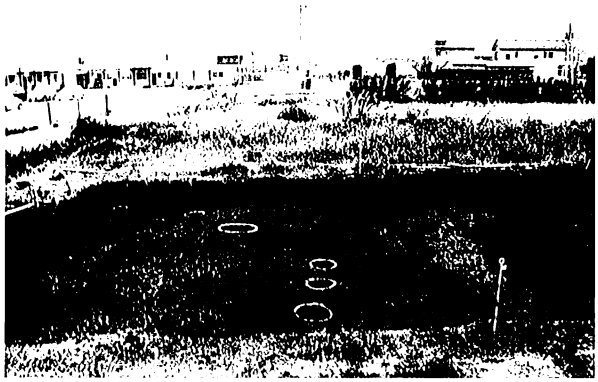
1　C区北側道全景



2　同　弥生時代以前面1号溝



3　同　As-B下面土坑



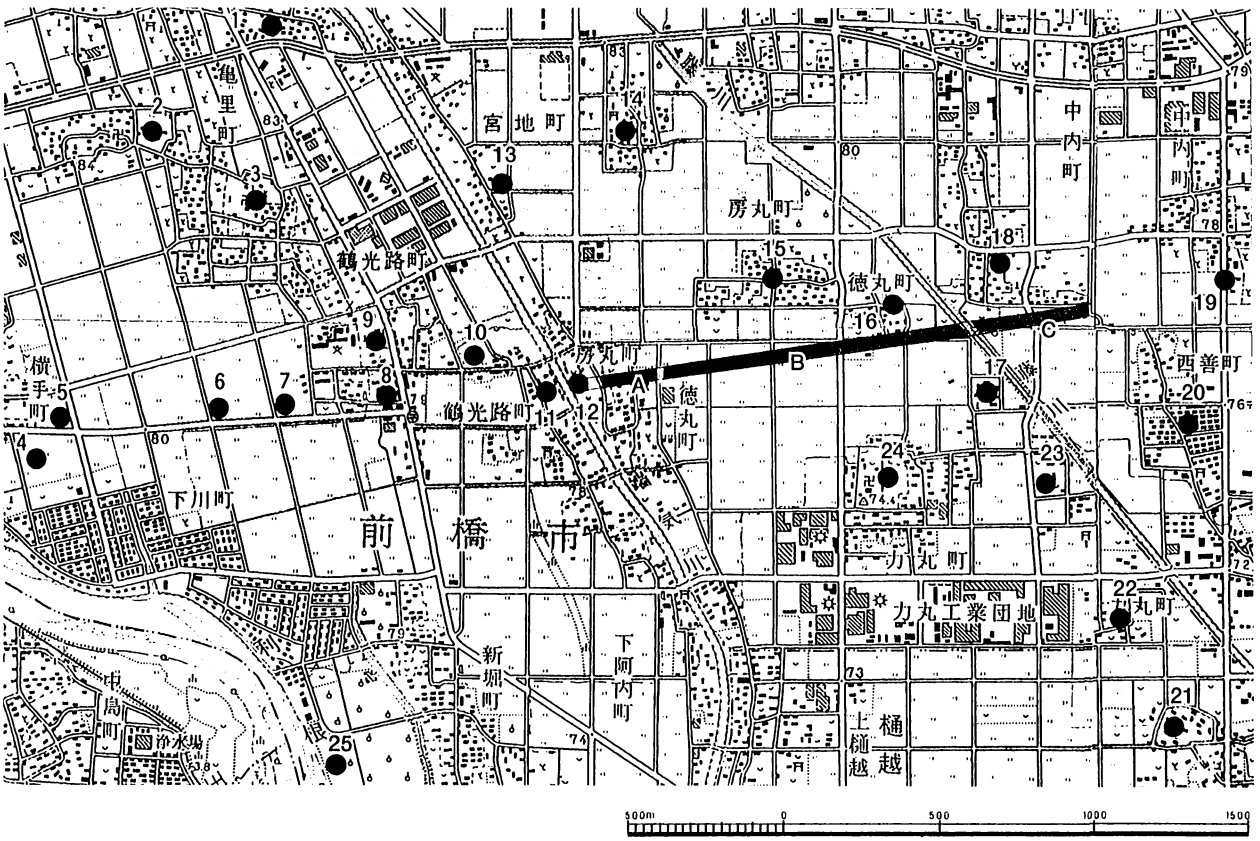
4　同　As-B下面ピット群

5　基本堆積土層

# Ⅲ　徳　丸　仲　田　Ⅲ　遺　跡

## 第１章　　遺跡の立地と周辺の遺跡

徳丸仲田Ⅲ遺跡の所在する徳丸町は前橋市の南部にあたり、JR前橋駅の南東約6.5kmに位置している。遺跡地の北1.0kmに県道高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西善力丸線が調査区を南北に縦断する。また、西1.1kmに鎌倉期以降の古道に沿っているといわれる県道前橋玉村線が南北に走る。本遺跡の所在する徳丸町および周辺の下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・西善町・中内町は、低地上に水田・畑が広がり、微高地上には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の群馬郡徳丸村地味の項には「黒埴ニシテ赭色ヲ帯ヒ膏脂アリ水利便ニシテ諸種ニ適ス但東西河畔ノ地砂壌ニシテ桑柘ニ宜シ」と記され、旧状を伝えている。

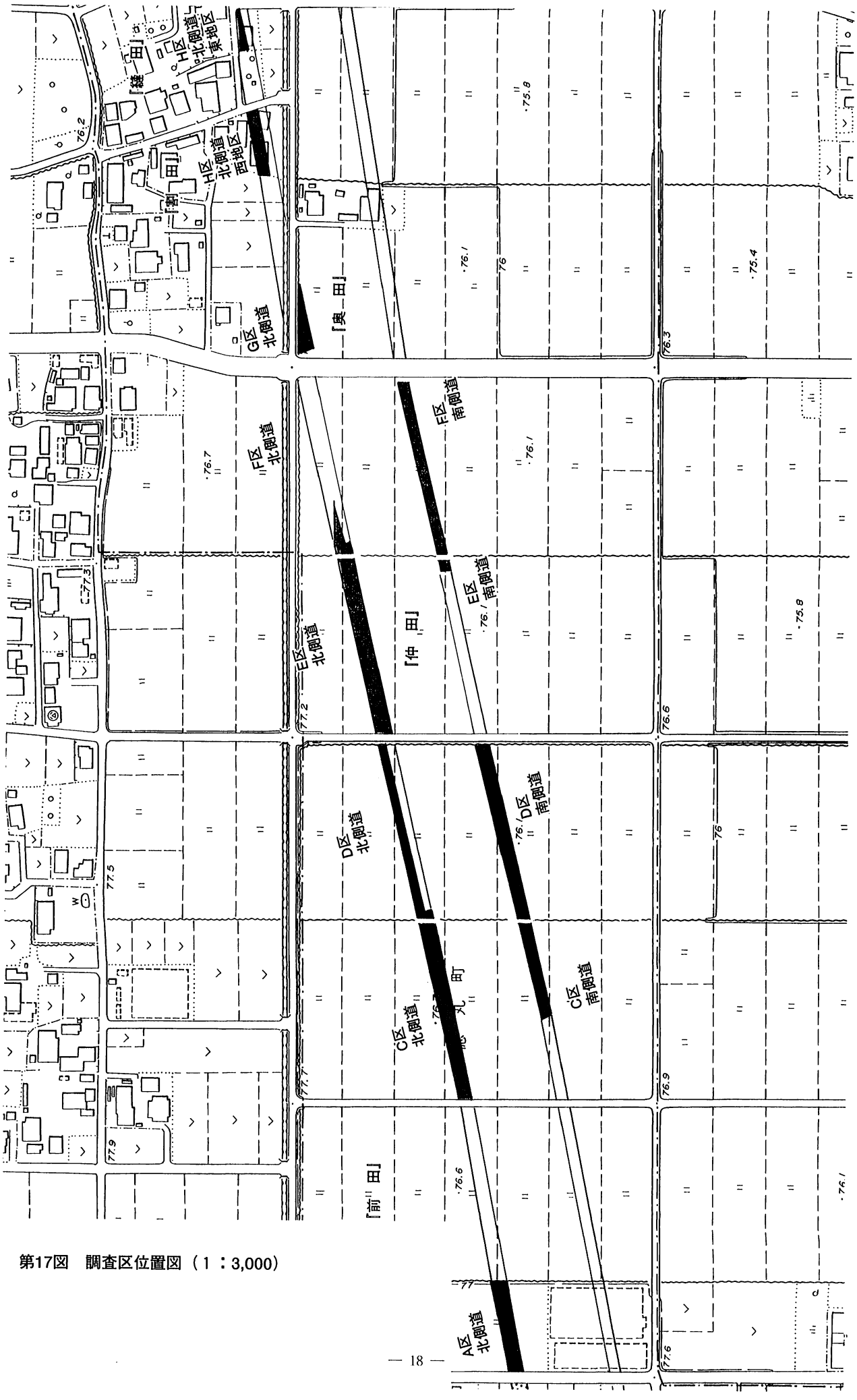



（国土地理院２万５千分の１『前橋』『大胡』『高崎』『伊勢崎』）

A　徳丸高堰遺跡　　B　徳丸仲田遺跡　　C　西善尺司遺跡

1．宿阿内城（亀里阿内城）跡　2．亀里（天神）矢島百石屋敷跡　3．成菩提山光明院極楽寺　4．井戸南遺跡　5．横手宮田遺跡　6．横手湯田遺跡　7．鶴光路練引遺跡　8．鶴光路（村中）環壕遺構群　9．雲上山善光寺　10．西田遺跡　11．鶴光路板橋遺跡　12．宝乗寺跡　13．宮地中田遺跡　14．東宮地環壕遺構群　15．房丸東環壕遺構群　16．徳丸東（縫田）環壕遺構群　17．徳丸東（後）環壕遺構群　18．旧西善環壕遺構群（須田屋敷）19．中内村前遺跡　20．横堀環壕遺構群　21．中樋越環壕遺構群　22．東力丸（宮田）環壕遺構群　23．東力丸（藤川）環壕遺構群　24．力丸城跡・降龍山善昌寺　25．新堀城跡

第16図　周辺の遺跡



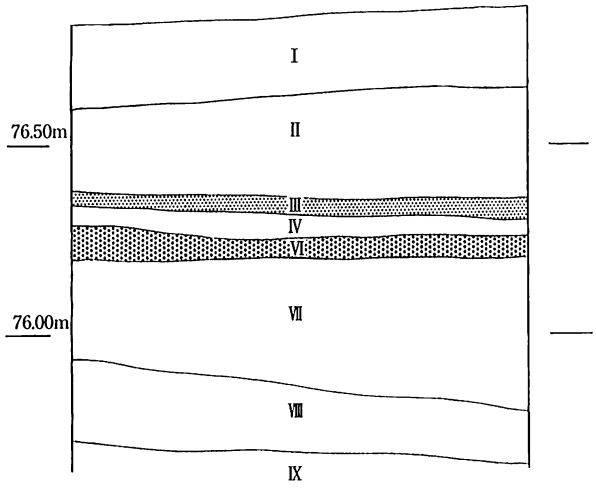

第17図　調査区位置図（1：3,000）

本遺跡の周辺を概観すると、西3.0km に利根川が南流し、周辺に端気川・藤川などの小河川が南東へ流下する。現在では河川改良事業・圃場整備事業により旧地形の改良が行われ、一面に重畳たる穀倉地帯が広がりをみせ、旧地形を読み取ることは難しい。これまで実施された調査からは、低地上に浅間山噴火の影響のみられる古墳時代前期および平安時代後期の水田が営まれており、現在に至るまで生産行為がなされたことが明らかにされている。さらに端気川および藤川沿いの微高地上では同時期の集落、中世館跡および環濠屋敷跡が展開する。特に本遺跡の位置する三丸地区（徳丸・力丸・房丸地区の通称）や鶴光路、西善地域周辺は、中世以降の城館跡（宿阿内城・力丸城・新堀城など）、環濠屋敷跡および寺社（成菩提山光明院極楽寺・雲上山善光寺・降龍山善昌寺など）が数多く確認される地域である。三丸地区（徳丸・力丸・房丸）は、すべて地区名に「丸」が使用されている。この「丸」は中世館等を示すもの、あるいは荘園制の単位などの諸説があり、詳細は不明であるものの、中世期において一つのまとまりを示すものであると推測される。

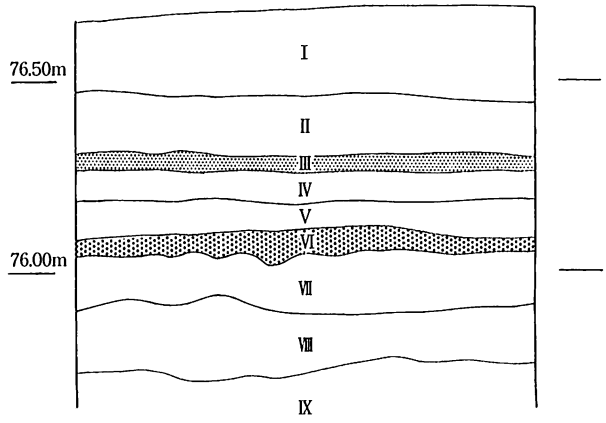
本遺跡は、西側より前橋市徳丸町小字『前田』（A 区・C 区）、『仲田』（D 区・E 区・F 区）、『奥田』（G 区）、『割田』（H 区西地区）、『縫田』（H 区東地区）に位置する。

## 第２章　調査の経過

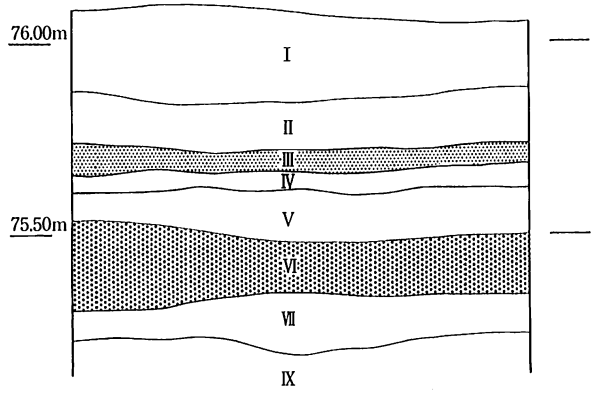
５月　中旬　平成10年度徳丸仲田Ⅲ遺跡の発掘調査を開始する。
E 区北側道、As－B 下面調査を行う。
下旬　E 区・F 区北側道、As－B 下面・As－C 混土層下面調査を行う。
６月　上旬　E 区・F 区北側道、As－C 混土層下面調査を行う。
中旬　E 区・F 区北側道、As－C 混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
下旬　E 区・F 区北側道冠水。E 区南側道、As－B下面調査を行う。
F 区南側道、As－C 混土層下面調査を行う。
７月　上旬　E 区南側道、As－B 下面調査を行う。
F 区南側道、As－C 混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
中旬　D 区・G 区北側道、As－B 下面調査を行う。D 区南側道西側、As－B 下面調査を行う。
E 区南側道、As－C 混土層下面調査を行う。F 区南側道、弥生時代以前面調査を行う。
下旬　H 区北側道東地区から C 区北側道へプレハブを移設する。
D 区・G 区・H 区西地区北側道および C 区・D 区南側道西側、As－B 下面調査を行う。
E 区南側道、As－C 混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
F 区南側道、弥生時代以前面調査を行う。H 区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。
E 区・F 区北側道および F 区南側道の発掘調査を終了する。
８月　上旬　D 区・G 区・H 区西地区北側道および C 区・D 区南側道西側、As－B 下面調査を行う。
D 区・G 区・H 区西地区北側道および C 区・D 区南側道西側、As－C 混土層下面調査を行う。
E 区南側道、弥生時代以前面調査を行う。
H 区北側道東地区、中世館跡検出面・旧石器時代調査を行う。E 区南側道の発掘調査を終了する。
中旬　C 区南側道、As－C 混土層下面調査を行う。
D 区・G 区北側道および D 区南側道西側、As－C 混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
下旬　C 区南側道・D 区北側道・G 区北側道および C 区南側道西側、弥生時代以前面調査を行う。
H 区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。台風４号により調査区が冠水する。



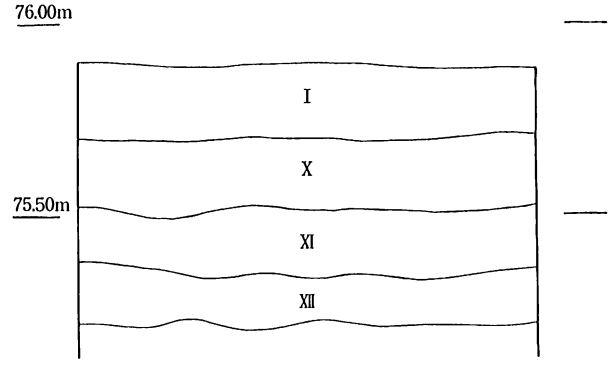

A区北側道北壁



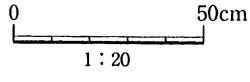

D区南側道北壁




H区北側道西地区北壁




H区北側道東地区北壁



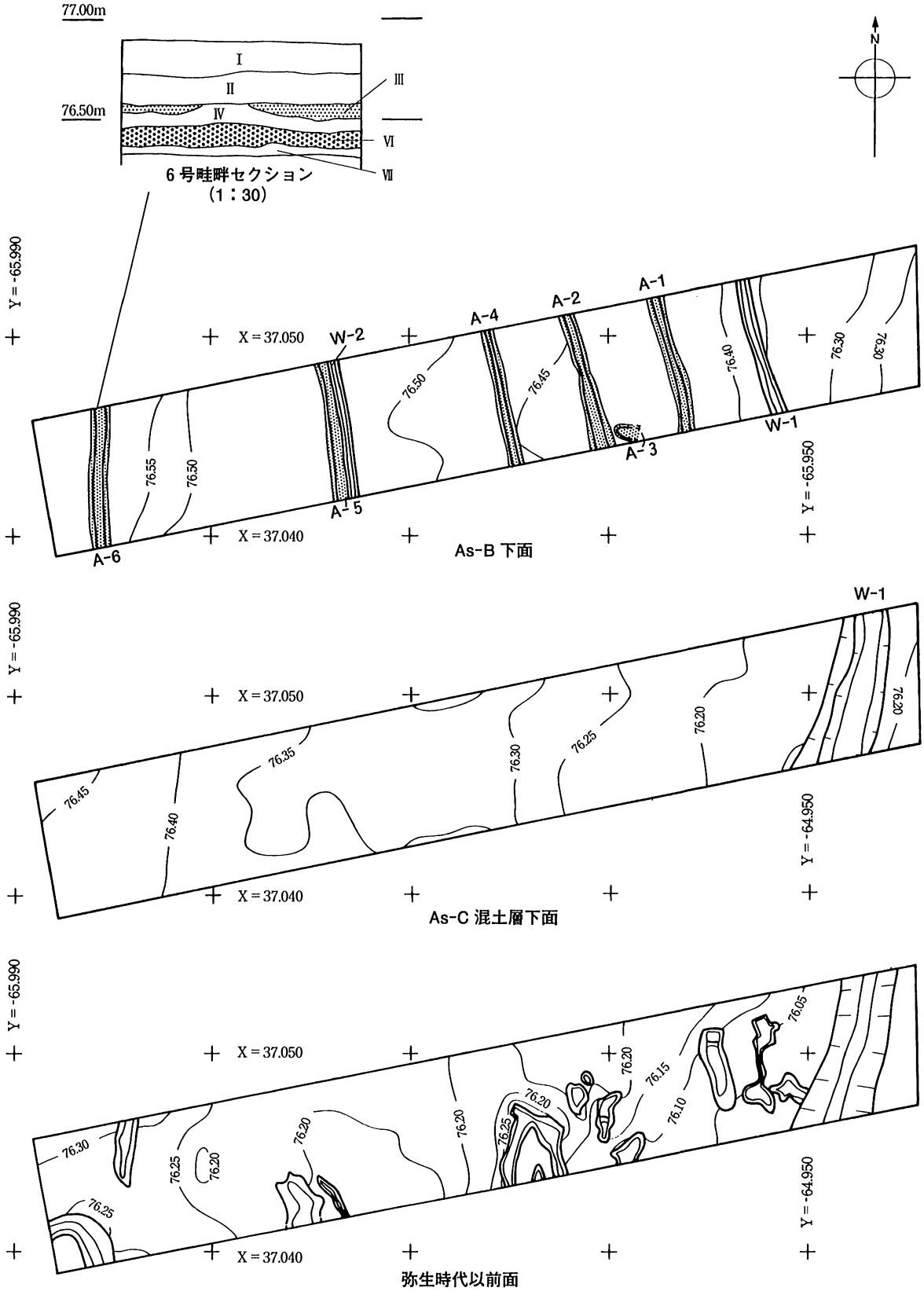

第18図　標準堆積土層

9月　上旬　C区北側道、As－B下面調査を行う。G区北側道、弥生時代以前面調査を行う。
H区北側道西地区As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
H区北側道東地区、中世館跡検出面調査を行う。
D区・G区北側道およびC区・D区南側道西側の発掘調査を終了する。
中旬　C区北側道、As－B下面・As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
H区北側道西地区・東地区の発掘調査を終了する。
台風5号が群馬県を直撃し、調査区が冠水する。
下旬　A区北側道、As－B下面・As－C混土層下面調査を行う。
C区北側道、As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
10月　上旬　A区北側道、As－B下面・As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
中旬　A区北側道、As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
C区北側道、As－B下面調査を行う。A区北側道の発掘調査を終了する。
C区北側道上のプレハブ撤去する。
下旬　C区北側道、As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
C区北側道の発掘調査を終了する。
11月　上旬　調査を一時中断する。
12月　上旬　D区南側道東側発掘調査再開、As－B下面・As－C混土層下面調査を行う。
中旬　D区南側道東側As－B下面・As－C混土層下面・弥生時代以前面調査を行う。
D区南側道東側発掘調査終了をもって平成10年度徳丸仲田Ⅲ遺跡の発掘調査を終了する。

## 第3章　標準堆積土層

本遺跡調査によって検出された文化層は、中世館跡検出面の第1面、浅間B軽石下面の第2面、FA堆積面の第3面、浅間C軽石混土層下面の第4面、弥生時代以前面の第5面に分けられる。本遺跡で確認された鍵層は浅間B軽石層、FA堆積面、浅間C軽石混土層の3層であった。以下はA区北側道、D区南側道、H区北側道西地区、H区北側道東地区で観察したもので、本遺跡の層序を示すものである。

Ⅰ　暗褐色土層　現耕作土。しまり、粘性ともに弱い。
Ⅱ　黒褐色土層　旧耕作土。しまりはあるが、粘性は弱い。
Ⅲ　As－B堆積層　天仁元年（1108年）降下浅間B軽石堆積層。（下面が第2面浅間B軽石下面）
Ⅳ　黒色土層　しまり、粘性ともにあり。
Ⅴ　灰褐色土層　しまり、粘性ともにあり。白色軽石（浅間C軽石）を少量含む。
（下面が第3面　浅間C軽石混土層下面）
Ⅵ　暗褐色土層　しまり、粘性ともにあり。白色軽石（浅間C軽石）多量混入。
Ⅶ　黒灰色土層　しまり、粘性ともにあり。
Ⅷ　濃灰色土層　しまり、粘性ともにあり。（下面が第4面　弥生時代以前面）
Ⅸ　灰白色土層　しまり、粘性ともにあり。シルト質。
Ⅹ　黄灰色土層　しまりはあるが粘性弱。（下面が第1面　中世館跡検出面）
Ⅺ　暗褐色土層　しまりはあるが粘性弱。砂層質。
Ⅻ　明黒褐色土層　しまりはあるが粘性弱。白色砂を含む。




第19図　A区北側道全体図（1：300）

# 第４章　遺構と遺物

## 第１節　A区北側道

### 第１項　概要

本区は小字『前田』に位置する。徳丸仲田Ⅲ遺跡の最西部にあたり、徳丸高堰Ⅱ遺跡と隣接する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は溝２条、畦畔６条、２面は溝１条、３面は溝１条、不明遺構14基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。

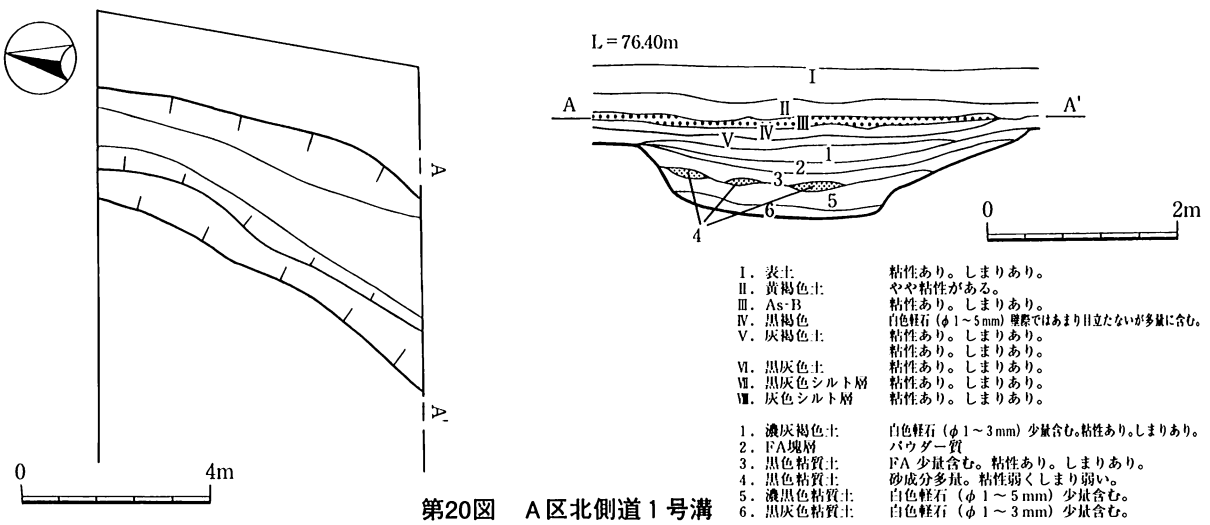
### 第２項　浅間Ｂ軽石下面

本区より、溝２条（南北方向）、畦畔６条が検出された。畦畔は南北方向に５条、東西方向に１条検出され、南北方向の畦畔・溝のうち、畦畔４条、溝２条はＮ９～16°Ｗを指し示すとともに、約4.3m間隔に畦畔・溝が配置されていた。南北方向の畦畔の残存は比較的良好ではあったが、東西方向の残存は不良であった。また、南北方向の畦畔・溝の走向は、西隣の徳丸高堰Ⅱ遺跡１号畦畔（N10°E）とは異なる。以上のことを模式図化すると以下の通りである。

| A区北側道畦畔配置模式図 | 5号畦畔 | 2号溝 | 消滅 —8.6m— カ | 4号畦畔 | —4.3m— | 2号畦畔 | —4.3m— | 1号畦畔 | —4.3m— | 1号溝 | 備考<br>畦畔中央部で計測。<br>畦畔下端幅平均50～60cm<br>５号畦畔、４号畦畔間に消失畦畔ありカ。 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 走向(N°W) | 10 | 9 | | 13 | | 16 | | 10 | | 15 | （Ｎ９～16°Ｗ）範囲 |

### 第３項　浅間Ｃ軽石混土層下面

本区より溝１条が検出された。１号溝は、堆積土中層にFA泥流層の堆積がみられ、FA泥流以前には既に存在し、FA泥流堆積以降も、浅いながらも溝が存続し、その後、浅間Ｂ軽石降下以前には埋没していたことが土層断面より判明した。




第20図　A区北側道１号溝

### 第４項　弥生時代以前面

本区より不明遺構14基が検出されている。不明遺構の形状は不整形で黒色粘質土の厚い堆積が確認されることより、本遺構の多くは粘土成分の長時間沈澱要素が想像され、溜井としての役割を帯びていた可能性が考えられる。本遺構は、同確認面で検出されたＤ区南側道土坑41基および徳丸高堰Ⅱ遺跡Ｃ区北側道１号溝等の関連性が指摘される。

## 第２節　Ｃ区北側道

### 第１項　概要

本区は小字『前田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は溝９条、畦畔９条、水田遺構、土坑１基、ピット11基、２面は土坑１基、３面は溝２条、土坑１基が検出されている。

### 第２項　浅間Ｂ軽石下面

本区より検出された１・４・９号畦畔、３～８号溝の走向（Ｎ０～７°W）に同一性がみられた。また、１号畦畔には、平行する２号畦畔・３号畦畔（N75°W）が交わる。２・３号畦畔は、４号畦畔と交わる想定地まで検出されなかったものの、これらの畦畔は同時期と推察され、囲まれた水田面は約３ｍ（南北距離）×７ｍ（東西距離）を計測し、平面形は平行四辺形を呈している。また、５・６号畦畔との境目には水口が検出されている。調査区西側では平面形「くの字」を描くような水田遺構が検出された。本遺構の畦畔は調査区北西隅より3.5m進み（N52°W）、110°折れ、9.0m 進み（N58°E）、108°折れ（N50°W）10.0m 進み、水田の平面形状は不明である。また、前述の１～４号畦畔とは異なる性格を持った畦畔と考えられる。

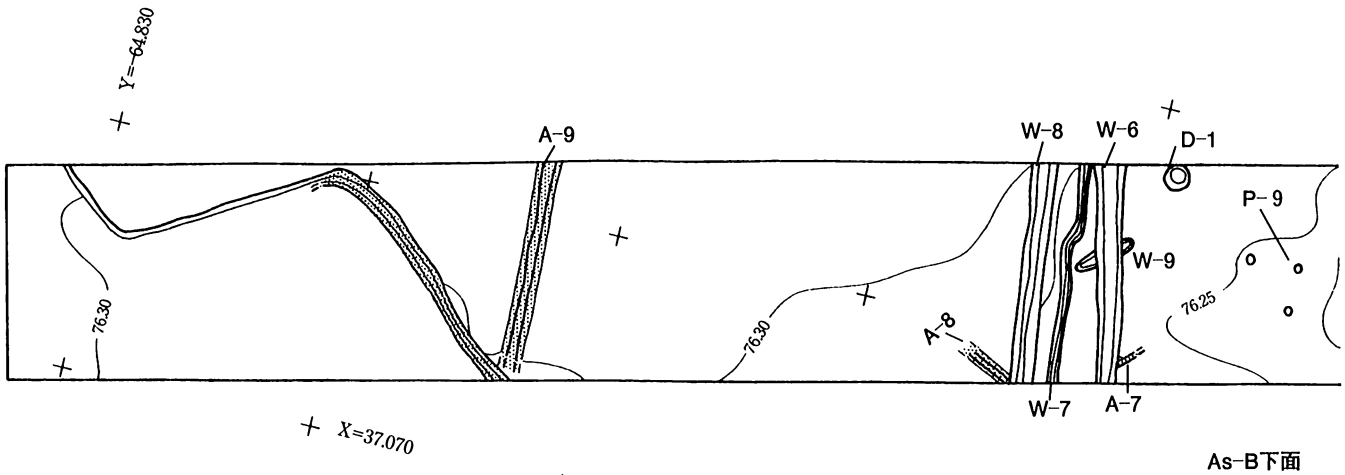
## 第３節　Ｃ区南側道

### 第１項　概要

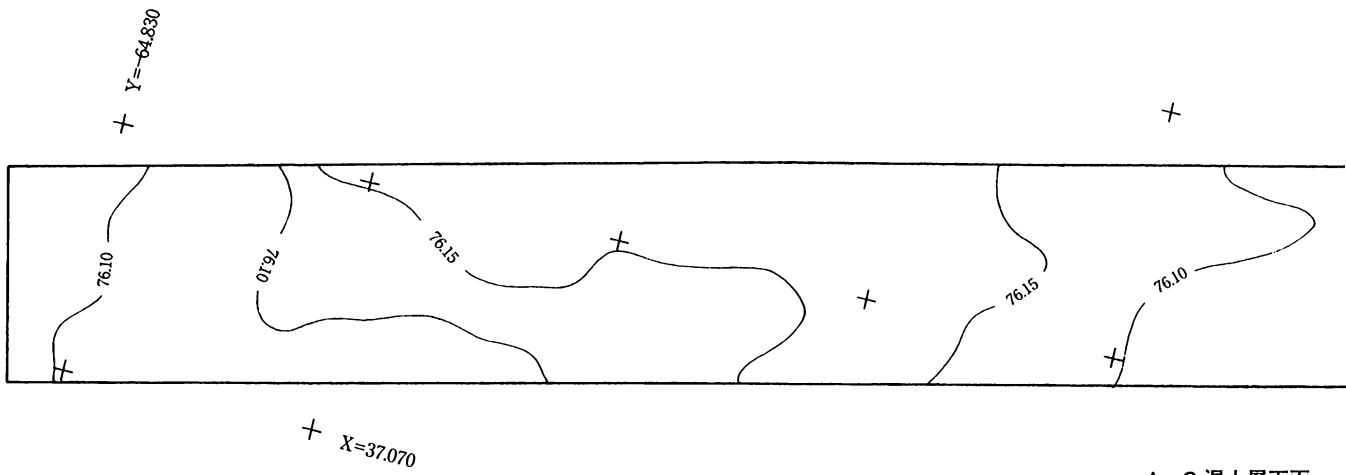
本区は小字『前田』に位置し、本遺跡平成10年度南側道調査区最西端にあたる。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は溝２条、畦畔３条、ピット17基、２面は溝２条、ピット４基、３面は土坑１基が検出されている。

### 第２項　浅間Ｂ軽石下面

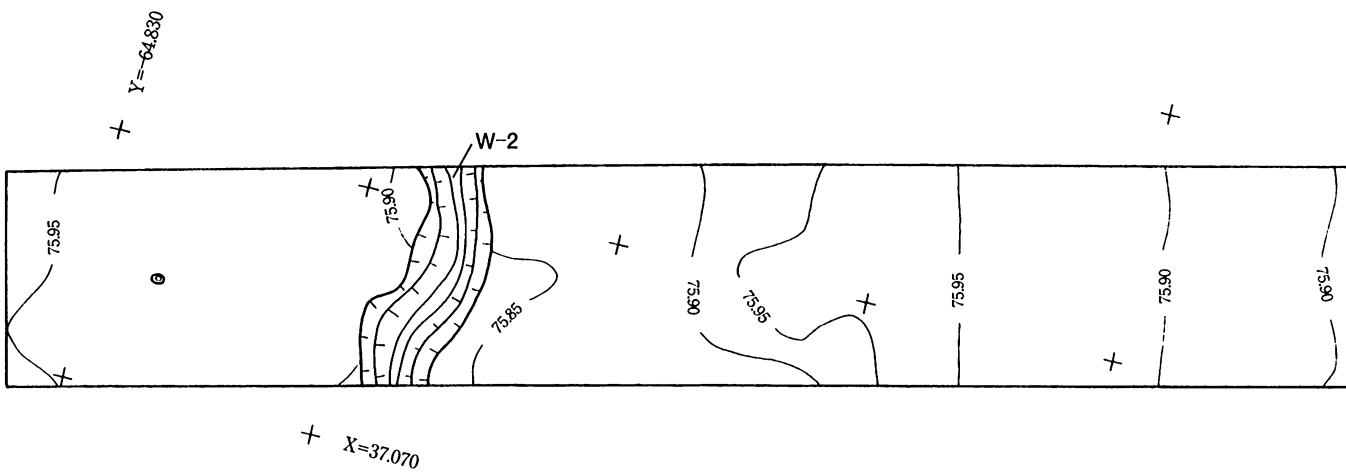
本区より検出された南北に走る１号溝（Ｎ０°E）と１号畦畔（Ｎ０°E）の走向は、ほぼ同一であった。一方で、２・３号畦畔の残存は良好であったものの、走向に一定基準がみられなかったことにより、畦畔の時期の違い、あるいは水田耕作面の平面形状が不定形であった可能性が指摘される。




As-B下面

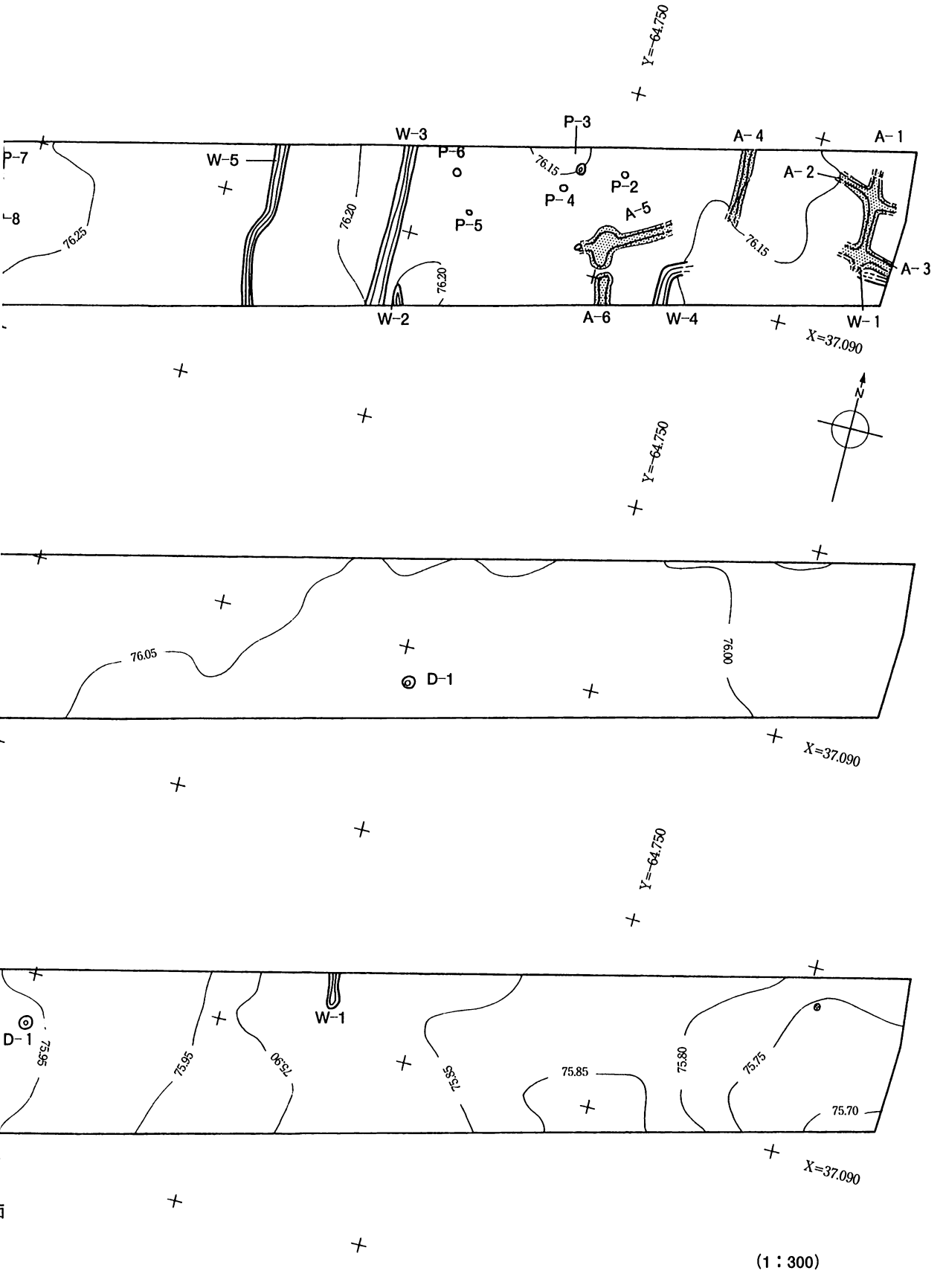



As-C 混土層下面



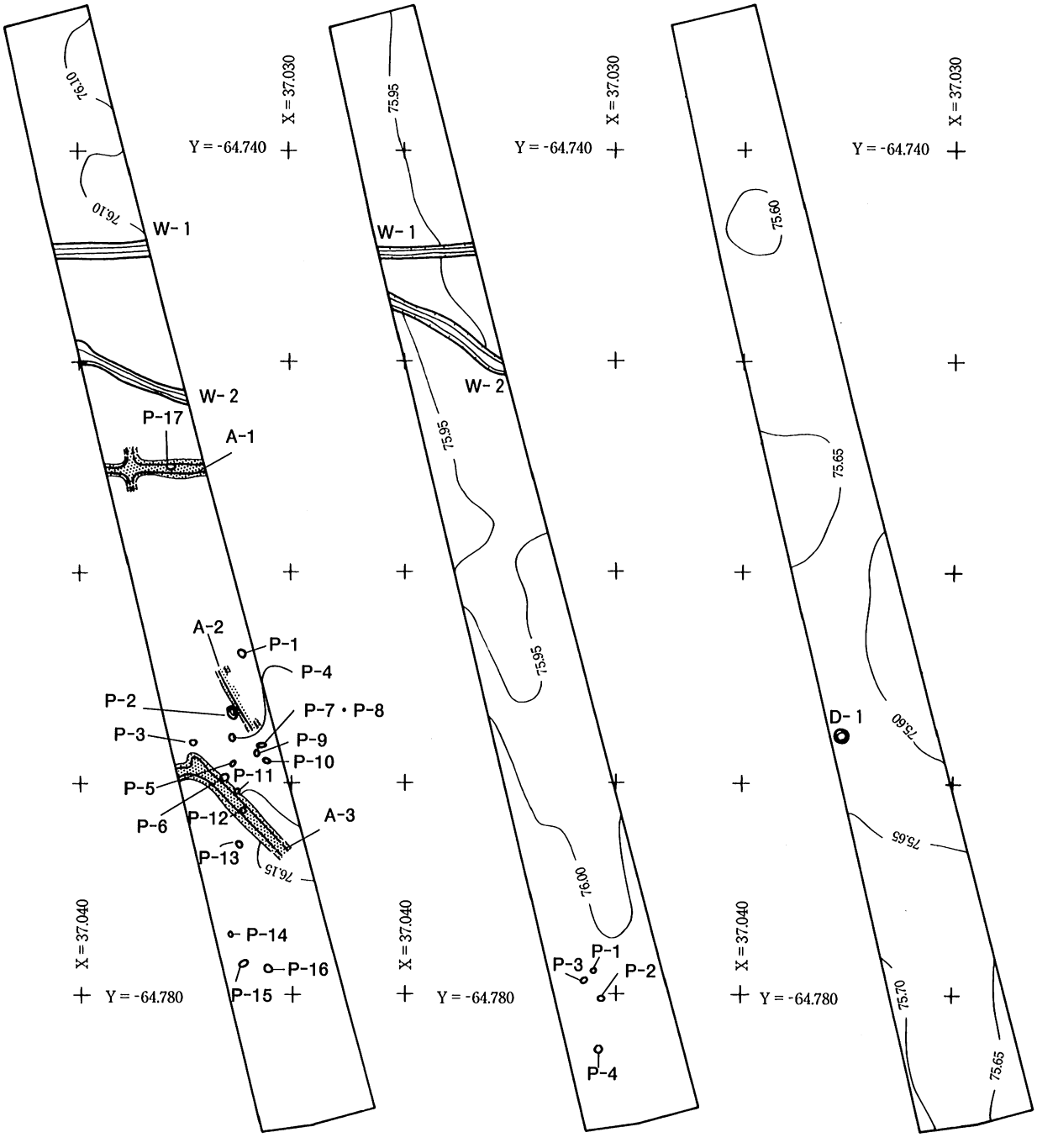

弥生時代以前

第21図　C 区北側道全


Y=-64.750
P-3
W-3
A-4
A-1
P-7
W-5
P-6
76.15
P-2
A-2
P-4
A-5
76.20
P-5
76.15
A-3
76.25
76.20
W-2
A-6
W-4
W-1
X=37.090
N
Y=-64.750
76.05
D-1
76.00
X=37.090
Y=-64.750
D-1
W-1
75.95
75.90
75.85
75.80
75.75
75.70
X=37.090

(1：300)

図　折図 5




As-B 下面　　As-C 混土層下面　　弥生時代以前面

(1：300)

第22図　C 区南側道全体図

## 第4節　D区北側道

### 第1項　概要

本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は4面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面はFA堆積面、第3面は浅間C軽石混土層下面、第4面は弥生時代以前面である。第1面は畦畔6条、第2面はFAに被覆された帯状遺構（畦畔ヵ）、第3面は溝1条、畦畔2条、ピット2基、第4面は溝4条が検出されている。なお第2面は第3面調査を行った際にFA堆積が一部残存（東西18m×南北3mの範囲）していた範囲である。第2面遺構平面図（第23図中段）掲載にあたり、確認面を一にする第3面との分化をせずに、第3面にFAの堆積分布をスクリーントーンをもって示した。

### 第2項　浅間B軽石下面

本面は耕地整理時等についたと思われるキャタピラの痕跡が一面にみられ、遺構の遺存状態は不良と予想されたものの、南北方向に走る畦畔6条が検出された。畦畔走向は、1号畦畔（N8°W）、2号畦畔（N8°W）、3号畦畔（N12°W）、4号畦畔（N14°W）、5号畦畔（N0°W）、6号畦畔（N0°W）を示しており、畦畔方向より1～4号畦畔（N8～14°W）、5・6号畦畔（N0°W）の2種に大別されると考えられる。また、畦畔間距離は、〈1号畦畔〉—5.0m—〈2号畦畔〉—15.0m—〈3号畦畔〉—10.0m—〈4号畦畔〉—17.0m—〈5号畦畔〉—16.0m—〈6号畦畔〉を計測する。しかし、東西方向に走る畦畔は確認されておらず、1区画面積の算出に至るまでの情報は得られなかった。

### 第3項　FA堆積面

本確認面は第3面調査を行った際に、X=37,110、Y=-64,690付近の東西18m×南北3mの範囲（スクリーントーン範囲）においてFAの堆積がみられた。また中央部にはFA堆積がみられない部分が南北（N10°W）に走ることが確認され、該期の畦畔であった可能性が考えられる。

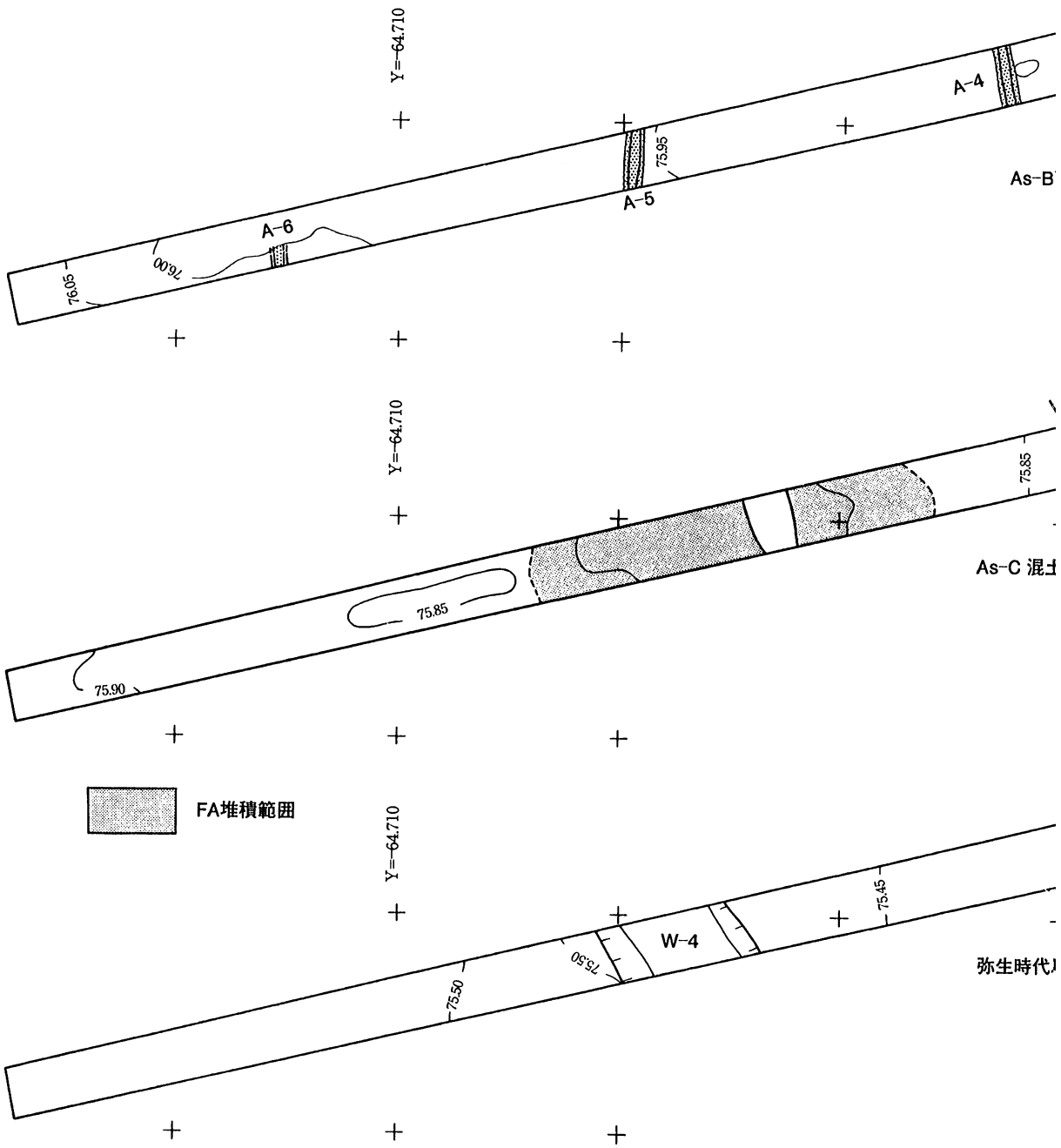
## 第5節　D区南側道

### 第1項　概要

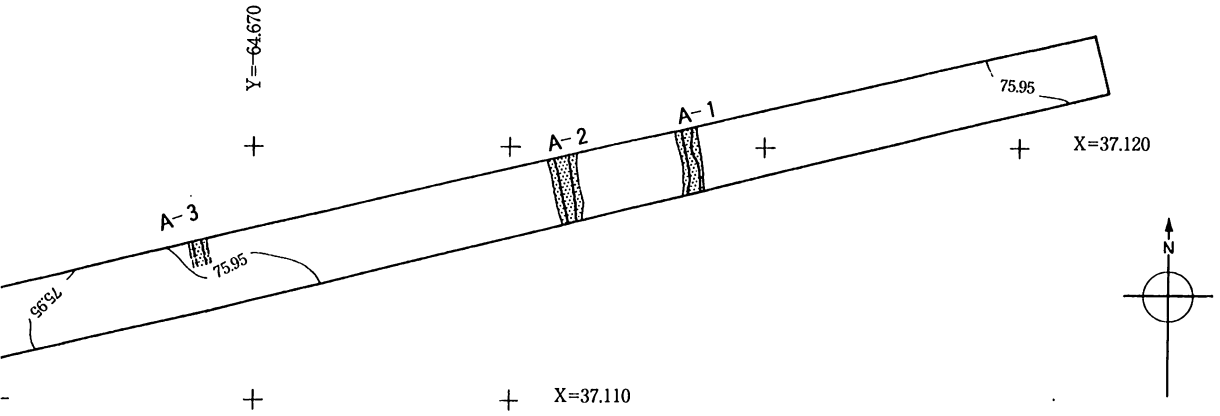
本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は3面である。第1面は浅間B軽石下面、第2面は浅間C軽石混土層下面、第3面は弥生時代以前面である。1面は溝2条、畦畔4条、2面は溝3条、3面は溝4条、土坑41基が検出されている。

### 第2項　浅間B軽石下面

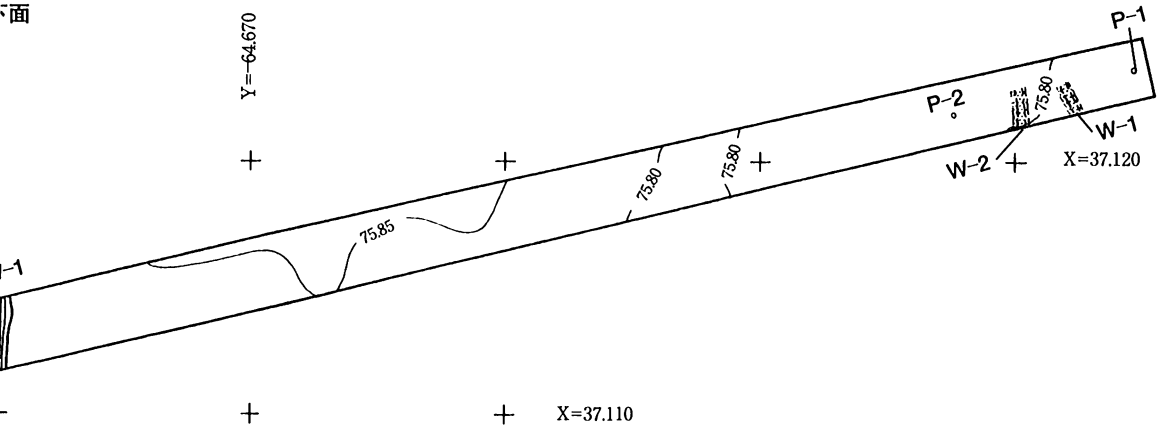
本区より、溝2条、畦畔4条が検出され、1号畦畔と2号畦畔はほぼ直交、2号畦畔・3号畦畔は同走向（N90°W）を示している。


Y=-64.710
A-4
75.95
A-5
A-6
76.00
79.05
As-B
Y=-64.710
75.85
As-C 混土
75.85
75.90
FA堆積範囲
Y=-64.710
75.45
W-4
75.50
75.50
弥生時代

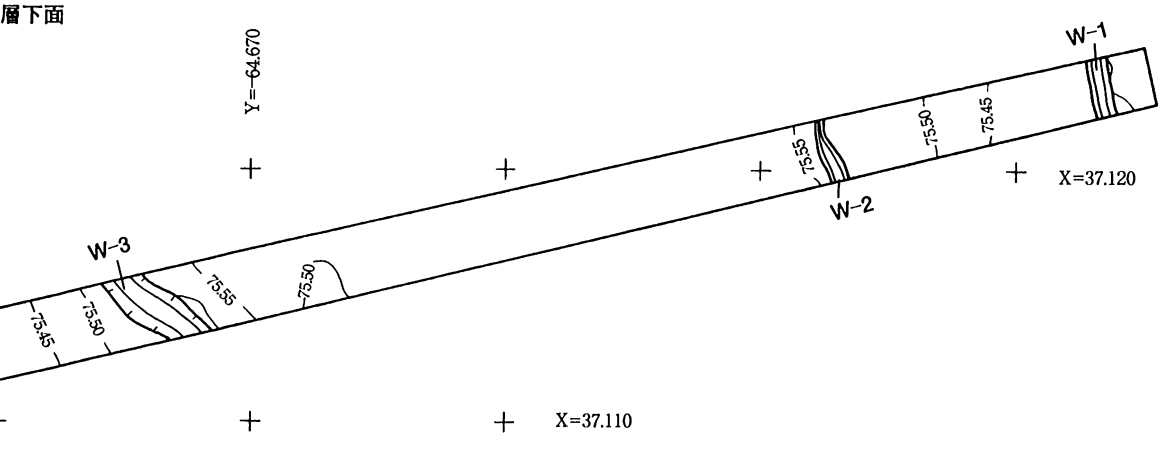
第23図　D 区北側道




下面




層下面

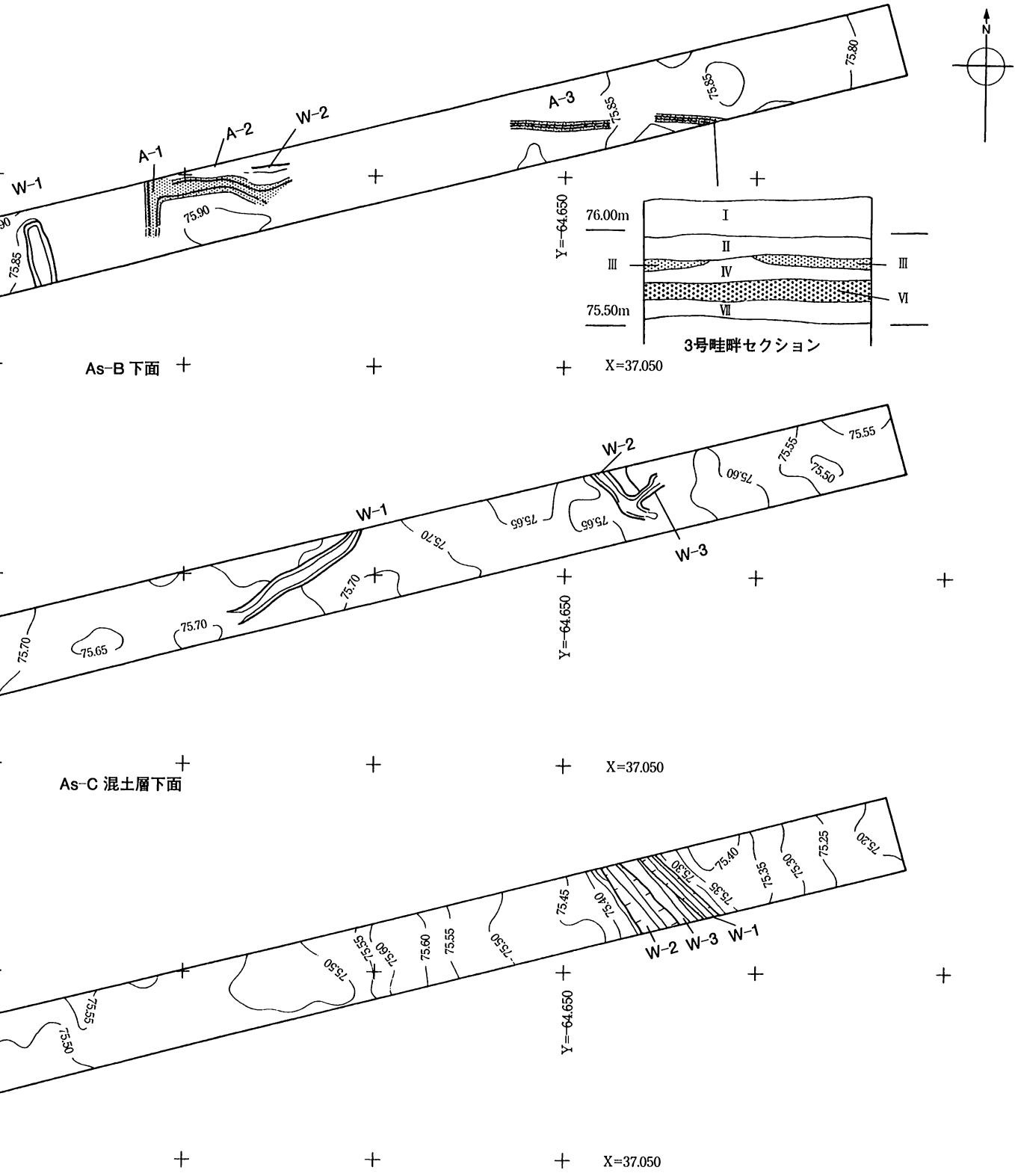



以前面

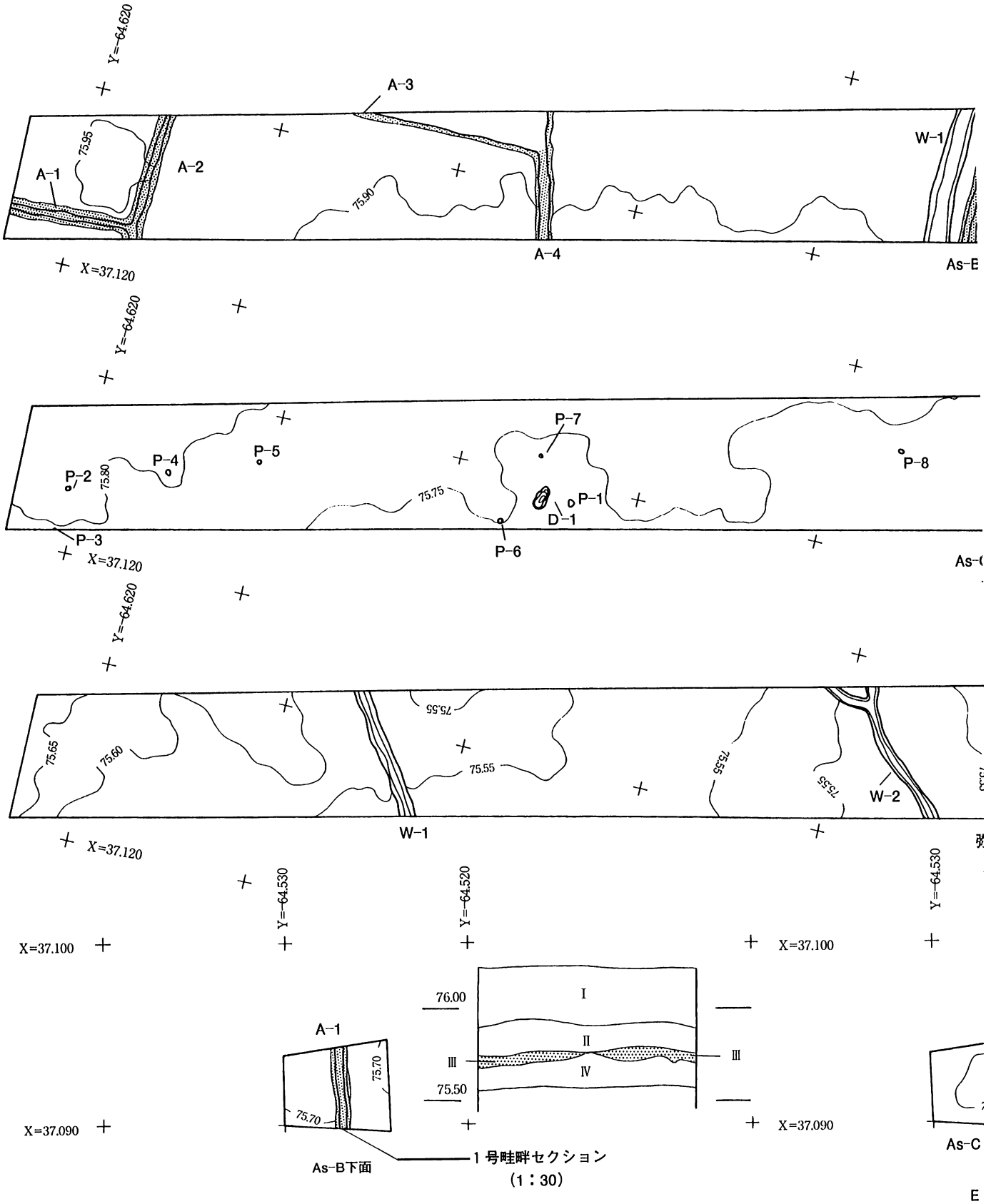
(1：300)

全体図　折図 6

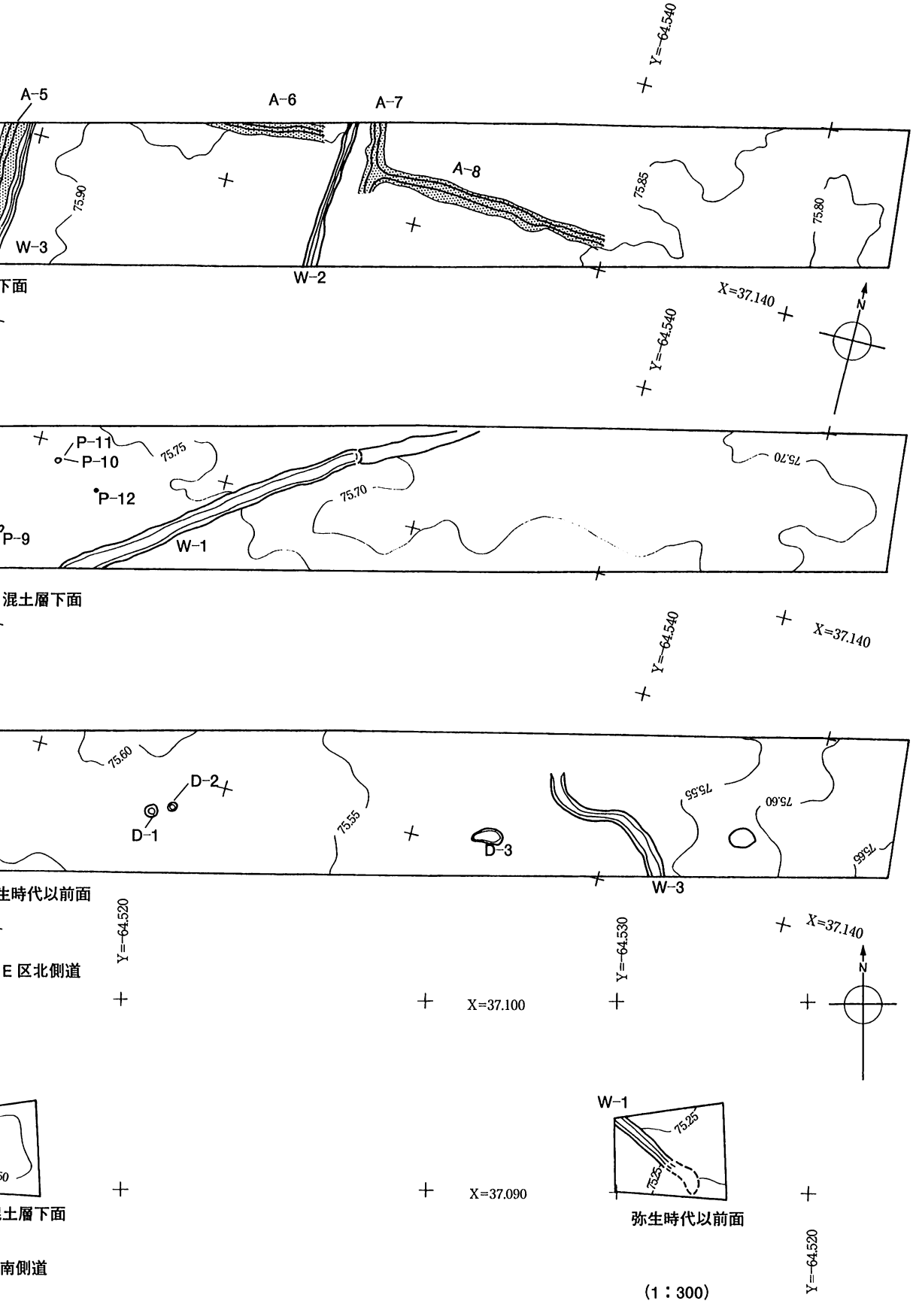
X=37.060
Y=-64.720
75.85
A-4
X=37.060
Y=-64.720
75.80
75.75
75.75
X=37.060
Y=-64.720
75.50
75.50
75.45
W-4



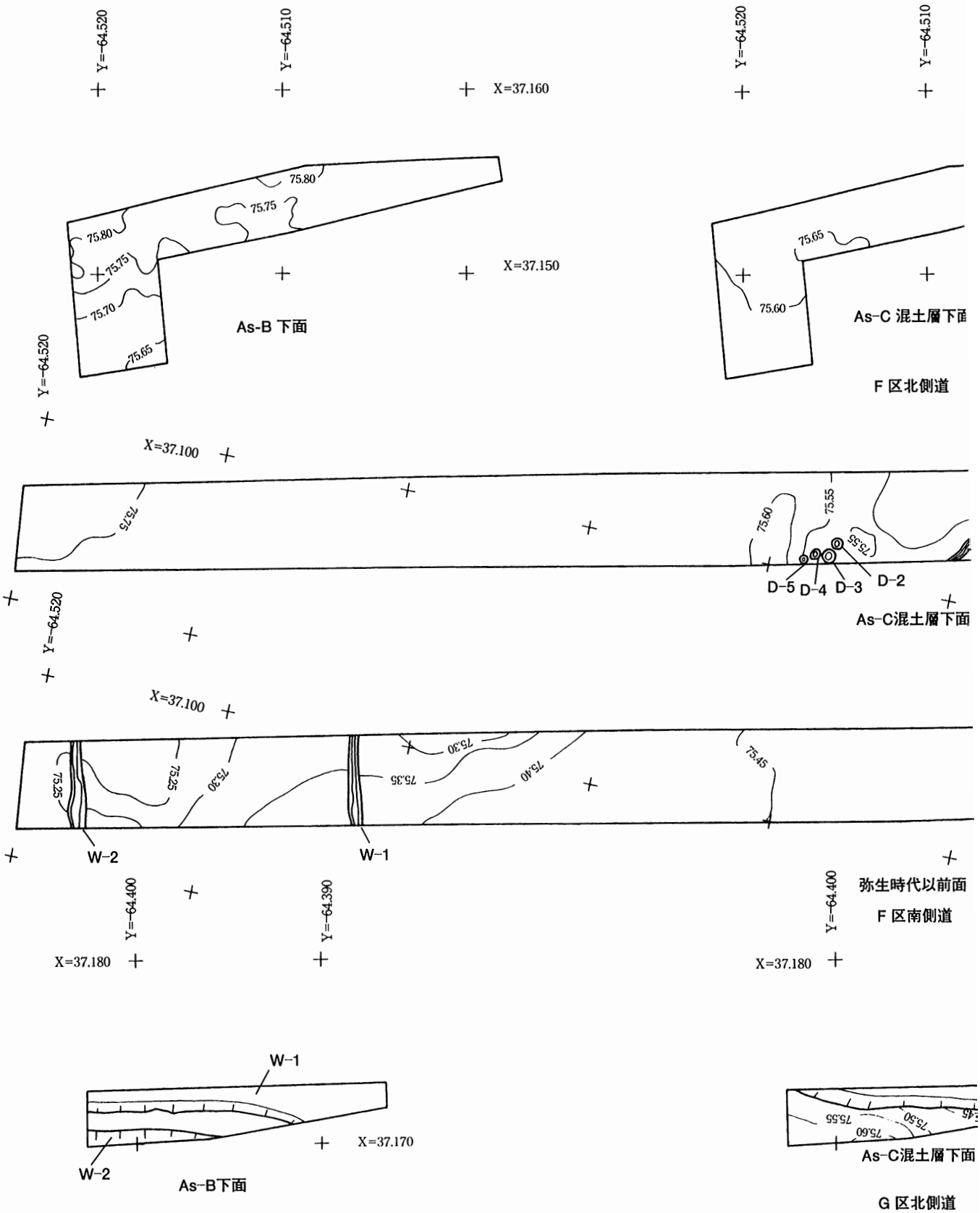

24図　D 区南側道全体図　折図 7



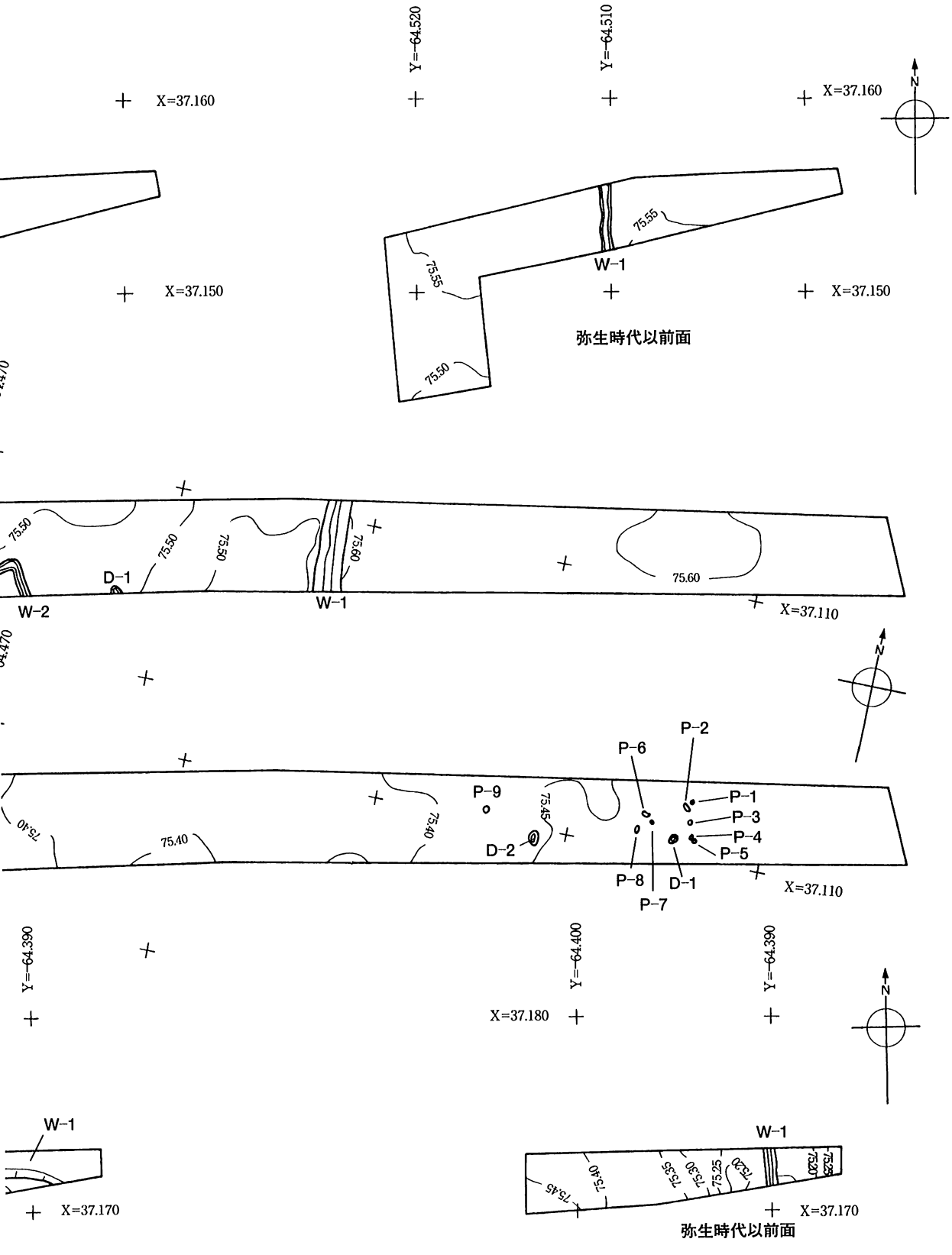

第25図　E区北側道・E区南側


A-5
A-6
A-7
A-8
W-3
W-2
75.90
75.85
75.80
下面
Y=-64.540
X=37.140
N
P-11
P-10
P-12
P-9
W-1
75.75
75.70
混土層下面
D-2
D-1
D-3
75.60
75.55
生時代以前面
E 区北側道
Y=-64.520
Y=-64.530
X=37.100
X=37.090
W-1
75.25
混土層下面
南側道
弥生時代以前面
(1：300)

道全体図　折図 8




第26図　F 区北側道・F 区南側道・G 区




(1：300)

ヒ側道全体図　折図 9

### 第３項　浅間Ｃ軽石混土層下面

本区より検出された１号溝、３号溝の（N51°E）走向は同一である。

### 第４項　弥生時代以前面

本区より、溝４条、土坑41基が検出された。１号溝、２号溝、３号溝は、ほぼ同位置より検出され、土層断面より、３号溝の旧流路埋没後に１号溝、２号溝が平行に南流していたことが確認された。土坑41基のうち大部分の形状は不整形である。土坑の多くは他の土坑と結合し、本遺跡A区北側道にみられるような不明遺構の前段階を形成した可能性が考えられる。いずれの遺構からも出土遺物はなく、遺構の構築された時期については不明である。

## 第６節　Ｅ区北側道

### 第１項　概要

本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間B軽石下面、第２面は浅間C軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は溝３条、畦畔８条、２面は溝１条、土坑１基、ピット10基、３面は溝３条、土坑３基が検出されている。

### 第２項　浅間B軽石下面

本区より、溝３条、畦畔８条が検出された。南北方向の畦畔、溝（西より２号畦畔、１号溝、５号畦畔、３号溝、２号溝）は、同走向（N２°E）であった。上部より掘り込まれている２号溝は、中世の所産である瀬戸香炉（15世紀代）が出土した。胎土より瀬戸焼であることが判明し、内部は無釉であった。

### 第３項　浅間C軽石混土層下面

本区１号土坑より頁岩製の石鏃（縄文時代）が出土したが、おそらくは後世の流入によるものと考えられる。

## 第７節　Ｅ区南側道

### 第１項　概要

本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は畦畔１条、３面は溝１条が検出されている。２面は確認面は存在したものの遺構検出はされなかった。

## 第８節　Ｆ区北側道

### 第１項　概要

本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。本地区は耕地整理の影響を受けており、第１面、第２面は部分的な残存であった。そのため、遺構が明瞭に確認されたのは第３面のみであった。同文化層では溝１条が検出されている。

## 第９節　Ｆ区南側道

### 第１項　概要

本区は小字『仲田』に位置する。本調査区において確認された文化層は２面である。第１面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第２面は弥生時代以前面である。本地区は耕地整理の影響を受けており、浅間Ｂ軽石下面は確認されず、第１面も部分的な残存であった。そのため、遺構が明瞭に確認されたのは第２面のみであった。１面は溝２条、土坑５基、２面は溝２条、土坑２基、ピット９基が検出されている。

## 第10節　Ｇ区北側道

### 第１項　概要

本区は小字『奥田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間Ｃ軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は溝２条、２面は溝１条、３面は溝１条が検出されている。しかし本地区は現代の撹乱を多く受けており、良好な四方壁面の土層観察は不可能であり、１面、２面、３面の残存は部分的であり、著しく不良であった。浅間B軽石下面１号溝、浅間Ｃ軽石混土層下面１号溝は、昭和40年代まで存在していた通称「あえぼり」と位置が重なるため、遺構確認面とは時期が異なる可能性が高いと思われる。「あえぼり」と考えられる溝からは、堰の用途として使用されたと思われる杭が出土した。

## 第11節　Ｈ区北側道西地区

### 第１項　概要

本区は小字『割田』に位置する。本調査区において確認された文化層は３面である。第１面は浅間Ｂ軽石下面、第２面は浅間C軽石混土層下面、第３面は弥生時代以前面である。１面は畦畔２条、竪穴状遺構１基、第２面は畦畔１条、第３面は土坑１基が検出されている。本地区は、旧宅地であったため、建築基礎等の撹乱を受けており、撹乱の受けていない部分のみ、遺構確認を行うことができた。

### 第２項　浅間B軽石下面

本区より検出された１号竪穴状遺構から出土した遺物は、すべて破片であった。体部中位までヘラ削りが施されている７～８世紀の非ロクロ坏、底部が回転糸切りを施す須恵器坏（９世紀以降の所産）等が出土している。

## 第12節　H区北側道東地区

### 第１項　概要

本区は小字『縫田』に位置し、平成10年度徳丸仲田Ⅲ遺跡発掘調査の最東端にあたる。本区は微高地に立地し、低地上に立地する本遺跡Ａ区北側道～Ｈ区北側道西地区とは異なった土層堆積を示している。本調査区において確認された文化層は中世館跡検出面の１面である。溝４条、ピット23基が検出されている。本地区西側は旧宅地であったため、建築基礎等の撹乱を受けており、撹乱の受けていない部分のみ、遺構確認を行うことができた。

本区は徳丸東環濠遺構群に属しており、付近の力丸城跡、房丸東環濠遺構群、東力丸環濠遺構群、旧西善

環濠遺構群等との関連性が注目される。

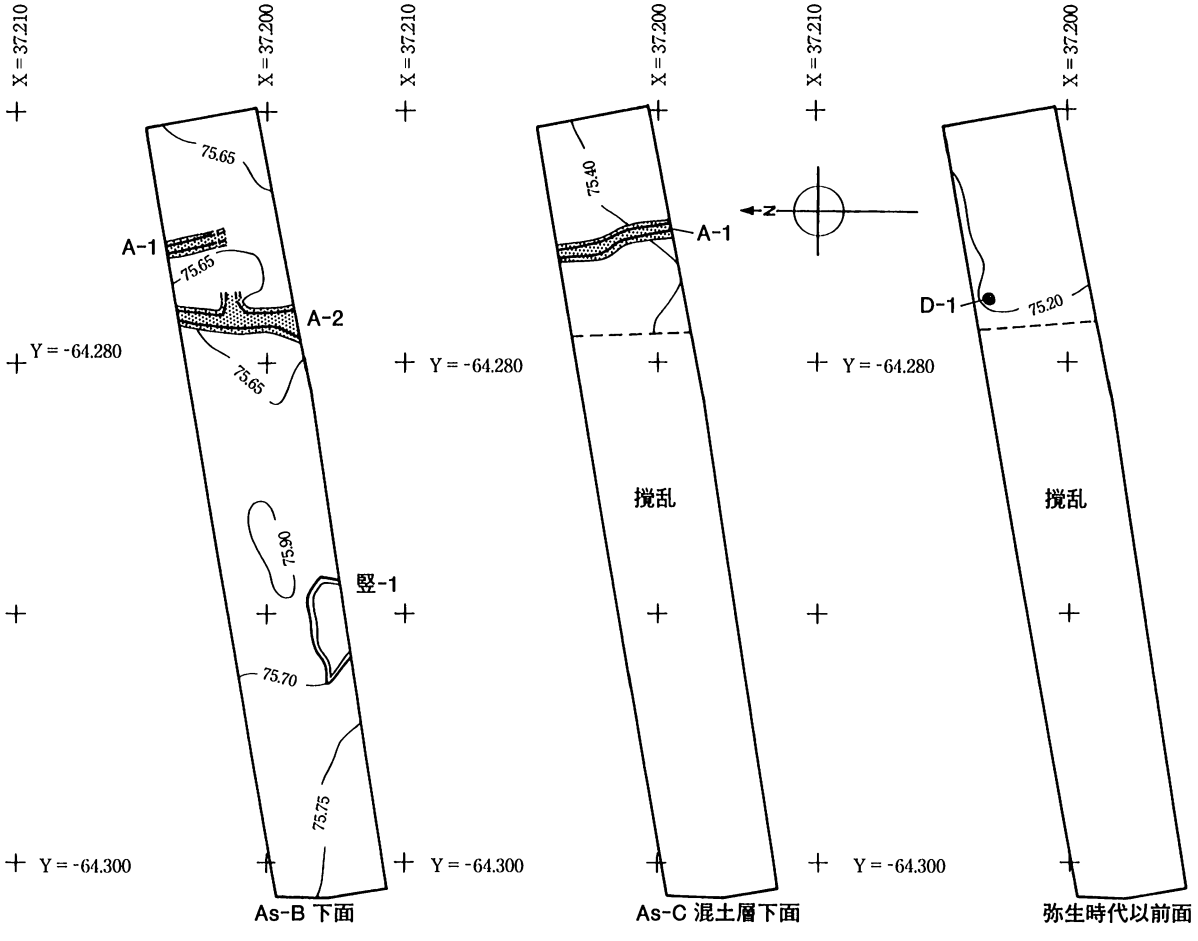
### 第２項　中世館跡検出面

本区より、溝４条、ピット23基が検出された。本区は微高地上に立地し、中世館跡の堀および館内部にあたり、徳丸東環濠遺構群の一部を調査した。本区西端より西端堀（４号溝）、南隣接地にあたる本線部分の環濠南端堀、東隣接地にあたる平成９年度徳丸仲田Ⅱ遺跡の東端堀が検出されており、方形をなす中世館跡の形状が確認された。

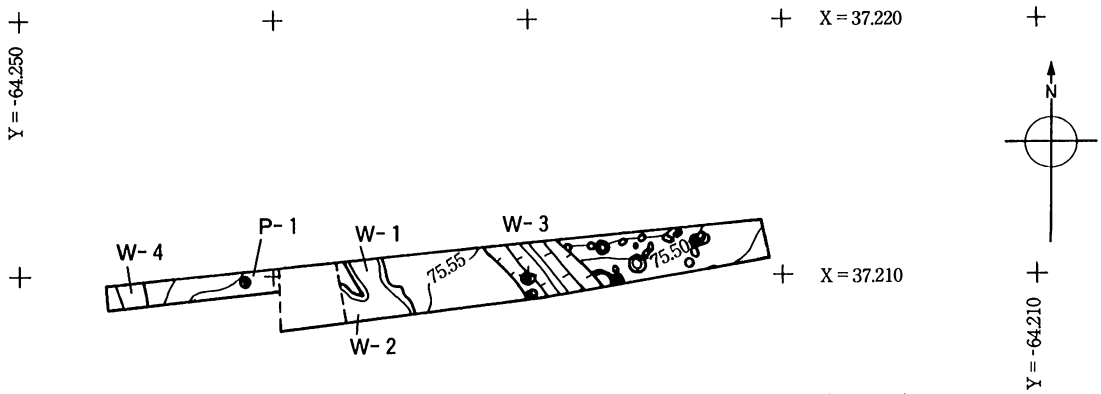
**４号溝**　本区から検出された４号溝は撹乱により、正確な堀の規模は不明であるが、平成９年度徳丸仲田Ⅱ遺跡発掘調査で検出された中世館跡の堀西端と考えられる。今年度調査、前年度調査結果より、中世館跡の南辺は約76m 程の規模があったと推測される。

**３号溝**　３号溝は、地山のローム層を削り、走向は凡そ N30°E で上端幅3.0m、下端幅0.2～0.3m、検出面からの深さ0.39～0.69m を計測する。本遺構は、本線部分検出の中世館跡（前述）の堀に切られている。３号溝中には、灰色土（しまり弱・粘性弱）が堆積し、堆積土中には黄色土塊ブロックの混入がみられた（上層に行くほどブロックは大になる）。本遺構からは、常滑系大甕が出土したが、頸部片であるため詳細な年代は不明である。本区遺構外出土遺物として、古墳時代前期の台付甕（石田川式土器など）が出土している。

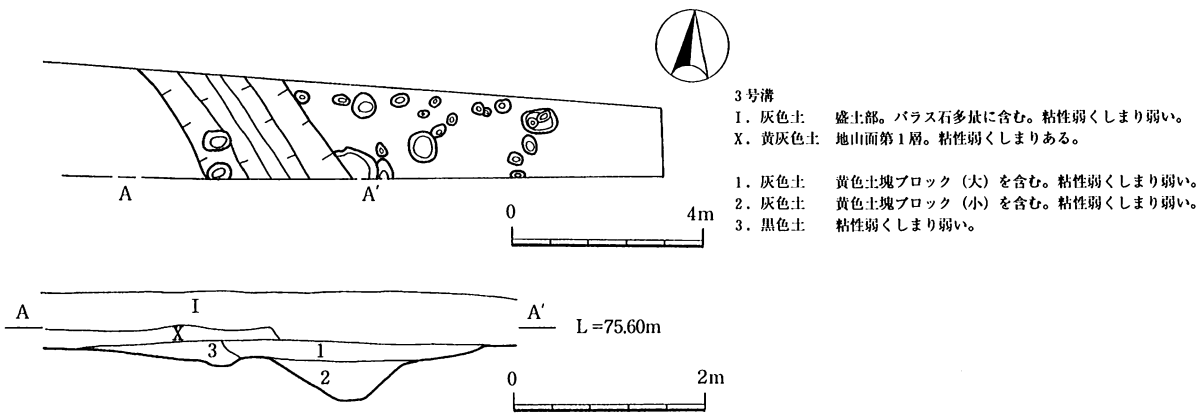
本調査区を南へ500m 下ると、力丸城跡（前橋市力丸町。現在の降龍山善昌寺付近一帯）にあたる。力丸城は、方眼状に幾重もの堀や溝が巡らされ、北端は本区に程近いところまで及んでいたとされている。



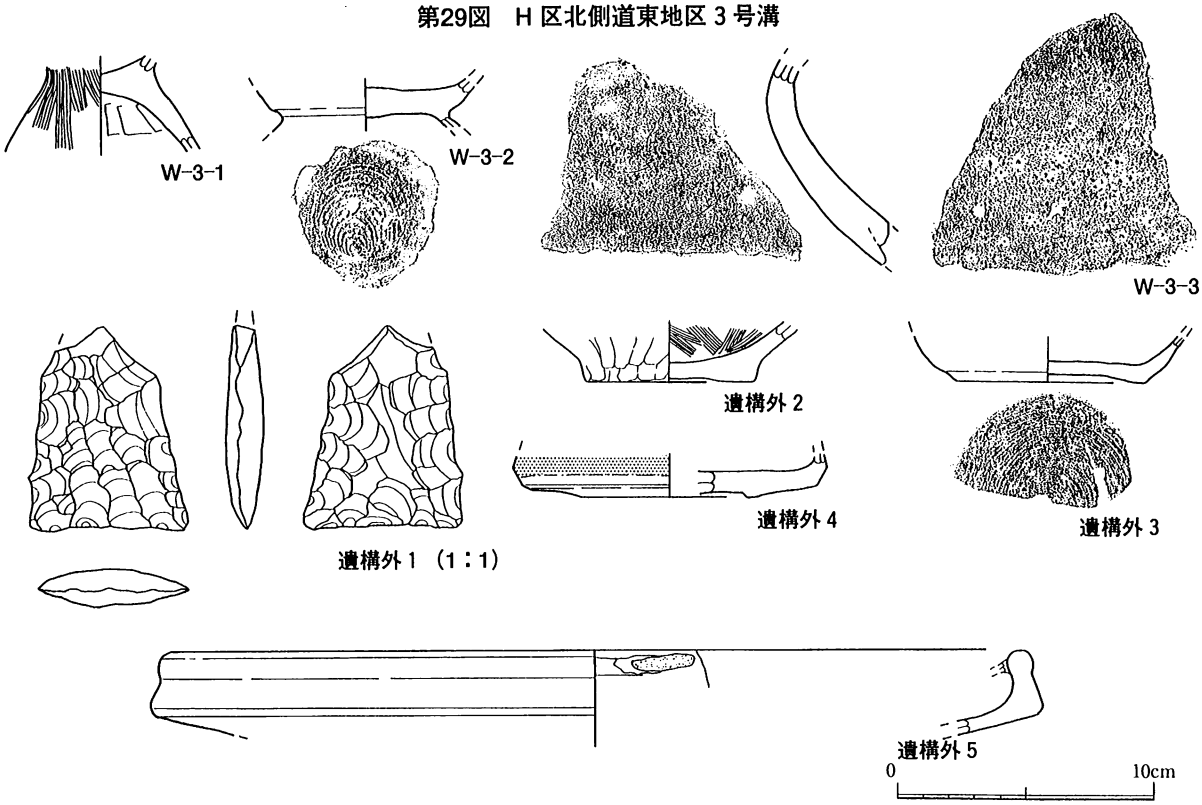

第27図　Ｈ区北側道西地区全体図




第28図　H区北側道東地区全体図　　(1：300)




第29図　H区北側道東地区3号溝




第30図　出土遺物

**表５　遺物観察表**

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・器高・底径(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3号溝 | 1 | 土師器台付甕 | ……・……(3.7) | 脚部片 | 脚部はわずかに膨らみながら開き、周縁は欠損している。石田川式の台付甕。内：ヘラナデ、外：刷毛目（煤付着）。 | ①石英・白色粒 ②黄橙色　③酸化 | H区東地区中世面3号溝埋没土 |
| | 2 | 須恵器坏 | ……・……(1.9) | 底部片 | 切り離しは回転糸切りで高台を貼り付ける。 | ①白色粒・チャート大粒 ②青灰色　③還元堅緻 | H区東地区中世面3号溝埋没土 |
| | 3 | 常滑甕 | ……・…… | 頸部片 | 頸部は上位で強く外反する。割れ口に粘土の接合部がわずかに観察される。 | ①長石・砂粒 ②素地は茶褐色、自然釉はオリーブ灰色　③還元 | H区東地区中世面3号溝埋没土 |
| 遺構外遺物 | 1 | 石鏃 | 全長(2.6)幅2.2重さ3.3g | 先端部欠損 | 面に側して剥離調整が行なわれ、各剥離は使用により摩耗している。 | ④頁岩 | E区北As-C混1号土坑-1 |
| | 2 | 土師器甕 | ……・(2.3)6.6 | 底部 | 上げ底気味の底部より、球形の胴部に連続する。内：刷毛目、外：胴部はヘラ磨き、底部はヘラ削り | ①白色・雲母・褐色粒 ②黄橙色　③酸化 | H区東As-B下 |
| | 3 | 須恵器坏 | ……・(1.8)7.1 | 底部1/2 | ロクロ成形、底部回転糸切り | ①角閃石粒・片岩粒 ②灰色　③還元 | 1号竪穴埋没土 |
| | 4 | 瀬戸焼香炉 | ……・……(1.7) | 底部片 | 底部は回転ヘラ削りにより、削り出し高台となる。外：胴部に鉄釉がかかるが底部までは及ばない。内：無釉となる。 | ①白色粒（ザックリとした質感）　②白黄色　③堅緻 | E区2号溝跡埋没土 |
| | 5 | 土師質焙烙 | (34.0)・(3.4)(35.0)…… | 口縁部片 | 口縁部は内傾し内耳を付ける。底部は緩やかな丸底で、被熱による煤と剥落が観察される | ①角閃石・褐色粒 ②白黄色　③酸化 | C区北As-B下埋没土 |

## 第５章　まとめ

本遺跡からは、中世館跡検出面、浅間Ｂ軽石下面、FA 堆積面、浅間Ｃ軽石混土層下面、弥生時代以前面の計５面が検出された。ここでは、主な検出された遺構の概観を述べることとする。

**浅間Ｂ軽石下面**　本遺構からは、溝19条、畦畔39条、土坑２基、ピット28基、水田遺構、竪穴状遺構１基が検出された。本遺跡周辺は、現在に至るまで水田として土地活用が図られているが、今回の調査においては多くの畦畔が検出され、古代よりの生産域であったことをうかがわせる。このうち検出された畦畔を走向方向により分類を行うと①・②グループ、③グループ、④グループ、⑤グループの４つに大別される。①・②は、Ｎ９～16°W に包括され、①・②ともに同時期の構築と推測される。しかし100m ほど東側に位置する③のＣ区では真北走向に近い畦畔が検出されており、時期差がうかがわれる。また、④のＤ区では東西両端は③に近く、中央部は①・②に近い走向を示している。⑤は他のグループとは異なる方向性を持つがその用途は不明である。西側に位置する①・②は、端気川の影響を東側より多く受けたと想像され、条里制が緩和された時期の要素を示している。また方向性および形状から、③は条里制水田に近い畦畔の可能性が考えられる。①・②と③の要素をあわせ持つ④は、条里制施行期、条里制緩和期の水田耕作と推測される。

**表６　畦畔走向一覧**

| | 遺跡・地区名 | 走向 | 小字 |
|---|---|---|---|
| ① | 徳丸高堰ⅡＣ区 | N10°W | 高堰 |
| ② | 徳丸仲田ⅢＡ区 | Ｎ９～16°W | 前田 |
| ③ | 同　Ｃ区 | Ｎ０～７°W | 前田 |
| ④ | 同　Ｄ区 | Ｎ０～14°W | 仲田 |
| ⑤ | 同　Ｅ区 | Ｎ２°E | 仲田 |

**弥生時代以前面**　本確認面より溝19条、土坑48基、ピット10基、不明遺構14が検出され、溝19条は下表の通りすべて北から南へ流れ、西に傾く17条、東に傾く２条に大別できる。このことにより、本遺跡周辺は、弥生時代以前より一定の規則性をもって治水が行われた可能性が指摘される。

**表７　溝走向一覧**

西に傾く溝２条

| Ｎ（0°≦角度≦８°）Ｗ | | 小字 |
|---|---|---|
| Ｃ区北側道２号溝 | Ｎ０°W | 前田 |
| Ｆ区北側道１号溝 | Ｎ０°W | 仲田 |
| Ｇ区北側道１号溝 | Ｎ４°W | 奥田 |
| Ｃ区北側道１号溝 | Ｎ８°W | 前田 |
| Ｄ区北側道１号溝 | Ｎ８°W | 仲田 |

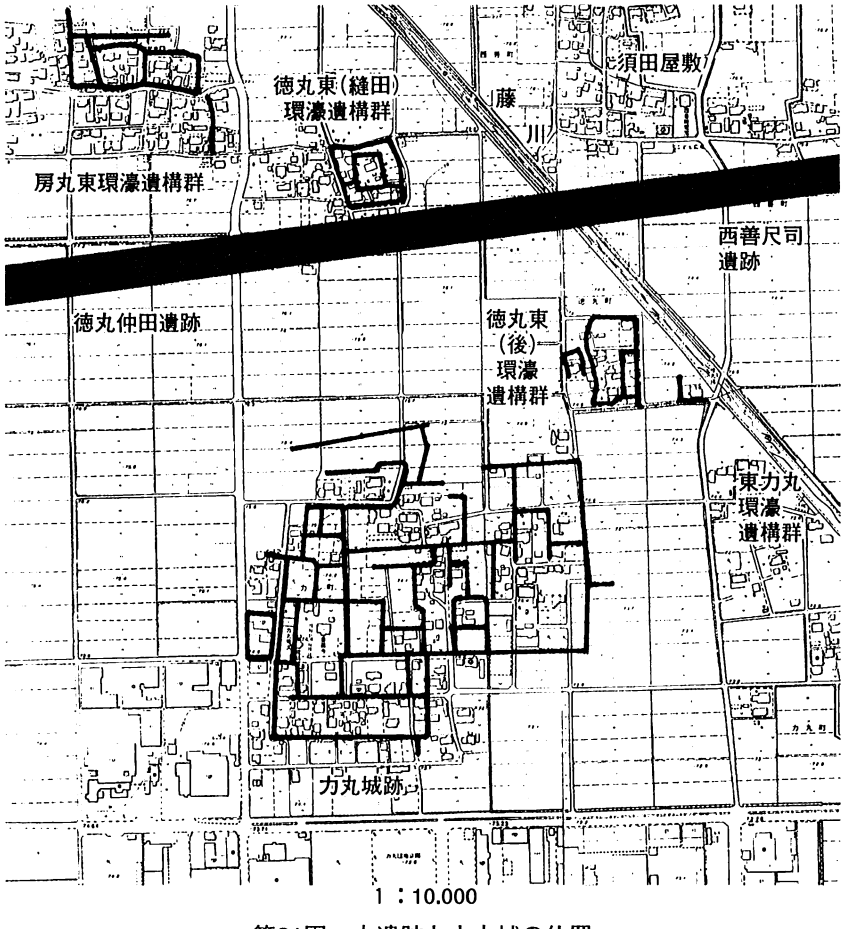
| Ｎ（13°≦角度≦16°）Ｗ | | 小字 |
|---|---|---|
| Ｆ区南側道２号溝 | N13°W | 仲田 |
| Ｆ区南側道１号溝 | N15°W | 仲田 |
| Ｄ区北側道２号溝 | N16°W | 仲田 |

| Ｎ（30°≦角度≦40°）Ｗ | | 小字 |
|---|---|---|
| Ｄ区北側道４号溝 | N30°W | 仲田 |
| Ｅ区北側道１号溝 | N32°W | 仲田 |
| Ｅ区北側道２号溝 | N36°W | 仲田 |
| Ｄ区北側道１号溝 | N40°W | 仲田 |
| Ｄ区北側道２号溝 | N40°W | 仲田 |
| Ｄ区北側道３号溝 | N40°W | 仲田 |

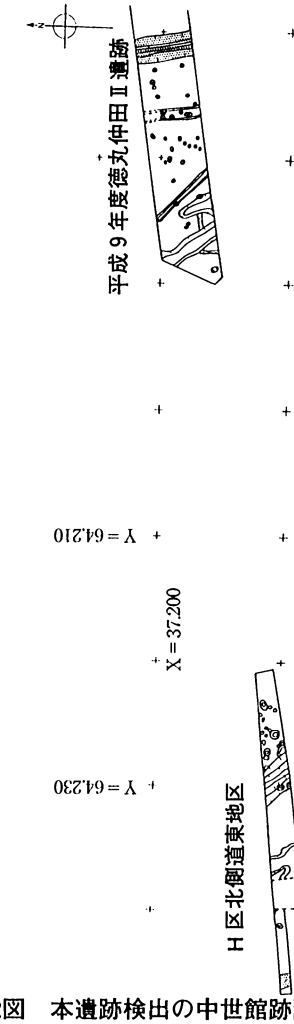
東に傾く溝２条

| | 走向 | 小字 |
|---|---|---|
| Ａ区北側道１号溝 | N14°E | 前田 |
| Ｄ区南側道４号溝 | N48°E | 仲田 |

**中世館跡検出面**　本遺構面は微高地上に立地する本遺跡H区北側道東地区（小字『縫田』）より確認されている。周辺の調査事例をみると、南隣接地にあたる本線部分の環濠南端堀、東隣接地にあたる平成９年度徳丸仲田Ⅱ遺跡で環濠東端堀が検出されており、これらのことより方形の環濠を持つ中世館跡の存在が明らかとなり、今回の調査はこの堀の一部と館内部に実施されている。周辺の中世史を見ると、本調査区を南へ500m下ると、力丸城址（前橋市力丸町。現在の降龍山善昌寺付近一帯）が存在する。力丸城は、方眼状に幾重もの堀や溝を巡らし、環濠屋敷および寺院（善昌寺・法楽寺）等を惣堀で大きく囲んだ城で、環濠北端は本区に程近いところまで及んでいたとされている。力丸城は、伝説によると、大江姓那波氏一族の日向守広宗が貞治六年（1367年）二月一日に初めて力丸付近に居住し、姓を力丸に改めたとされている。そして、永和三年（1377年）に没し、善昌寺殿と号したといわれ、その後、天正十八年（1590年）、伊賀守某の時に滅亡する。徳丸・力丸・房丸付近、通称「三丸地区」は、微高地上に中世館跡、環濠屋敷が多くみられる地域である。「丸」の意味の詳細は不明であるが、この「丸」の意味するものは、力丸城およびやや微高地上にある環濠屋敷が、水田という見通しの利く場所にあって、あたかも館や城郭の「丸」、もしくはその形態をなすように水田に浮かび上がった様子によって付いたと想像される。那波一族の出城として力丸城が設置され、付近を力丸氏が治めるようになる前後に、有力な家臣等により小さな屋敷が構築され、それら環濠屋敷を惣堀で囲み、力丸城が構築されたと考えられる。今回の調査事例は力丸氏没落後、機能を失い分立した結果を示すものと推測され、在地社会における中世から近世への変化をおぼろげながら示すものと捉えられる。

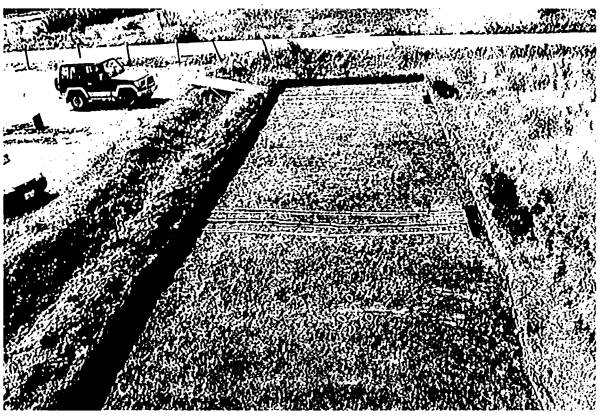



第31図　本遺跡と力丸城の位置

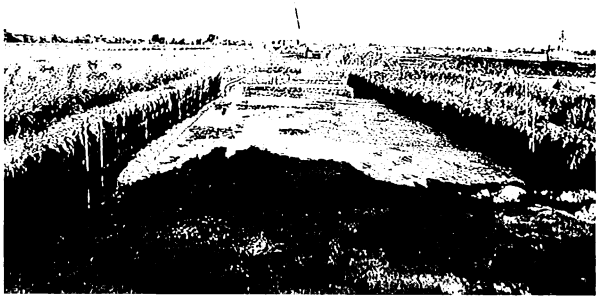



第32図　本遺跡検出の中世館跡配置図

1　A～F 区全景



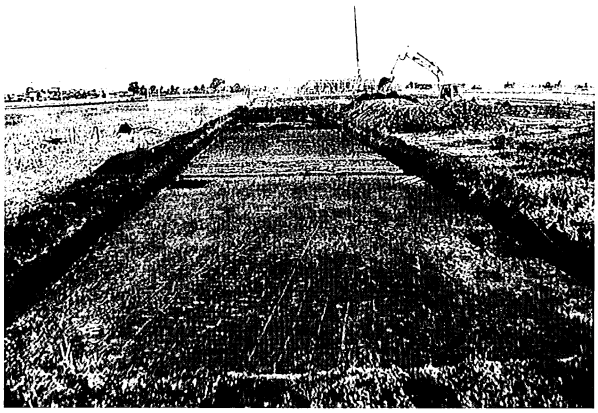
2　A 区北側道 As-B 下面全景



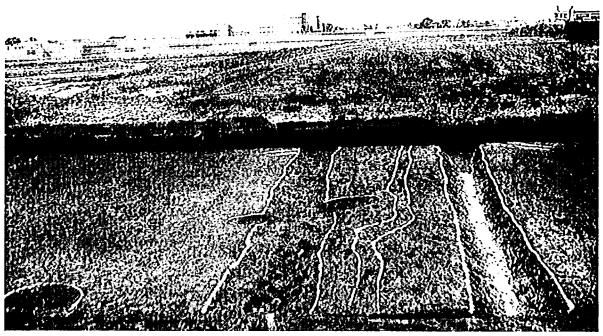
3　同　As-C 混下面全景

4　同　As-C 混下面 1 号溝

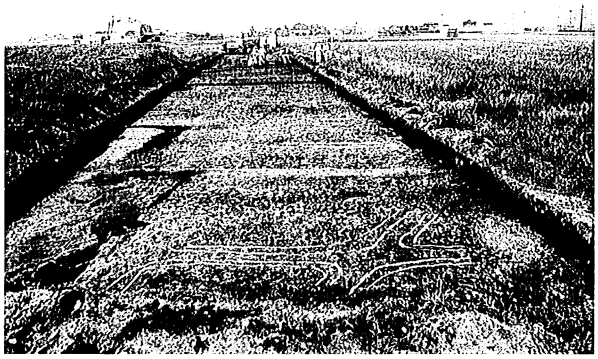
5　同　弥生時代以前面全景



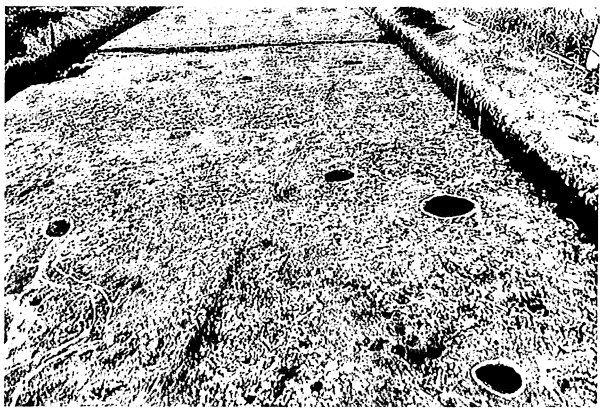
1　C区北側道 As-B 下面全景



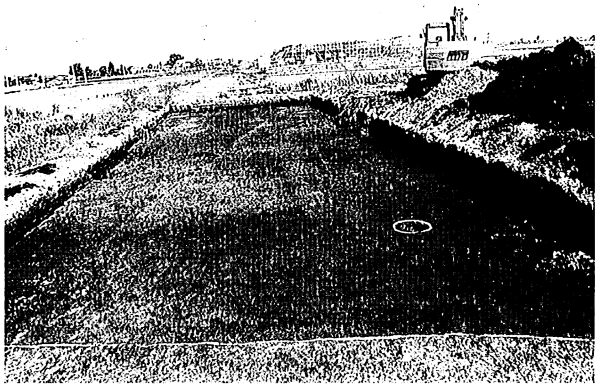
2　同　As-B 下面畦畔



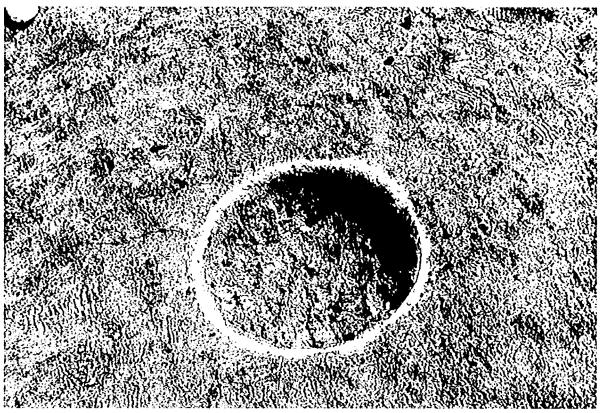
3　同　As-B 下面水田



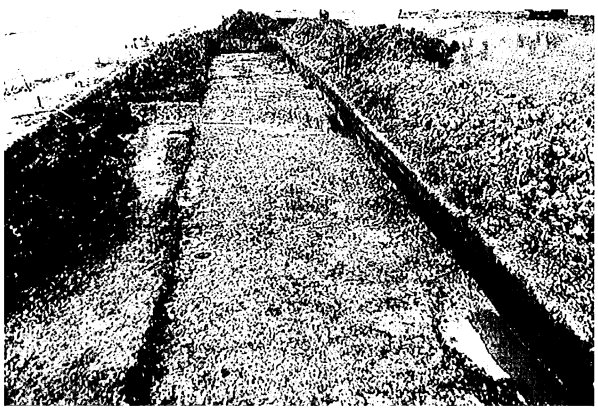
4　同　As-B 下面ピット群



5　同　As-C 混下面全景

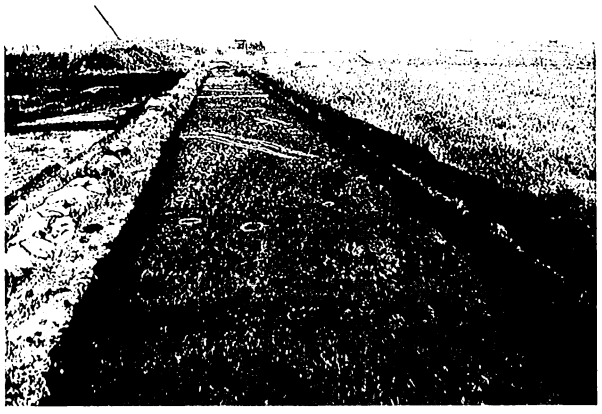


6　同　As-C 混下面1号土坑



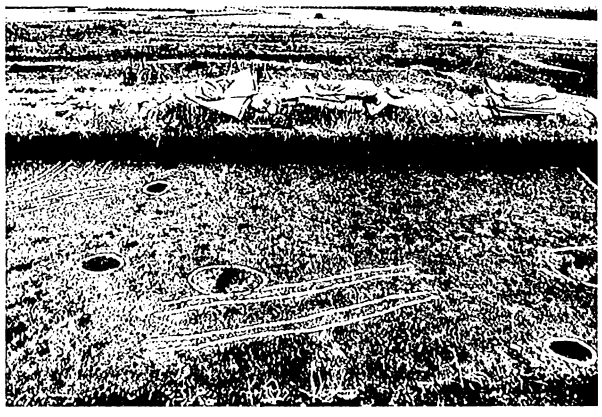
7　同　弥生時代以前面全景

8　同　弥生時代以前面2号溝



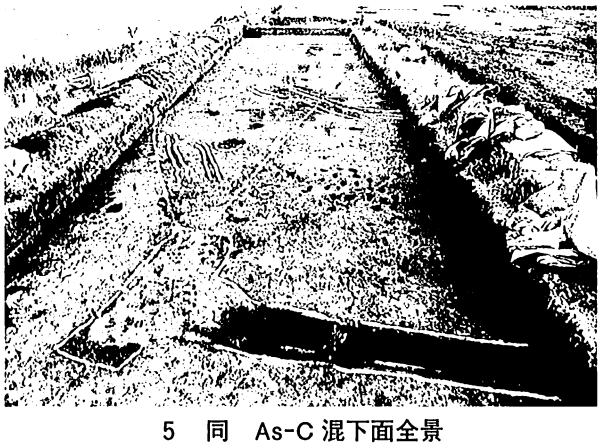
1　C区南側道 As-B 下面全景

2　同　As-B 下面1号畦畔

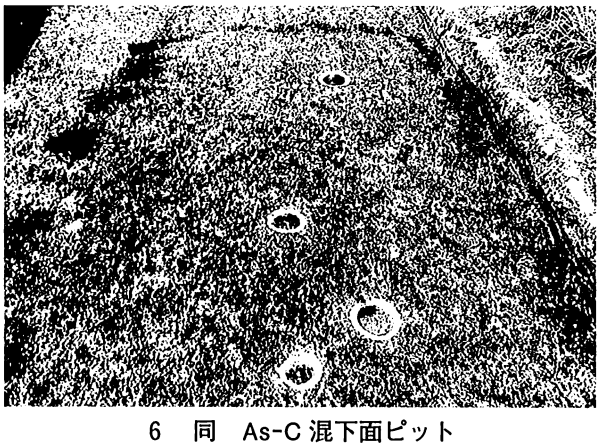


3　同　2号畦畔

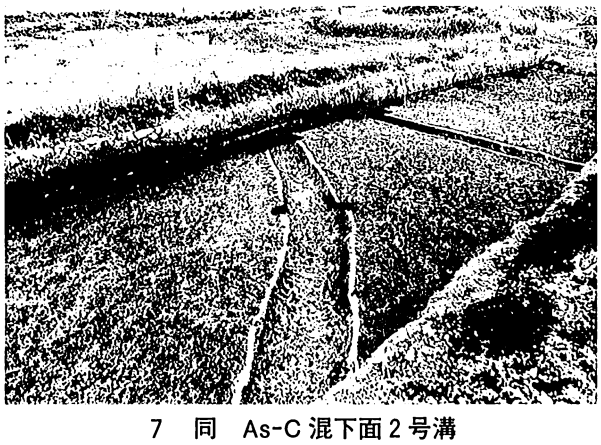
4　同　3号畦畔



5　同　As-C 混下面全景

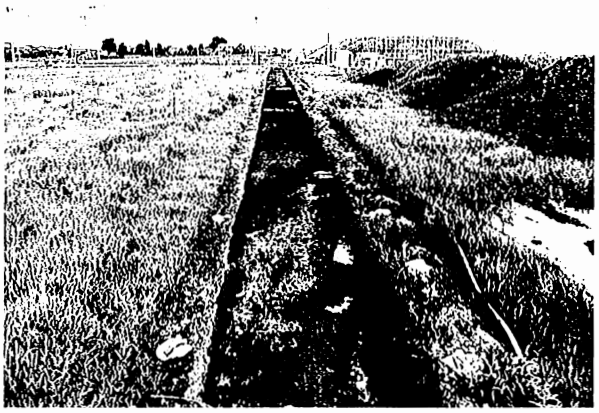


6　同　As-C 混下面ピット

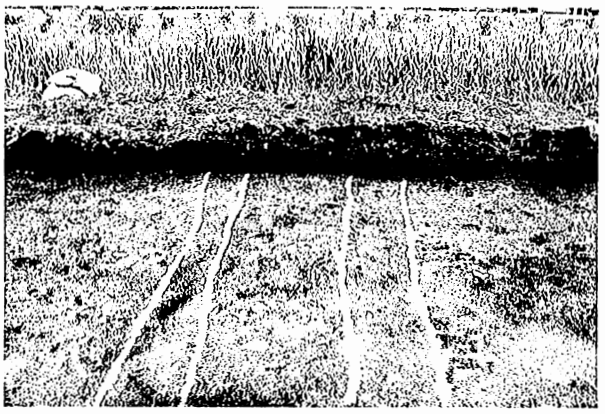


7　同　As-C 混下面2号溝

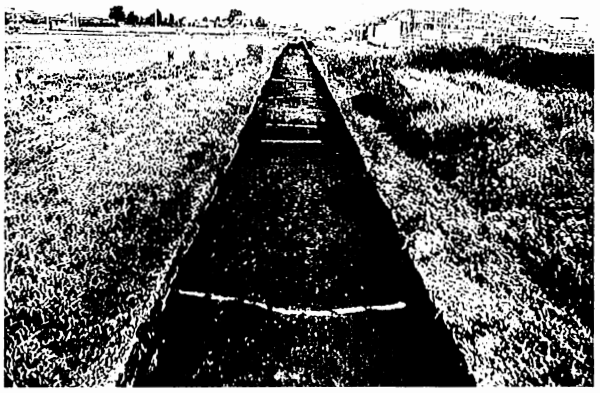
8　同　弥生時代以前面全景



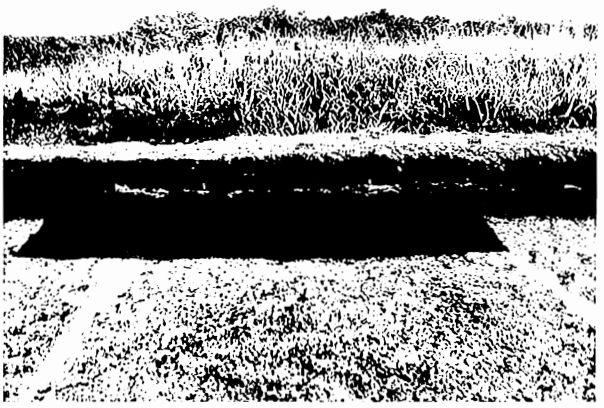
1　D区北側道 As-B 下面全景



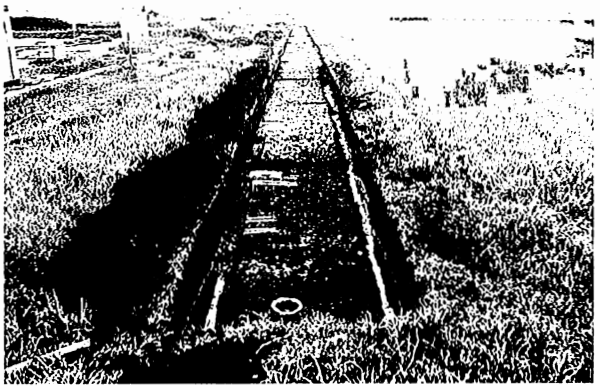
2　同　As-B 下面2号畦畔



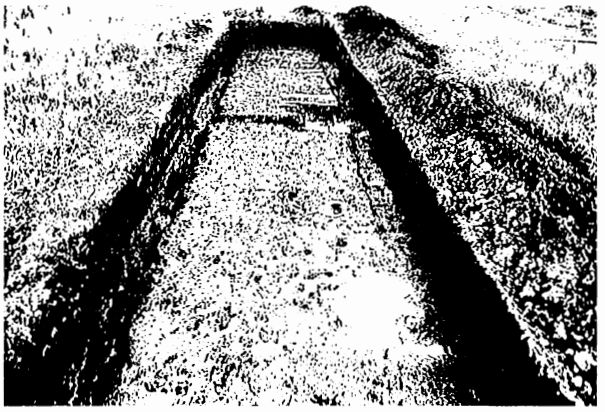
3　同　FA に被覆された帯状遺構



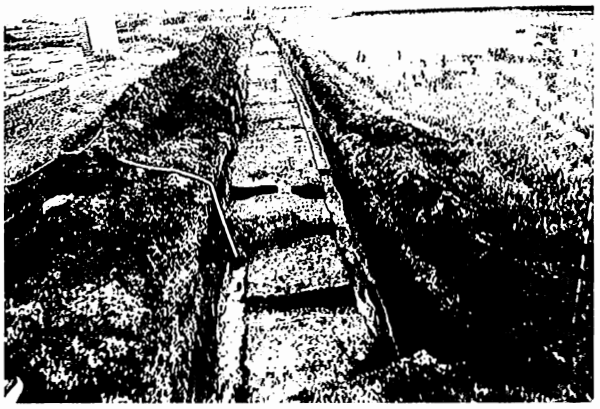
4　同　FA 土層断面



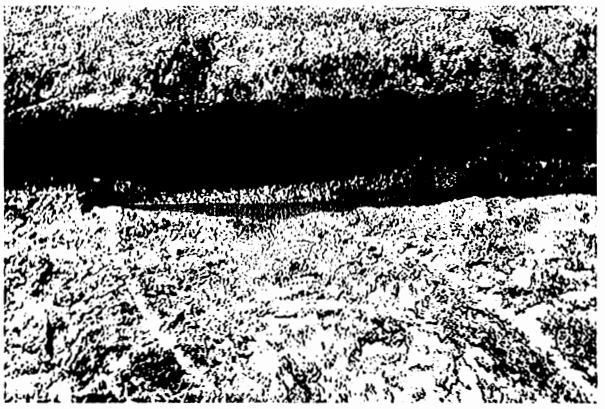
5　同　As-C 混下面全景



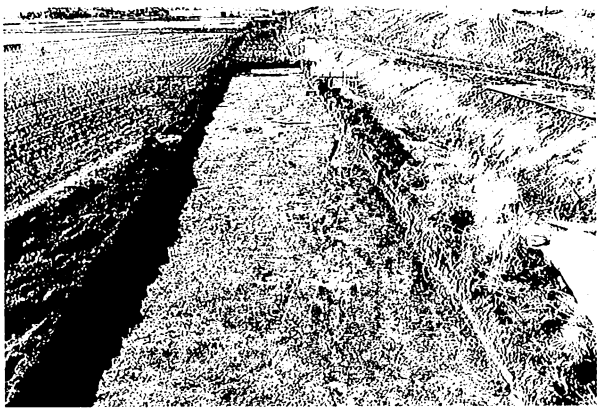
6　同　As-C 混下面1号畦畔



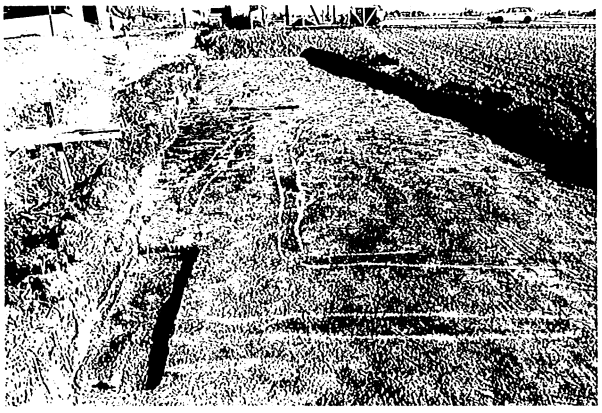
7　同　弥生時代以前面全景



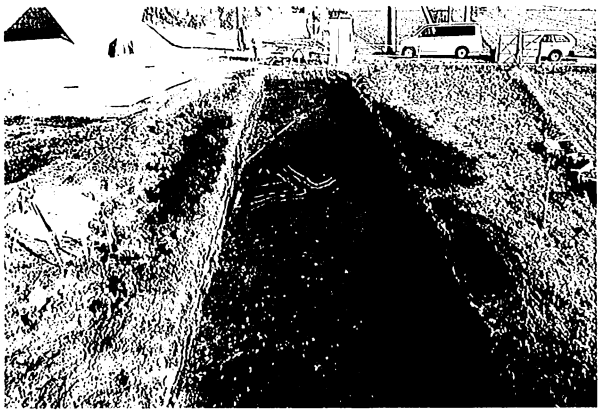
8　同　弥生時代以前面3号溝



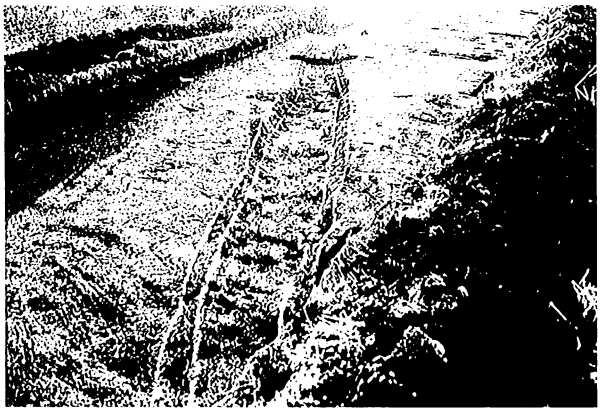
1　D区南側道 As-B 下面全景



2　同　As-B 下面2号畦畔

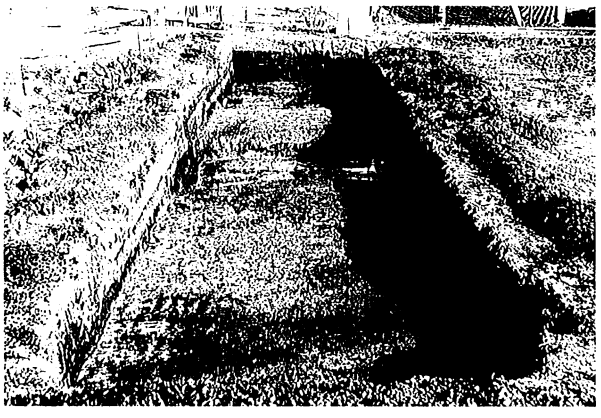


3　同　As-C 混下面全景



4　同　As-C 混下面1号溝

5　同　As-C 混下面2号溝

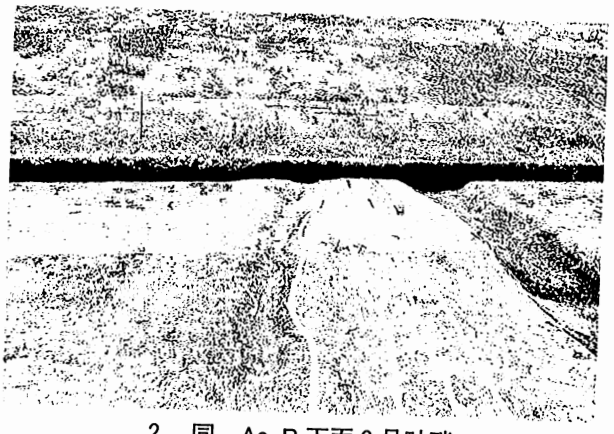


6　同　弥生時代以前面全景

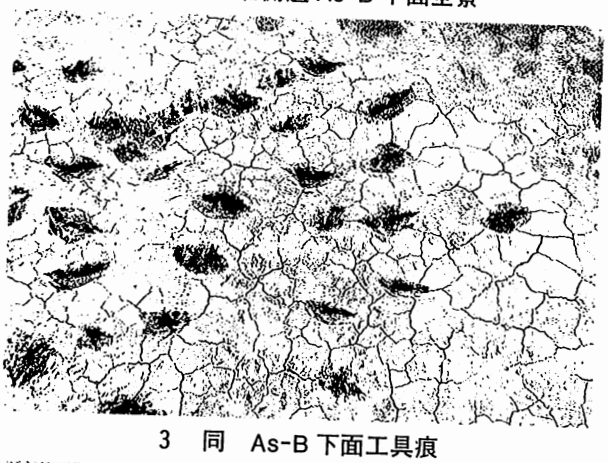
7　同　弥生時代以前面溝

8　同　弥生時代以前面溝土層

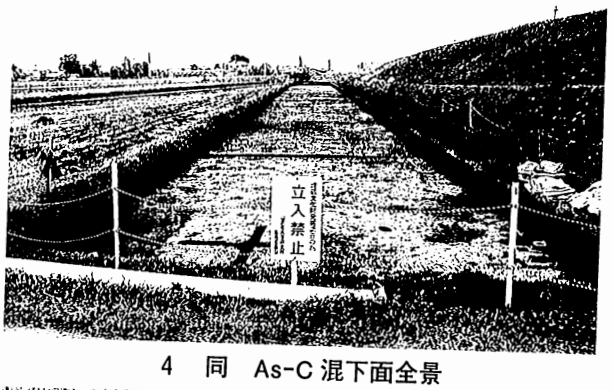
1　E区北側道 As-B 下面全景



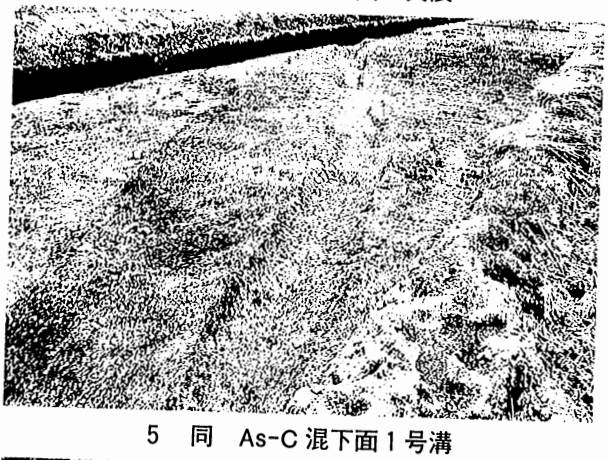
2　同　As-B 下面2号畦畔



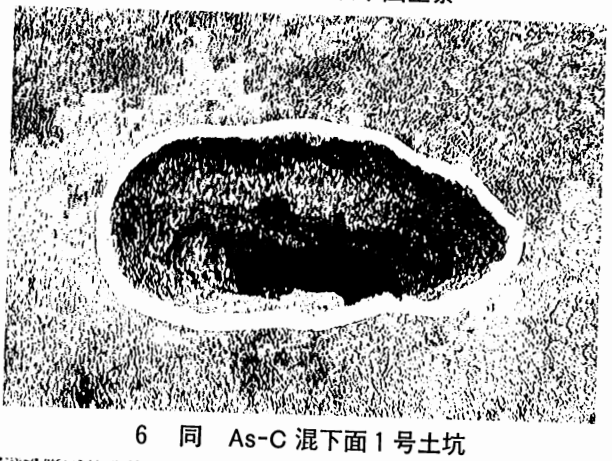
3　同　As-B 下面工具痕




4　同　As-C 混下面全景

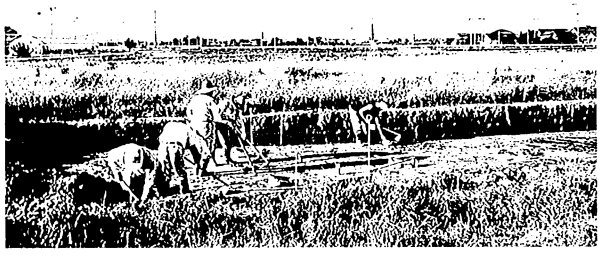


5　同　As-C 混下面1号溝

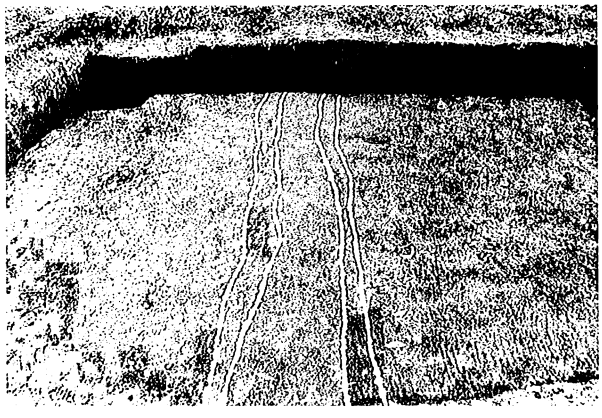


6　同　As-C 混下面1号土坑

7　同　弥生時代以前面全景

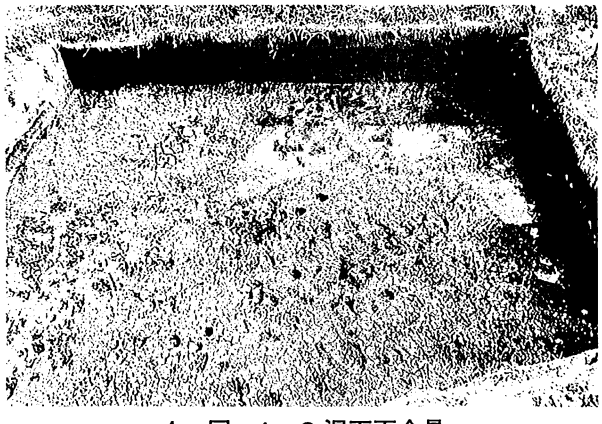


1　作業風景

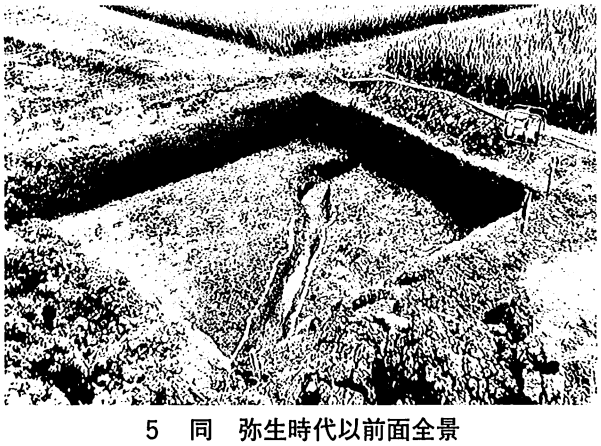


2　E区南側道 As-B 下面全景

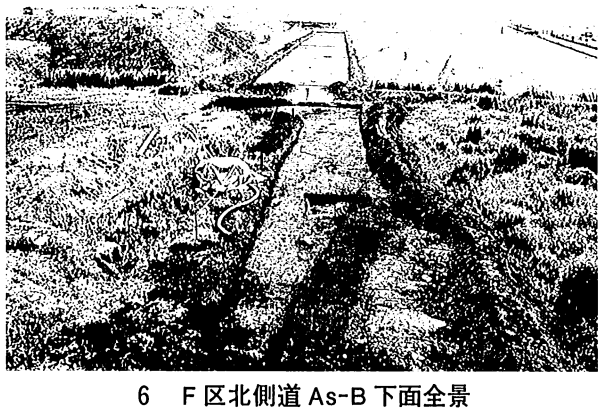
3　同　As-B 下面1号畦畔断面



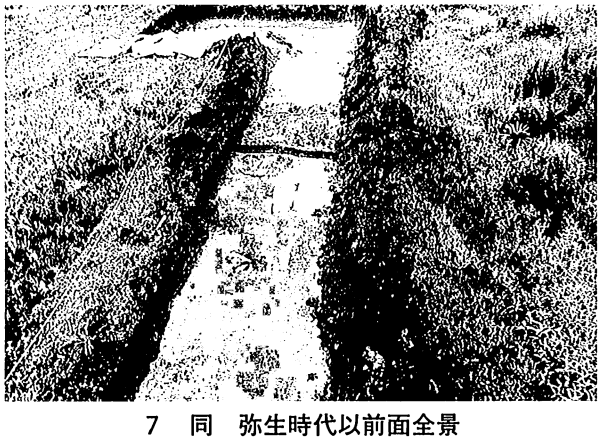
4　同　As-C 混下面全景



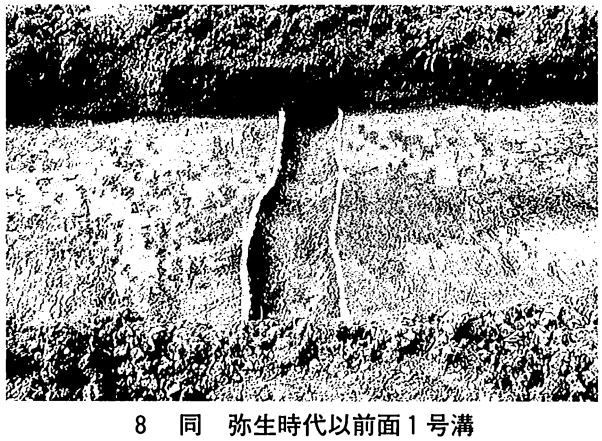
5　同　弥生時代以前面全景



6　F区北側道 As-B 下面全景



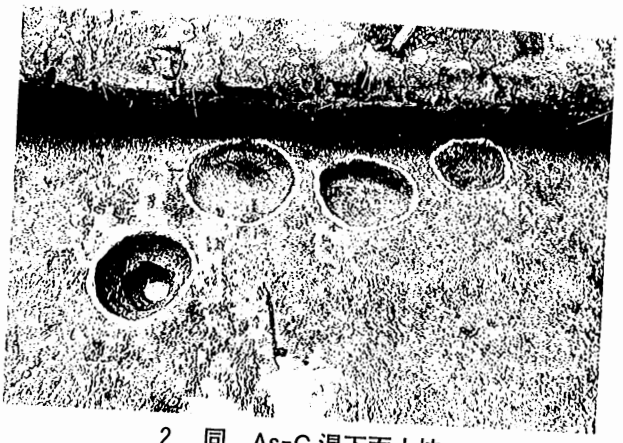
7　同　弥生時代以前面全景



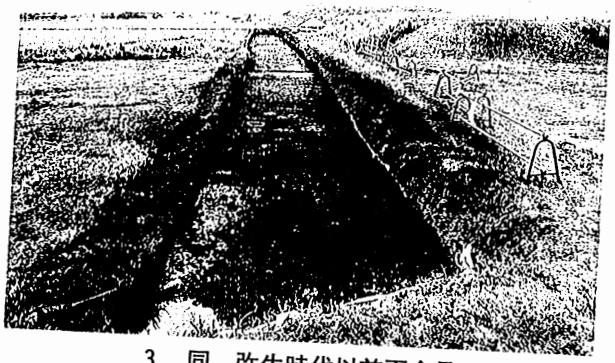
8　同　弥生時代以前面1号溝

図版10

1　F区南側道 As-C 混下面全景



2　同　As-C 混下面土坑



3　同　弥生時代以前面全景

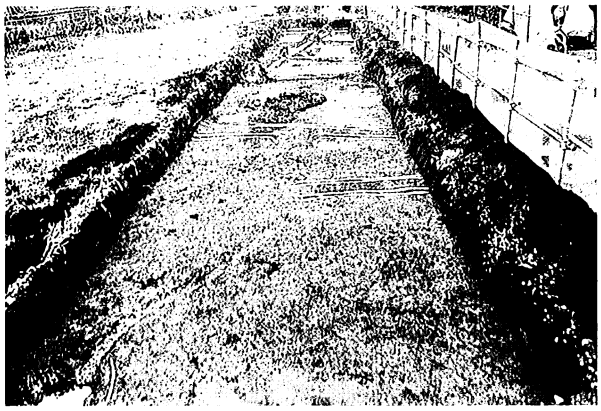
4　同　弥生時代以前面小掘込み

5　G区北側道 As-B 下面全景

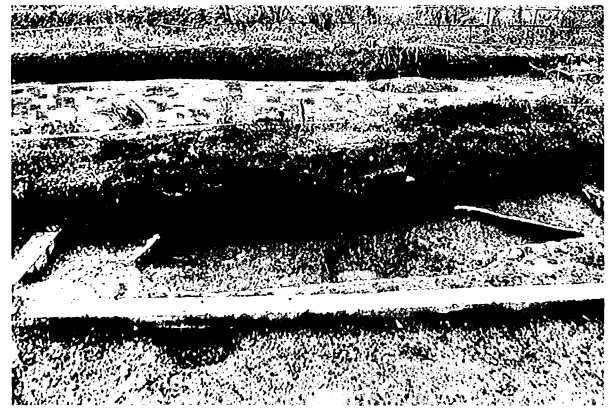
6　同　As-C 混下面全景

7　同　あえぼり跡（昭和40年以前）

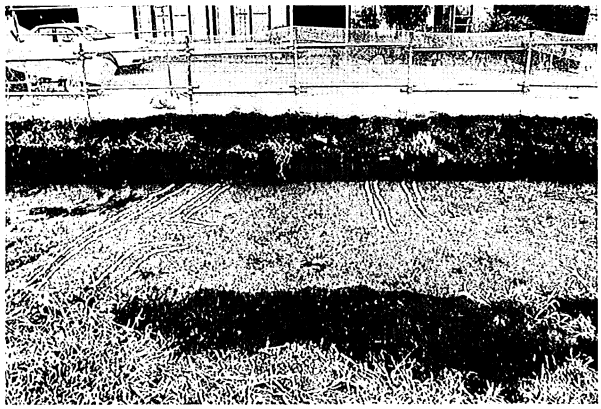
8　同　弥生時代以前面全景



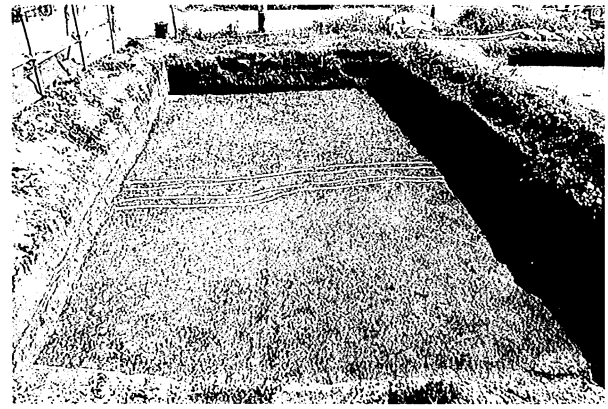
1　H区北側道西地区 As-B 下面全景



2　同　As-B 下面1号竪穴状遺構



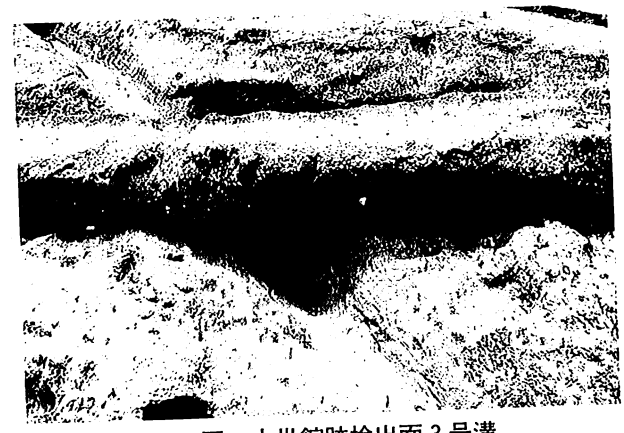
3　同　As-B 下面1号畦畔・2号畦畔



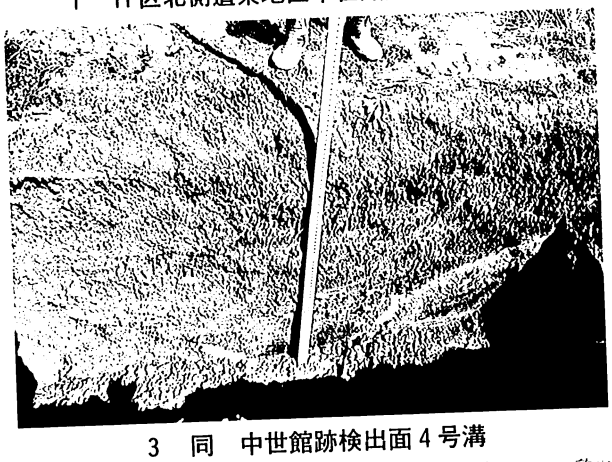
4　同　As-C 混下面1号畦畔

5　H区北側道東地区中世館跡検出面全景

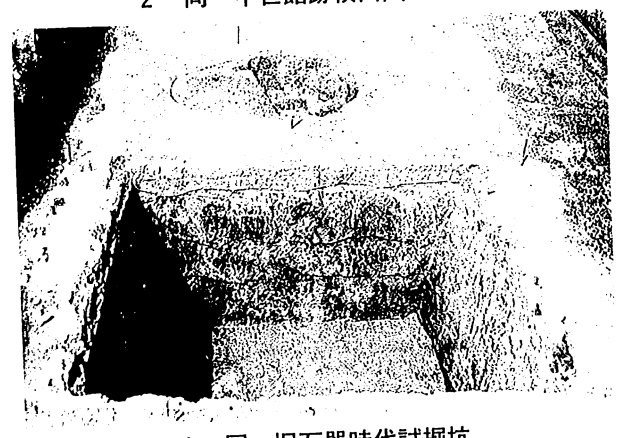
1　H区北側道東地区中世館跡検出面全景



2　同　中世館跡検出面3号溝



3　同　中世館跡検出面4号溝

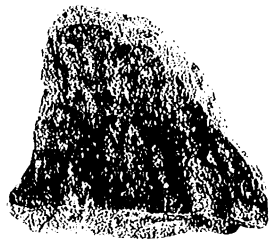


4　同　旧石器時代試掘坑

5　作業風景

6　実測風景

W－3－1



W－3－3

遺構外1

遺構外4

遺構外2

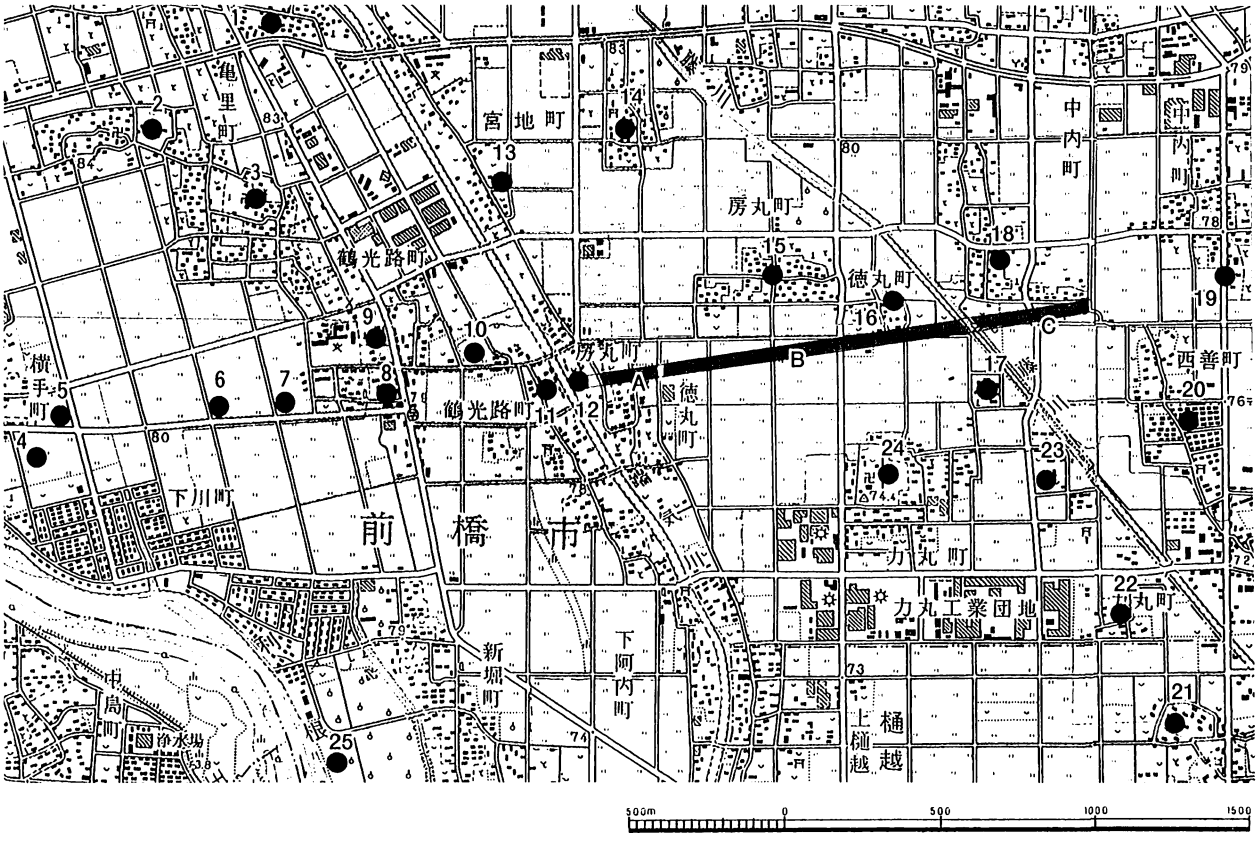
遺構外5

7　出土遺物

# Ⅳ 西善尺司Ⅲ遺跡

## 第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡

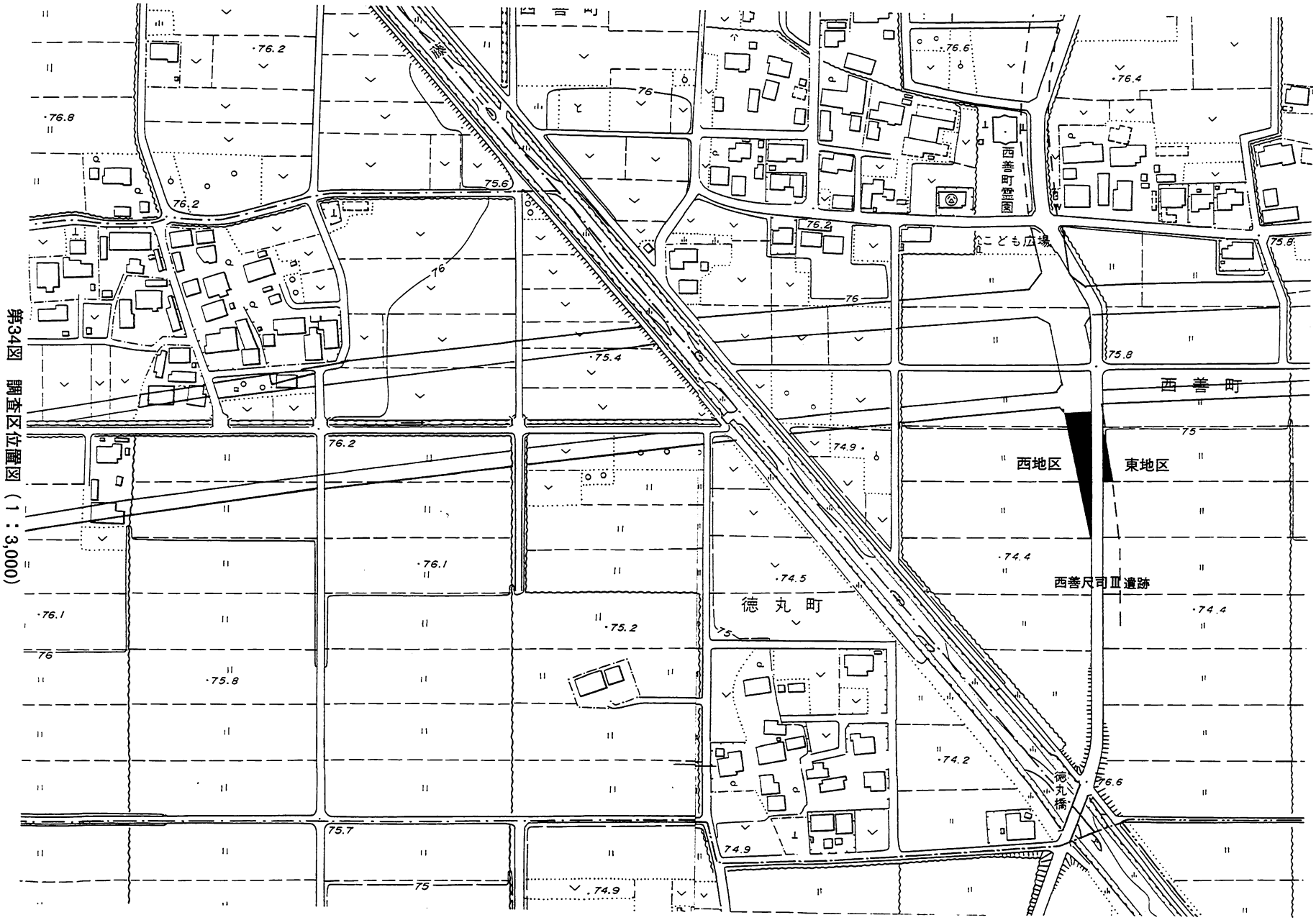
西善尺司Ⅲ遺跡の所在する西善町は前橋市の南部にあたり、JR 前橋駅の南東約6.3km に位置している。遺跡地の北0.7km には県道高崎駒形線が東西に走り、これと交差する県道西善玉村線が調査区を南北に縦断する。また、同県道により調査区は二分されており、このうち調査区西側を西地区、東側を東地区と呼称した。本遺跡の所在する西善町および周辺の徳丸町・下阿内町・力丸町・房丸町・宮地町・中内町は、低地に水田・畑が広がり、微高地上には集落が営まれている。また『上野国郡村誌』の佐波郡西善村地味の項には「其色赭黧交エ稲粱ニ適ス、但シ桑及ヒ麥ニ利アラス、水利便ナレトモ往々旱ニ苦シム」と記され、旧状を伝える。また、同書佐波郡東善養寺村（前橋市東善町付近）の記述より、長寛二年の善養寺東西分割伝承、さらに『建久三年伊勢大神宮神主請文写』にみえる長寛年間（1163年～1165年）の玉村御厨（佐波郡玉村町付近）成立が一致するなど、この時期に本遺跡付近は再整備が行われた可能性がうかがわれる。




国土地理院２万５千分の１『前橋』『大胡』『高崎』『伊勢崎』

A　徳丸高堰遺跡　　B　徳丸仲田遺跡　　C　西善尺司遺跡
1．宿阿内城（亀里阿内城）跡　2．亀里（天神）矢島百石屋敷跡　3．成菩提山光明院極楽寺　4．井戸南遺跡　5．横手宮田遺跡　6．横手湯田遺跡　7．鶴光路練引遺跡　8．鶴光路（村中）環壕遺構群　9．雲上山善光寺　10．西田遺跡　11．鶴光路榎橋遺跡　12．宝乗寺跡　13．宮地中田遺跡　14．東宮地環壕遺構群　15．房丸東環壕遺構群　16．徳丸東（縫田）環壕遺構群　17．徳丸東（後）環壕遺構群　18．旧西善環壕遺構群（須田屋敷）19．中内村前遺跡　20．横堀環壕遺構群　21．中樋越環壕遺構群　22．東力丸（宮田）環壕遺構群　23．東力丸（藤川）環壕遺構群　24．力丸城跡・降龍山善昌寺　25．新堀城跡

第33図　周辺の遺跡




第34図　調査区位置図（1：3,000）

## 第２章　調査の経過

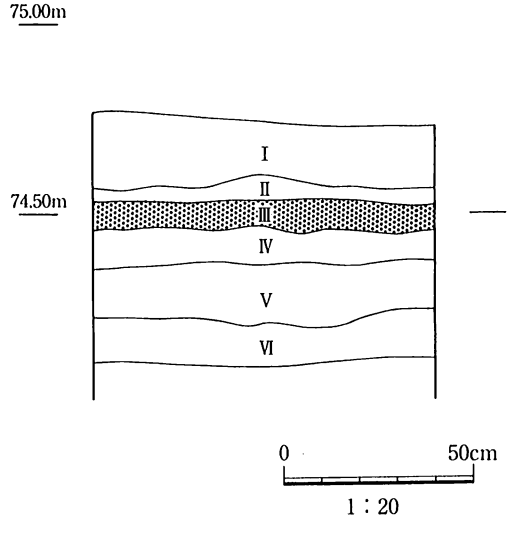
６月　上旬　　平成10年度西善尺司Ⅲ遺跡の発掘調査を開始する。
　　東地区・西地区の調査区設定、表土除去、浅間Ｃ軽石混土層下面調査を行う。
　　中旬　　東地区・西地区の全体測量、表土除去を行う。
　　東地区・西地区弥生時代以前面調査・旧石器試掘坑を設定し、調査を行う。
　　東地区・西地区全体測量を行う。
　　下旬　　東地区・西地区埋め戻しを終了する。
　　東地区・西地区調査終了をもって平成10年度西善尺司Ⅲ遺跡の発掘調査を終了する。

## 第３章　標準堆積土層

本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、浅間Ｃ軽石混土層下面の第１面、弥生時代以前面の第２面に分けられる。本地区で確認された鍵層は浅間Ｃ軽石混土層の１層であった。

以下は東地区東壁面で観察したもので本遺跡の層序を示すものである。

Ⅰ　暗褐色土層　現耕作土。しまりなく、粘性なし。
Ⅱ　灰色土層　旧耕作土。白色軽石を少量含み、しまり、粘性ともにあり。
Ⅲ　明茶色土層　白色軽石（浅間Ｃ軽石）を少量含み、しまり、粘性ともにあり。炭化粒、黒色土塊がわずかにみられる。
（下面が第１面　浅間Ｃ軽石混土層下面）
Ⅳ　暗茶色土層　橙色粒、暗茶色粒を少量含み、白色軽石（浅間Ｃ軽石）をまばらに含む。しまり、粘性ともにあり。
Ⅴ　肌色土層　暗茶色粒を少量含み、橙色粒をまばらに含む。しまり、粘性ともにやや強い。
（下面が第２面　弥生時代以前面）
Ⅵ　明白黄色土層　暗茶色粒を少量含む。しまり、粘性ともに強い。

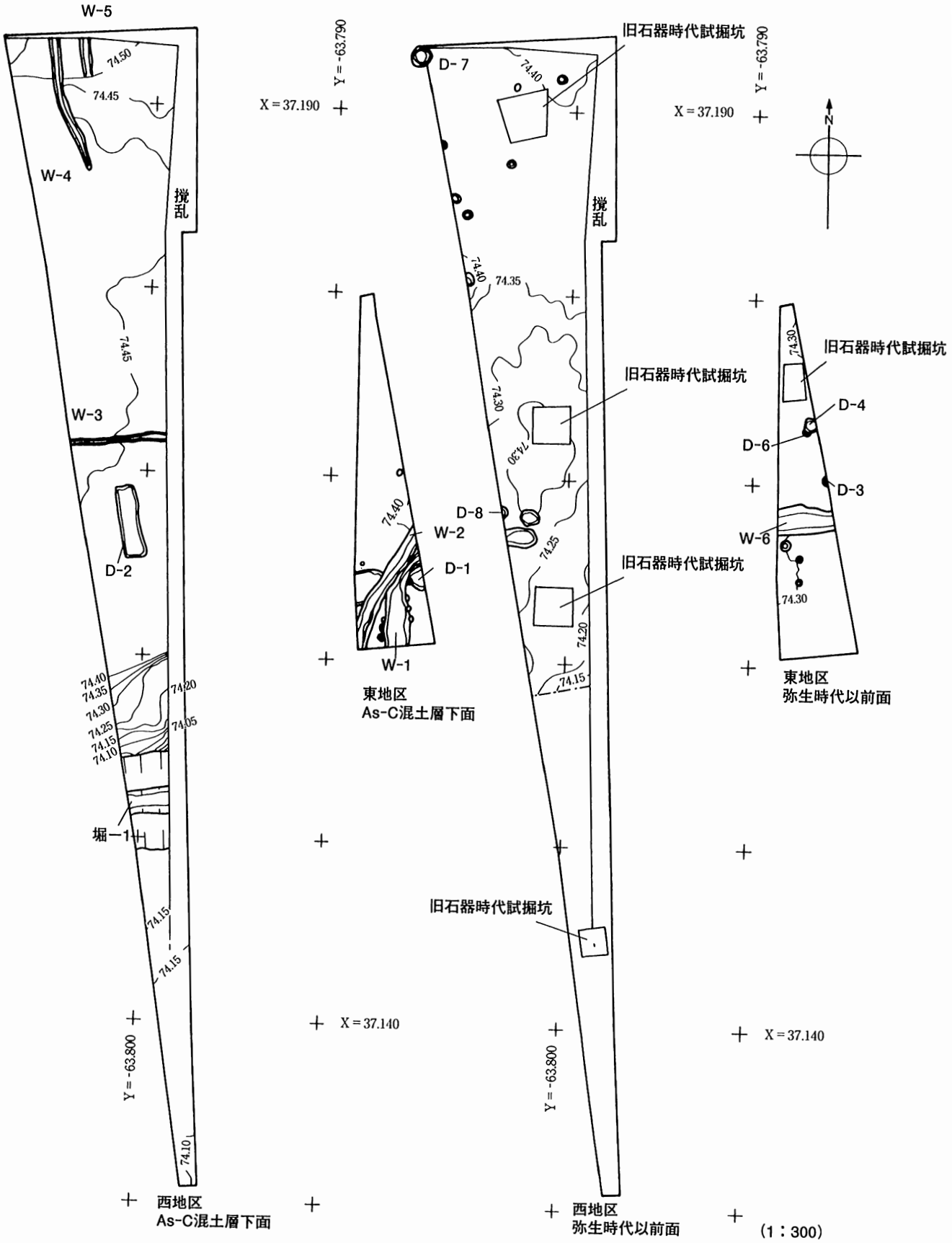



第35図　標準堆積土層

## 第４章　遺構と遺物

### 第１項　概要

本調査区において確認された文化層は２面であり、第１面は浅間Ｃ混土層下、第２面は弥生時代以前面である。第１面からは溝５条、堀１条、土坑２基、ピット９基、第２面からは溝１条、土坑５基、ピット12基が検出されている。以下、このうち特筆される遺構を記すこととする。




第36図　西地区・東地区全体図

**第２項　浅間Ｃ軽石混土層下面**

溝５条、堀１条、土坑２基、ピット９基が検出された。本遺構確認面より上層は圃場整備のため撹乱を受けており、浅間Ｂ軽石堆積層の検出は明確ではなかった。

**１号堀**　X=37,150、Y=-63,800で検出されている。本遺構は薬研状の形態を呈し、検出長2.5m、上端幅4.8m、下端幅1.2m、深さ1.3m を計測する。浅間Ｃ軽石混土層下面にて遺構確認されているが、前述の撹乱により本面以降に構築されたとみられ、形状および埋没土層から、中世館の堀の一部と考えられる。さらに１号堀と３号溝は同一走向（N94°W）を示し、本遺跡の北350m に位置する須田屋敷北側環濠の走向、南西1.0km に位置する力丸城南側環濠の走向（N94°W）と一致し、同じ目的をもった遺構の可能性が高い。

**１号溝**　X=37,160、Y=-63,780で検出されている。上部が撹乱されていたため、本面で検出され、掲載したが、近世の溝である。北から南に流下、走向方向（N°５W）を示し、検出長5.0m、上端幅1.5m、下端幅1.0m、深さ0.2m を計測する。本遺構より肥前伊万里焼の碗が出土している。見込み文様は伊万里焼の碗・蕎麦猪口に用いられるもので、18世紀末～19世紀初頭に限られる。また、筑前能古焼の碗にも類似品があり、能古焼の生産自体、伊万里焼の見込み文様の存続期間と大差なく、双方の関連が想定される。

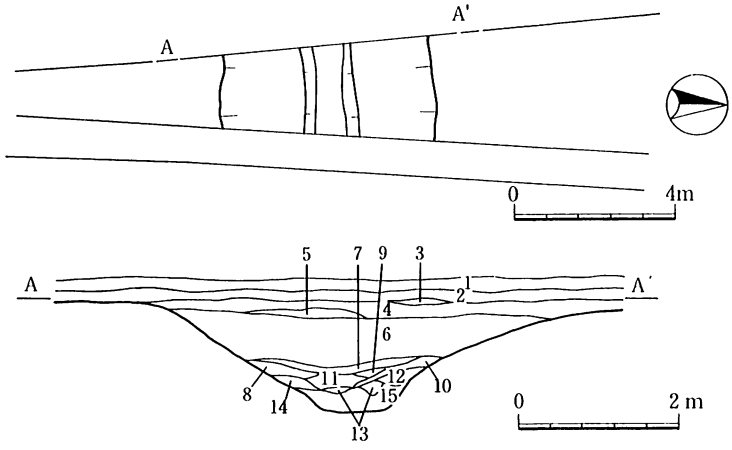
**第３項　弥生時代以前面**

本検出面からは、溝１条、土坑５基、ピット12基が検出されている。

**７号土坑**　X=37,190、Y=-63,800で検出されている。上部が撹乱されていたため、本面で検出された遺構である。本遺構は、平面形は円形で、直径55cm、深さ30cm を計測し、形状は逆台形を呈している。本遺構よりＳ字状口縁台付甕の口縁部および壺の胴部～底部が埋没土中より出土し、後者は逆位の状態であった。両者は共伴遺物で、ともに古墳時代前期の所産である。

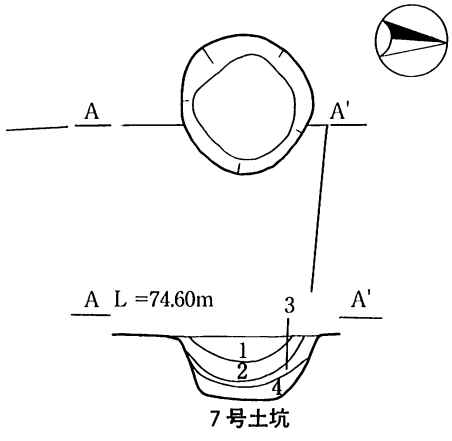
## 第５章　まとめ

本遺跡からは、浅間Ｃ軽石混土層下面、弥生時代以前面の計２面の遺構確認面が検出された。浅間Ｃ軽石混土層下面からは溝５条、堀１条、土坑２基、ピット９基、弥生時代以前面からは溝１条、土坑５基、ピット12基が検出されているが、確認面である浅間Ｃ軽石混土層下面より上層は、圃場整備等により撹乱を受けており、同層以降に構築された遺構が複合しているものと思われる。特筆される遺構は、西地区浅間Ｃ軽石混土層下面より検出された１号堀である。形状は薬研状を呈し、形状および埋没土層から判断して、中世館の堀の一部と考えられる。西地区から確認されている３号溝、本遺跡の北350m に位置する須田屋敷北側環濠の走向、南西1.0km に位置する力丸城南側環濠（N94°W）と走向方向は一致し、これらは同一の性格を持った遺構と考えられる。この地域で確認されている須田屋敷をはじめとした環濠を伴う遺構は、旧西善環濠遺構群と呼ばれ、特に須田屋敷は武蔵国鉢形城主として知られる北条氏邦の陣屋が営まれたとの伝承があり、北東には禅養寺が位置していたと伝えられる。本遺跡検出の１号堀の構築時期については、須田屋敷の北条氏邦陣屋伝承、力丸城伝承などから、北条氏邦の上野国支配が終焉を迎える天正十八年（1590年）前後と考えられる。本遺跡の調査成果を踏まえて旧西善環濠遺構群をみると、その成立については、中世において城郭的要素を持つ拠点であったものが、小田原の役後の後北条氏上野支配の終焉、さらに徳川家康家臣平岩親吉の厩橋（前橋）入部による力丸氏・那波氏等の衰退、在地武士の帰農化などの諸要因から、近世へ至る時代の中でそれらが徐々に解体した結果と捉えられる。西善付近の環濠屋敷は在地社会における中世から近世への変化を示す好資料といえよう。しかしながら、今回の調査は道路部分という限られた範囲で実施されたものであり、不明な点が多く、それらについては周辺部の調査を待って検討を加えたい。

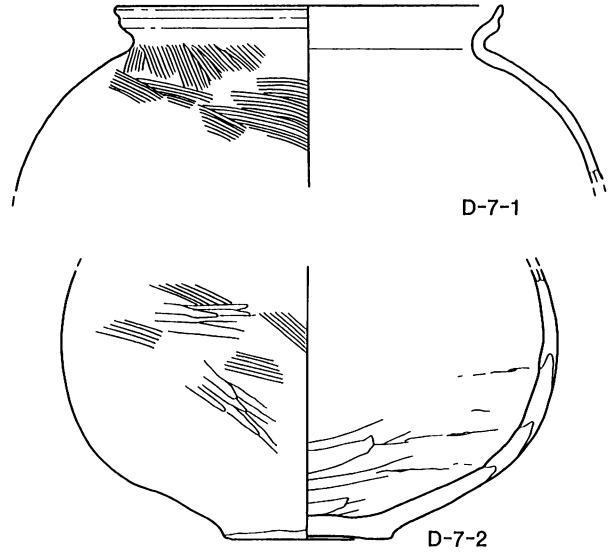



1号堀
1．暗褐色土　耕作土。
2．暗褐色土　耕作土。浅間A軽石を多量に含む。
3．青灰色土　浅間A軽石をまばらに含む。
4．茶色土　浅間A軽石多量、炭化粒をまばらに含む。
5．灰色土
6．灰色土
7．暗灰色土
8．砂質土
9．砂質土
10．黒灰色土
11．砂質土
12．暗灰色土
13．砂質土
14．暗青灰粘質土
15．暗青灰粘質土

**第37図　1号堀平面図・断面図**

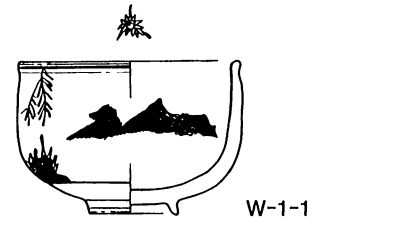



7号土坑




7号土坑
1．黒褐色土　黒色土基調にロームブロック10～40cm、5％充填。
2．暗褐色土　黒色土基調にロームブロック10～40cm、50％充填。
3．黒色土　黒色土基調にロームブロック10～40cm、5％充填。
4．暗褐色土　黒色土基調にロームブロック10～40cm、10％充填。粘土。しまる。

0　2 m




0　10cm

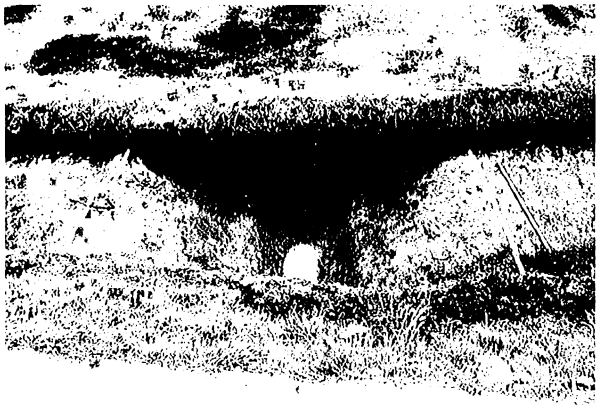
**第38図　7号土坑・同出土遺物、1号溝出土遺物**

**表8　遺物観察表**

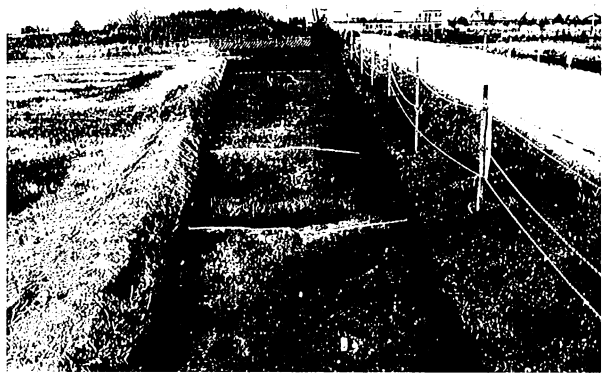
| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・器高・底径(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7号土坑 | 1 | 土師器台付甕 | (15.2)…… | 口縁部 1／2 | 口縁部は「S字」状を呈する石田川式土器。外：胴部刷毛目。 | ①石英・長石・砂粒 ②橙褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 2 | 土師器壺 | ……・…… 6.6 | 胴～底部 | 胴部は偏球形を呈し、底部は突出して上げ底となる。内：ヘラナデ、外：刷毛目後ヘラ磨き。 | ①石英・長石・褐色 ②明赤褐色　③酸化 | 埋没土 |
| 1号溝 | 1 | 近世陶磁器茶碗 | (8.7)・6.0 3.5 | 1／2 | 見込み文様は伊万里焼（18C後半～19C前半）・筑前能古焼（19C前半）に類似する肥前・筑前系と思われる。外体部には山水草木を描く。 | ①磁胎・②呉須は藍色 | 埋没土 |

1　遺跡全景（空撮）

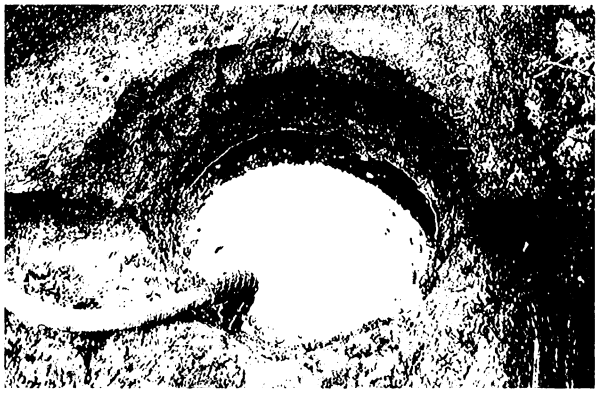
2　遺跡全景（空撮）



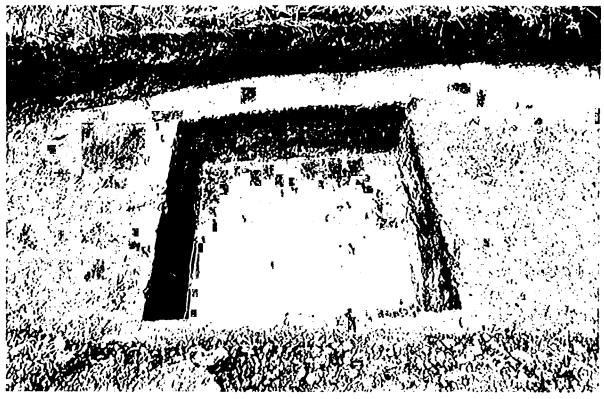
1　西地区 As-C 混下面 1 号堀全景



2　同　As-C 混下面全景

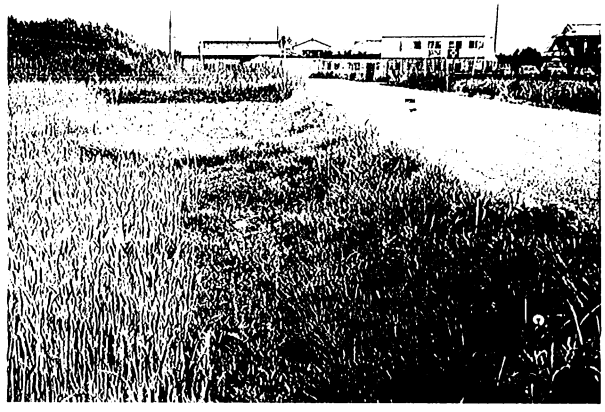


3　同　弥生時代以前面 7 号土坑



4　旧石器時代試掘坑

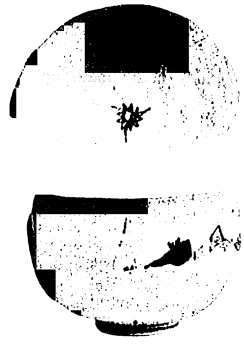
5　同　作業風景



6　同　調査前風景

D－7－1

D－7－2



W－1－1

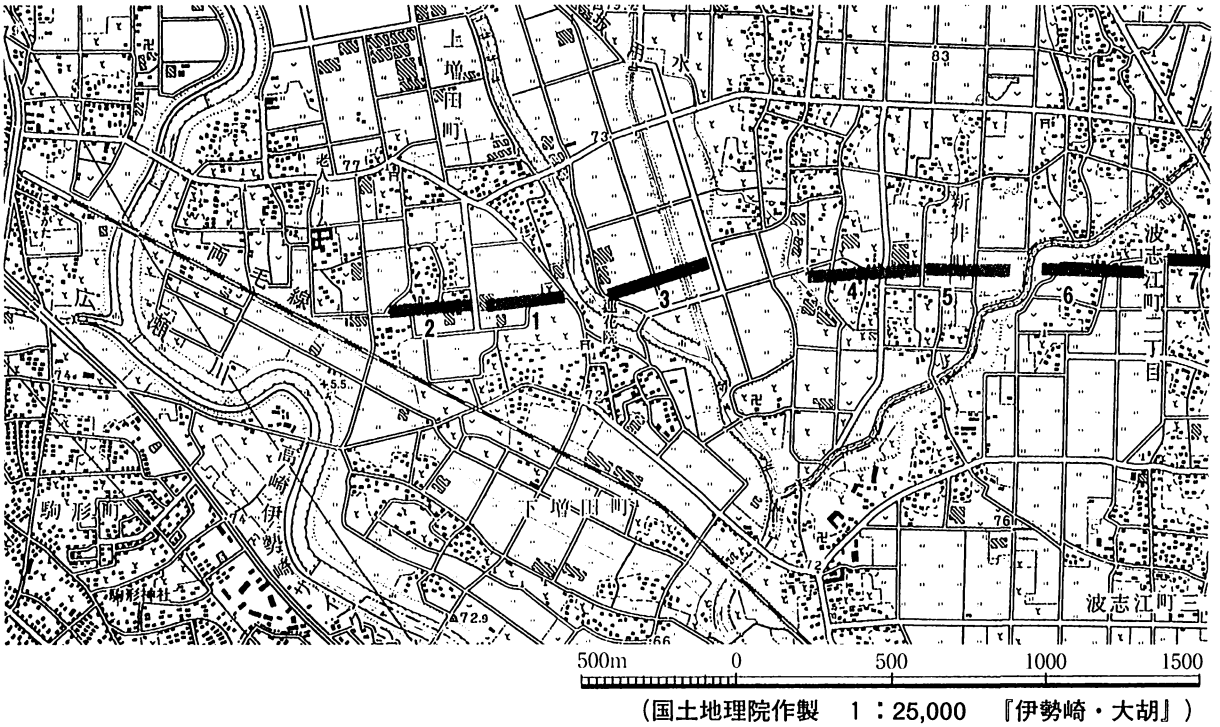
7　出土遺物

# Ⅴ　下増田常木Ⅱ遺跡

## 第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡

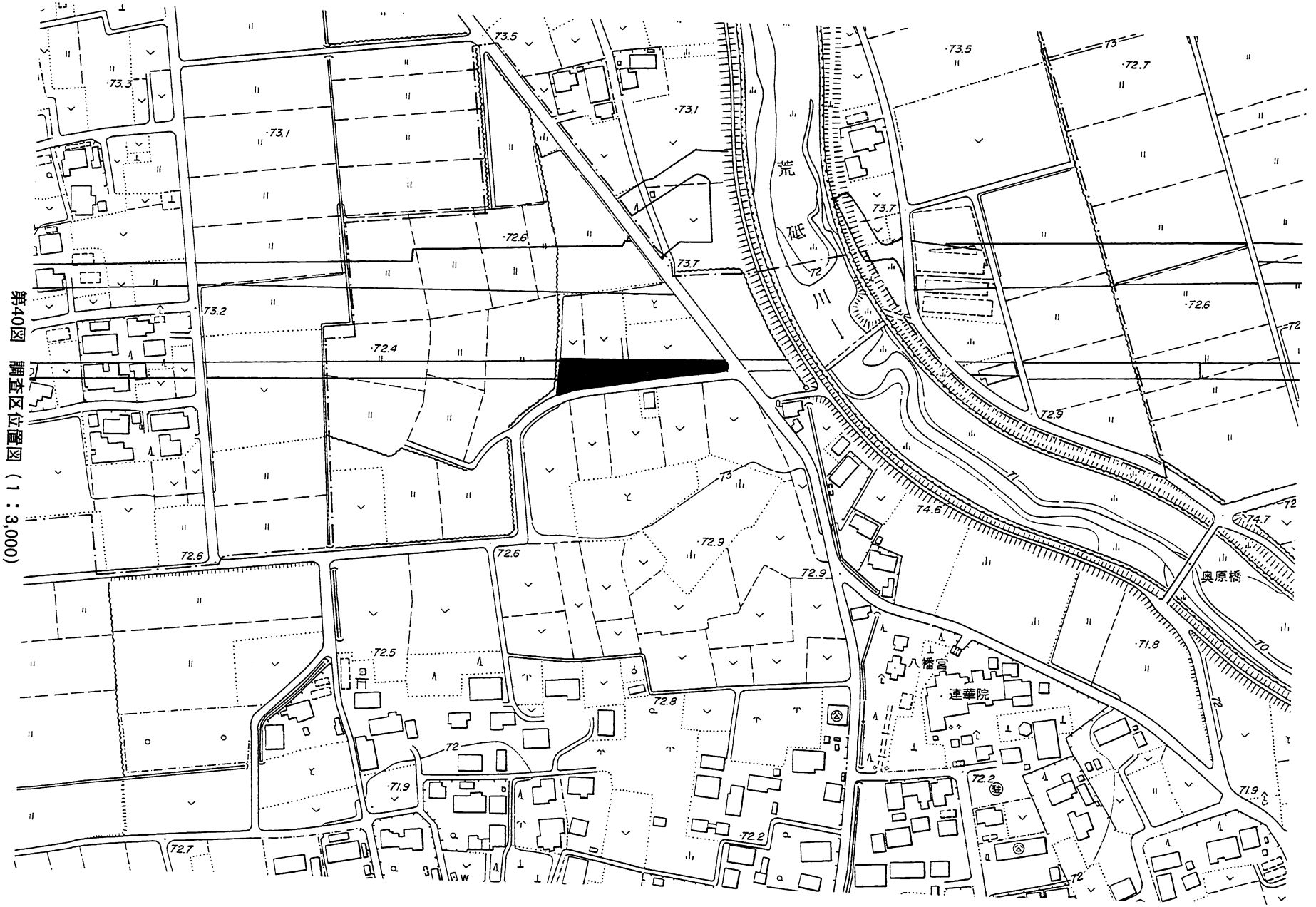
本遺跡が所在する地域は、旧利根川流路とされる広瀬川低地帯の西岸域にあって、大間々扇状地の裾部に沿うように北西から南東方向に帯状に広がる河成段丘上にあたる。地理的な区分ではこの河成段丘部は、かつて完新世期に旧河川が作り出した流路部分の後背湿地と、中州部分の微高地に分けられる。本遺跡はこの中州部分に当たっている。従来、この地域においては、遺跡の存在はあまり知られていなかった。しかし、北関東自動車道路建設に伴う一連の発掘調査により、この旧中州部分および後背湿地にも人々が生活していた痕跡が数多く発見されている。

時代別に概観すれば、**縄文時代**では下増田越渡遺跡(3)において後期から晩期にかけての遺物が僅かながら発見されている。また、萩原遺跡(4)では早期～中期以降の遺物の報告がなされているが遺構の検出はない。大間々扇状地寄りとなる波志江中野面遺跡(6)では中期の集落が検出され、まとまった資料が得られている。続く**弥生時代**では下増田越渡遺跡において後期の遺物が僅かながら出土している。また、下増田常木遺跡(1)では集落跡が確認されている。**古墳時代**になると遺跡の発見例が増加する。集落では下増田常木遺跡、萩原遺跡、墓域では波志江中野面遺跡、下増田越渡遺跡、生産遺跡では下増田越渡遺跡・下増田常木遺跡で As-C 混土層下の水田が検出されている。**奈良・平安時代**は９世紀前半の洪水層下と As-B 軽石層下の２面で遺跡の存在が確認されている。集落では下増田常木遺跡・下増田越渡遺跡・萩原遺跡・新井大田関遺跡(5)・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡(7)、生産遺跡では下増田越渡遺跡・波志江中野面遺跡・萩原遺跡・新井大田関遺跡・下増田常木遺跡の水田・畠跡がある。**中世**では下増田越渡遺跡・下増田島遺跡(2)・下増田常木遺跡・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡で遺構・遺物の検出が報告されている。




（国土地理院作製　１：25,000　『伊勢崎・大胡』）

第39図　周辺の遺跡




第40図　調査区位置図（1：3,000）

## 第２章　調査の経過

| | |
|---|---|
| 平成10年10月８日 | 本日より調査を開始する。ボックスハウス設置、および器材の準備を行う。 |
| 12・14日 | 表土除去作業を開始する。 |
| 14日 | 第１面の表土除去作業を行い、遺構の確認を行う。 |
| 15日 | 12号土坑、１～６号溝、道路状遺構の検出を行う。 |
| 16日 | 地上測量による全体図を作成する。 |
| 17日 | 第１面の調査を終了する。各遺構の写真撮影を行う。 |
| 19～23日 | 第２面（洪水層まで）の表土除去を行う。 |
| 26～28日 | 洪水層下水田跡の検出作業を進める。 |
| 28日 | 洪水層下の調査を終了し、本地区での現地調査を終了する。 |

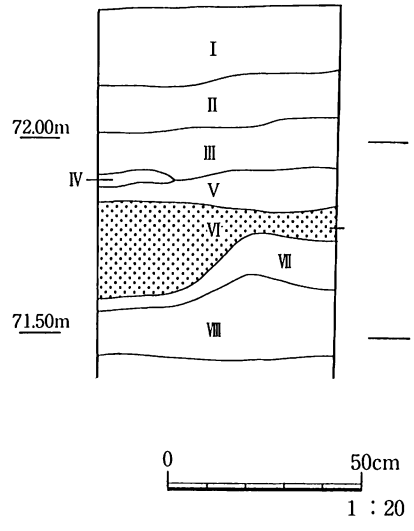
## 第３章　標準堆積土層

本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、表土層直下での中・近世の第１面、並びに９世紀前半に発生したとされる洪水層直下の第２面に分けられる。本地区で確認された鍵層はこの洪水層１層のみであった。荒砥川の左岸に位置する下増田越渡Ⅲ・Ⅳ遺跡では浅間Ｂ軽石（As-B）、や榛名二ッ岳FA（Hr-FA）の堆積が確認されているが、小河川（荒砥川）を隔てた対岸に位置する本遺跡の堆積状況と異なっている。

以下は各土層の観察結果である。

《土層観察結果》

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ層 | 黄褐色土層 | 良くしまっている。粘性なし。（下面が第１面近世確認面） |
| Ⅱ層 | 暗黄褐色土層 | 良くしまっている。粘性なし。 |
| Ⅲ層 | 暗褐色土層 | 良くしまっている。粘性ややあり。灰色の粘質土をブロック状に含む。 |
| Ⅳ層 | 暗褐色土層 | 良くしまっている。粘性あり。褐色土をブロック状に含む。 |
| Ⅴ層 | 暗褐色砂質土層 | 良くしまっている。粘性あり。 |
| Ⅵ層 | 暗青灰色砂質土層 | Ⅴ層よりしまり弱い。粒子粗く粘性なし。Hr-FPと思われる軽石を混入する。（９世紀前半の洪水層と判断される。） |
| Ⅶ層 | 暗灰褐色砂質土層 | 良くしまる。白色の粒子を含み鉄分の沈着が見られる。（上面が第２面） |
| Ⅷ層 | 灰褐色砂質土層 | Ⅶ層よりも明るい。しまり、粘性ある。 |




第41図　標準堆積土層

## 第4章　遺　構

### 第1項　概　要

今回の調査における調査区の文化層は2面である。第1面の近世以前の遺構確認面では土坑3基・溝7条・道路状遺構1条が検出されている。第2面の9世紀前半とされる洪水層下面では、水田跡が検出されている。

### 第2項　近世以前面

土坑は北西のX=38,800、Y=-63,400において3基偏在して検出されている。平面形状はほぼ円形もしくは楕円形を呈する。規模は長径が約60cm～90cm、確認面下の深さは約40cm～55cmを測る。埋没状況は堆積状況から判断すると、人為埋没の可能性が考えられる。出土遺物はなく機能および細かな時期共に不明である。

溝はX=38,800、Y=-63,380付近で7条が集中して検出されている。東西方向へ走向するもの(1·7号)、「く」の字状に蛇行するもの（2·3·4号)、南北に走向するもの(5·6号)に分けられる。断面形状はいずれも浅い皿状を呈し、上端幅は約30cm～55cm、確認面よりの深さは、10cm～30cmを測る。全体として掘り込みが浅く小規模な溝である。

遺物の出土は見られず、機能および時期共に不明である。

道路状遺構はX=38,800、Y=-63,400付近で検出されている。走向は調査区南西端より北東へむかって北側の調査区域の外へ延びている。走向方向は北東から東方向に緩やかに弧を描くもので、N40°Eである。道の幅約1.0m～2.1mを測り、その幅は一定ではない。また、路面は全面にわたり硬くしまっており、断ち割り調査によって2枚の硬化面が確認されている。

本遺構に伴う遺物は検出されていないが、硬化面中に認められた白色の軽石は榛名山二ッ岳を給源とするものと判断され、浅間A軽石は確認されていない。したがって、18世紀後半以前の所産と判断される。

### 第3項　9世紀前半面

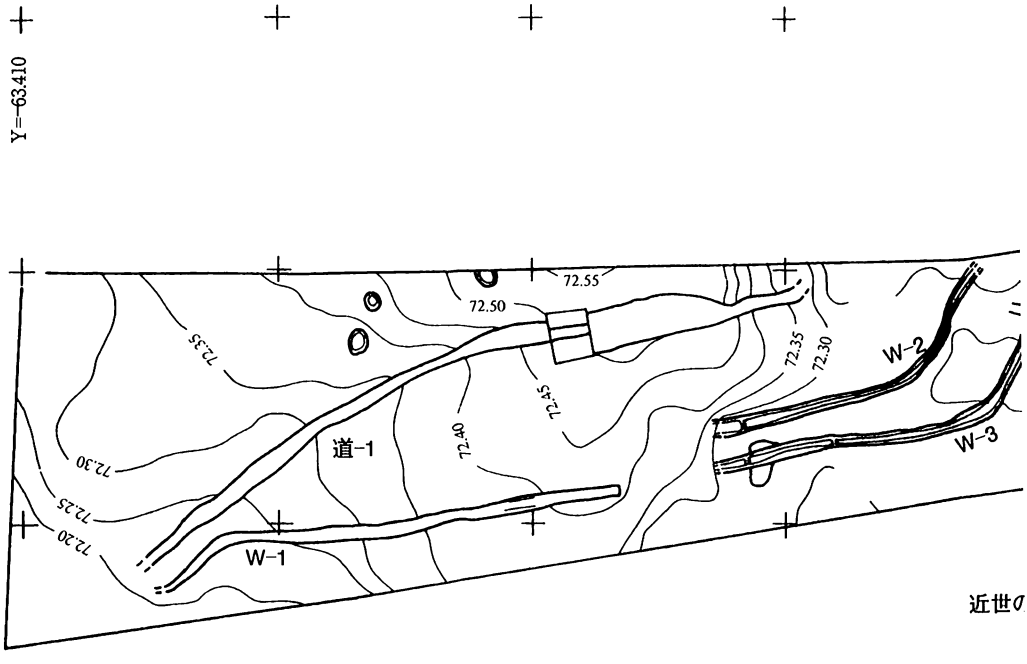
第2面では、9世紀前半に発生したとされる洪水層下より水田跡を検出した。水田跡はX=38,800、Y=-63,400周辺で検出されている。調査区西側部分では比較的遺存状況は良好であったが、中央部より東側にかけては広範囲にわたって削平を受けており、水田面はおろか水田土壌たる粘質土さえも残存していなかった。

畦畔は調査区西側において3条検出している。1・2号畦畔は緩やかに蛇行しながらX=38,780、Y=-63,410付近でL字に接続する。3号畦畔は1・2号の東側に位置し、2号と走向方向がほぼ一致する。区画された内部が水田面になるものか、規格性は看取できない。畦畔の高さは10～14cm、幅55～75cmを測る。断面形は台形状を呈し、全体的にしっかりとしたつくりで遺存状態は良好といえる。

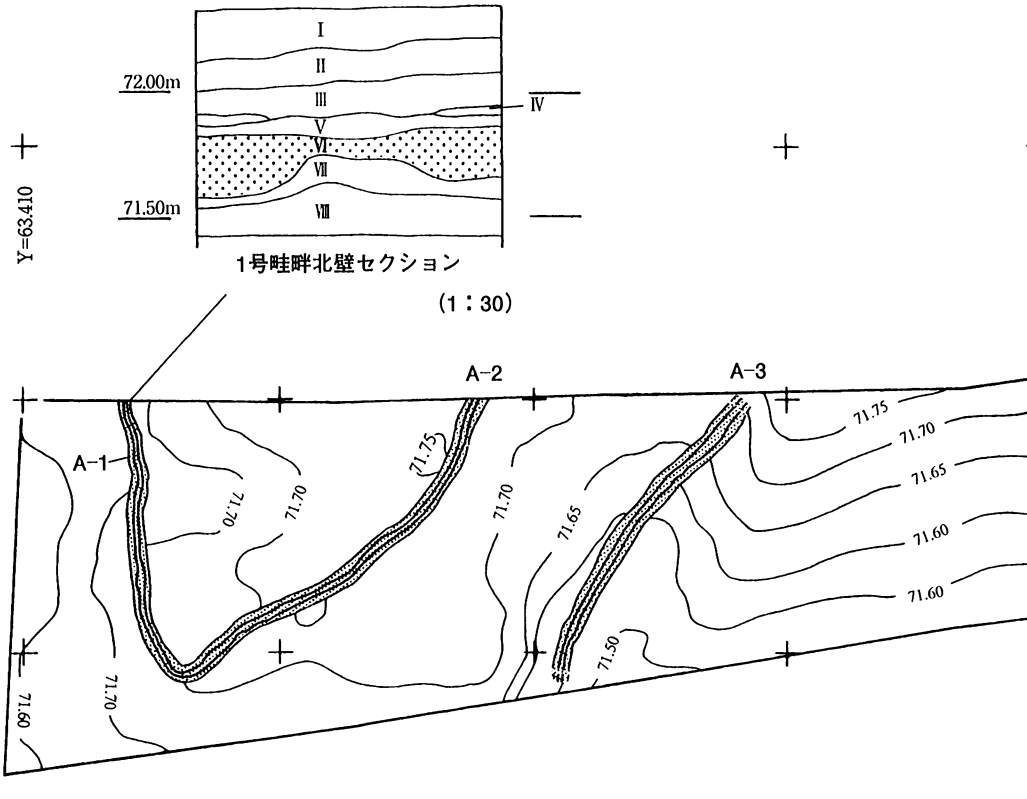
遺物の出土はみられなかった。

## 第5章　まとめ

本遺跡において検出された遺構は2面の文化層から、近世の土坑・道路状遺構・溝、9世紀前半以前の水田面1面畦畔3条であった。調査範囲の制約もあって内容については不明な点が多い。周辺の調査結果を待ちたい。

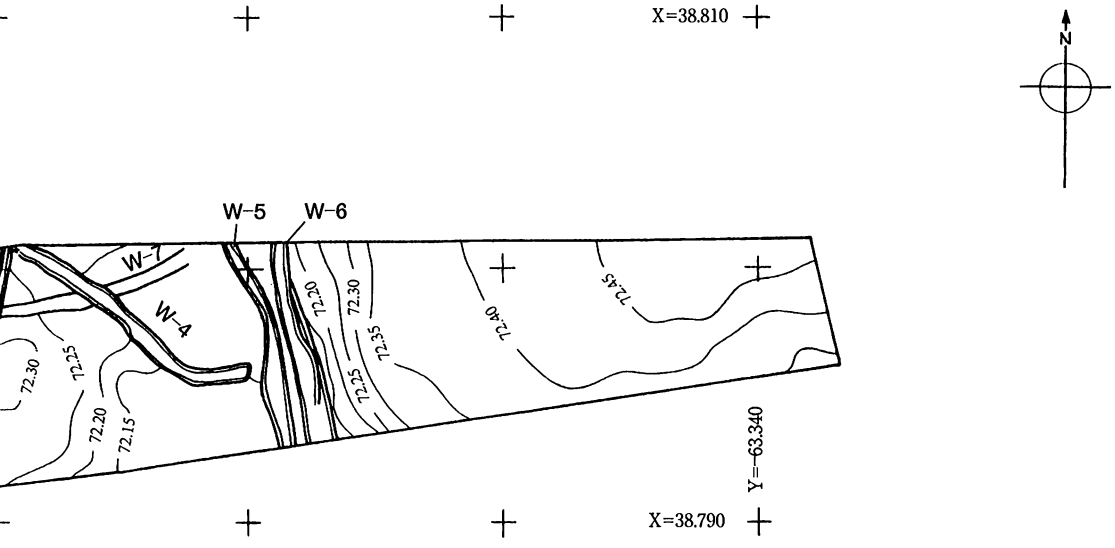



近世の

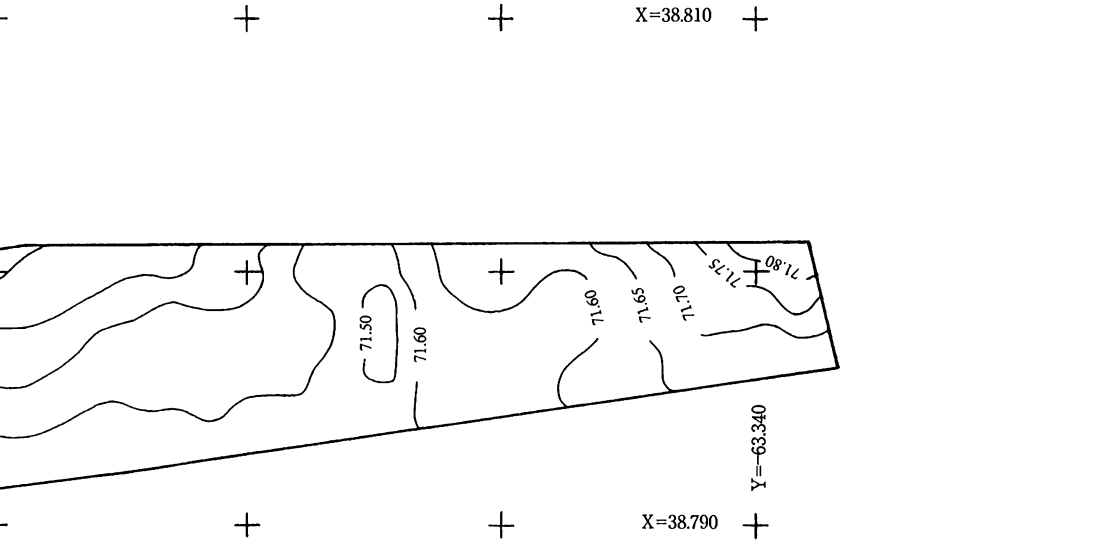



9世紀前半の

第42図




遺構確認面

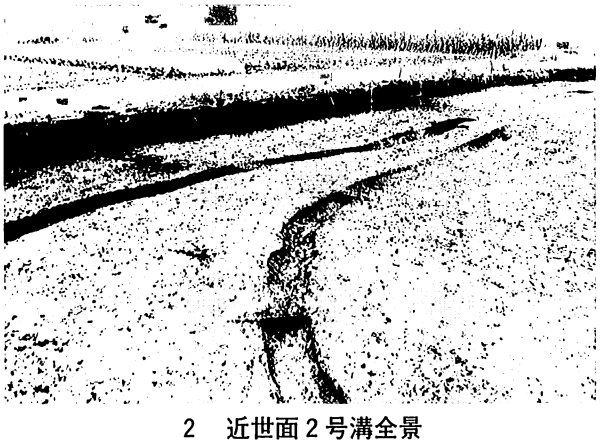



(1：300)

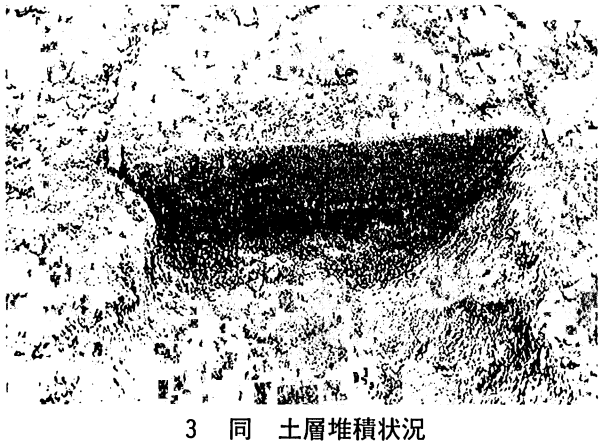
洪水層下水田跡

体図　折図10

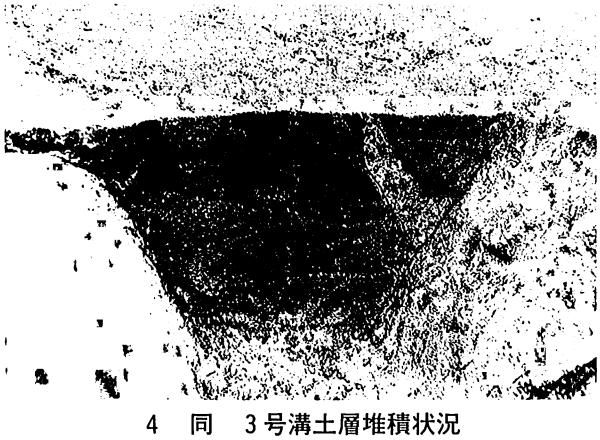
1　遺跡遠景（矢印部分）



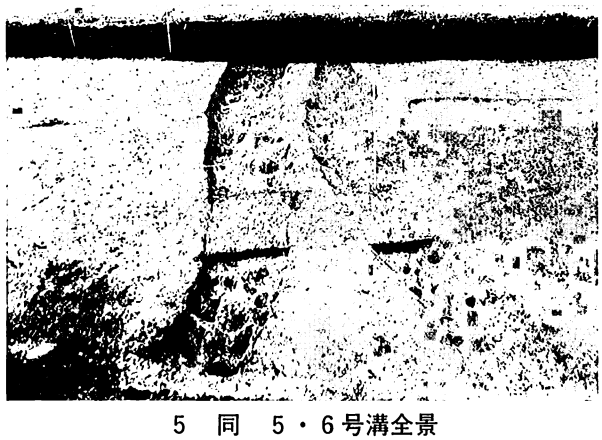
2　近世面2号溝全景



3　同　土層堆積状況

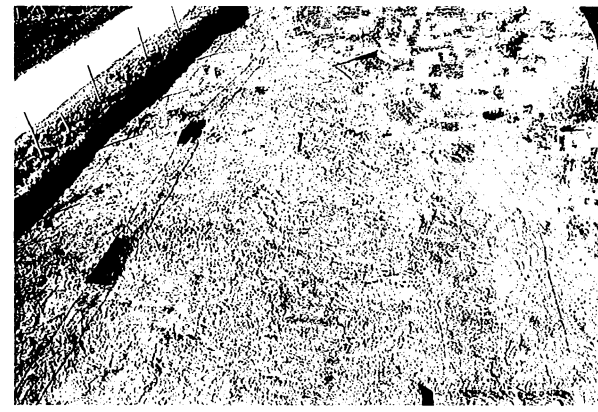


4　同　3号溝土層堆積状況

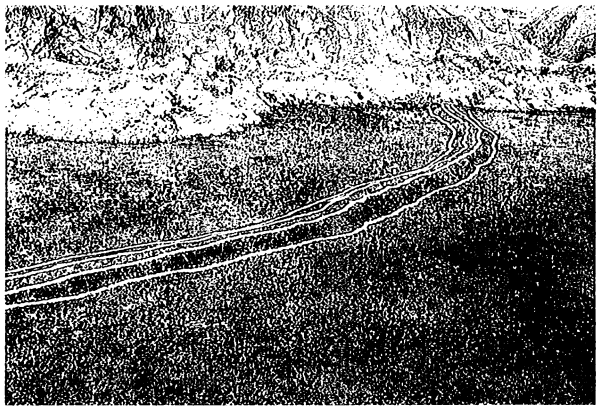


5　同　5・6号溝全景

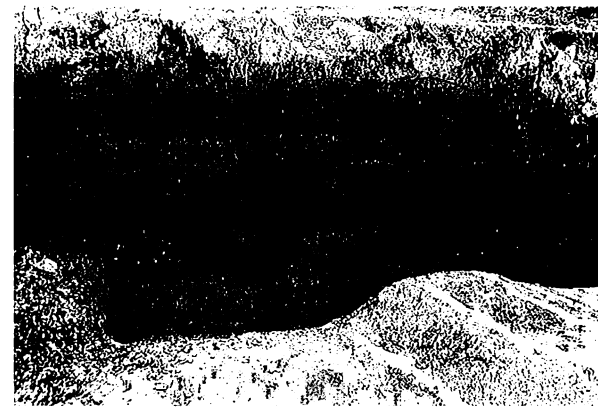
1　近世面4～6号溝全景



2　同　1号道路状遺構

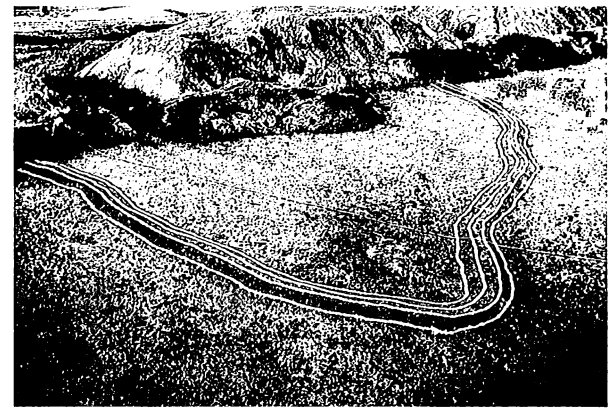


3　9世紀前半洪水層下面1号畦畔

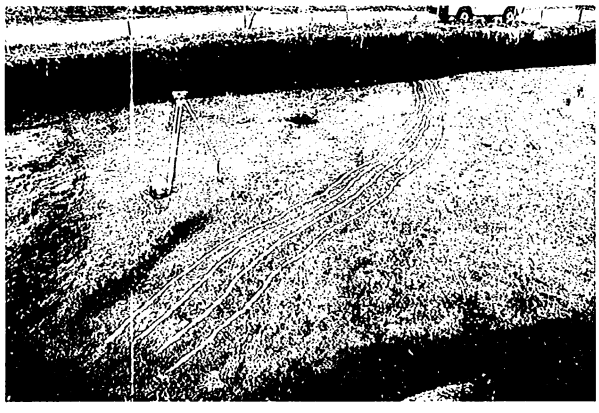


4　同　1号畦畔土層堆積状況

5　同　1・2号畦畔



6　同　1・2号畦畔



7　同　3号畦畔

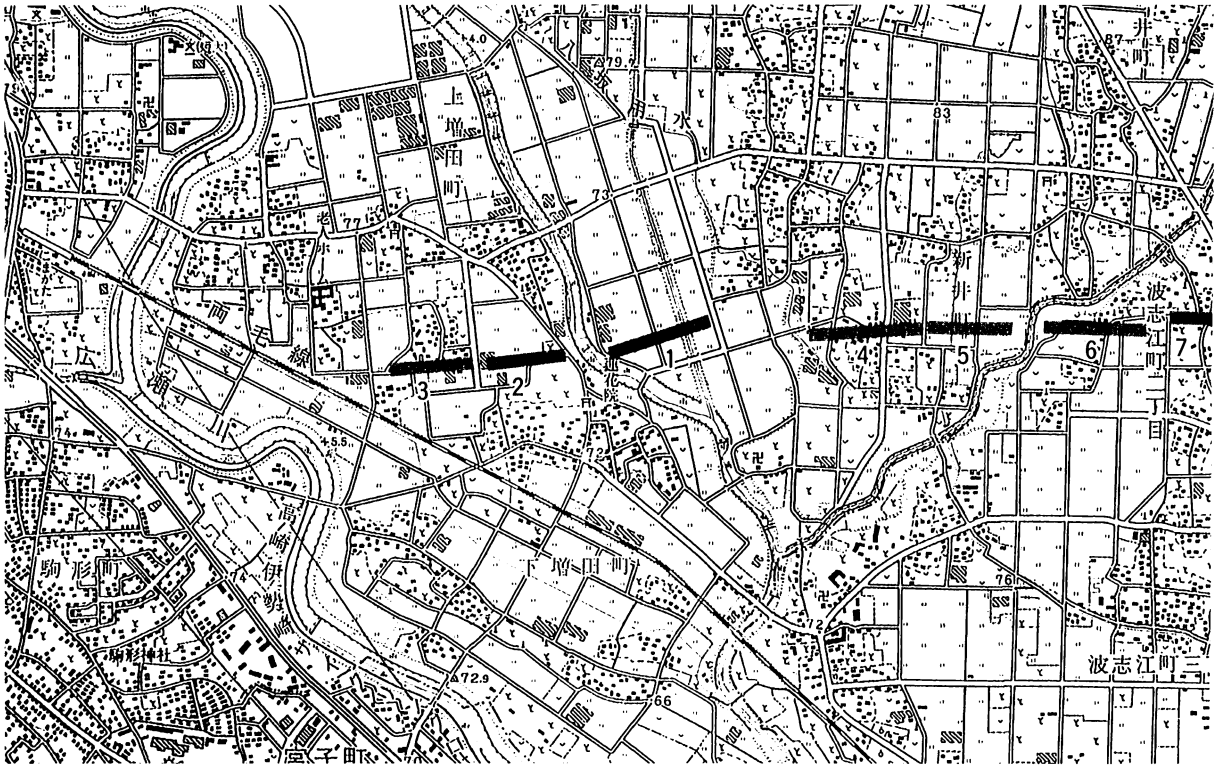
8　同　1・2・3号畦畔

# Ⅵ　下増田越渡Ⅳ遺跡

## 第１章　遺跡の立地と周辺の遺跡

本遺跡が所在する地域は、旧利根川流路とされる広瀬川低地帯の西岸域にあって、大間々扇状地の裾部に沿うように北西から南東方向に帯状に広がる河成段丘上にあたる。地理的な区分ではこの河成段丘部は、かつて完新世期に旧河川が作り出した流路部分の後背湿地と、中州部分の微高地に分けられる。従来、この地域に於ては、遺跡の存在はあまり知られていなかった。しかし、北関東自動車道路建設に伴う一連の発掘調査により、この旧中州部分および後背湿地にも人々が生活していた痕跡が数多く発見されている。

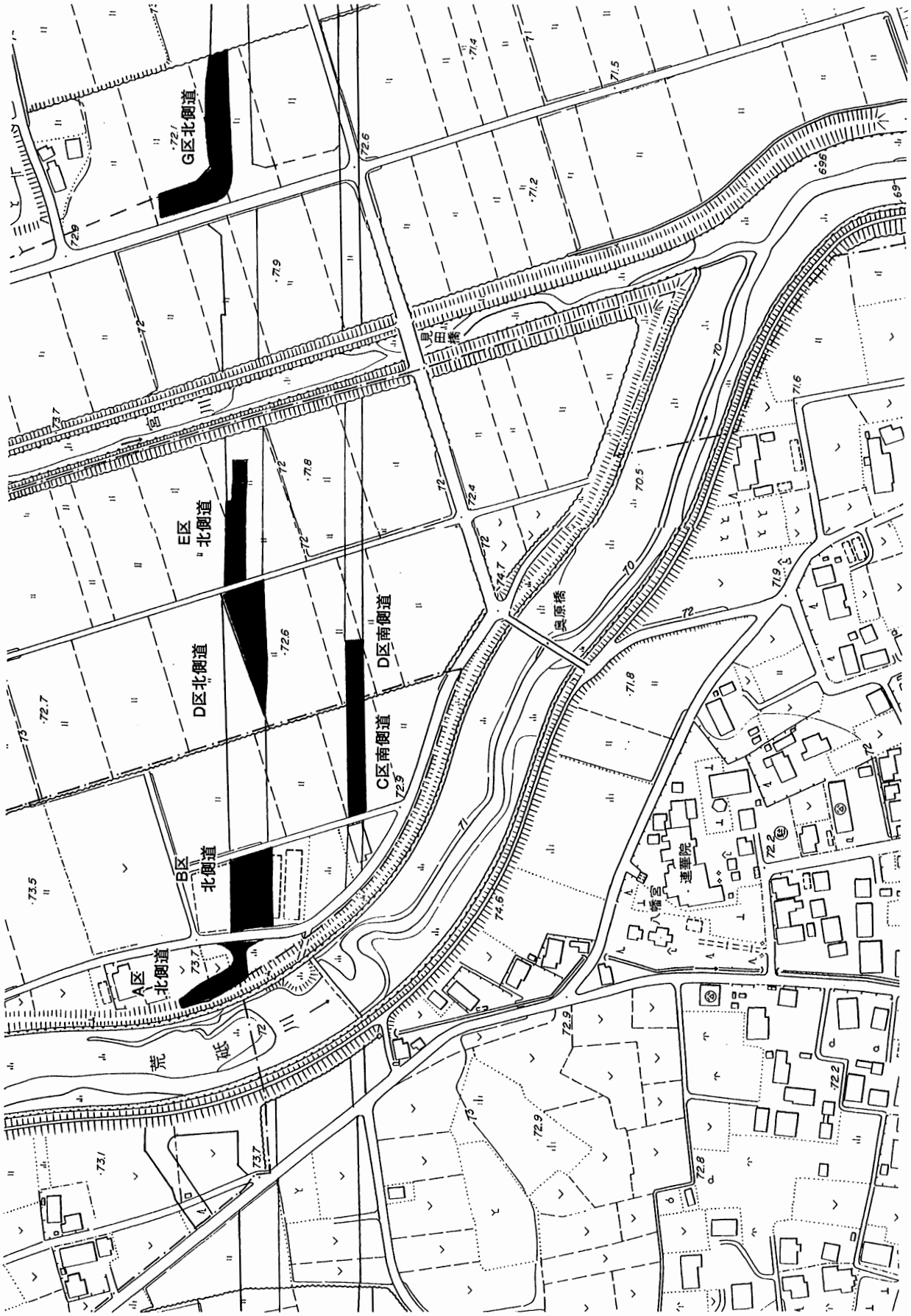
時代別に概観すれば、**縄文時代**では下増田越渡遺跡(1)において後期から晩期にかけての遺物が僅かながら発見されている。また、萩原遺跡(4)では早期～中期以降の遺物の報告がなされているが遺構の検出はない。大間々扇状地寄りとなる波志江中野面遺跡(6)では中期の集落が検出され、まとまった資料が得られている。続く**弥生時代**では下増田越渡遺跡において後期の遺物が僅かながら出土している。また、下増田常木遺跡(2)では集落跡が確認されている。**古墳時代**になると遺跡の発見例が増加する。集落では下増田常木遺跡、萩原遺跡、墓域では波志江中野面遺跡、下増田越渡遺跡、生産遺跡では下増田越渡遺跡・下増田常木遺跡でAs-C混土層下の水田が検出されている。**平安時代**になると集落では下増田常木遺跡・下増田越渡遺跡・萩原遺跡・新井大田関遺跡(5)、波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡(7)、生産遺跡では下増田越渡遺跡・波志江中野面遺跡・萩原遺跡・新井大田関遺跡・下増田常木遺跡の水田・畠跡がある。**中世**では下増田越渡遺跡・下増田鳥遺跡(3)・下増田常木遺跡・波志江中野面遺跡・波志江西屋敷遺跡で遺構・遺物の検出が報告されている。




500m　0　500　1000　1500

（国土地理院作製１：25,000『伊勢崎・大胡』）

第43図　周辺の遺跡




第44図　調査区位置図（1：3,000）

## 第２章　調査の経過

**平成10年**

**５月21日**　本日より調査を開始する。重機搬入。調査区への搬入路を確保する。**27日** E 区 B 軽石下水田までの表土除去を終了。D 区１～３号溝の検出作業を行う。**30日** D 区 B 軽石下検出水田調査終了。

**６月２日**　A 区 B 軽石下水田まで表土除去を行う。E 区 B 軽石下水田の検出作業を行う。**４日** D 区１～３号溝の実測を行う。**５日** D 区畦畔の実測を行う。E 区４号溝の検出作業を行う。**９日** A 区B 軽石下水田の検出作業を開始する。**11日** B 区平安時代の包含層まで表土除去を行う。C 区 C 混土層まで表土除去を行う。**15日** A、B、E 区 B 軽石下水田跡の航空測量を行う。**16日** B 区遺構確認を行う。**17日** B 区１号住居跡、土坑の検出作業を始める。**18日** B 区土坑と１号住居跡の検出作業を行う。北東部分にトレンチを設定する。C 区遺構確認の写真撮影を行う。**19日** B 区１号住居跡と土坑の検出作業を行う。**23日** 各調査区の排水作業を行う。**25日** B 区土坑の実測、写真撮影を行う。**26日** B 区１号住居跡と土坑の検出作業を行い、完掘する。**29日** D 区洪水層下水田まで表土除去を行う。**30日** B 区２号住居跡と土坑の検出作業を行う。E 区洪水層下水田までの表土除去を終了する。

**７月１～８日**　B 区２号住居跡と土坑の検出作業を行う。大溝の検出作業を始める。B 区東側部分の遺構確認。C 区ピットの検出作業。D 区南側部分にトレンチ設定。C 軽石混土層下水田跡を確認する。B 区中央部分の遺構確認を行う。**９日** D 区洪水層下水田の検出を行う。**13日** A 区航空測量を行う。D 区洪水層下水田跡の航空測量、実測を行う。E 区洪水層下水田の検出を行う。**14日** C 区方形周溝墓を確認したあと検出作業に取りかかる。D 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。E 区洪水層下水田跡の精査、清掃を行う。**15日** C 区土坑と方形周溝墓の検出作業を行う。土坑を完掘する。D 区噴砂の検出作業と C 軽石混土層下水田跡の表土除去。E 区洪水層下水田跡の実測と写真撮影を行う。**16日** E 区 C 軽石混土層下水田跡まで表土除去を行う。**21日** D 区噴砂の検出作業を終了し、写真撮影を行う。C 軽石混土層下水田跡の検出作業に取りかかる。E 区排水作業。**22日** C 区方形周溝墓の検出作業を行う。**23～29日** C 区方形周溝墓の調査を行う。D 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。C 区３・４号住居跡の検出作業を行う。C 区４号住居跡の検出作業を行う。C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。**29日** C 区方形周溝墓を完掘、写真撮影を行う。D 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業。**30日** A 区大溝の調査を終了し埋め戻しを行う。C 区方形周溝墓の実測を行う。

**８月３日**　A 区洪水層下の遺構確認を行う。E 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。**４日** C 区36、37号土坑の実測を行う。E 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。**５日** C 区４号住居跡の実測を行う。土坑の検出作業を行う。３号住居跡の写真撮影を行う。E 区 C 軽石混土層下水田跡の検出作業を行う。**６日** D 区 C 軽石混土層下水田跡の畦畔の確認を行う。**10日** B 区２号住居跡のカマドの検出作業を行う。E 区 C 軽石混土層下水田跡の畦畔の実測と写真を撮影する。D 区10号溝と C 軽石混土層下水田跡を完掘する。**11日** B 区洪水層面まで掘り下げて遺構確認を行う。１・７号住居跡の検出作業を行う。２号住居跡の完掘写真を撮影する。D 区 C 軽石混土層下水田跡の実測と写真撮影を行う。10号溝の写真撮影を行う。**12日** B 区１号住居跡の西壁とカマドの検出作業を行う。７号住居跡の検出作業を行う。C 区36、37号土坑の検出作業を行う。**17日** B 区８・９号住居跡の検出作業を行う。１号住居跡のカマドの検出作業を行う。C 区36、37号土坑の完掘写真を撮影する。**20日** B 区大溝の検出作業を行う。**21日** B 区大溝断面の精査を行う。**27～31日** B 区大溝の実測を行う。D 区南壁の断面を実測する。E 区調査区の埋め戻しを開始。

**9月1～5日**　B区大溝の断面実測を行う。D区南壁断面の実測を行う。C区ピットの実測を行う。D区6号住居跡の検出作業。**7日**D区埋め戻しを開始し終了する。ボックスハウス2棟をA区に移設する。**8日**D区6号住居跡の検出作業を行う。**9日**A区への引っ越し作業を行う。**11日**B区大溝の断面実測を行う。**14日**B区1号住居跡の検出。C区埋め戻しを開始する。**17日**B区大溝の実測。C区埋め戻しを終了する。**18日**B区大溝の実測。1号住居跡、16号土坑の実測と写真撮影。**25日**B区7・8・10号住居跡を検出後、実測。1号住居跡完掘。**29日**B区1・8・9号住居跡と1号掘立、10・11号溝の実測と完掘。その後写真撮影を行い全体図を作成する。**30日**B区全体図を作成。11号溝の実測。B区は3/4調査終了。

**10月1日**　B区残り1/4の表土除去を行い、遺構確認を行う。**6日**B区46・47号土坑、10・13号溝を完掘し、すべての遺構の検出作業を終了する。その後、実測、写真撮影。**7日**B区の調査を終了し埋め戻しを開始する。**8日**B区埋め戻し作業。

**平成11年**

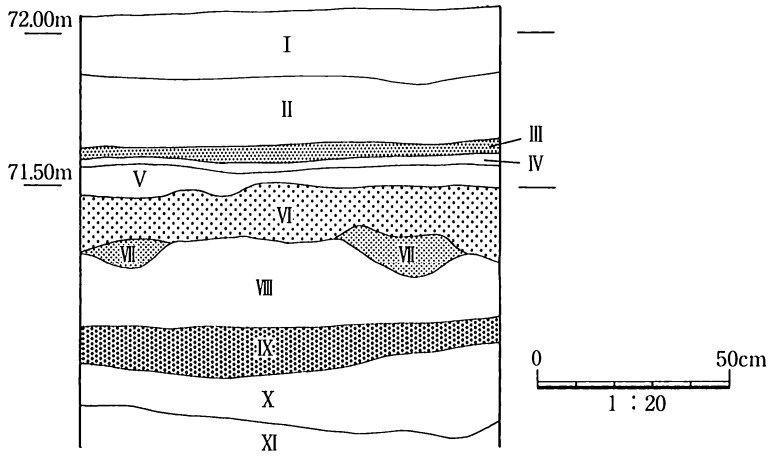
**1月5日**　G区発掘調査開始にあたり現場打ち合わせを行う。**11日**G区ボックスハウス、物置、トイレの設置。器材、資材の搬入。**12～18日**G区調査開始。1区C混土層下水田跡と4区B軽石混土層埋没の畠跡の表土除去。4区東西に走る大溝（W－15）を確認する。測量基準杭を設定する。**19日**G区1区C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。4区B軽石混土層埋没の畠跡の写真撮影と実測。**20日**G区4区B軽石混土層埋没の畠跡の写真撮影と実測。**21日**G区1区2号大溝を検出し完掘する。のち実測を行う。C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。4区B軽石混土層埋没の畠跡の実測。**22日**G区3区B軽石混土層埋没畠跡の表土除去作業。4区FA下水田跡の表土除去作業。**25日**G区1区C混土層下水田跡の畦畔の検出作業を行う。**26日**G区1区C混土層下水田跡の実測と写真撮影を行う。3区B軽石混土層埋没の畠跡を完掘後、実測、写真撮影。**27日**G区3区B軽石混土層埋没の畠跡の実測。FA下水田面まで表土除去を行う。**28日**G区1区調査を終了し、埋め戻し作業を行う。3区FA下水田跡の検出作業を行い、終了する。4区1号溝（各トレンチ）の実測と写真撮影を行う。**29日**G区3区FA下水田跡の実測。C混土層上面水田面まで表土除去。4区FA下水田跡の検出作業を行う。1号溝（各トレンチ）の実測と写真撮影を行う。

**2月1日**　G区3区C混土層上面水田跡の検出作業を行う。4区FA下水田跡完掘。1号溝（各トレンチ）の実測と写真撮影を行う。**2日**G区3区C混土層上面水田跡の検出作業。4区FA下水田跡の全景写真撮影。**3日**G区3区C混土層上面水田跡完掘。全景写真撮影を行う。1号溝（F、Gトレンチ）の実測と写真撮影を行う。**4日**G区現場作業中止。3区C混土層上面水田跡の平面測量を行う。4区FA下水田跡の平面測量を行う。**5日**G区3区、4区C混土層下水田跡の表土除去を行う。**6日～9日**G区3区C混土層下水田跡の表土除去を行う。**10日**G区3区C混土層下水田跡の検出作業を行う。**12日**G区3区C混土層下水田跡の検出作業と全景写真の撮影を行う。**13日**G区3区C混土層下水田跡平面測量を行う。**14日**G区2区C混土層下水田面まで表土除去を行う。**15日**G区2区C混土層下水田跡を完掘する。4区C混土層下水田跡の検出作業を行う。**16～22日**G区2区C混土層下水田跡の全景写真撮影。4区C混土層下水田跡の検出作業。**24日**ボックスハウス、物置、トイレの撤収を行う。**26～28日**全調査区の埋め戻しを行い全調査を終了する。

## 第３章　標準堆積土層

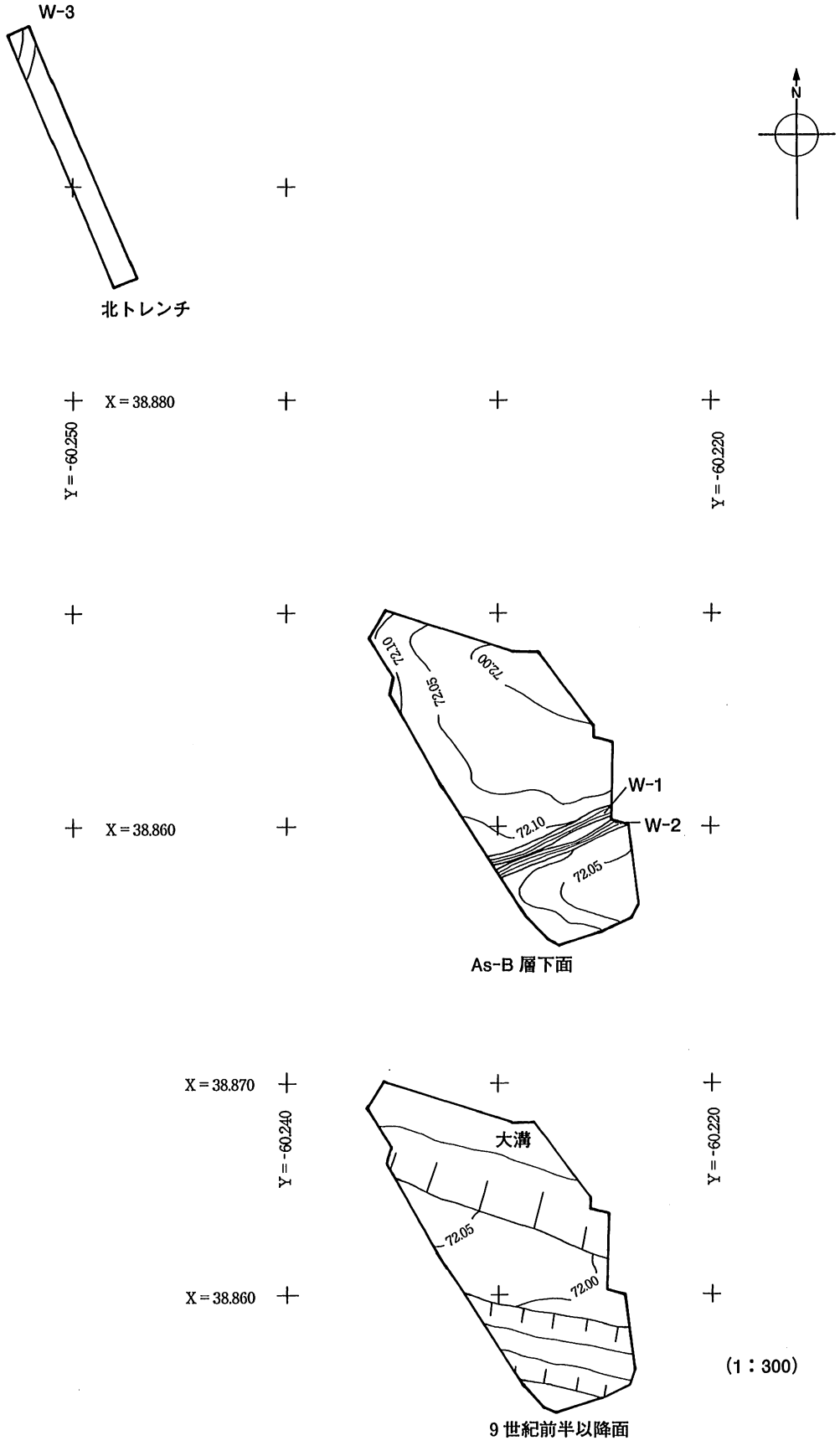
本遺跡の調査によって検出された遺構・遺物は、中・近世、平安時代末期、平安時代前期、古墳時代、弥生時代、縄文時代に分けられる。これら資料は上位より浅間Ｂ軽石（As-B）の純層、九世紀前半の洪水層、榛名二ッ岳ＦＡ（Hr-FA）層、浅間Ｃ軽石（As-C）混土層の４枚の鍵になる層によって区分されている。調査に於てはこれらの鍵層に従って掘り下げを進めたが、一部の区域においては層厚が薄くて明瞭に確認できなかったり、後世の撹乱により取り除かれた部分もあった。Ｂ区北側道では As-B 軽石下面で遺構確認を開始したが、Ｂ軽石上面に中世の遺構が存在した事が確認できている。また、Ｃ区南側道では浅間Ｂ軽石層および９世紀前半の洪水層共に明瞭な堆積がなく、第１確認面で中世から古墳時代にわたる遺構が検出されている。

以下、本遺跡における標準堆積土層についてＥ区北側道南壁で観察された層順をもって概略する。




**第45図　標準堆積土層**

Ⅰ層　黒褐色土層　　耕作土。
Ⅱ層　黒褐色土層　　As-B 軽石混土層。
Ⅲ層　暗灰黄色軽石層　As-B 軽石純層。
Ⅳ層　黒褐色土層　　鉄分を含む。粘性あり。
Ⅴ層　茶褐色土層　　軽石を若干含む。粘性あり。
Ⅵ層　明灰褐色砂質層　酸化鉄の沈澱がある。しまりあり。９世紀前半洪水層。
Ⅶ層　黄色層　　Hr-FA 層。
Ⅷ層　黒褐色土層　　Hr-FA 下水田　粘性あり。
Ⅸ層　黒色土層　　As-C 軽石混土層　As-C 軽石を多量に含む。
Ⅹ層　黒色土層　　As-C 軽石混土層下水田　粘性あり。
Ⅺ層　灰褐色粘土質層




第46図　A 区北側道全体図

# 第４章　遺構と遺物

## 第１節　Ａ区北側道

### 第１項　概要

本調査区は荒砥川の左岸に位置する。確認された文化層は２面であり、第１面は浅間Ｂ軽石層下面、第２面は９世紀前半に生じたとされる洪水層下面である。２面とも水田跡は検出されず、第１面においては北東へのびる溝３条が検出され、第２面では、比較的大規模な溝２条を検出した。走向は南東方向である。このうち１条については過去の周辺の調査において検出されていたものであるが、今回の調査地区においても連続する事が確認できた。なお、本地区においては、いずれの遺構からも出土遺物はなかった。

## 第２節　Ｂ区北側道

### 第１項　概要

本調査区において確認された文化層は３面である。

第１面は、浅間Ｂ軽石層下（第47図中）である。同層直下からは３条(14･15･16号)の溝が検出されている。なお、浅間Ｂ軽石層下の調査途中で、明確な文化層としては捉えられなかったものの、中世以降と考えられる土坑群を検出している（第47図上)。また、同様に水田跡の下面より、同層を掘り込む９～11世紀代の集落跡を検出した（第47図下)。さらに、この面を掘り下げて調査を進めたところ、新たな遺構を検出した。この結果をふまえた上で、最下層において検出された遺構の一部は弘仁九年（818）の地震に伴うとされる噴砂にきられていたため、この面を「９世紀前半以前面」とし、その上層にあたる面を「９世紀前半以降 As-B 降下以前面」とする。(第54図)

As-C混層は一部において確認されたものの面的な広がりは見られない。さらに、シルト上面においても遺構は確認されていない。

### 第２項　中世面

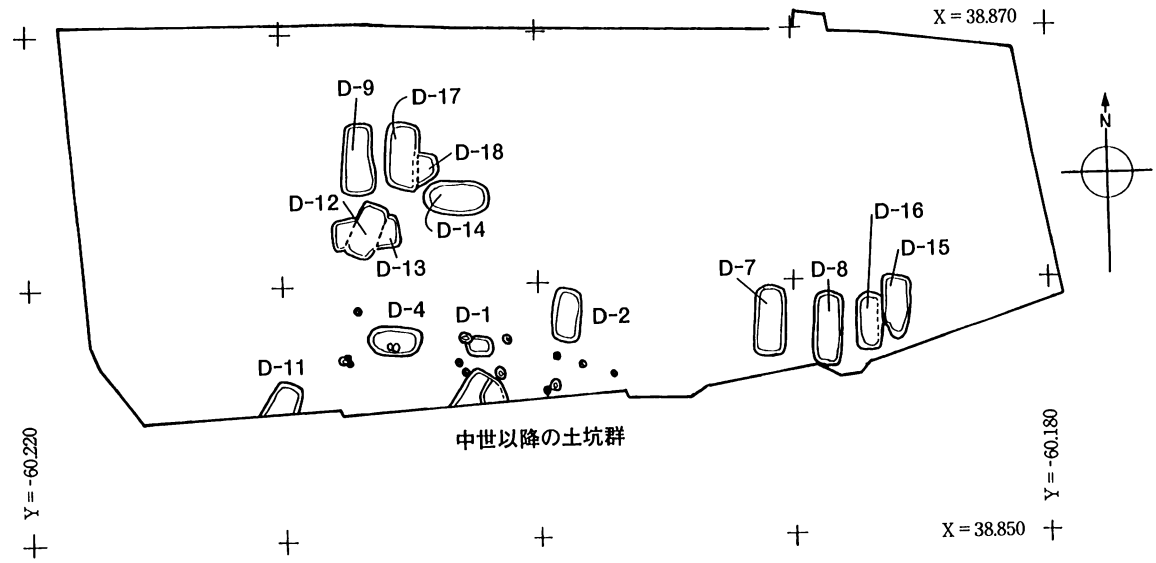
覆土および出土遺物より中世以降と判断された土坑は15基・小ピット15基を数える。そのうち土坑12基の形状はいずれも隅丸方形状を呈し、長径２～３m、短径１m 前後であり、配置状況には一定の方向性が認められる。この事より、墓壙としての性格も想定されたが、骨片や副葬品等の出土遺物はなく、その機能面については明確にできなかった。

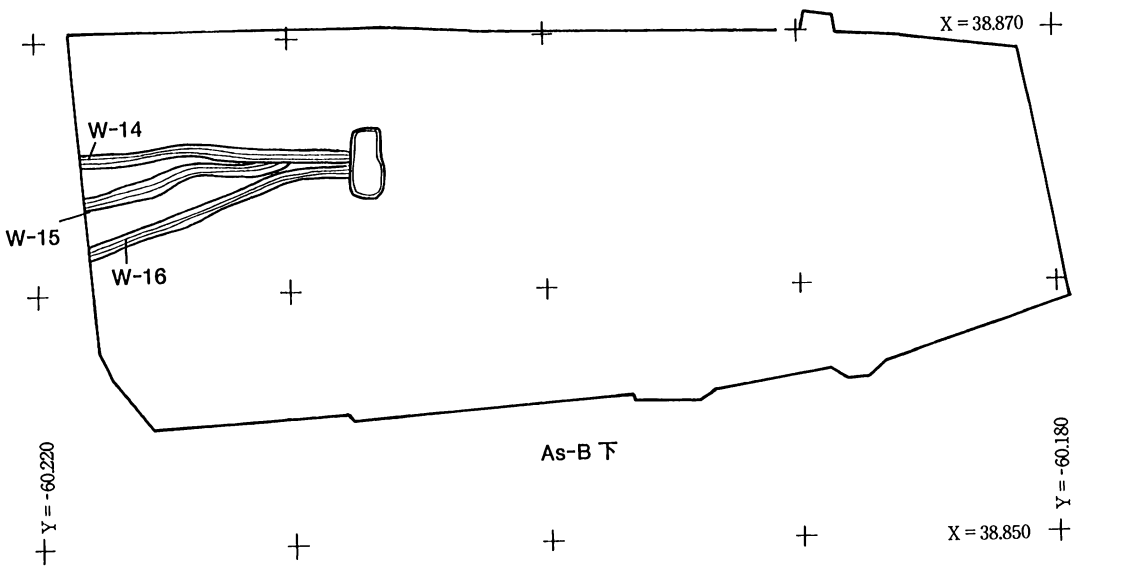
以下に、中世の土坑について特徴的な９号土坑を取り上げ、その形状を概略しておく。

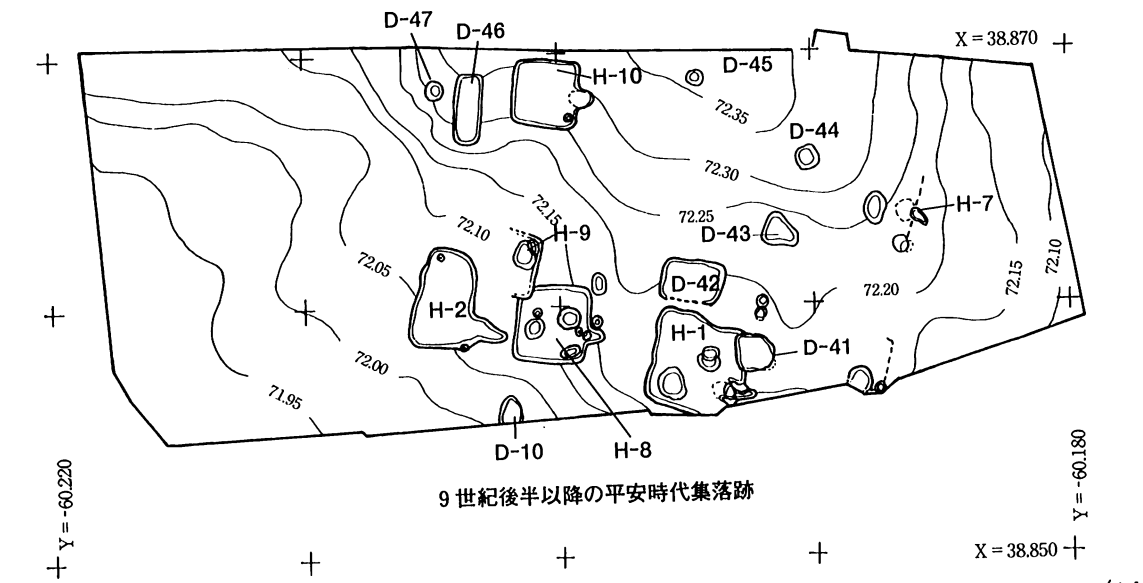
検出されたのはX=38,860、Y=-60,200である。主軸はほぼ真北にとる。平面形は隅丸方形、断面形は箱形を呈する。規模は長軸2.8m、短軸1.2m、確認面下の掘り込みは58cm を測る。重複では14～16号溝を切る。遺物は検出されていないが、埋没土上層に浅間Ｂ軽石混土層が確認されたため、12世紀以降と考えられる。

### 第３項　浅間Ｂ軽石(As-B)下面

検出された遺構は溝３条で、９号土坑(中世)により切られる。またＡ区で２条の溝(1･2号)が検出されているが、走向方向から本遺構と同一遺構と判断される。２条の溝が本区で３条に分かれる点は現道路部分下での分岐が想定される。覆土中には As-B のほぼ純層が堆積しており、降下時に存在したものであろう。出土遺物はない。




(1：300)

第47図　B 区北側道全体図 (1)

### 第４項　９世紀前半以降 As-B 降下以前面の集落

９～11世紀代の集落跡では竪穴住居跡６軒、土坑９基を検出している。層位的には浅間Ｂ軽石の除去後に確認されたもので、９世紀前半に発生した砂脈（噴砂痕）および浅間Ｃ軽石(As-C)を混入する灰黄褐色土層を掘り込んで構築されている。

#### 住居跡

竪穴住居跡は６軒検出した。時期は出土遺物より９世紀後半から11世紀にわたるものと判断され、形状は長方形、方形を呈する。カマドの構築の方角は未確認のものを除き、すべて東カマドである。なお、１号住居跡は11号溝を、８号住居跡は10号溝を切る形でカマドが構築されていることが調査によって確認されている。以下に住居跡の概要について一覧表にまとめる。

**表９　Ｂ区北側道住居跡一覧**

| 遺構番号 | 検出位置 | | 規模（m） | | 主軸 | カマド | 重　　複 | 出土遺物 | 時　期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | Ｘ軸 | Ｙ軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | |
| １号住居 | 38,850 | -60,190 | 4.3 | 3.8 | N110°E | 東壁南寄り | 11号溝跡より新<br>41号土坑より新 | 土師器皿・坏・甕、須恵器皿・坏・甕<br>灰釉陶器、転用硯(須恵器坏) | 10世紀後半～11世紀代 |
| ２号住居 | 38,850 | -60,200 | 4.0 | 3.8 | N102°E | 東壁南寄り | なし | 土師器坏、須恵器羽釜、灰釉陶器埦 | ９世紀後半～10世紀前半 |
| ７号住居 | 38,860 | -60,180 | －－ | －－ | －－ | － | １・２号掘立より新 | 土師器及び須恵器羽釜・坏、<br>灰釉陶器埦・皿 | ９世紀後半～10世紀前半 |
| ８号住居 | 38,850 | -60,200 | 3.5 | 3.0 | N92°E | 東壁中央 | 10号溝より新 | 土師器坏、灰釉陶器埦・瓶 | ９世紀後半～10世紀前半 |
| ９号住居 | 38,860 | -60,200 | －－ | －－ | －－ | － | なし | 土師器甕・坏・羽釜 | 10世紀後半～11世紀代 |
| 10号住居 | 38,860 | -60,200 | 3.0 | 2.5 | N93°E | 東壁中央 | なし | 土師器甕、須恵器坏片 | ９世紀後半～10世紀前半 |

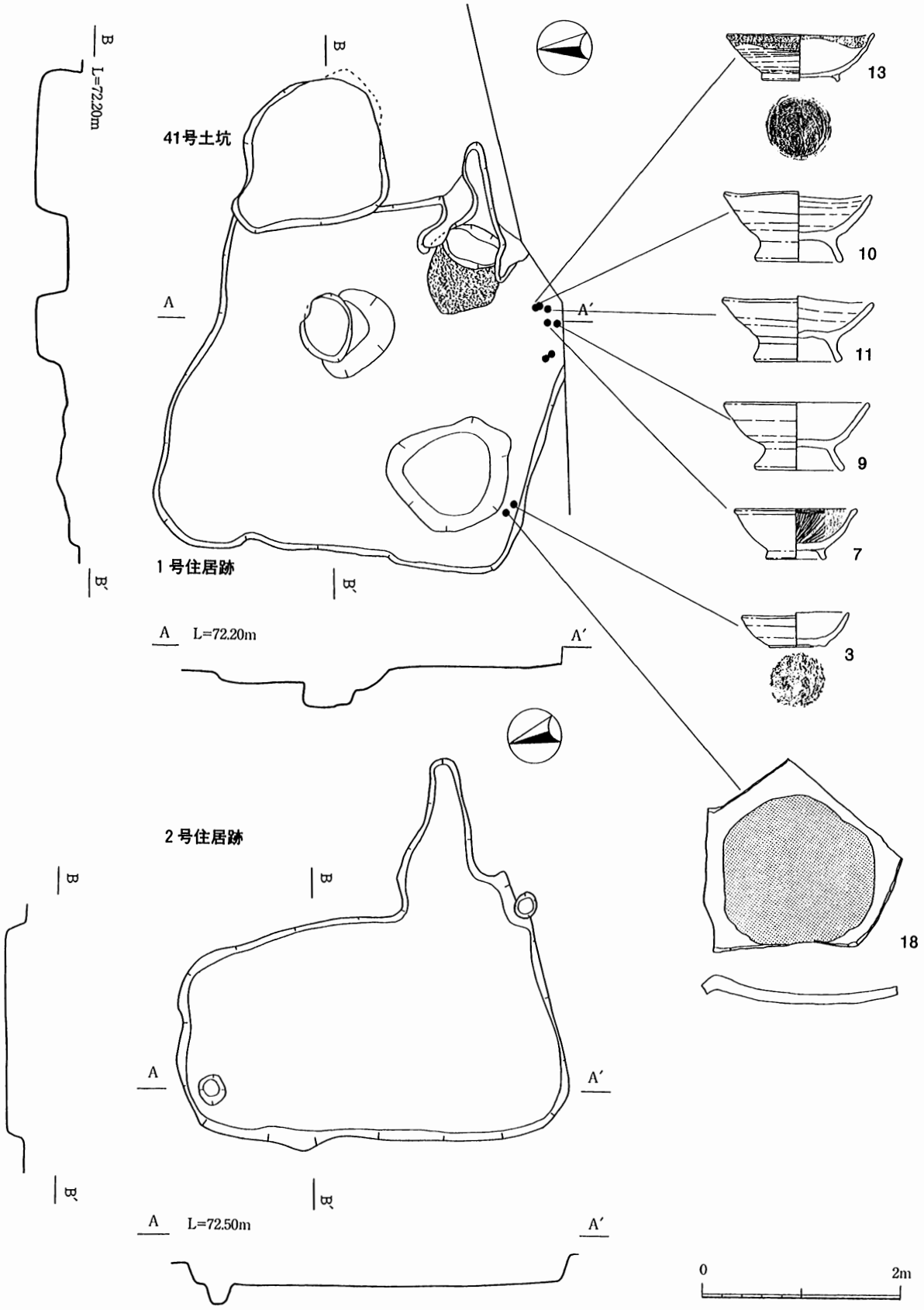
#### 土坑

９基の土坑が検出されている。調査区の中央付近に集中する傾向がある。平面形状的には不整円形を呈する15･41･43･44号、方形を呈する42号、楕円形もしくは円形を呈する1･4･11･45･47号に分けられる。いずれにも覆土中に浅間Ｃ軽石の混入が認められるものの、同Ｂ軽石は含まれていない。規模および形状的にも多様で性格は不明である。掲載遺物には41号土坑出土の須恵器坏１点がある。遺物より遺構の時期は９世紀後半～10世紀前半が想定される。

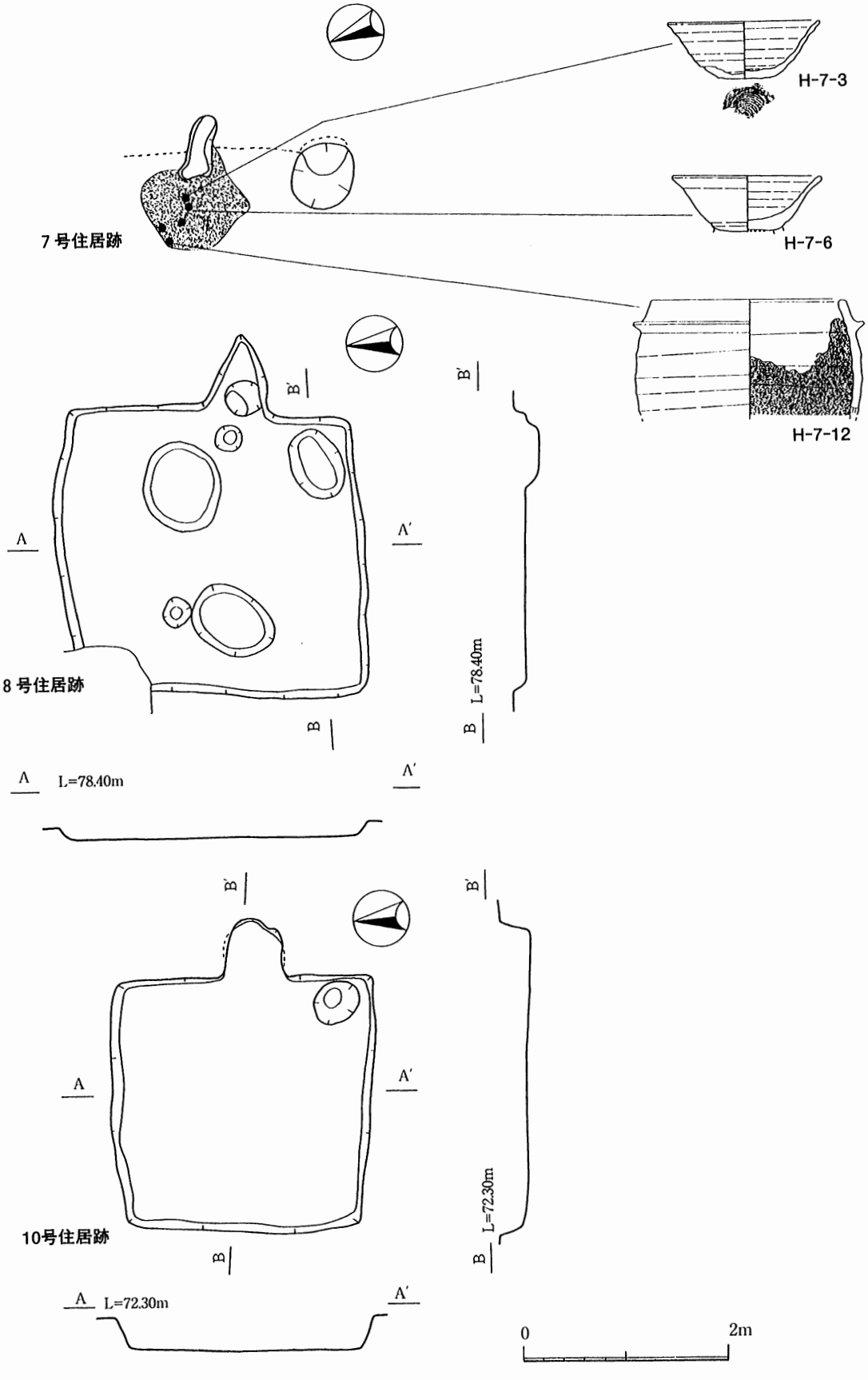
各土坑の詳細については割愛する。

### 第５項　９世紀前半以前面

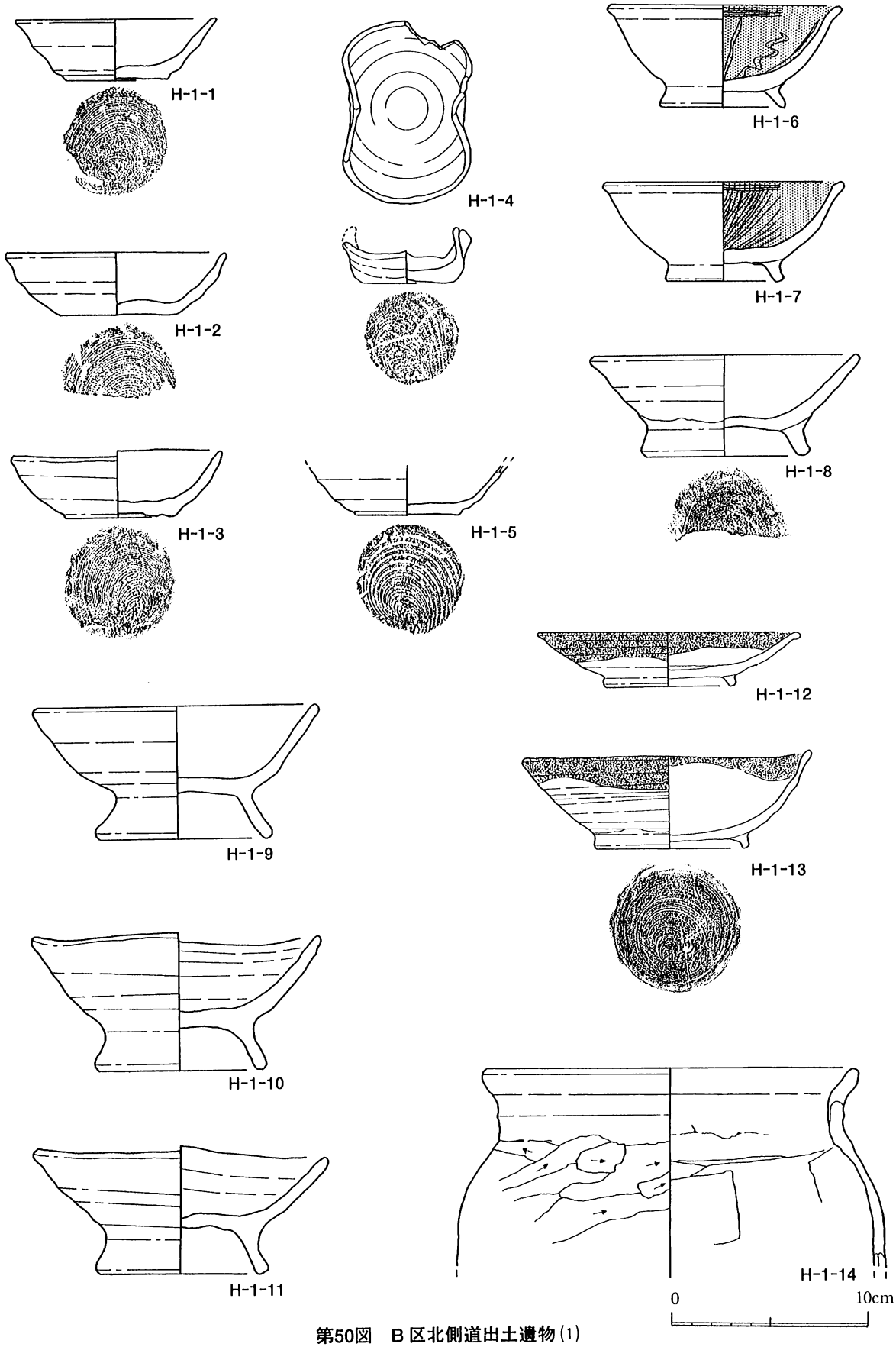
９世紀前半以前面において掘立柱建物跡２棟、溝４条（道路状遺構１条を含む）を検出した。このうち、10号溝と11号溝にはさまれた部分は、道路状遺構と考えられる。走向はほぼ真北方向である。掘立柱建物跡は道路状遺構と平行する形で検出されており、二つの遺構は同時期に営まれ、かつ何らかの関連性をもって機能していたと考えられる。さらに、この建物跡の柱穴覆土には弘仁九年の地震に伴う砂脈（噴砂痕）が確認されており、９世紀前半以前の遺構と判断された。



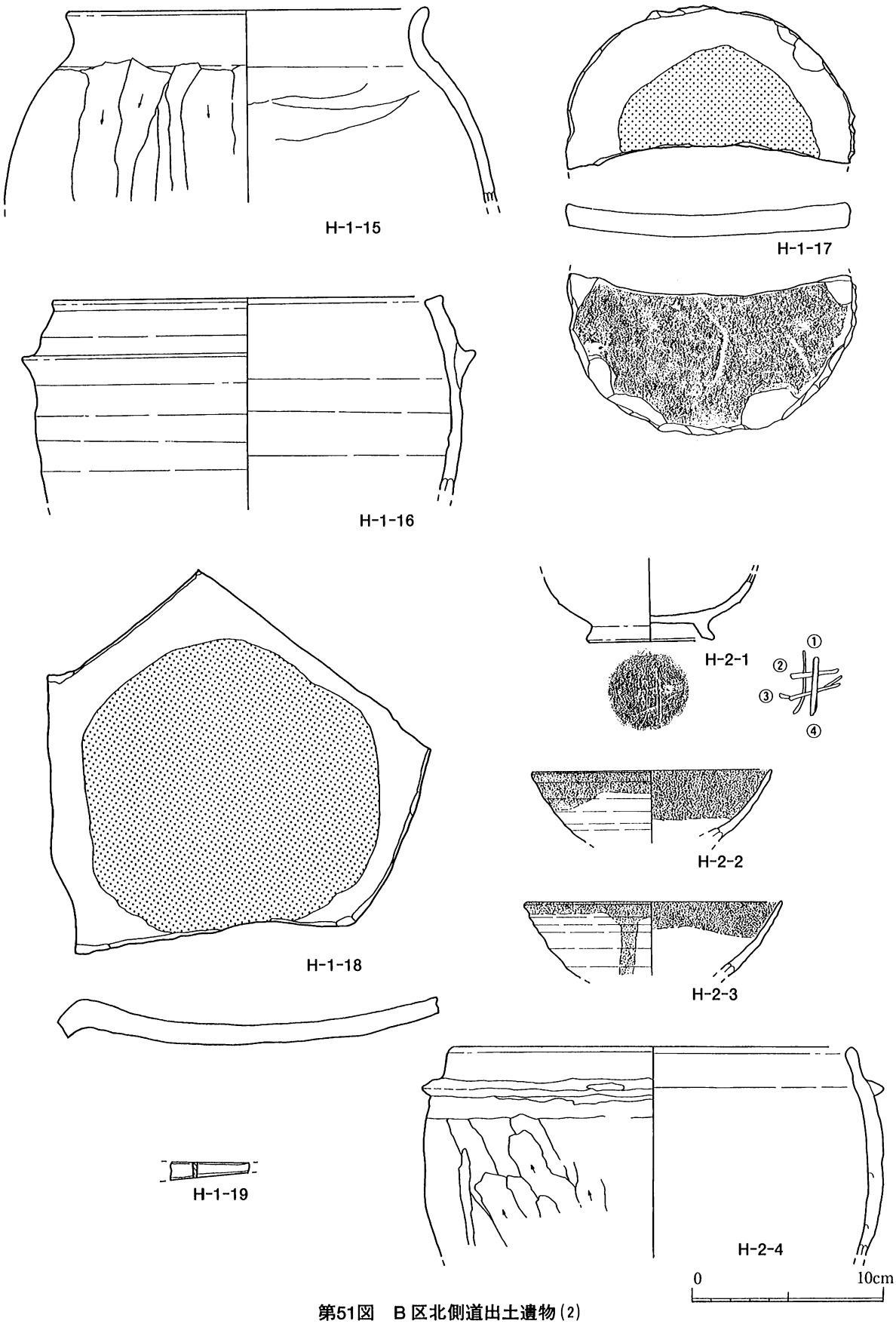

第48図　B区北側道1・2号住居跡、41号土坑



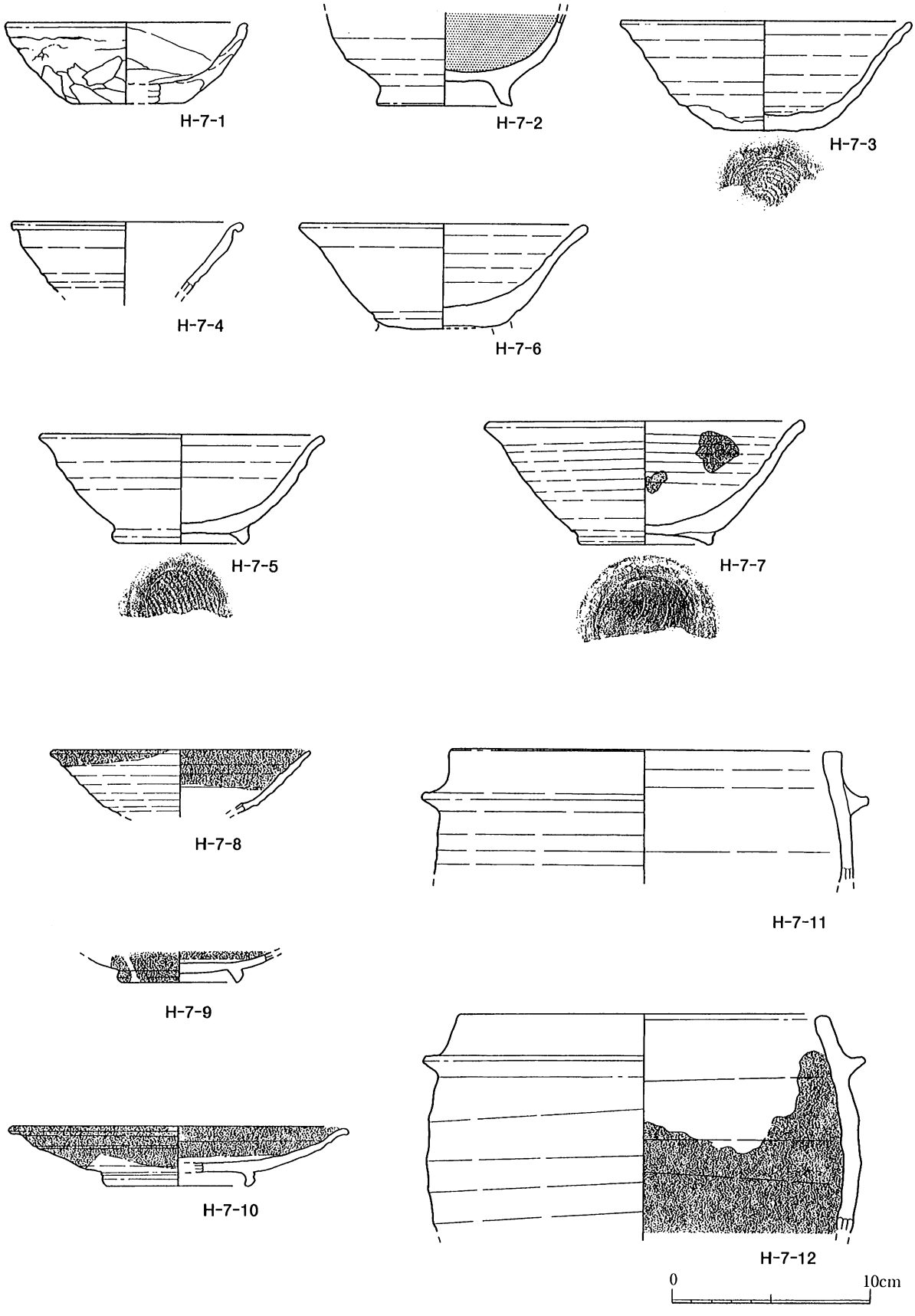

第49図　B区北側道7・8・10号住居跡



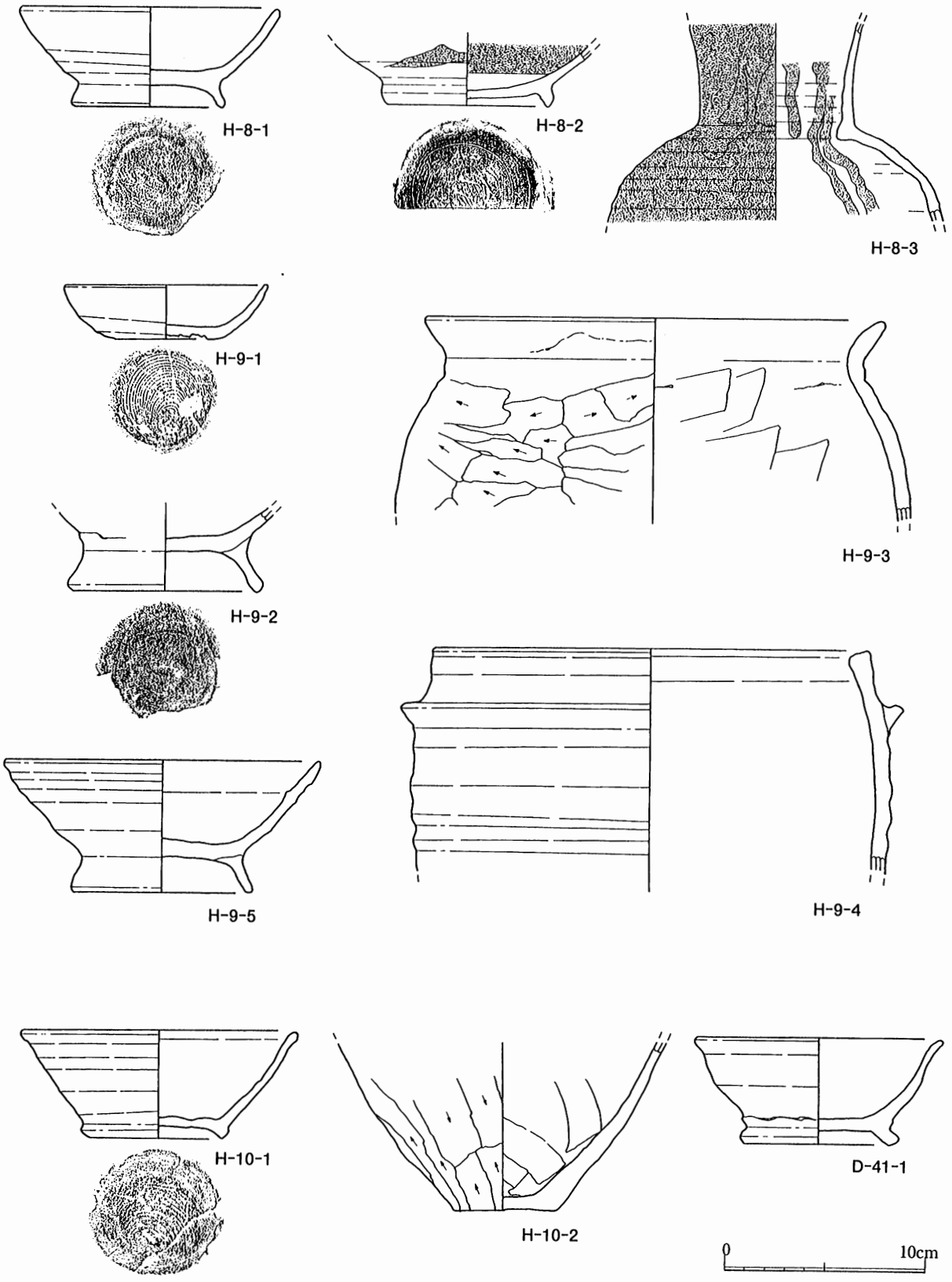

第50図　B 区北側道出土遺物(1)



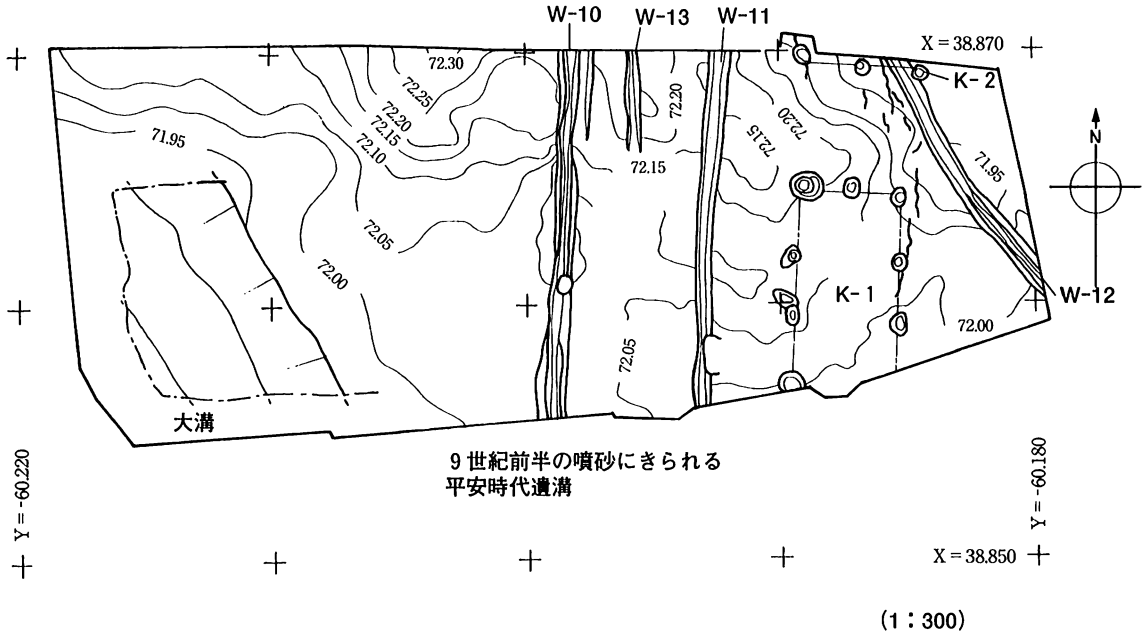

第51図　B区北側道出土遺物(2)




第52図　B 区北側道出土遺物 (3)




第53図　B区北側道出土遺物(4)




第54図　B区北側道全体図(2)

また、調査区西側においては大溝を検出した。

**1号掘立柱建物跡**

X=38,860、Y=-60,190で検出されている。主軸はほぼ真北で、規模は3間×2間、桁行7.8m、梁行4.0mを測る。柱穴の距離は2.4～2.8m、柱穴の長径は約0.6～0.8mで、最大では1.2mを測る。柱痕は確認できなかった。確認面よりの深さ約0.5m～0.7mを測る。遺物は検出されていないが、弘仁九年（818年）の地震による砂脈との関係より、9世紀前半以前の所産と考えられる。

**2号掘立柱建物跡**

X=38,860、Y=-60,180で検出されている。3基の柱穴の配列より想定したものであるが、その方向は1号掘立柱建物跡と一致している。規模は東西方向が2間幅で、2.0mの等間である。各柱穴の径は0.6～0.8m、確認面下の掘り込みの深さは0.4～0.5mを測る。

**10号溝・11号溝（道路状遺構）**

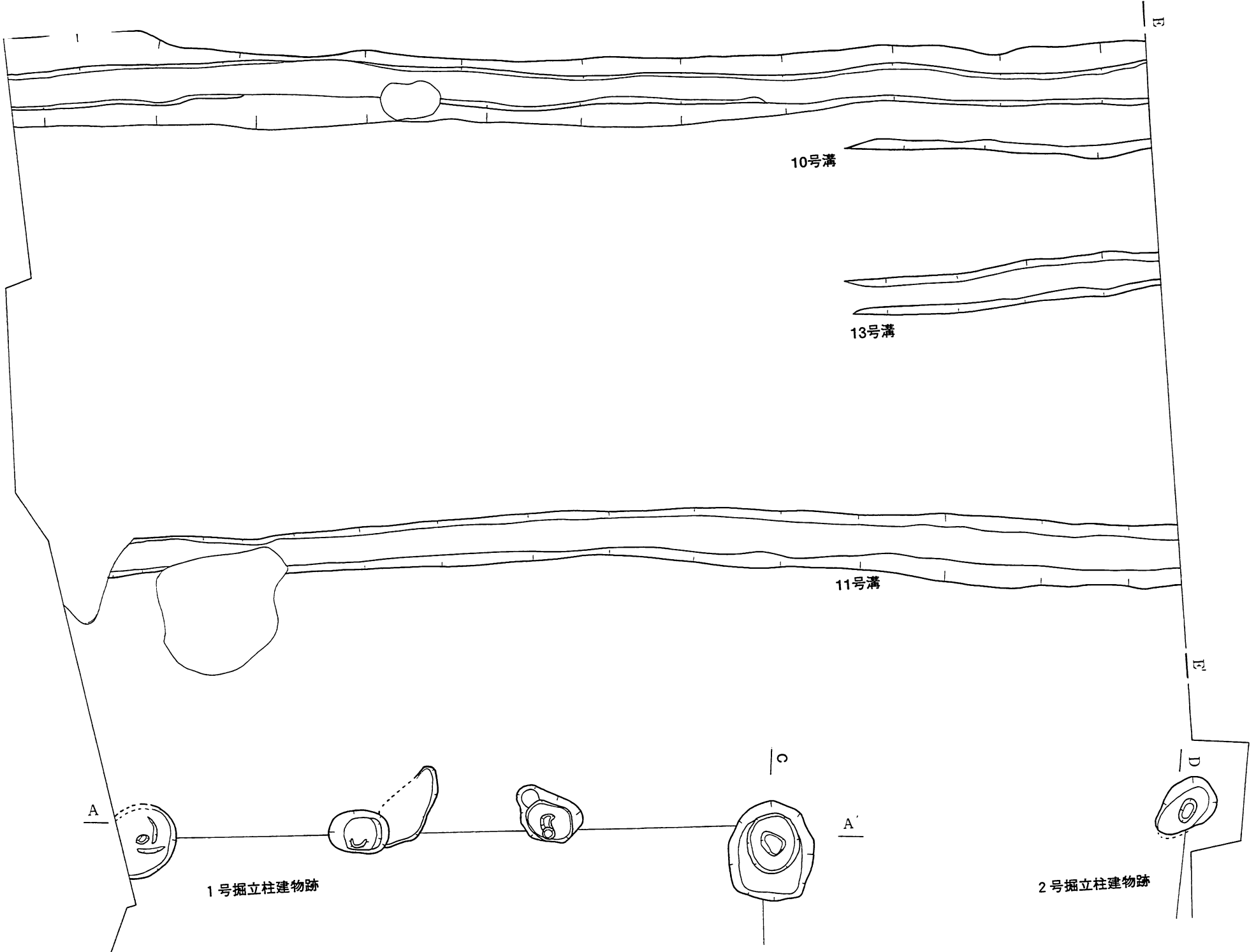
10・11号は共にX=38,850～38,860、Y=-60,190において検出されている。2本の溝の走向は平行で、ほぼ真北から真南を指向する。検出長は共に約14mに渡り、調査区を南北に横断して調査区域の外へと延びている。両側溝の断面形状は浅いU字状で、北側壁で観察される断面では、西側の溝に2回以上の改修が観察されるものの、東側では観察されない。心々間の距離は凡そ6mを測る。

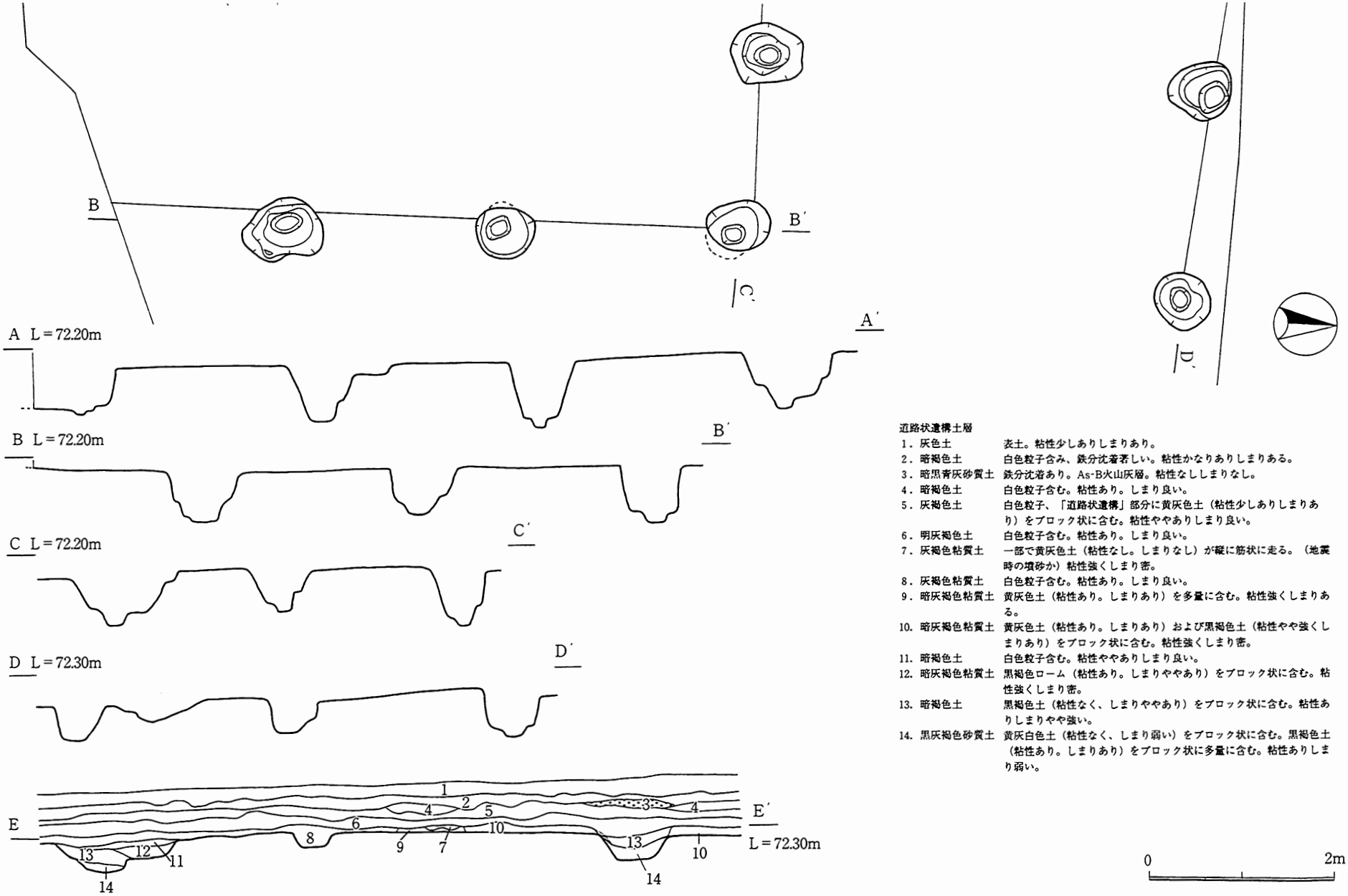
検出された状況より、この2条の溝は道路状遺構と想定された。路面にあたる両溝の間には平坦面が広がるが、同面に轍等の硬化面は検出されていない。

両溝からの出土遺物はないが、東側の側溝（11号溝）が1号住居跡に切られ、また西側の側溝が（10号溝）が8号住居跡に切られる点、さらに、道路面において確認される砂脈（噴砂痕）との関係より本遺構は9世紀前半以前の構築と判断され、9世紀前半に発生したとされる洪水によってその機能を完全に停止したものと想定できる。

**大溝**

本遺構は調査区域の西端部で検出されている。A区の東側において検出された大溝と形状および覆土の堆


E
10号溝
13号溝
11号溝
E'
C
D
A
A'
1号掘立柱建物跡
2号掘立柱建物跡




道路状遺構土層

1．灰色土　表土。粘性少しありしまりあり。
2．暗褐色土　白色粒子含み、鉄分沈着著しい。粘性かなりありしまりある。
3．暗黒青灰砂質土　鉄分沈着あり。As-B火山灰層。粘性なししまりなし。
4．暗褐色土　白色粒子含む。粘性あり。しまり良い。
5．灰褐色土　白色粒子、「道路状遺構」部分に黄灰色土（粘性少しありしまりあり）をブロック状に含む。粘性ややありしまり良い。
6．明灰褐色土　白色粒子含む。粘性あり。しまり良い。
7．灰褐色粘質土　一部で黄灰色土（粘性なし。しまりなし）が縦に筋状に走る。（地震時の墳砂か）粘性強くしまり密。
8．灰褐色粘質土　白色粒子含む。粘性あり。しまり良い。
9．暗灰褐色粘質土　黄灰色土（粘性あり。しまりあり）を多量に含む。粘性強くしまりある。
10．暗灰褐色粘質土　黄灰色土（粘性あり。しまりあり）および黒褐色土（粘性やや強くしまりあり）をブロック状に含む。粘性強くしまり密。
11．暗褐色土　白色粒子含む。粘性ややありしまり良い。
12．暗灰褐色粘質土　黒褐色ローム（粘性あり。しまりややあり）をブロック状に含む。粘性強くしまり密。
13．暗褐色土　黒褐色土（粘性なく、しまりややあり）をブロック状に含む。粘性ありしまりやや強い。
14．黒灰褐色砂質土　黄灰白色土（粘性なく、しまり弱い）をブロック状に含む。黒褐色土（粘性あり。しまりあり）をブロック状に多量に含む。粘性ありしまり弱い。

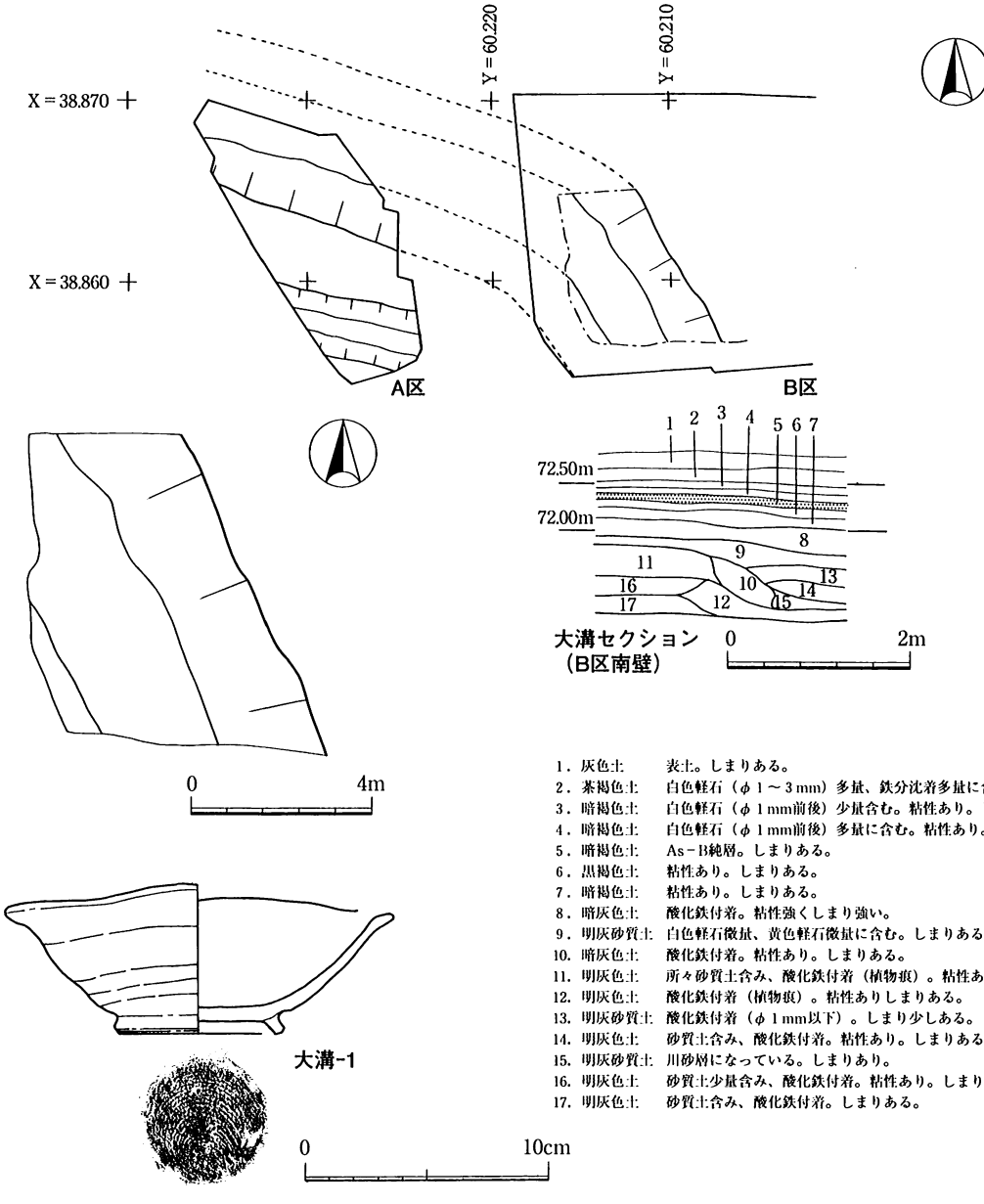
0　2m

第55図　B区北側道１・２号掘立柱建物跡、10・11・13号溝　折図11

積状況より同一の遺構と判断される。部分的な調査ではあったが、その走向方向は北西から南東方向で大きく蛇行するものと想定される。幅は推定で８ｍ、深さは1.25ｍを測る。

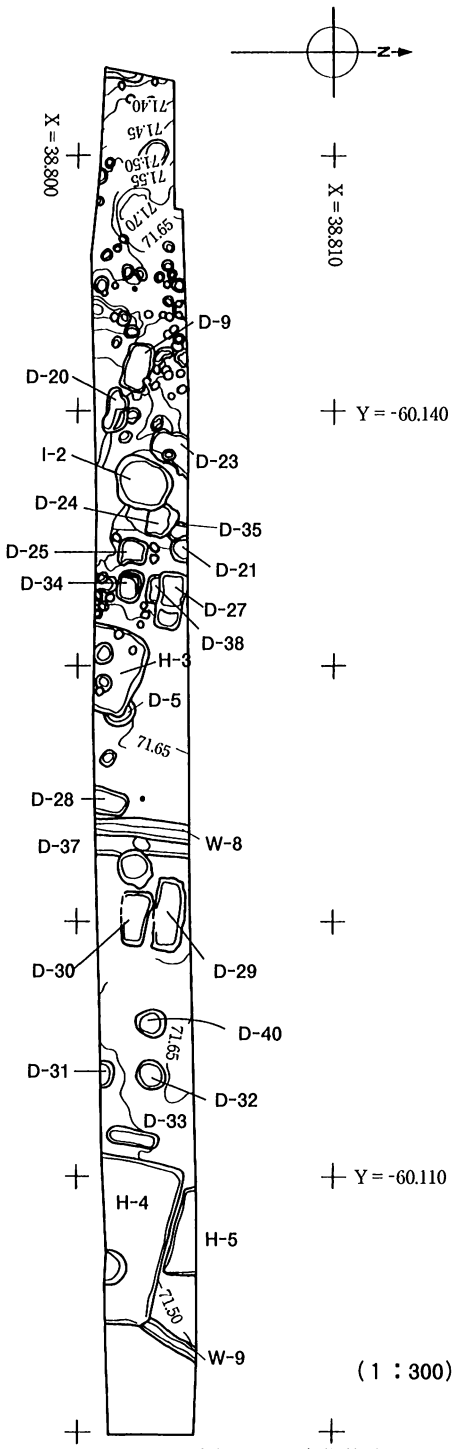
溝は浅間Ｃ軽石を混入する褐色粘質土層面を切って構築され、最終的に９世紀前半以降に埋没したと考えられるもので、その埋没状況は自然堆積が考えられる。

出土遺物には９世紀後半の須恵器坏の完形品が溝最下層付近にて出土している。




1．灰色土　表土。しまりある。
2．茶褐色土　白色軽石（φ１～３mm）多量、鉄分沈着多量に含む。しまりある。
3．暗褐色土　白色軽石（φ１mm前後）少量含む。粘性あり。しまりある。
4．暗褐色土　白色軽石（φ１mm前後）多量に含む。粘性あり。しまりある。
5．暗褐色土　As－B純層。しまりある。
6．黒褐色土　粘性あり。しまりある。
7．暗褐色土　粘性あり。しまりある。
8．暗灰色土　酸化鉄付着。粘性強くしまり強い。
9．明灰砂質土　白色軽石微量、黄色軽石微量に含む。しまりある。
10．暗灰色土　酸化鉄付着。粘性あり。しまりある。
11．明灰色土　所々砂質土含み、酸化鉄付着（植物痕）。粘性あり。しまりある。
12．明灰色土　酸化鉄付着（植物痕）。粘性ありしまりある。
13．明灰砂質土　酸化鉄付着（φ１mm以下）。しまり少しある。
14．明灰色土　砂質土含み、酸化鉄付着。粘性あり。しまりある。
15．明灰砂質土　川砂層になっている。しまりあり。
16．明灰色土　砂質土少量含み、酸化鉄付着。粘性あり。しまりある。
17．明灰色土　砂質土含み、酸化鉄付着。しまりある。

**第56図　Ｂ区北側道大溝・同出土遺物**




9世紀代後半の平安集落跡
第57図　C区南側道全体図(1)

## 第3節　C区南側道

### 第1項　概要

本調査区においては、他の調査区同様、鍵層となる浅間B軽石層および9世紀前半の洪水層の確認を念頭におきながら調査をすすめていたが、浅間B軽石、洪水層の2つの鍵層は何らかの原因でその堆積を確認することができなかった。

遺構はこれらの鍵層を検出する目的で徐々に掘り下げを進める段階で、標準堆積土層Ⅸ層前後で第1面が確認されている。検出された遺構・遺物はその特徴より9世紀後半代より中世にわたる集落と確認された。第1面の調査終了後、さらに確認面を掘り下げた結果、シルト層上面において方形周溝墓を確認するに至り、同面を第2面として調査を実施した。

### 第2項　9世紀代～中世

検出した遺構は、集落跡確認面で住居跡3軒、土坑21基、井戸跡2基、溝状遺構2条、ピット多数である。各遺構別の分布状況は調査範囲の制約のため明瞭ではないが、西寄りに偏在する傾向がある。

#### 井戸跡

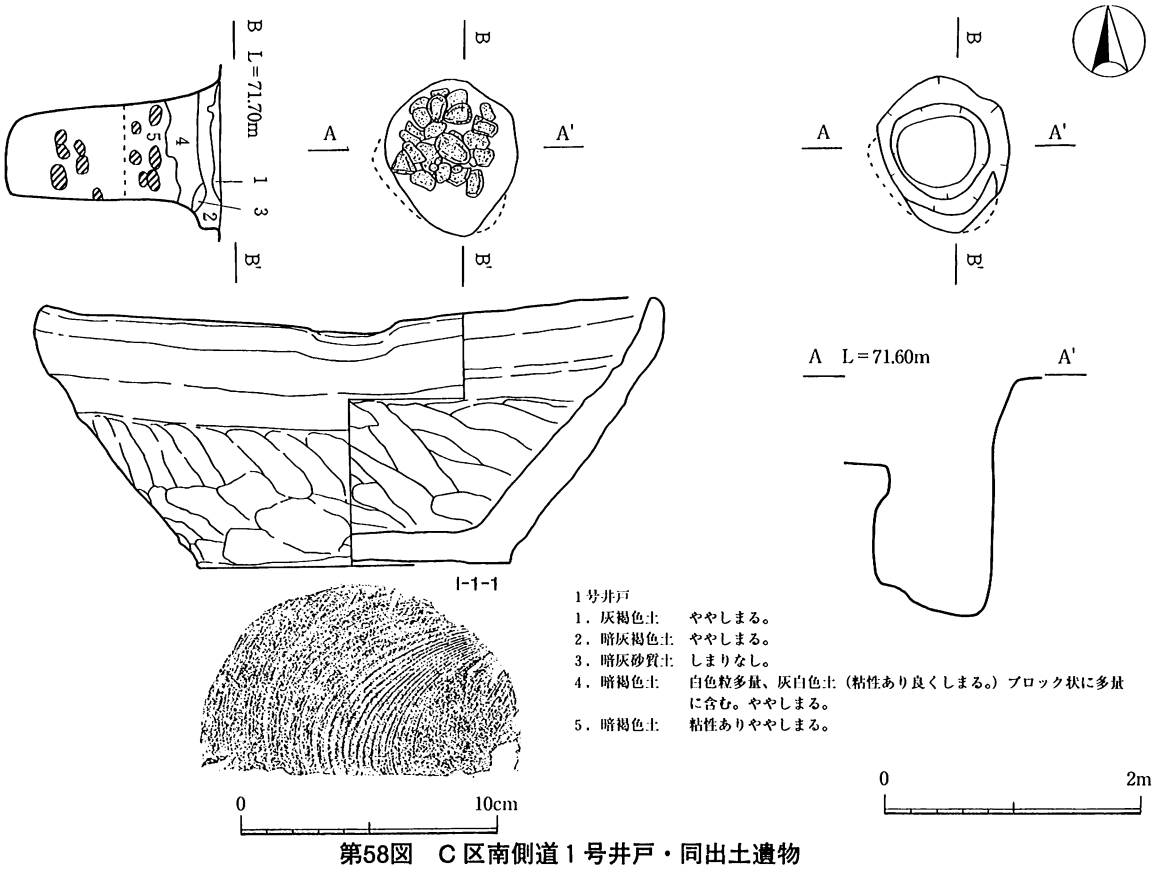
中世の遺構と判断されたものに2基の井戸がある。1号井戸は調査区の西端部に、また、2号井戸（36号土坑）は中央やや西寄りで検出されている。

#### 1号井戸跡

本遺構はX=38,800、Y=-60,140で検出された。形状は平面形は不整円形、断面形は円筒状を呈する。規模は長径1.2m、確認面下の深さは約1.8mを測る。覆土は上層で自然堆積を示しているが、確認面下約70cmの深さにおいて、約20～30cmの円礫が大量に出土しており、人為的な埋め戻しが行われた可能性が高い。埋没状況から判断して、石組みの井戸とは考えられない。本遺構の下層より方形周溝墓が検出されており、本遺構よりも古い。出土遺物には14世紀以降の須恵質の鉢1点が出土している。

#### 2号井戸跡

本遺構はX=38,800、Y=-60,130において検出された。形状は平面形は円形で断面形は円筒状を呈する。規模は長径2.0m、確認面下の深さは約1.4mを測る。1号井戸同様に覆土は自然堆積で、確認面下約0.3mの深さにおいて、約20～30cmの円礫が大量に出土しており、人為的な埋め戻しが行われている。9世紀後半の遺物を出土した24号土坑と重複するものであるが、本遺構からの出土遺物はなく新旧関係は捉えられていない。形状および埋没状況より判断して、1号井戸同様に中世の所産と判断した。




**第58図　C区南側道1号井戸・同出土遺物**

### 住居跡

3軒の住居跡が検出されている。遺構はその他のものが西側に偏在する傾向にあるものの、住居跡は東側よりで検出されている。各住居跡の概要は以下の一覧表にまとめた

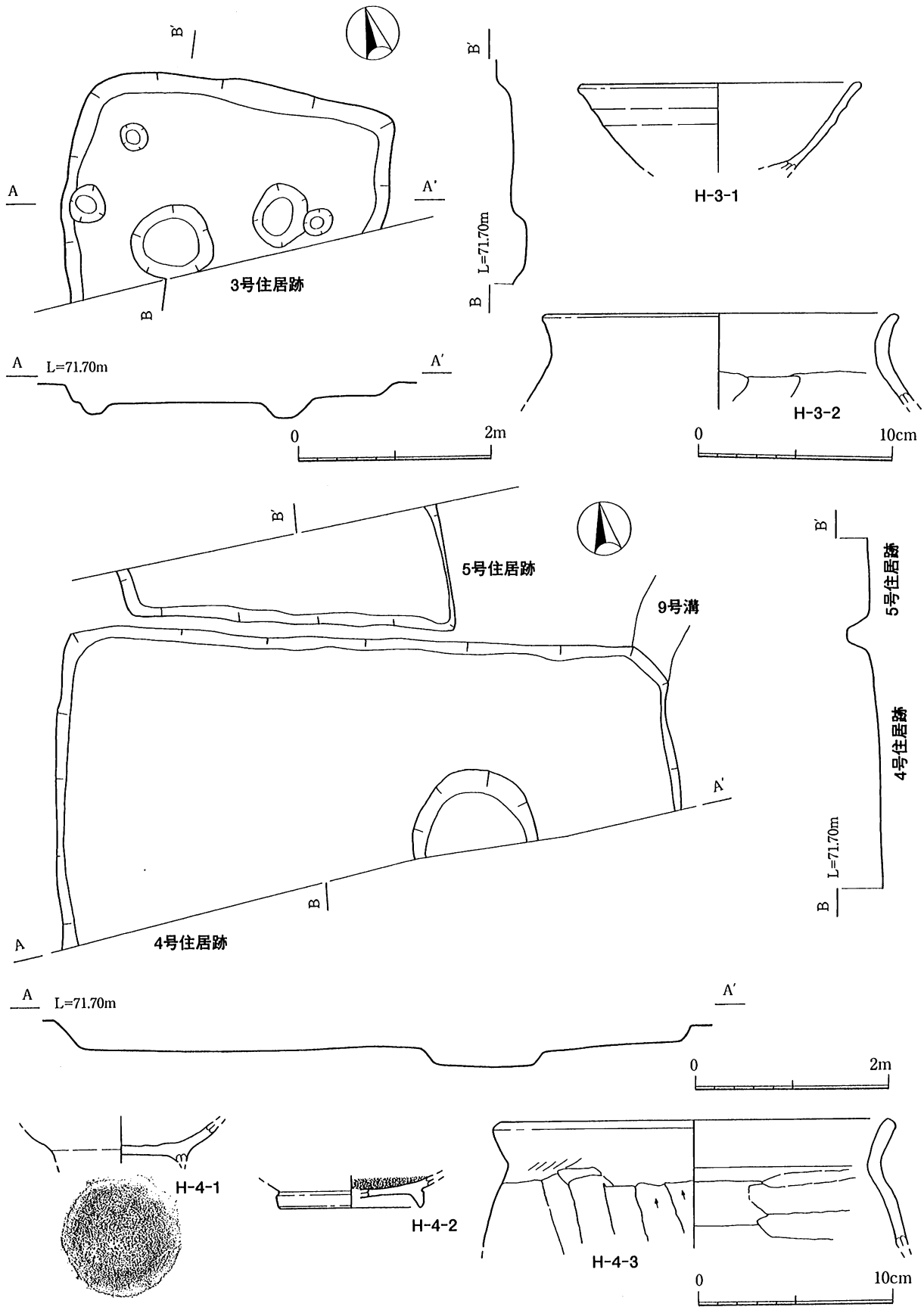
**表10　C区南側道住居跡一覧**

| 遺構番号 | 検出位置 | | 規模（m） | | 長軸 | カマド | 重　複 | 出土遺物 | 時　期 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | X軸 | Y軸 | 長軸 | 短軸 | | | | | |
| 3号住居 | 38,800 | -60,120 | 3.0 | ―― | N115°E | ― | 5号土坑より新 | 土師器坏・甕 | 10世紀後半～11世紀代 |
| 4号住居 | 38,800 | -60,100 | 6.0 | ―― | N100°E | ― | 9号溝より旧 | 土師器坏・甕、須恵器甕、灰釉陶器碗 | 10世紀後半～11世紀代 |
| 5号住居 | 38,800 | -60,100 | 3.5 | ―― | N100°E | ― | なし | なし | 不明 |

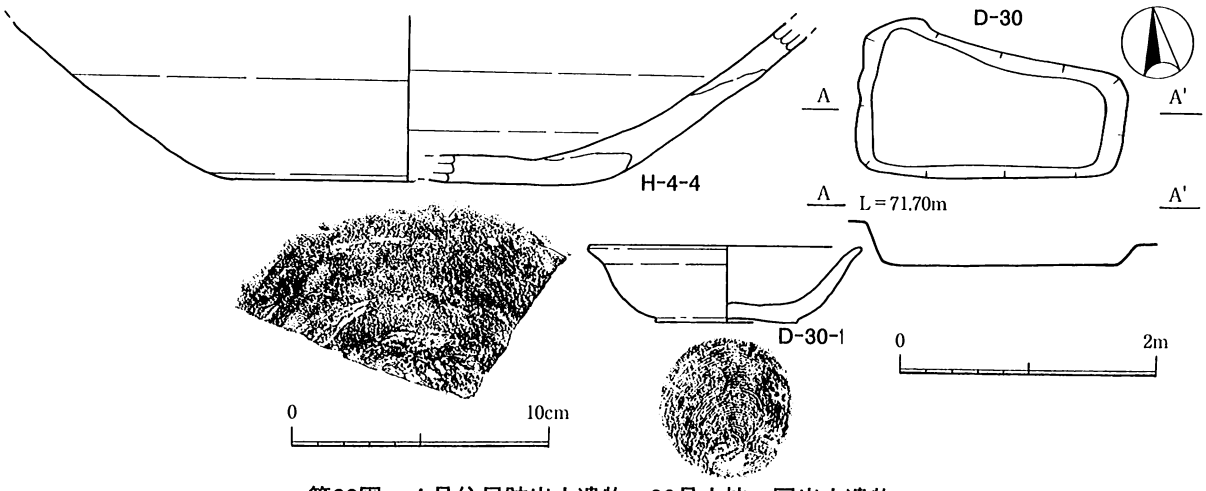
### 土坑

検出された土坑は20基である。X=38,800、Y=-60,130周辺に集中する傾向がある。平面形は円形・楕円形(5･21･31･32･35･37･40号)、もしくは隅丸方形（19･20･22･23･24･25･27･28･29･30･33･34･38号）を呈する。このうち、隅丸方形を呈するものは長軸を東西若しくは南北方向にとるものが多く、規則性が感じられる。出土遺物はほとんどみられず、資料が少ないために性格は不明である。

土師器の坏を出土した30号土坑はX=38,800、Y=-60,120で検出されている。遺物より9世紀後半代の所産と考えられる。




第59図　C区南側道3・4・5号住居跡、同出土遺物




第60図　4号住居跡出土遺物、30号土坑、同出土遺物

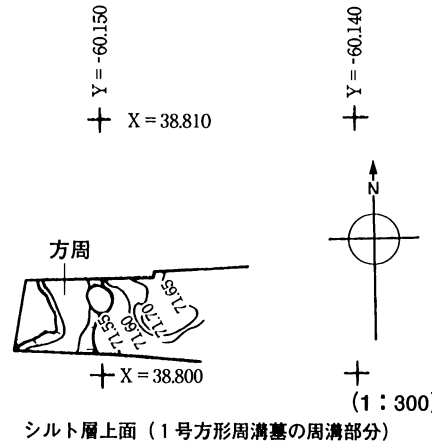
### 第3項　シルト層上面

**1号方形周溝墓**（周溝の一部分）

本遺構はX=38,800、Y=-60,140において検出されたものである。9世紀代の集落確認調査後に実施した、シルト層上面で確認した。

平面形状はL字に曲がる溝であるが、隣接する本線部分の県埋蔵文化財調査事業団調査区域において（未報告）、事前に検出されていた遺構である。呼称を方形周溝墓としたのも上記の理由からで、同調査団より調査時に御指導を賜っている。

本調査区において確認できたのは周溝部分の隅角である。周溝の幅は3.1～1.3m、確認面下の深さは0.7mを測る。



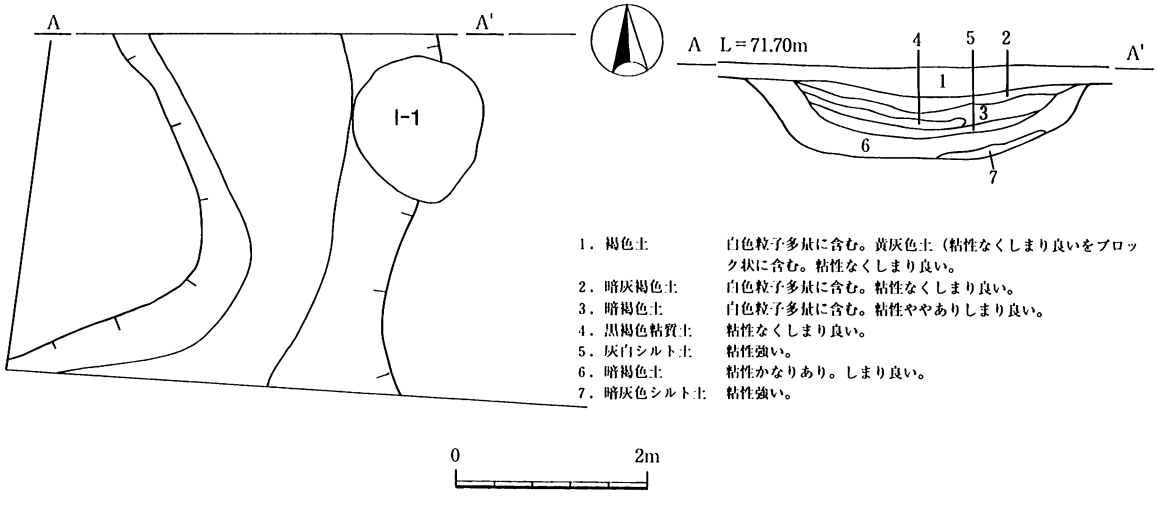

シルト層上面（1号方形周溝墓の周溝部分）

第61図　C区南側道全体図(2)

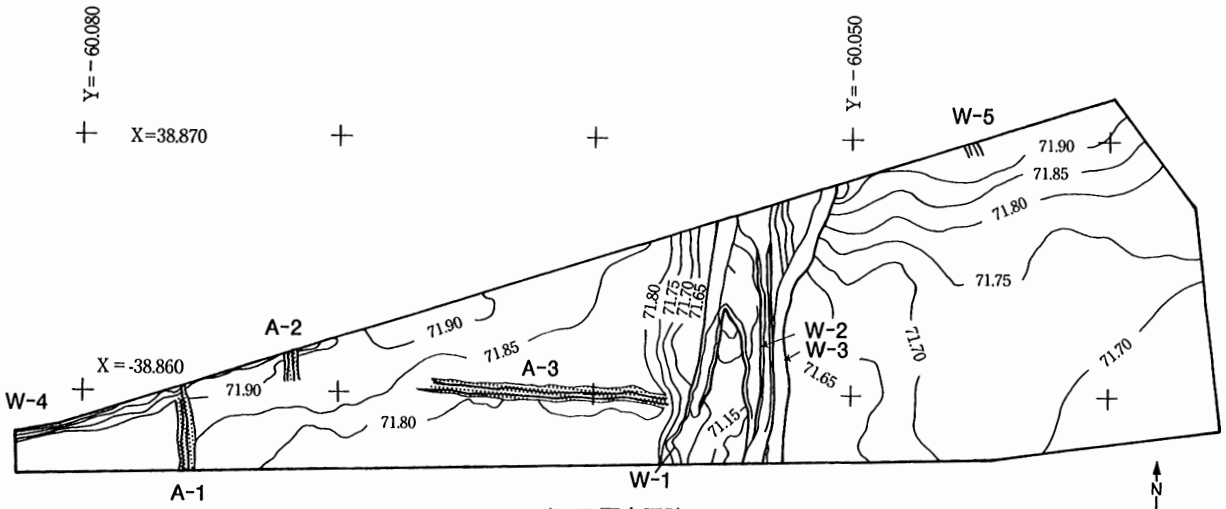
覆土は自然埋没と判断されるもので、中層に灰白色のシルト質層がレンズ状に観察され、分析には至っていないがHr-FAの可能性がある。

溝の底部はコーナー付近から南西側で、北側に比べやや浅くなる傾向が見られる。

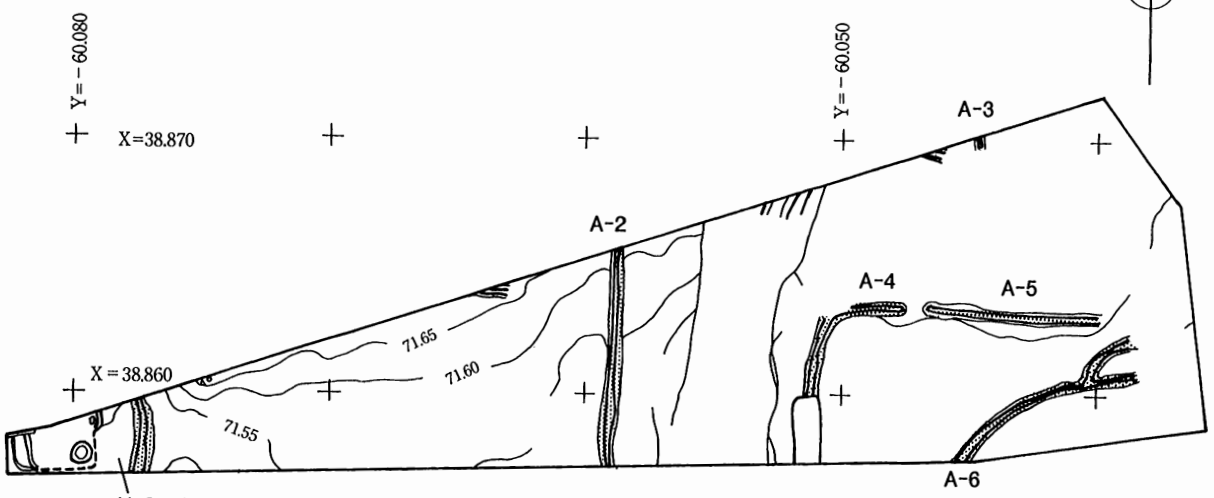
遺物は検出されていない。古墳時代前期から中期の所産であろうか。



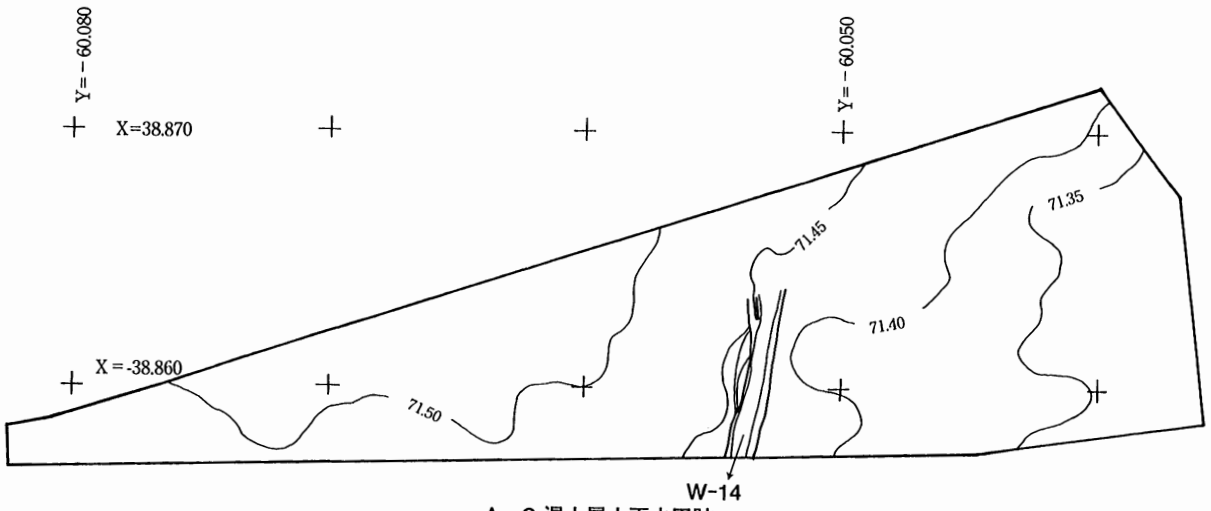

第62図　C区南側道1号方形周溝墓




As-B 下水田跡




9 世紀前半の洪水層下水田跡




As-C 混土層上面水田跡

(1：300)

第63図　D 区北側道全体図

## 第４節　Ｄ区北側道

本調査において確認された文化層は３面（４期）である。

第１面浅間Ｂ軽石層下においては水田跡および畦畔を検出した。水田面では人や動物の足跡は検出されなかった。畦畔の走向は、東西および南北方向である。他に溝５条を検出した。構築の時期は、埋没土の上層に浅間Ｂ軽石が堆積している点より浅間Ｂ軽石降下以前の所産と考えられる。

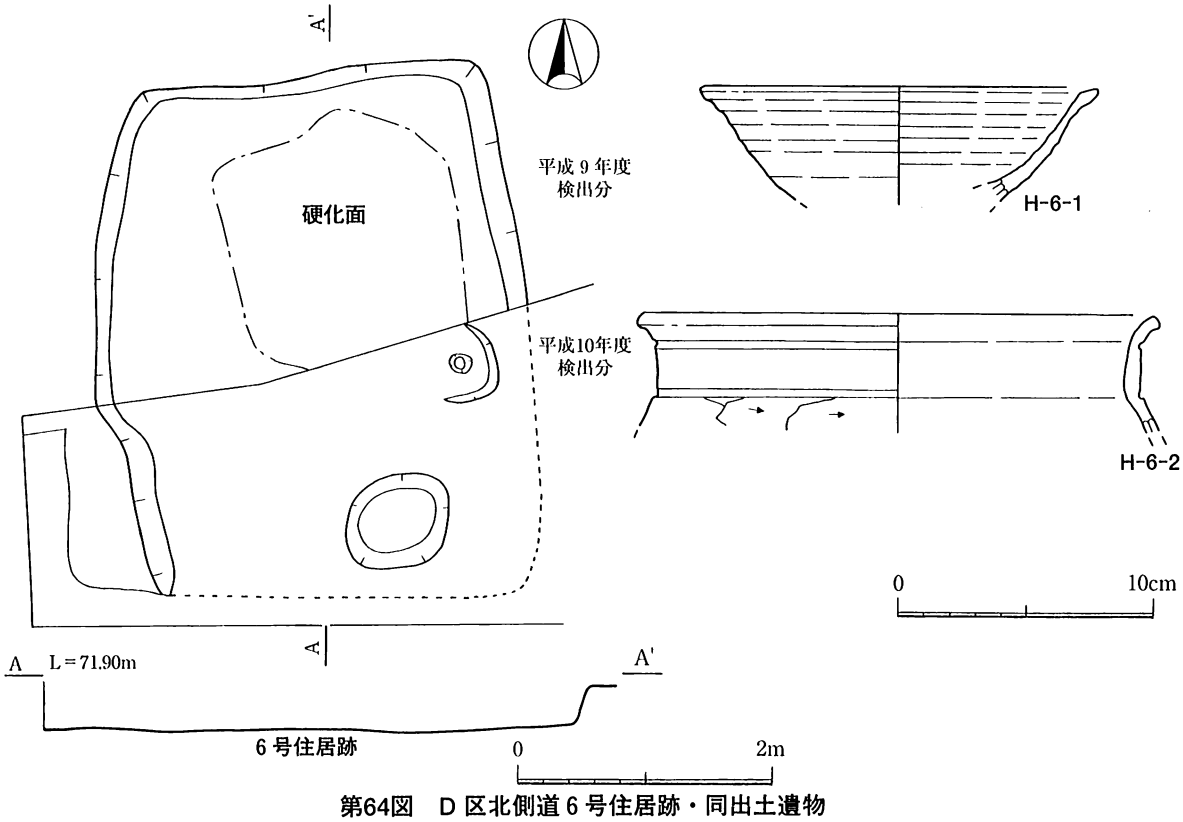
最も大きい２号溝については、幅約２ｍ、確認面よりの深さ約55cm を測る。断面形状は逆台形状を呈する。その性格は水田耕作用用水路としての役割の他、東西に走向する畦畔と直交する点などにより、畦畔とともに水田区画の役割を担っていた可能性も考えられる。

第２面は９世紀前半に生じたとされる洪水層下の水田跡である。６条の畦畔を検出している。畦畔は南北方向および東西方向に構築されている。また、取水施設として畦畔の間において水口が検出されている。

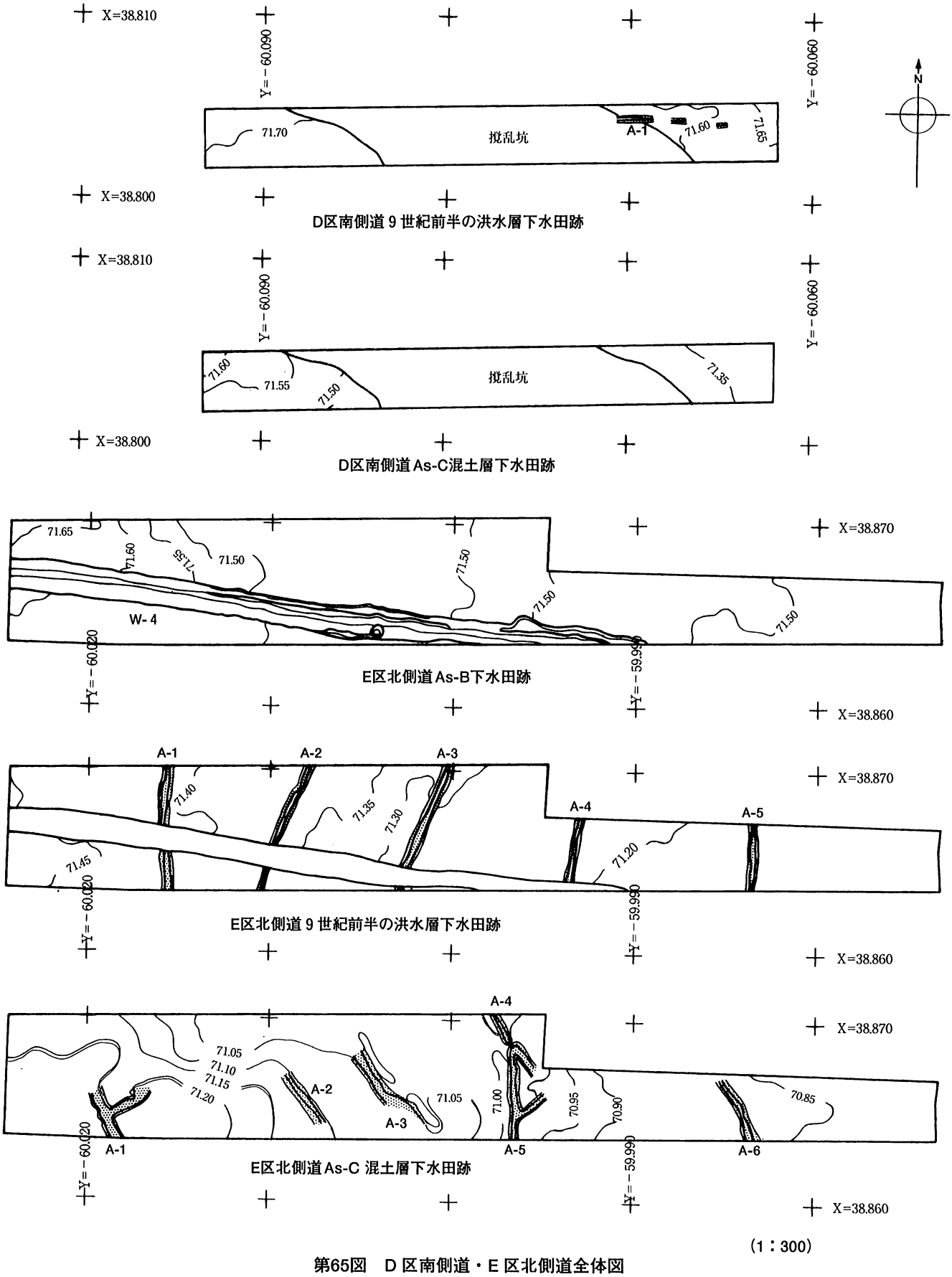
尚、調査区西境付近で検出した６号住居跡は平成９年度調査の18号住居跡である。遺物としては９世紀後半以降の遺物が出土しており、９世紀前半の洪水以降に構築された遺構と判断される。したがって、本文化層よりも時期が新しくなる。

さらに、この水田面では確認されていないが、弘仁九年の地震に伴うとされる噴砂跡が水田面の直下にて広範囲に確認された。したがって、噴砂の発生より洪水の発生までの間には若干の時間差が想定できる。

第３面の浅間Ｃ軽石混土層上面において水田跡を検出した。しかし、水田跡の遺存状態は良好ではなく、この時期の特徴である、小区画の畦畔は検出されなかった。他に溝を１条検出している。南北方向に構築されている。




第64図　Ｄ区北側道６号住居跡・同出土遺物




(1：300)

第65図　D区南側道・E区北側道全体図

## 第5節　D区南側道

中央部分は北西方向から南東方向に幅15m程の撹乱坑が斜方向に縦断している。遺構検出が可能であったのは、調査区域の東西両端部である。

本調査区において確認された文化層は2面である。

第1面は9世紀前半とされる洪水層下水田跡である。この面での水田跡の遺存状態は良好とはいえず、東西方向に断続的に延びる畦畔1条を検出しているのみである。遺物は出土しなかった。

第2面は浅間C混土層下で水田跡を検出した。しかし水田跡の遺存状態は良好でなく、畦畔は確認できなかった。やはり遺物は出土していない。

## 第6節　E区北側道

本調査区において確認された文化層は3面である。

第1面浅間B軽石層下では水田跡を検出した。畦畔は確認できなかったが、溝を1条検出した。走向は西北西で直線状にのびている。規模は上端幅が1.3～2.1m、下端幅0.3～0.6m、確認面よりの深さ40～55cmを測る。断面形は逆台形状を呈する。

第2面9世紀前半洪水層下では水田跡および畦畔5条を検出した。この畦畔の走向はいずれも南北方向で直線状に、さらに8～10mの等間隔を保って構築されており、規則性がうかがわれる。

第3面浅間C混土層下では水田跡および畦畔6条を検出した。いずれも断片的ではあるが小規模畦畔という、この時代の畦畔の特徴の一端を表しているといえる。

なお、本調査区において出土した遺物は、土師器片等である。

## 第7節　G区北側道

本調査区において確認された文化層は4面である。

第1面が浅間B軽石混土層に埋没した畠跡、2面がHr－FAに埋没した水田跡、3面が浅間C軽石混土層上水田跡、4面が浅間C軽石混土層下水田跡である。

第1面の調査区中央付近で浅間B軽石層下畠跡を検出した。しかし、後世の撹乱の影響を被ったためか畝の部分は削平されており、全体的に遺存状況は良好とはいえなかった。そのため、サクの掘り込みは深いところで20cm程度、浅い所で5cm程である。幅は約30cm測る。

第2面ではHr－FA層下において水田跡を検出した。直上にはFA層が層厚3cm程堆積しており、調査区中央部にすすむにつれて残存状態が良好であった。畦畔は北東～南西方向に構築されているのを確認した。幅は約1m、高まりは約6cmを測る。しかし、東側においては後世の耕作によるものと考えられる削平の為に遺存状況は良好ではなかった。残存する水田面の標高は東部71.15m～西部70.85mで、地形的には大間々扇状地の傾斜方向と一致する。水田面では、水口および水路等取水に関する施設は検出されず、人の足跡や耕作痕も確認できなかった。また、水田に伴う遺物も検出されなかった。

第3面の浅間C軽石混土層上面では水田跡を検出した。ほかの文化層と同様、調査区中央部分では遺存状況が比較的良好であった。しかし、水田面は起伏が激しく後世の耕作の影響を受けていたためか畦畔や人の足跡、耕痕跡は確認できなかった。また、調査区北側と東側では後世の削平を受けていたためか、水田跡の遺存状態は良好とはいえなかった。残存する水田面の標高は、北西70.95m～南東70.70mであり、15cm

程の高低差が確認された。遺物については土器片が少量出土している。

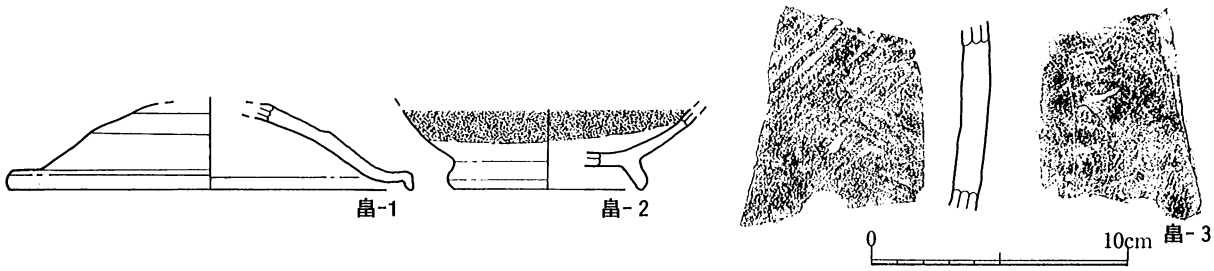
第４面の浅間Ｃ軽石混土層下面において検出された水田跡は、今回の調査を行った中で、最も古い時期にあたる水田である。調査区では浅間Ｃ軽石の純層は確認できず、層厚約10cmのＣ軽石混土層に埋没した状況で水田跡が検出された。調査区のほぼ中央を東西に走る形で大溝（15号溝）が検出されたが、これが水田跡を破壊していたため、検出面積は調査面積全体の2/3程度に止まった。

調査区全体を概観すると、水田の遺存状況の差が明瞭である。北側では、東西および南北方向ともに畦畔が構築されていることが確認され、古墳時代に代表されるような小区画水田が連続して確認されている。畦畔の遺存状態は南北方向は良好で平均して６～７cm、中には10cmをこえる高まりも存在する。ただし、東西方向のものは確認されてはいるものの、ほとんど平坦に近い状態で残りの良いところでも２cm程であり、場所によっては途中で消滅してしまう部分も見受けられた

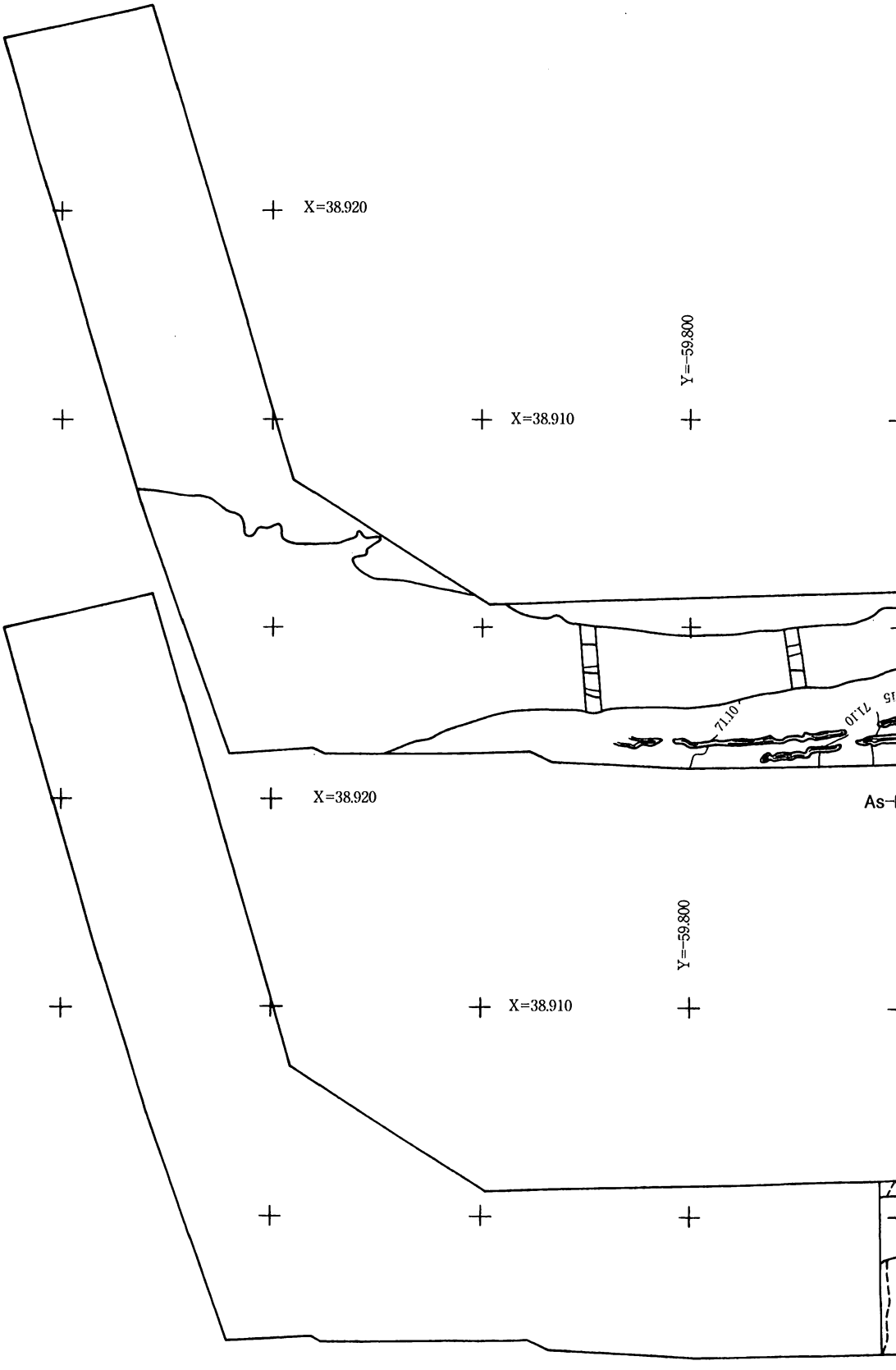
残存する畦畔の幅は比較的狭く大半が40cmを前後する範囲内に収まる。また、調査区の中央にすすむほど大形化する傾向がみられ、最大で約１ｍに達しようとするものも確認されている。しかし、畦畔自体が調査区の中で、前述の大溝に切られたり、調査区外にのびているものや、途切れていたり完結していないために全貌を明らかにできず、したがって小区画の個数や面積を把握するには至らなかった。また、水田面において耕作を行ったとされる起伏を確認したが、足跡等は検出されなかった。残存する水田面の標高は北西70.90m～南東70.45mで、45cm程の高低差が認められたが、これは地形的に大間々扇状地扇端部分にあたる為の自然傾斜によると考えられる。水田面では水口および水路等取水に関する施設は検出されなかった。

遺物は、古墳時代と考えられる甑底部が検出されている。

以上、遺存状態が良好であった調査区北側とは対照的に調査区東側においては後世の撹乱によってほとんど消滅している状態であった。

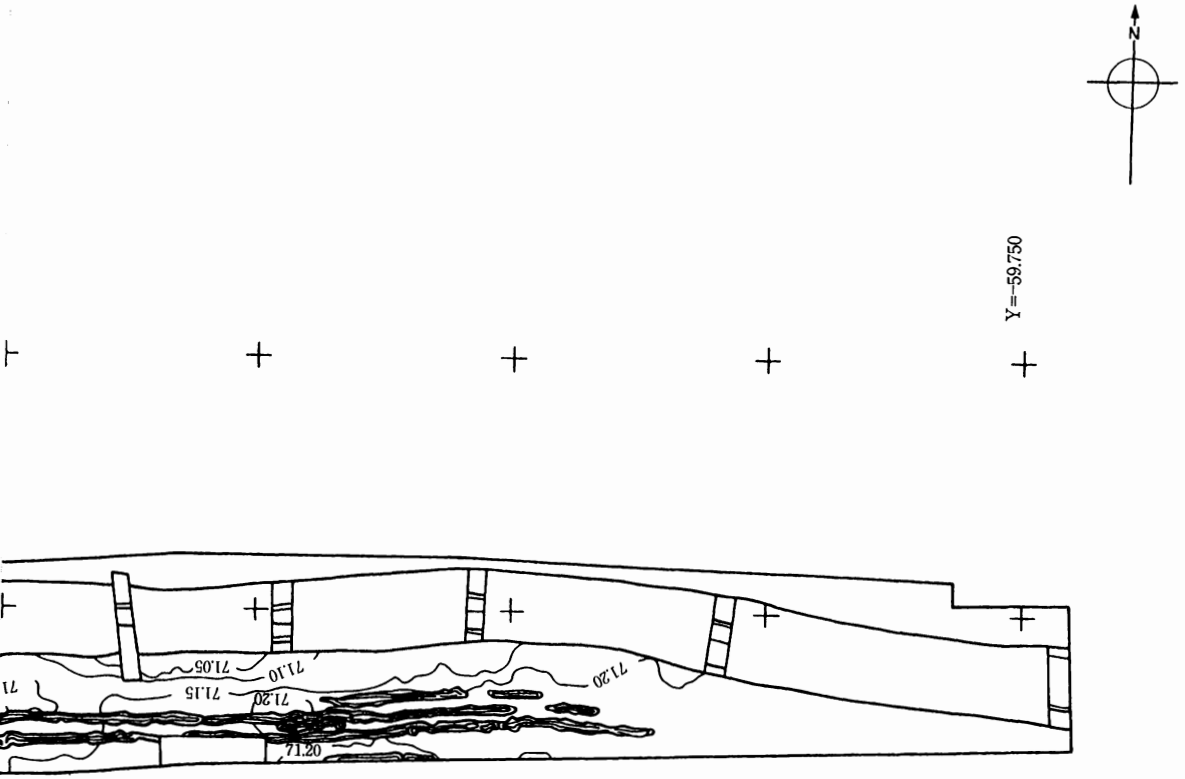



**第66図　Ｇ区北側道出土遺物**

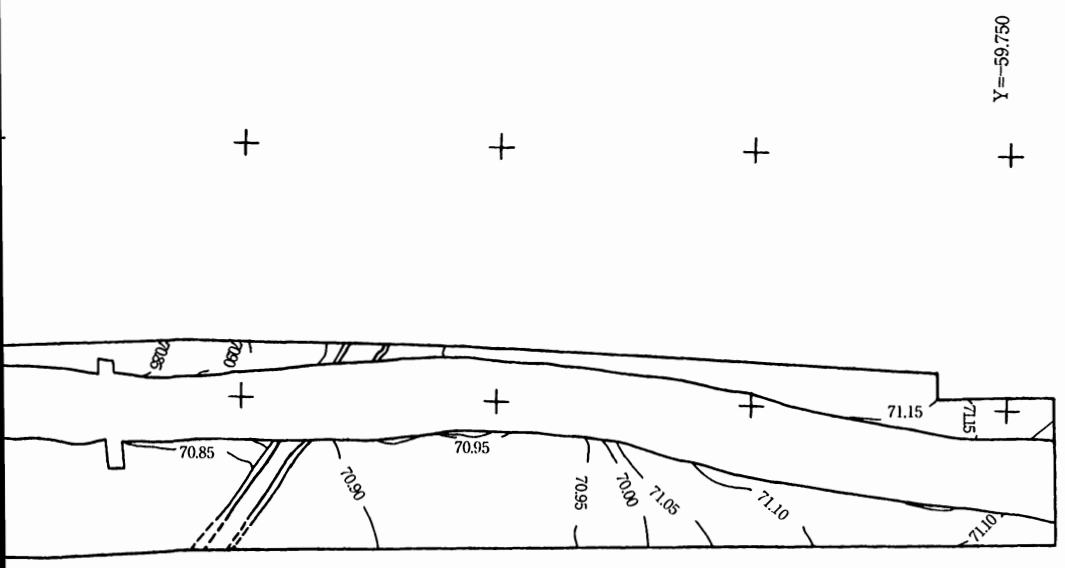



Hr－FA 混

第67図　G 区北側



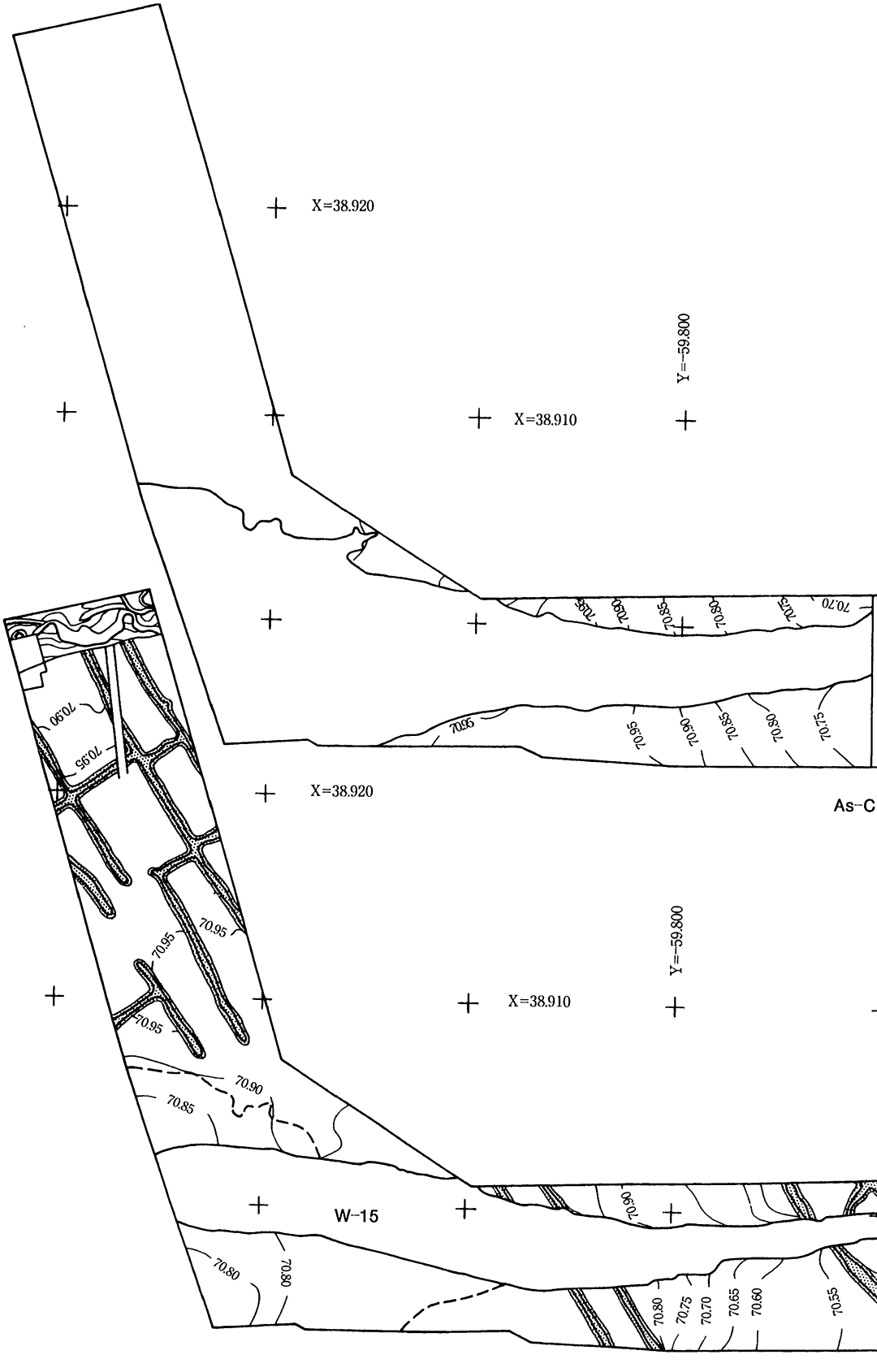

3 畠跡




層下水田跡

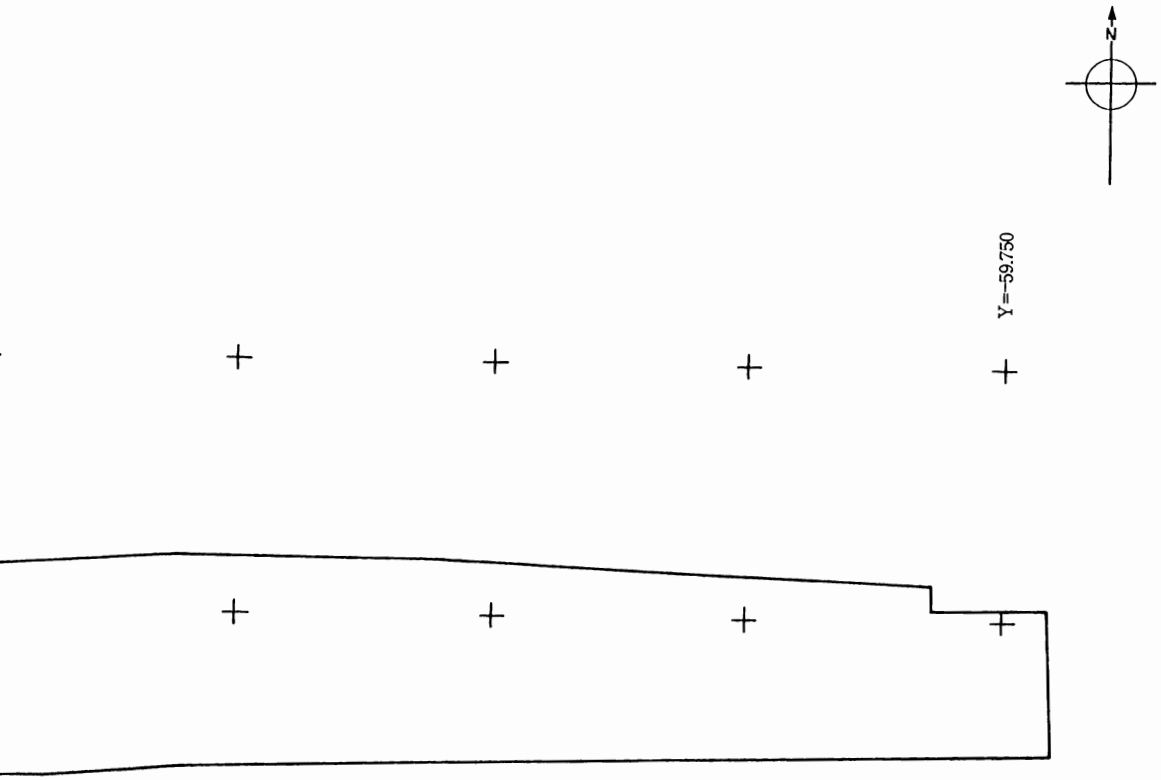
(1：300)

全体図 (1)　折図12

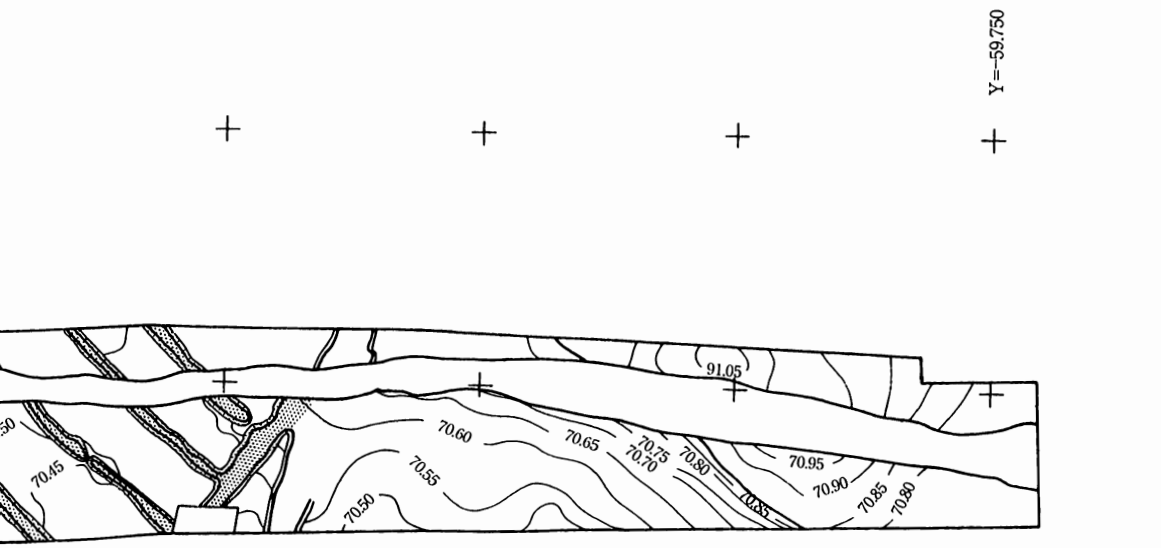

X=38.920
X=38.910
Y=-59.800
70.70
70.75
70.80
70.85
70.90
70.95
As-C
W-15
70.55
70.60
70.65
70.70
70.75
70.80

As-C

第68図　G 区北



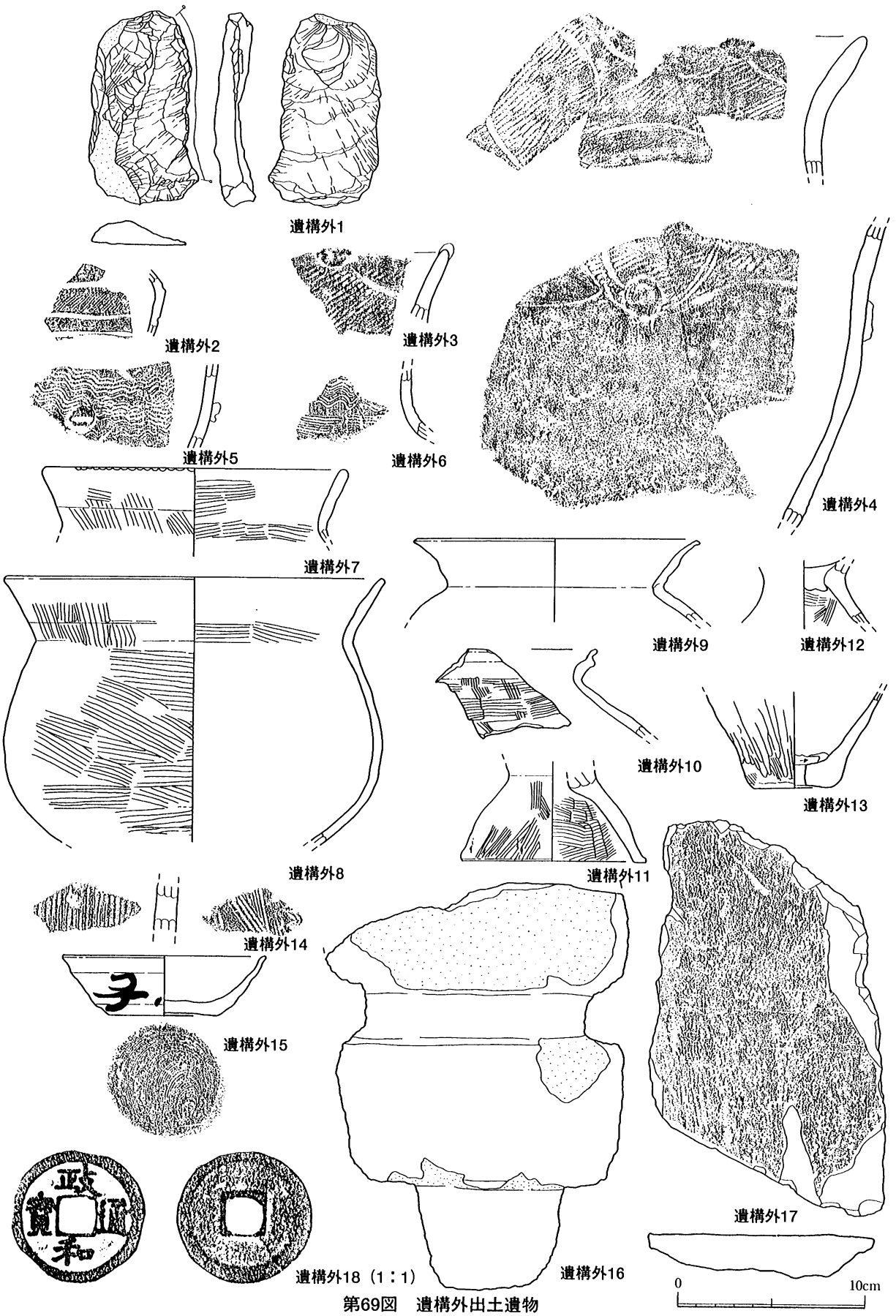

土層上水田跡




(1：300)

土層下水田跡

道 全体図(2)　折図13




第69図　遺構外出土遺物

## 第5章　まとめ

今回の調査は、A・B・D・E・G区北側道およびC・D区南側道の「合計」7地区にわたる調査である。

調査にあたっては、平成9年度調査および過去の周辺における調査成果に基づき、主としてAs-B層下、9世紀前半に生じたとされる洪水層下、Hr-FAおよびAs-C混土層下等の文化層を想定した。しかし実際、調査の過程において地区によっては指標となるテフラが削平をうけ面的な広がりとして確認できなかったために、当初の予想とは異なる部分もあった。ここでは調査の成果について代表的なものを概略してまとめとしたい。

最も注目すべき遺構は、B区北側道において9世紀前半以前の文化面より検出された、掘立柱建物跡および道路状遺構である。この二つの遺構はともに10世紀代と考えられる住居跡に切られている点や、特に掘立柱建物跡については柱穴が弘仁九年（818年）に発生した地震に伴う砂脈（噴砂痕）に切られている点等より構築された時期は9世紀前半以前と考えられる。さらに、この二つの遺構は、恐らくほぼ時期を同じくして営まれ、何らかの関連性をもって機能していたと推測される。今回の調査は一つの調査区の面積が狭いため得られる資料が極めて限定され、現状はまさに「点」である感は否めない。また、仮に道路であるとするならば必然的に目的地やそこへ至るルートが問題となってくる。したがって、本遺跡の周辺環境、遺構の位置する延長線上に存在していた施設、道路状遺構や掘立柱建物跡が構築された当時の下増田地域の状況等、より多角的に検討する必要がある。そうした意味においても今後の周辺地域における発掘調査の成果に大いに期待したい。

また、B区北側道で9世紀後半から11世紀にかけての集落跡が検出され、E区北側道及びG区北側道においてAs-C混土層上下面より古墳時代の小区画畦畔を伴う水田跡を検出した。尚、広範囲な地域において平安時代末期のAs-B層下面水田跡を検出したが、これは荒砥川左岸の微高地に集落を、そして付近の後背湿地に水田等生産域を求めるという、広瀬川低地帯における地形を生かした土地利用の特徴を示す例といえよう。また、遺物についても、破片ながら縄文時代晩期安行3b～3c式に比定される土器を始め、古墳時代前期の石田川式土器から10世紀にかけての土師器、須恵器が出土しており、この地域が長い間にわたって人々が生活を営んできた土地であることを示すものといえる。

**表11　遺構一覧表**

| 時代 | 遺構名 | A区北側道 | B区北側道 | C区南側道 | D区北側道 | D区南側道 | E区北側道 | G区北側道 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 古墳時代 | 住居跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 掘立柱建物跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 土坑 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 井戸跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 溝 | 2 | － | － | 1 | － | － | 1 |
| | 水田跡 | － | － | － | As-C混土層上層 | As-C混土層下 | As-C混土層下層 | Hr-FA下 |
| | 方形周溝墓 | － | － | 1 | － | － | － | － |
| 平安時代 | 住居跡 | － | 6 | 3 | 1 | － | － | － |
| | 掘立柱建物跡 | － | 2 | － | － | － | － | － |
| | 土坑 | － | 9 | 20 | － | － | － | － |
| | 井戸跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 溝 | 3 | 7 | 2 | 5 | － | 1 | 1 |
| | 水田跡 | － | － | － | 洪水層下・As-B層下 | 洪水層下 | 洪水層下 As-B層下 | 洪水層下 As-B層下 |
| | 畠跡 | － | － | 1 | － | － | － | As-B層下 |
| 中近世 | 館跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 土坑 | － | 14 | － | － | － | － | － |
| | 溝 | 2 | － | － | － | － | － | 1 |
| | 水田跡 | － | － | － | － | － | － | － |
| | 井戸跡 | － | － | 2 | － | － | － | － |

## 表12　B地区遺物観察表(1)

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1号住居跡 | 1 | 須恵器<br>坏 | (10.4)<br>3.1<br>5.4 | 1／2 | 口縁～体部は直線的に開き、底部切り離しは回転糸切りである。 | ①石英・長石・角閃石<br>②灰褐色　③未還元 | 埋没土 |
| | 2 | 須恵器<br>坏 | (11.4)<br>3.2<br>5.8 | 1／2 | 口縁～体部は内湾気味に開き、底部切り離しは回転糸切りである。 | ①石英・長石・角閃石<br>②にぶい赤橙色　③未還元 | 埋没土 |
| | 3 | 須恵器<br>坏 | 10.7<br>3.5<br>5.8 | 完形 | 口径10cm前後の小型坏である。口縁～体部は内反気味に丸みを持つ。内体部に籾痕あり。底部切り離しは回転糸切り無調整である。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②にぶい赤橙色　③未還元 | 床着 |
| | 4 | 須恵器<br>耳　皿 | 9.3<br>4.6<br>3.0 | 口縁部一部欠損 | 無高台皿の両端を押圧した耳皿である。底部切り離しは右回転糸切り無調整である。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②黄橙色　③未還元 | 埋没土 |
| | 5 | 須恵器<br>坏 | ……<br>5.4<br>…… | 体部～底部 | 体部は内湾気味に開き、底部の切り離しは右回転糸切り無調整である。 | ①細かな石英・長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 6 | 土師器<br>坏 | 11.7<br>6.2<br>5.2 | 1／2 | 口縁～体部は内湾し端部で外反する。高台は小さく短い。内部は内黒となるが、ヘラ磨きの範囲は口縁内部周縁にとどまり、残る内部には十字状・稲妻状に暗文を施す。回転糸切り。 | ①石英・長石・角閃石<br>②黒褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 7 | 須恵器<br>坏 | 12.0<br>5.1<br>5.8 | 1／2 | 口縁～体部は内湾し端部で外反する。高台は小さく短い。内部は内黒となり全体にヘラ磨きを施す。ロクロ成形。 | ①石英・長石・角閃石<br>②灰黄褐色　③未還元 | 床着 |
| | 8 | 須恵器<br>坏 | 13.6<br>8.3<br>5.2 | 1／3 | 口縁～体部は直線的に開き、高台は1.5cm前後である。底部切り離しは回転糸切り。 | ①石英・長石・角閃石<br>②灰黄褐色　③未還元 | 埋没土 |
| | 9 | 須恵器<br>坏 | 14.2<br>9.5<br>6.7 | 完形 | 口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。底部切り離しは回転糸切り。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②橙色　③未還元 | 床着 |
| | 10 | 土師器<br>坏 | 14.7<br>8.4<br>7.0 | 完形 | 口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②橙色　③酸化 | 埋没土 |
| | 11 | 土師器<br>坏 | 14.9<br>8.2<br>6.6 | 完形 | 口縁～体部は内反気味に開き、高台は高さ2cm以上を有する。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②浅黄色　③酸化 | 床着 |
| | 12 | 灰釉<br>皿 | 13.3<br>6.6<br>2.8 | 2／3 | 口縁～体部は大きく開き、端部でさらに外反する。高台は三日月状を呈する。釉は漬け掛けで体部中位までで、底部までは及ばない。 | ①長石　②灰白色　③還元 | 埋没土 |
| | 13 | 灰釉<br>埦 | 14.6<br>7.6<br>5.0 | 完形 | 口縁～体部は内反気味に開き、高台は通常の形態である。釉は漬け掛けで口縁部内外周縁にとどまる。底部は回転糸切りである。 | ①長石　②灰白色　③還元粒　②浅黄色　③酸化 | 床着 |
| | 14 | 土師器<br>甕 | (19.0)<br>…… | 口縁部～胴部<br>…… | 口縁部は「コの字」状に屈曲する。厚さは0.6cmである。外：横位ヘラナデ内：横位ヘラ削り。 | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 15 | 土師器<br>甕 | (18.8)<br>……<br>…… | 口縁部～胴部 | 口縁部は短く内湾気味に立ち上がる。外：横位ヘラ削り。内：縦位ヘラナデ | ①石英・長石・角閃石、褐色粒　②黄褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 16 | 須恵器<br>羽　釜 | (20.0)<br>……<br>…… | 口縁部～胴部 | 口縁部は内傾し、端部は面をなす。胴部は張りがないタイプ。ロクロ成形。 | ①石英・長石　②浅黄橙色<br>③酸化 | 埋没土 |
| | 17 | 転用<br>硯 | 幅　14.9<br>厚さ 1.2 | 1／2 | 須恵器甕の胴部片を転用した硯である。胴部片を打ち欠き円形に仕上げている。内面は光沢が見えるほど使用されている。 | ①長石・片岩粒　②青灰色<br>③還元 | 埋没土 |
| | 18 | 転用<br>硯 | 幅　19.5<br>厚さ 1.0 | 完形 | 須恵器甕の頸～胴部片を転用した硯である。内面は使用痕が観察される。 | ①石英・長石・片岩粒<br>②灰色　③還元 | 床着 |
| | 19 | 鉄刀子 | 残長4.0<br>幅　0.8 | 柄部片 | 断面逆台形状の刀子に柄部である。 | | 埋没土 |
| 2号住居跡 | 1 | 土師器<br>坏 | ……<br>6.4<br>…… | 体部～底部 | 体部は内湾気味に立ち上がり、高台は面をなす。外底部に線刻文字「井」がある。 | ①石英・長石・片岩粒<br>②灰黄色　③酸化 | 埋没土 |
| | 2 | 灰釉<br>埦 | (12.5)<br>……<br>…… | 口縁部～体部 | 口縁～体部は内湾気味に立ち上がる。釉は漬け掛けで内外底部までは及ばない。 | ①黒色・長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 3 | 灰釉<br>埦 | (13.4)<br>……<br>…… | 口縁部～体部 | 口縁～体部は内湾気味に立ち上がる。釉は漬け掛けで内外底部までは及ばない。 | ①長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 4 | 須恵器<br>羽　釜 | (20.8)<br>……<br>…… | 口縁部～胴部 | 口縁～胴部は膨らみ内湾し、端部は面をなさない。鍔は幅がなくなる。外：縦位のヘラ削り（ヘラナデツケ？） | ①石英・長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| 7号住居跡 | 1 | 土師器<br>坏 | (12.3)<br>(6.0)<br>4.1 | 1／4 | 口縁～体部は内湾し、上位でさらに緩やかに屈曲する非ロクロ土器である。内：ヘラナデ、外：体部上位～底部手持ちヘラ削り。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②にぶい褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 2 | 土師器<br>坏 | ……<br>7.0<br>…… | 体部～底部 | 体部は張りのある腰から内湾気味に立ち上がる。内部は内黒（全体にヘラ磨き）となる。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②黄灰色　③酸化 | 埋没土 |

## 表13　B地区遺物観察表(2)

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 7号住居跡 | 3 | 須恵器<br>坏 | 14.9<br>……<br>(5.5) | 高台欠損 | 口縁～体部は緩く内反気味に開く。底部の切り離しは回転糸切りである。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②灰色　③還元軟質 | 埋没土 |
| | 4 | 須恵器<br>坏 | (12.0)<br>……<br>…… | 口縁部<br>～体部 | 口縁部は開き、端部でさらに短く折れ曲がる。 | ①石英・長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 5 | 須恵器<br>坏 | (14.4)<br>7.0<br>5.6 | 1／2 | 口縁～体部は緩やかに内湾し、端部でさらに外反する。 | ①石英・長石粒<br>②にぶい黄橙色　③未還元 | 埋没土 |
| | 6 | 須恵器<br>坏 | (14.6)<br>(5.3)<br>…… | 2／3 | 口縁～体部は緩やかに内湾し、端部でさらに外反する。高台が欠損した後も研磨して使用している。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②暗灰色　③未還元 | 床着 |
| | 7 | 須恵器<br>坏 | (16.0)<br>6.9<br>6.3 | 1／2 | 口縁～体部は緩やかに内湾し、端部でさらに外反する。内体部には部分的に煤が付着し、灯明用に使用されている。ロクロ成形。 | ①石英・長石粒<br>②暗灰色　③未還元 | 埋没土 |
| | 8 | 灰釉<br>埦 | (13.3)<br>……<br>(3.3) | 口縁部<br>1／2 | 口縁～体部は開き比較的浅く、釉の範囲は内外ともに口縁部周縁にとどまる。また内底部に重ね焼き痕が顕著に観察される。 | ①長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 9 | 灰釉<br>皿 | ……<br>……<br>(1.5) | 底部 | 高台は三日月状を呈し、内外の釉は自然釉である。 | ①長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 10 | 灰釉<br>皿 | (17.6)<br>7.2<br>3.1 | 1／3 | 口縁部は端部でさらに外反する。高台は断面三日月状を呈する。 | ①長石粒<br>②灰白色　③未還元 | 埋没土 |
| | 11 | 須恵器<br>羽釜 | (20.0)<br>……<br>…… | 口縁部<br>～胴部 | 口縁部は内傾し端部は面をなし、胴部は張りがない。ロクロ成形。 | ①石英・長石粒<br>②暗灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 12 | 須恵器<br>羽釜 | (18.8)<br>……<br>…… | 1／3 | 口縁部は内傾し端部は面をなし、胴部は張りがない。ロクロ成形。 | ①石英・長石・結晶片岩粒<br>②灰白色　③還元 | 床着 |
| 8号住居跡 | 1 | 須恵器<br>坏 | (12.7)<br>(8.0)<br>5.0 | 1／2 | 口縁～体部は内湾し端部に至る。底部の切り離しは回転糸切りである。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②灰褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 2 | 灰釉<br>埦 | ……<br>8.2<br>…… | 底部<br>1／2 | 釉の範囲は内外の底部にまでは及ばない。高台の断面は三日月状を呈する。底部は回転糸切り後回転ヘラ削り。 | ①長石<br>②灰白色　③還元 | 埋没土 |
| | 3 | 灰釉<br>広口瓶 | ……<br>……<br>…… | 頸部 | 頸部径は7.9cmあるため長頸瓶ではなく広口瓶とした。肩部は丸みを帯びる。釉は内外に及び、特に外部は全面、内部は上位とする。 | ①長石・黒色粒　②灰白色(釉調オリーブ黄色)　③還元 | 埋没土 |
| 9号住居跡 | 1 | 須恵器<br>坏 | 10.1<br>5.0<br>2.7 | 3／4 | 口縁部は緩やかに内湾する。底部の切り離しは回転糸切りである。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②黄橙色　③未還元 | 床着 |
| | 2 | 須恵器<br>坏 | ……<br>9.2<br>…… | 底部<br>1／2 | 高台は高さ2cm以上を有する。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②明赤褐色　③未還元 | 床着 |
| | 3 | 土釜 | (22.8)<br>……<br>(10.0) | 口縁部<br>～胴部 | 口縁部は短く外反する。外：横位ヘラ削り、内：横位ヘラナデ。 | ①長石・石英・角閃石・褐色粒　②橙色　③酸化 | カマド |
| | 4 | 須恵器<br>羽釜 | 21.7<br>……<br>…… | 口縁部<br>～体部 | 口縁部は内傾し端部は面をなす。胴部は張りがない。ロクロ成形。 | ①長石・石英・角閃石・片岩粒　②にぶい橙色　③未還元 | カマド |
| | 5 | 須恵器<br>坏 | 16.0<br>9.0<br>6.6 | 1／2 | 口縁～体部は直線的に開き、高台は2cm以上ある。ロクロ成形。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②にぶい橙色　③未還元 | カマド |
| 10号住居跡 | 1 | 須恵器<br>坏 | 13.5<br>6.6<br>5.5 | 3／4 | 口縁～体部は直線的に開き端部でさらに外反する。底部は右回転糸のり。 | ①長石・石英・角閃石<br>②褐灰色　③未還元 | 埋没土 |
| | 2 | 土師器<br>甕 | ……<br>5.6<br>…… | 胴下部～<br>底部 | 胴～底部は径の小さな底部より緩く開く。外：縦位ヘラ削り、内：斜位ヘラナデ。 | ①長石・石英・角閃石<br>②にぶい赤褐色　③酸化 | 埋没土 |
| 41号土 | 1 | 須恵器<br>坏 | (12.6)<br>7.8<br>5.3 | 1／3 | 口縁～体部は直線的に開き端部でさらに外反する。ロクロ成形。 | ①長石・石英・角閃石<br>②暗灰色　③未還元 | 床着 |
| B区大溝 | 1 | 須恵器<br>坏 | 16.0～14.3<br>6.8<br>6.2 | 完形 | 口縁～体部は緩やかに内湾し、端部でさらに外反する。歪みがひどい。底部の切り離しは右回転糸切りである。 | ①長石・石英<br>②暗灰色　③還元 | 埋没土 |

## 表14　C地区遺物観察表(1)

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 3号住居跡 | 1 | 土師器<br>坏 | (14.6)<br>……<br>…… | 口縁部<br>～体部 | 口縁～体部はわずかに内湾気味に開く。 | ①石英・角閃石粒<br>②暗黄褐色　③酸化 | 埋没土 |
| | 2 | 土師器<br>甕 | (18.3)<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は短く立ち上がり、大きく屈折しない。内：横位ヘラナデ。 | ①石英・角閃石・褐色粒<br>②黄橙色　③酸化 | 埋没土 |

## 表15　C地区遺物観察表(2)

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 4号住居跡 | 1 | 土師器<br>坏 | ……<br>……<br>(2.0) | 底部 | 高台欠損、底部の切り離しは回転糸切り。 | ①石英・長石・角閃石<br>②暗茶色　③酸化 | 床着 |
| | 2 | 灰釉<br>埦 | ……<br>7.4<br>…… | 底部<br>1／2 | 高台は三日月状を呈し、内底部の釉は自然釉である。 | ①長石<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 3 | 土師器<br>土　釜 | (20.8)<br>……<br>(6.6) | 口縁部<br>～胴部 | 口縁部は短く立ち上がり、大きく屈折しない。内：横位ヘラナデ、外：縦位ヘラ削り。 | ①長石・角閃石・褐色粒<br>②黄橙色　③酸化 | 床着 |
| | 4 | 須恵器<br>甕 | ……<br>……<br>(14.4) | 底部<br>1／4 | 底部は平たく納め、外底部に粘土紐の痕跡あり。 | ①石英・長石粒<br>②灰色　③還元軟質 | 床着 |
| 30号土 | 1 | 須恵器<br>坏 | (10.7)<br>5.7<br>3.0 | 1／3 | 口縁～体部は緩やかに内湾し、端部でさらに外反する。底部の切り離しは回転糸切りである。 | ①長石・石英・角閃石粒<br>②黄白色　③未還元 | 床着 |
| 1号井戸 | 1 | 須恵質<br>鉢 | 23.9<br>12.2<br>10.4 | 3／4 | 片口の鉢である。口縁～体部は内反気味に開き、端部で小さく内反する。ロクロ成・整形を基本とし内部は指ナデ、外部は指圧・指ナデで、内部は使用により滑沢である。底部は回転糸切りである。 | ①長石・石英・片岩粒<br>②暗灰色　③還元 | 埋没土 |

## 表16　D地区遺物観察表

| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 6号住居跡 | 1 | 須恵器<br>坏 | (15.7)<br>……<br>…… | 口縁部<br>～頸部 | 口縁～体部はわずかに膨れて開き、端部でさらに外反する。ロクロ目が強い。 | ①長石・褐色粒<br>②暗灰色　③還元軟質 | カマド |
| | 2 | 土師器<br>甕 | (20.5)<br>……<br>…… | 口縁部<br>～体部 | 口縁部は「コの字」状を呈し、屈曲部は沈線がなされる。外：横位ヘラ削り | ①石英・長石・角閃石・褐色粒　②黄橙色　③酸化 | 埋没土 |

## 表17　G地区遺物観察表

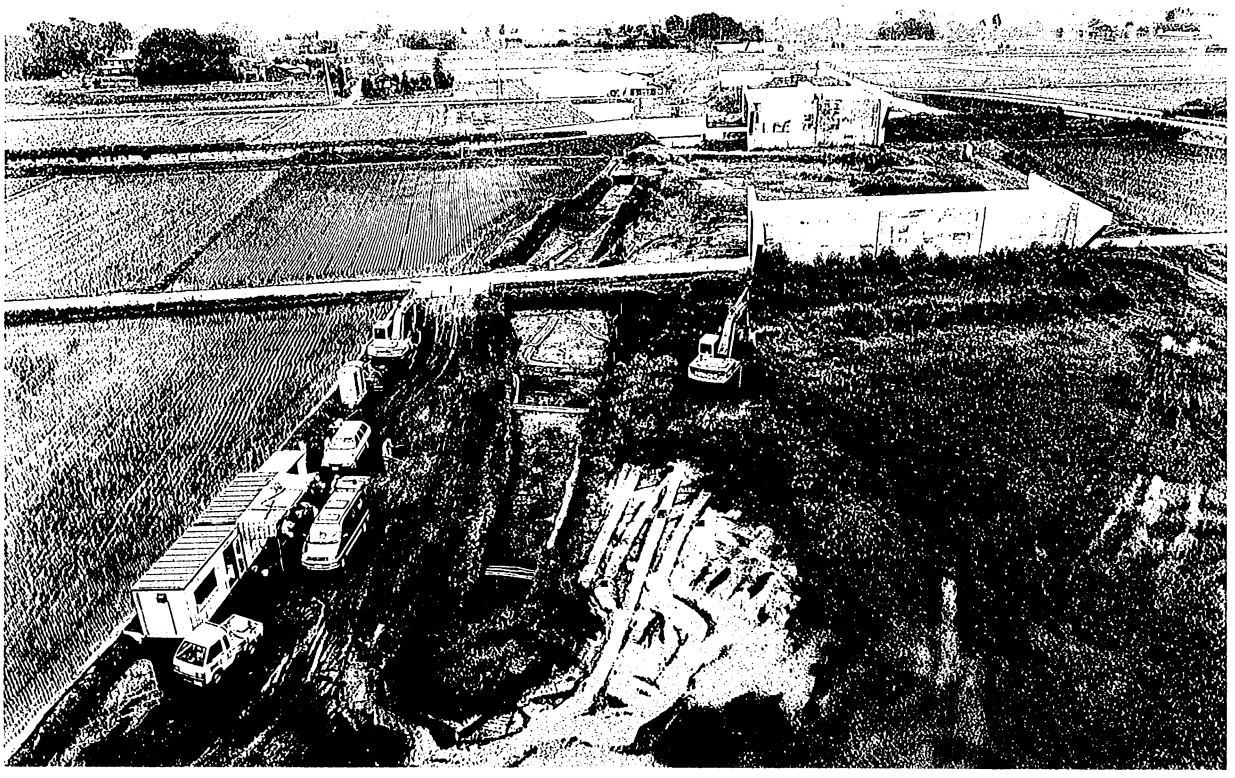
| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 畠跡 | 1 | 須恵器<br>蓋 | 16.1<br>……<br>(2.5) | 口縁部<br>1／4 | 口縁部は端部で小さく折り曲げられる。回転ヘラ削りは天井部の中位から始まる。 | ①長石粒<br>②灰色　③還元軟質 | 埋没土 |
| | 2 | 灰釉<br>埦 | ……<br>(7.4)<br>…… | 底部<br>1／4 | 高台は断面三日月状をなす。釉は内外底部までは及ばない。 | ①長石粒<br>②灰色　③還元 | 埋没土 |
| | 3 | 須恵器<br>甕 | ……<br>……<br>…… | 胴部片 | 内：同心円当て具、外：平行叩き。 | ①長石粒　②青灰色（断面は２層）　③還元 | 埋没土 |

## 表18　遺構外遺物観察表

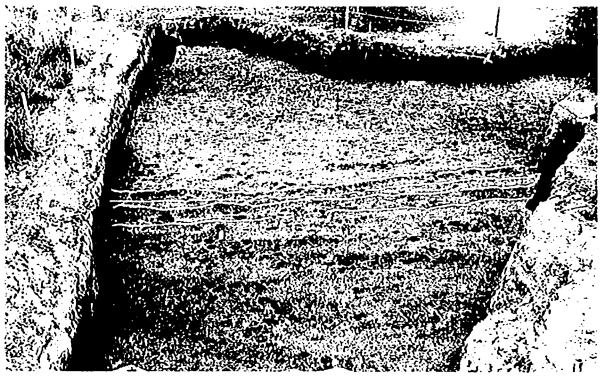
| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺構外遺物 | 1 | 剥片石器 | 長さ10.3<br>幅5.2 | 完形 | 縦長剥片を側面に調整を加え、刃部を形成した使用痕のある剥片石器。 | ④安山岩 | ７号住<br>埋没土 |
| | 2 | 縄文土器<br>浅　鉢 | ……<br>……<br>…… | 破片 | 沈線で区切られた縄文帯を施す。「くの字」状に屈曲するところから口縁部に近い部分と思われる。加曽利Ｂ２式。 | ①長石・角閃石<br>②黒灰色　③酸化 | X=38,860<br>Y=-60,190 |
| | 3 | 縄文土器<br>深　鉢 | ……<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は平縁で端部には押圧された貼り瘤が施される。口縁部文様帯には弧状に擦り消した部分が残る。地文は無節縄文である。晩期安行３ｂ～３ｃ式並行か。 | ①石英・長石・褐色粒<br>②暗褐色　③酸化 | X=38,860<br>Y=-60,210 |
| | 4 | 縄文土器<br>深　鉢 | ……<br>……<br>…… | 口縁～胴部 | 口縁部は波状となり、その間には押圧された貼り瘤が施される。口縁部文様帯には弧状に擦り消した部分と縦位の楕円形沈線文、弧状沈線文で構成される。口縁波頂部下の文様には縦位の楕円形沈線で構成され円形の貼り瘤が施される。地文は無節縄文である。３と同形式と思われる。晩期安行３ｂ～３ｃ式並行か。 | ①石英・長石・褐色・角閃石粒　②黄褐色　③酸化 | ７号住<br>埋没土 |
| | 5 | 弥生土器<br>甕 | ……<br>……<br>…… | 胴部片 | 櫛歯状工具で波状文を施し、浮文を貼りつける。樽式土器。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②黄橙色　③酸化 | 10号住<br>床着 |
| | 6 | 弥生土器<br>甕 | ……<br>……<br>…… | 頸部片 | 櫛歯状工具で波状文・簾状文を施す。樽式土器。 | ①長石・角閃石粒<br>②黄褐色　③酸化 | ２号住<br>上層 |
| | 7 | 土師器<br>甕 | ……<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は「くの字」状に屈折し、端部に刻みを入れ、内外面刷毛目調整を施す。古式土師器。 | ①長石・褐色粒<br>②黄橙褐色　③酸化 | ７号住<br>埋没土 |
| | 8 | 土師器<br>甕 | ……<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は「くの字」状に屈折し、胴部は偏球形を呈する。内外面刷毛目調整を施す。古式土師器。 | ①長石・褐色粒<br>②黄橙色　③酸化 | ７号住<br>埋没土 |
| | 9 | 土師器<br>甕 | 15.4<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は「くの字」状に屈折する。古式土師器。 | ①長石・褐色粒<br>②灰褐色　③酸化 | ８号住<br>埋没土 |

## 表19　遺構外遺物観察表

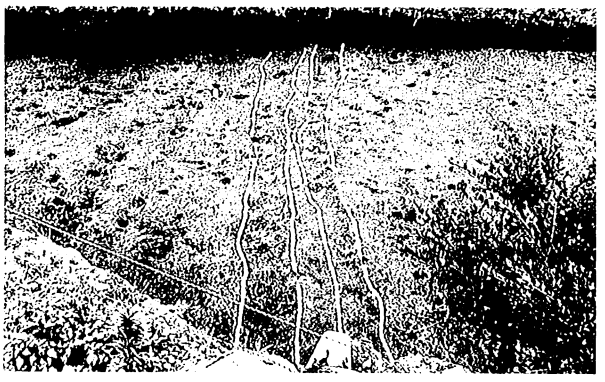
| 遺構 | 遺物番号 | 器種 | 口径・底径<br>器高(cm) | 遺存率 | 器形及び成・整形の特徴 | ①胎土②色調③焼成④材質 | 出土位置 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 遺構外遺物 | 10 | 土師器<br>台付甕 | ……<br>……<br>…… | 口縁部片 | 口縁部は「S字」状に屈曲する石田川式土器である。胴部は刷毛目調整である。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②黄橙色　③酸化 | As-C混上 |
| | 11 | 土師器<br>台付甕 | ……<br>10.0<br>…… | 脚部 | 脚部は膨れ気味に開き、端部で面をなす。内外細かな刷毛目調整。 | ①長石・褐色粒<br>②黄橙色　③酸化 | X=38,870<br>Y=-60,190 |
| | 12 | 土師器<br>高　坏 | ……<br>……<br>…… | 脚部 | 脚部と坏部との接合には粘土の充塡が観察され、脚部内は刷毛目調整される。内外赤彩。 | ①石英・長石粒<br>②黄褐色　③酸化 | X=38,870<br>Y=-60,190 |
| | 13 | 土師器<br>甑 | ……<br>4.4<br>…… | 底部 | 底径の小さな甑である。孔は単孔で直径1.2cmである。 | ①石英・長石・角閃石粒<br>②黄橙色　③酸化 | As-C混上 |
| | 14 | 円筒埴<br>輪 | ……<br>……<br>…… | 破片 | 円筒埴輪片と思われる。内外刷毛目調整である。 | ①石英・長石・片岩粒<br>②茶褐色　③酸化 | 2号溝<br>埋没土 |
| | 15 | 須恵器<br>坏 | 10.8<br>5.8<br>3.2 | 2／3 | 口縁部は直線的に開き、底部切り離しは回転糸切りである。外体部墨書正位「子」あり。 | ①石英・長石・褐色粒<br>②橙色　③酸化 | X=38,870<br>Y=-60,190 |
| | 16 | 五輪塔<br>空風輪 | 長さ(21.9)<br>幅14.9 | | 空風輪である。空輪頂部は欠損している。空輪は宝珠形、風輪は輪状を呈する。火輪に接続するほぞは長さ5.5cm、幅8.0cmである。④粗粒安山岩 | | As-B下 |
| | 17 | 用途不<br>明<br>石製品 | ……<br>……<br>…… | 破片 | 線刻により縦線1本と横線2本単位が2本で区画される板状の④緑泥片岩である。板碑に使用されたものか。 | | X=38,860<br>Y=-60,200 |
| | 18 | 銭　貨 | 円径：2.5cm<br>方径：0.6cm | ほぼ完形 | 北宋銭「政和通寶」初鋳年代（1111年）。 | | E区<br>As-B水田 |



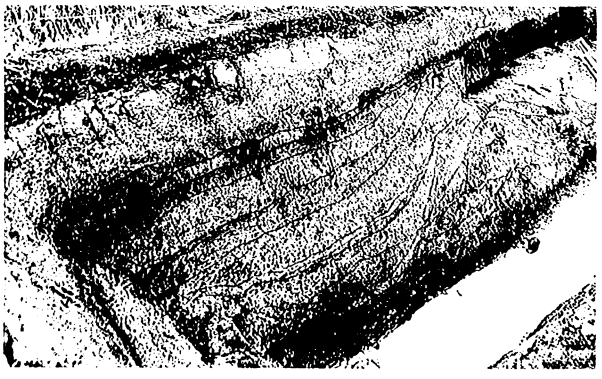
1　遺跡遠景



2　A区北側道 As-B 下面全景

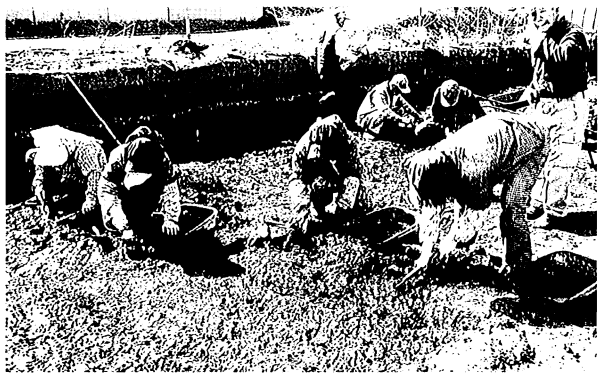


3　同　As-B 下面1・2号溝

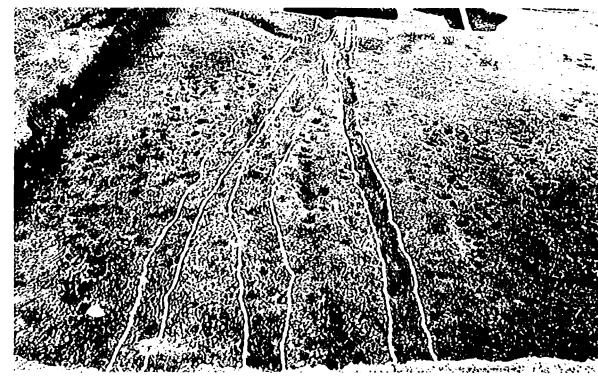


4　同　9世紀前半以降大溝

5　同　As-B 下面　A区北トレンチ



1　作業風景



2　B区北側道　As-B下面14～16号溝

3　同　1号住居跡

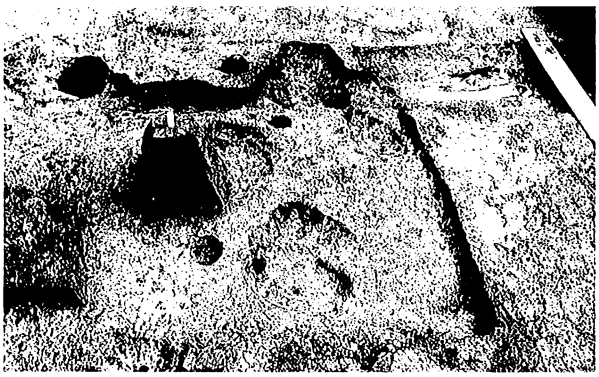
4　同　遺物出土状況

5　同　カマド近景

6　同　2号住居跡

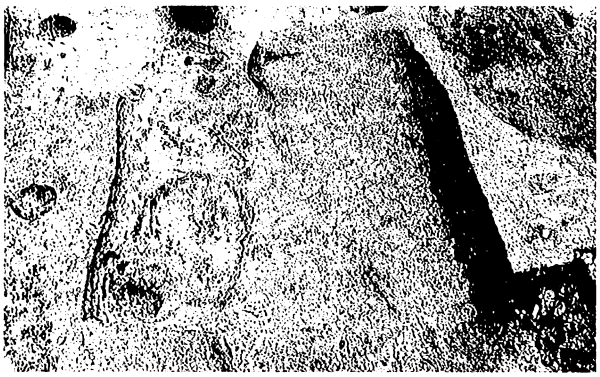
7　同　カマド近景

8　同　7号住居跡

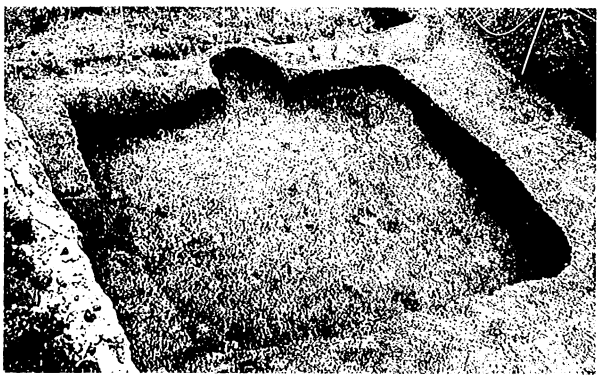


1　B区北側道8号住居跡

2　同　遺物出土状況

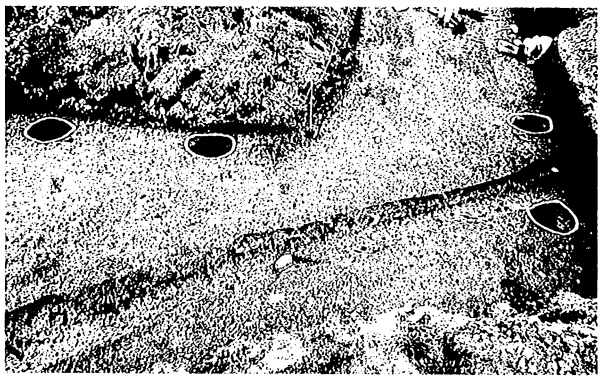


3　同　9号住居跡

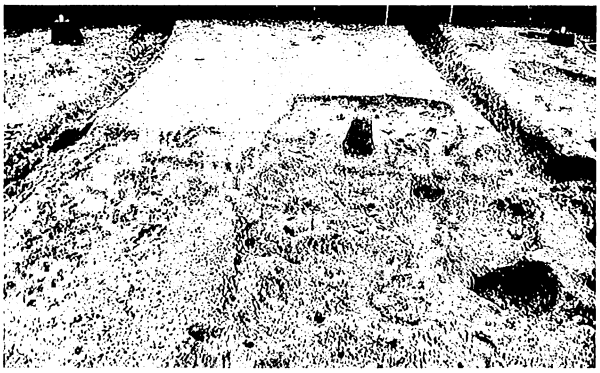


4　同　10号住居跡

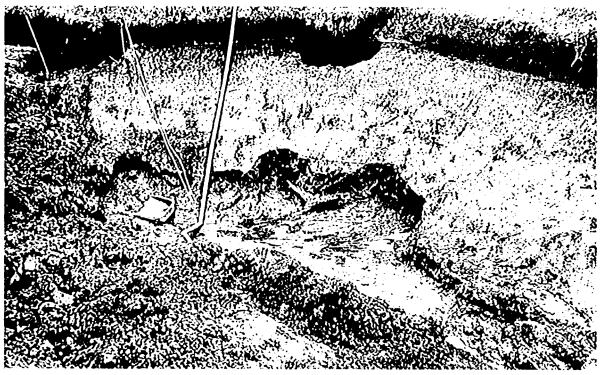
5　同　41号土坑



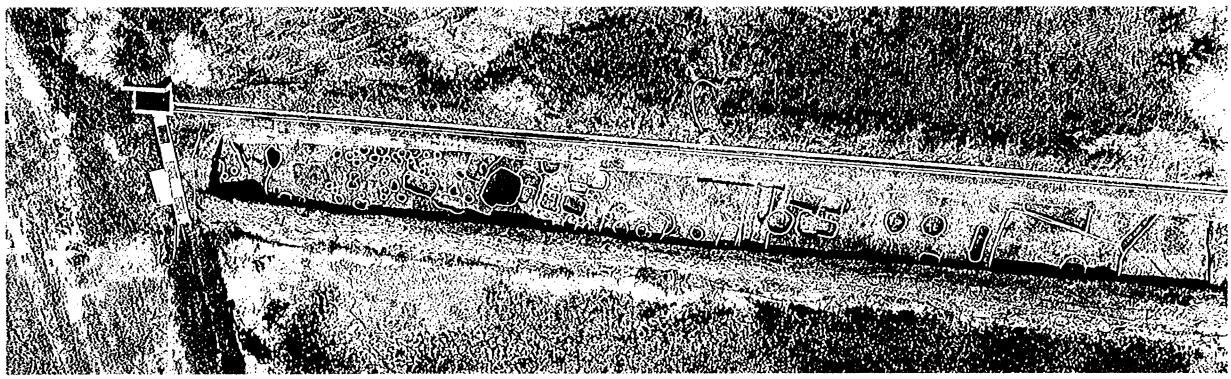
6　同　9世紀前半以前面1号掘立柱建物跡



7　同　10・11号溝（道路状遺構）

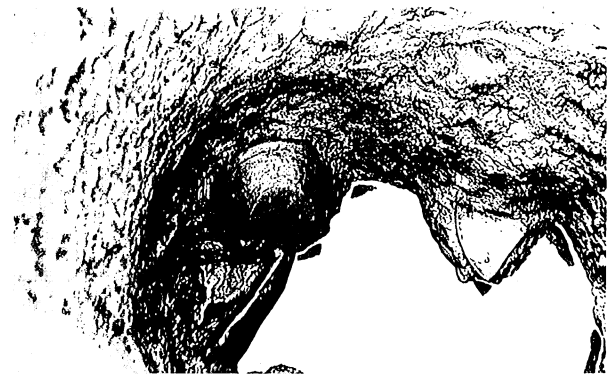


8　9世紀前半以降大溝

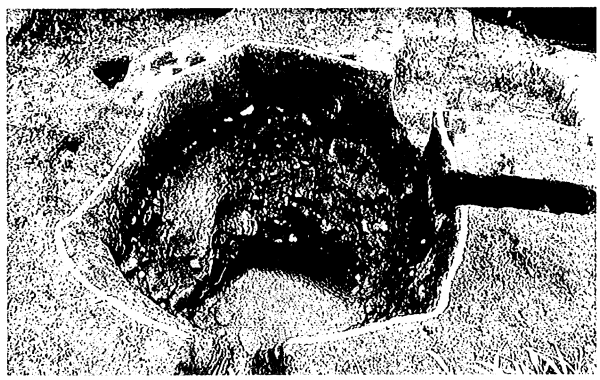


1　C区南側道全景

2　同　1号井戸跡

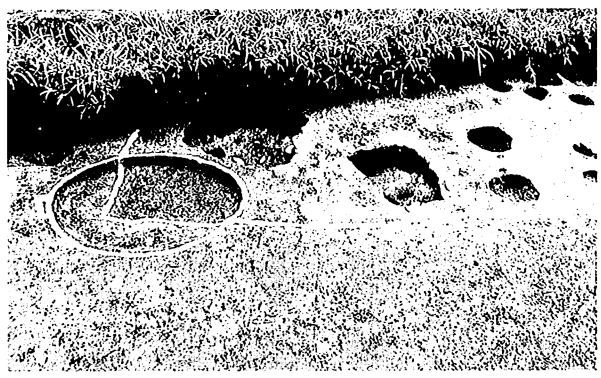


3　同　遺物出土状況

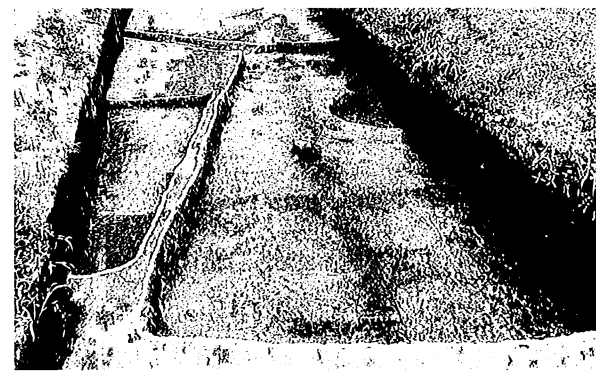


4　同　2号井戸跡

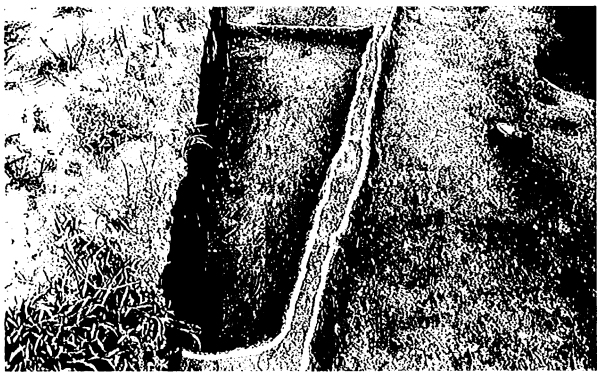
5　同　土層堆積状況



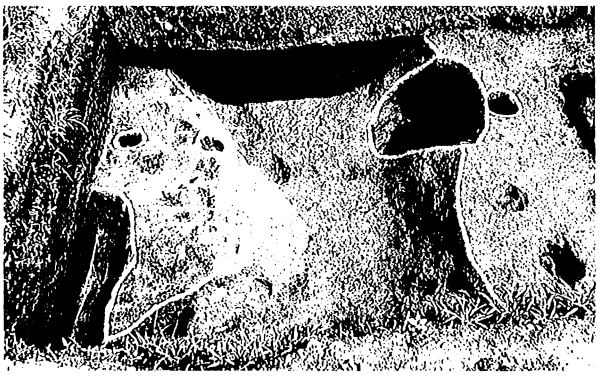
6　同　3号住居跡・5号土坑



7　同　4号住居跡

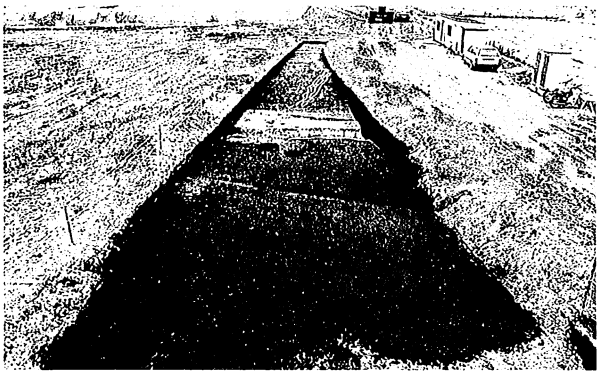


1　C区南側道5号住居跡

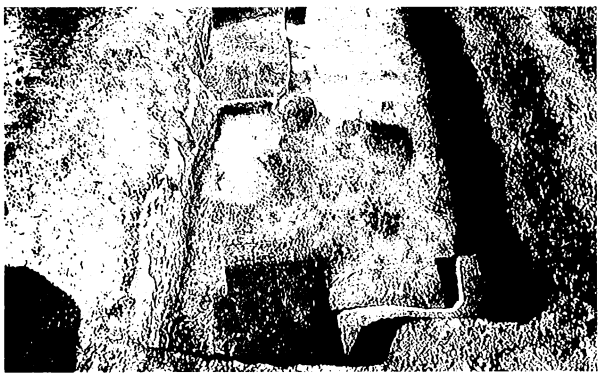


2　同　1号方形周溝墓

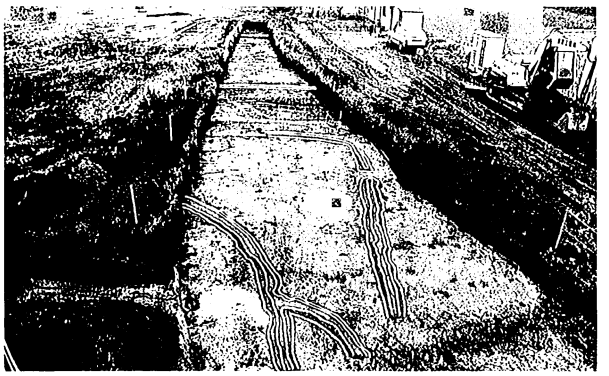
3　同　土層堆積状況



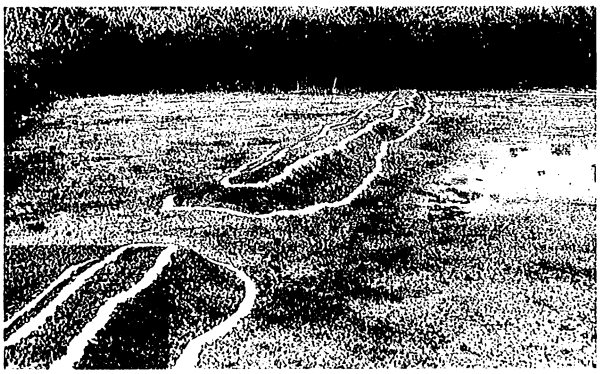
4　D区北側道As-B下面全景



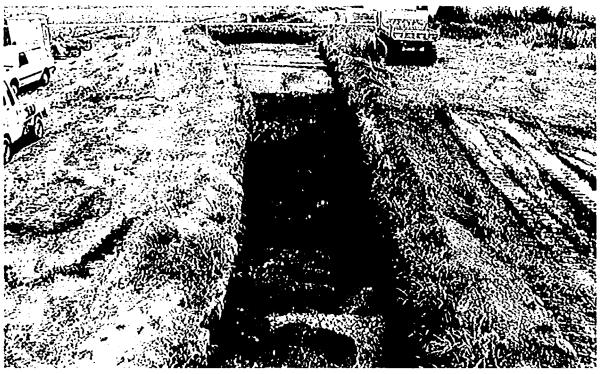
5　同　6号住居跡



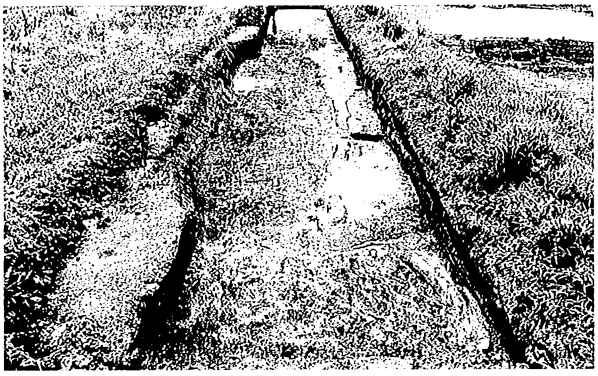
6　同　9世紀前半洪水層下面全景



7　同　9世紀前半洪水層下面水口

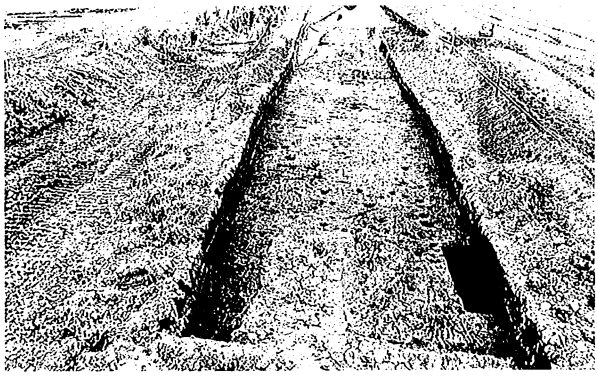


8　同　As-C混下面全景



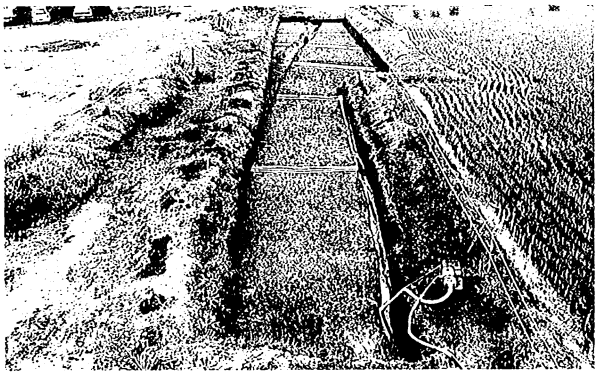
1　D区南側道9世紀前半洪水層下面全景

2　同　As-C混下面全景

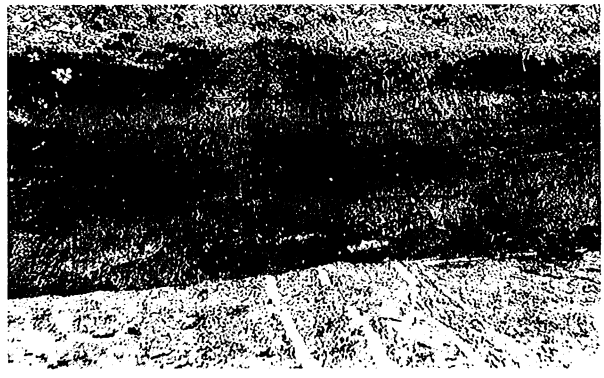


3　E区北側道As-B下面全景

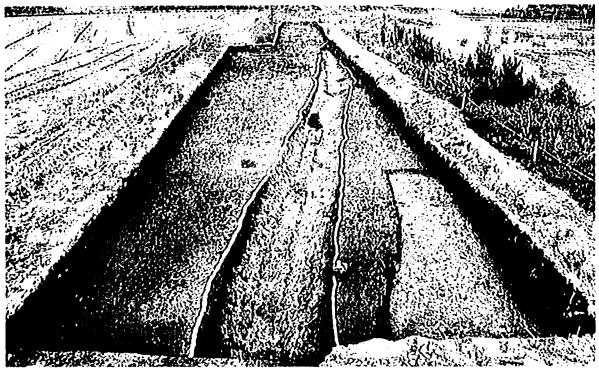
4　同　As-B下面4号溝土層堆積状況



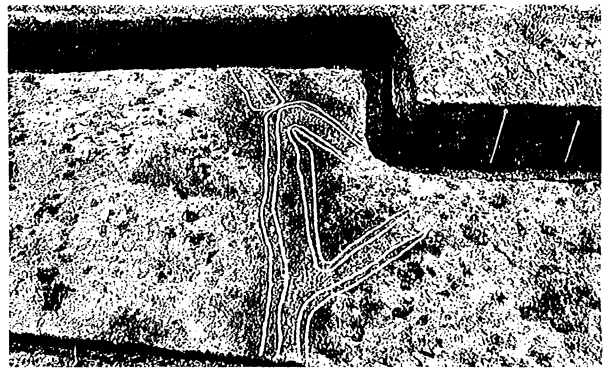
5　同　9世紀前半洪水層下面全景



6　同　土層堆積状況

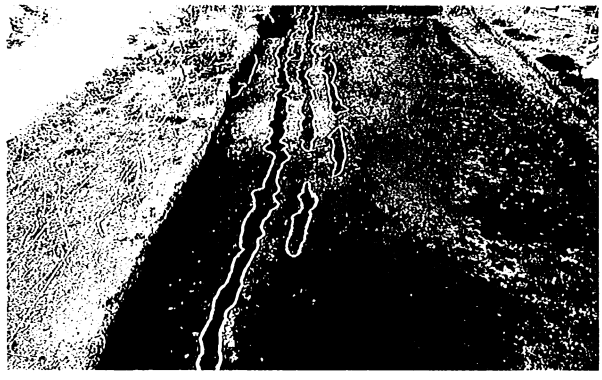


7　同　As-C混下面全景

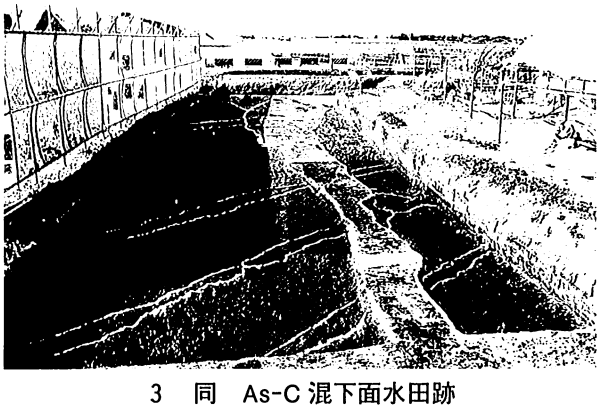


8　同　As-C混下面畦畔

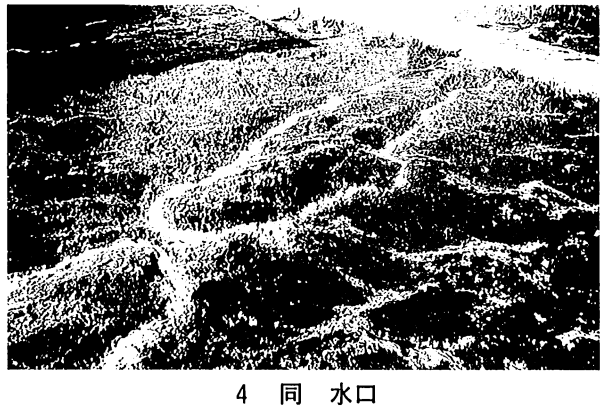
1　G 区北側道 As-B 下面基本堆積土層



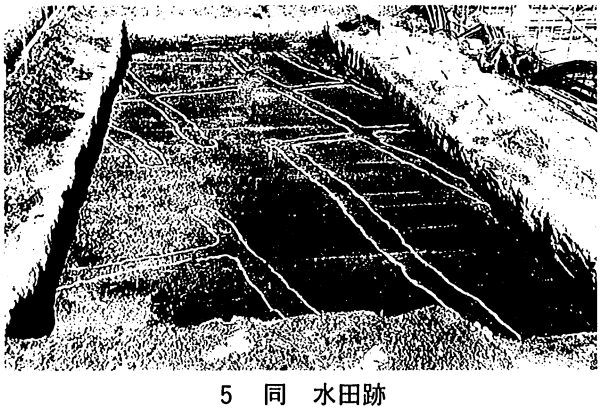
2　同　As-B 下面畠



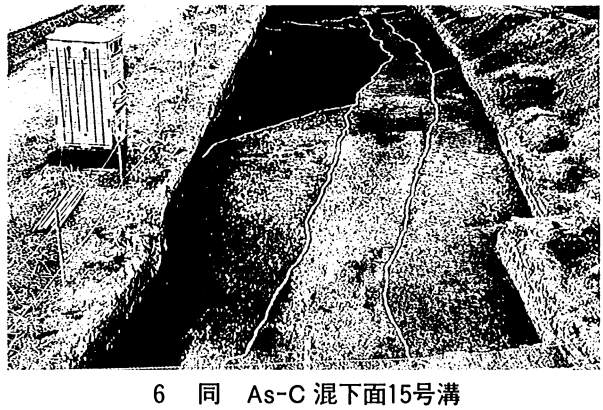
3　同　As-C 混下面水田跡



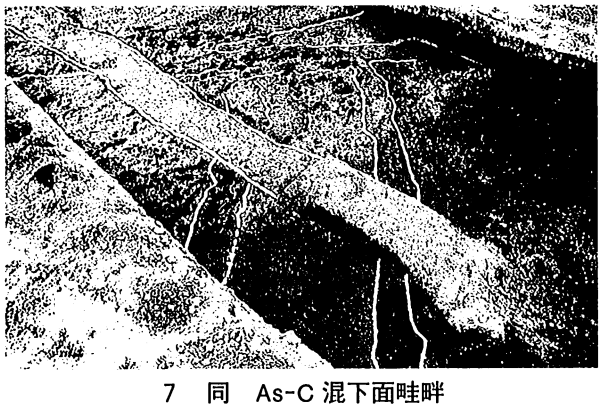
4　同　水口



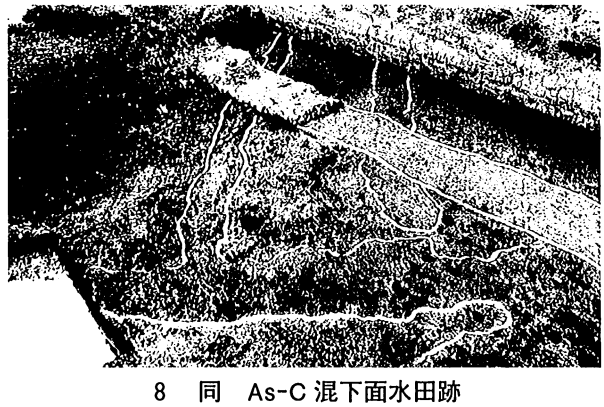
5　同　水田跡



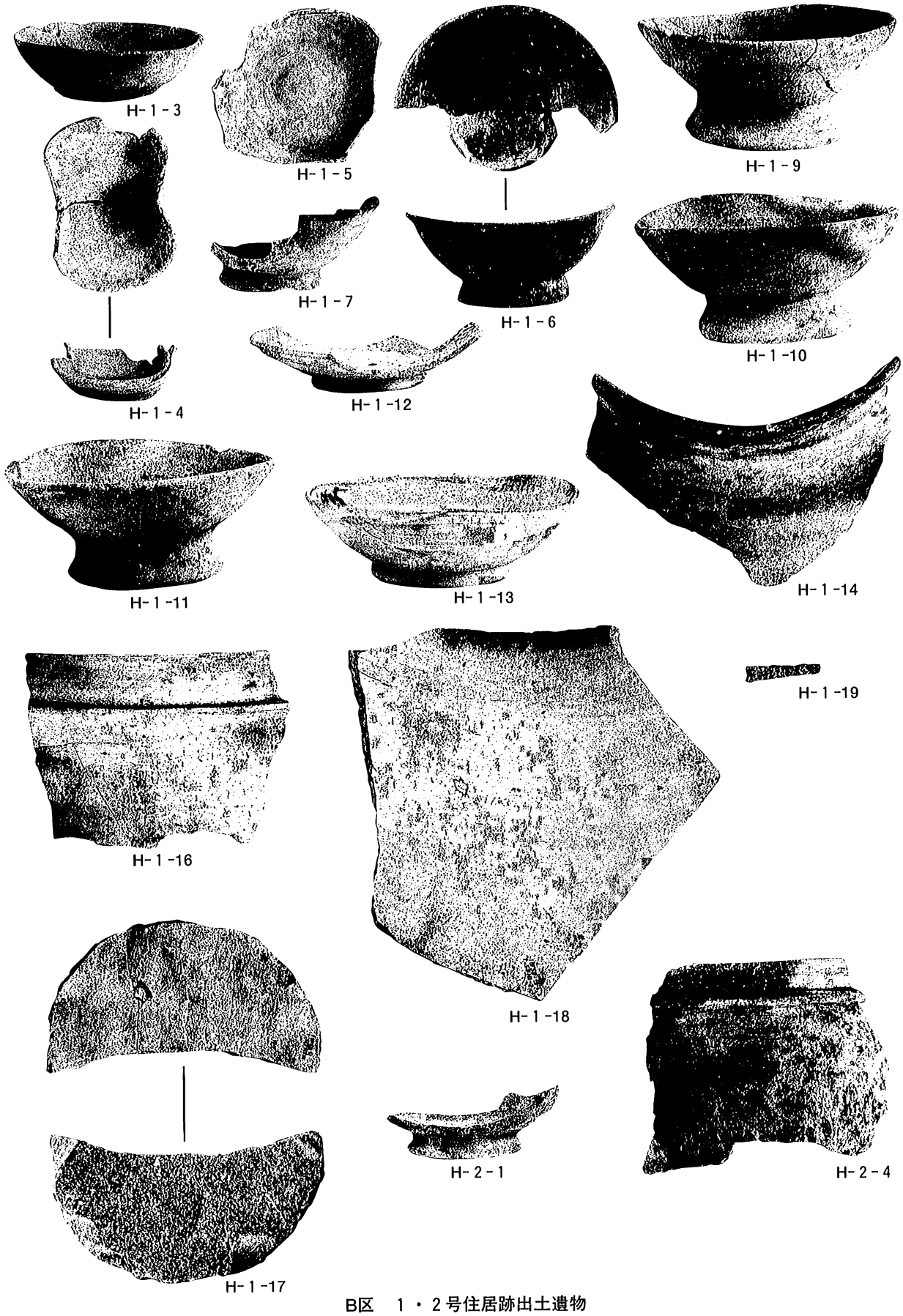
6　同　As-C 混下面15号溝



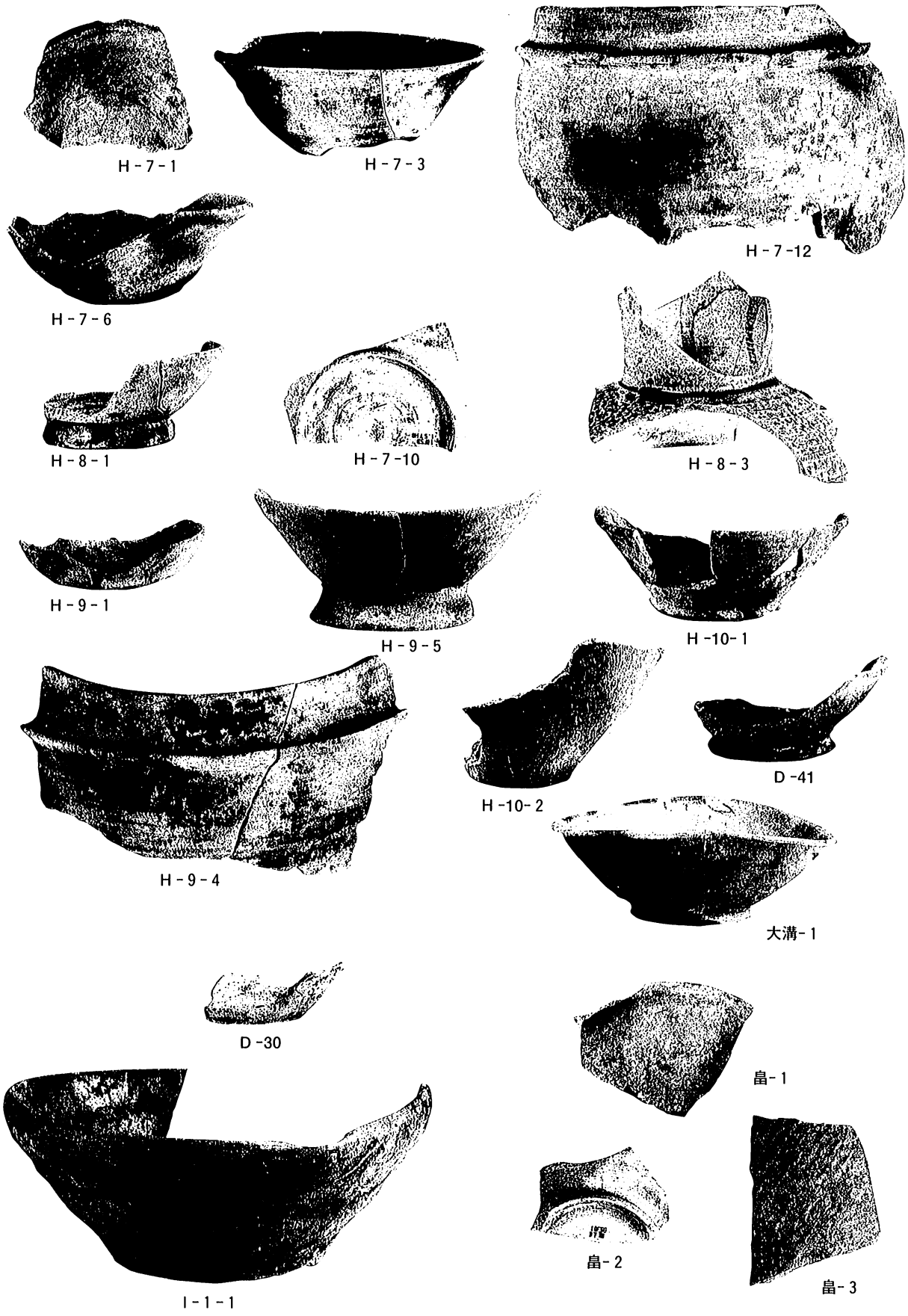
7　同　As-C 混下面畦畔



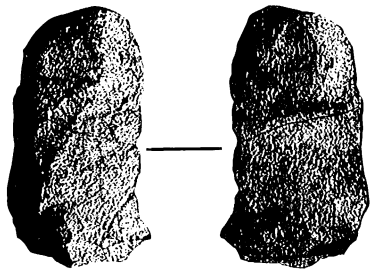
8　同　As-C 混下面水田跡




B区　1・2号住居跡出土遺物



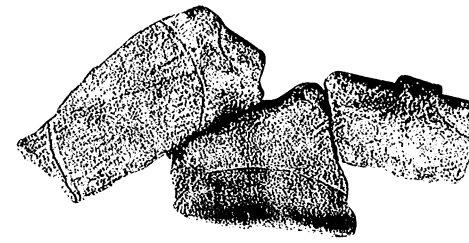

B区　7～10号住居・41号土坑・大溝、C区30号土坑・1号井戸、G区畠出土遺物



遺構外 1

遺構外 2

遺構外 3



遺構外 4

遺構外 5

遺構外 6

遺構外 7

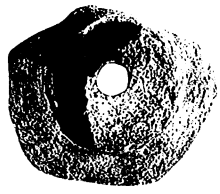
遺構外 8

遺構外 9

遺構外10

遺構外11

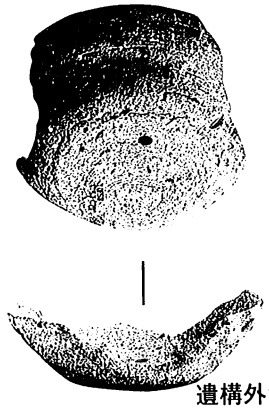
遺構外12



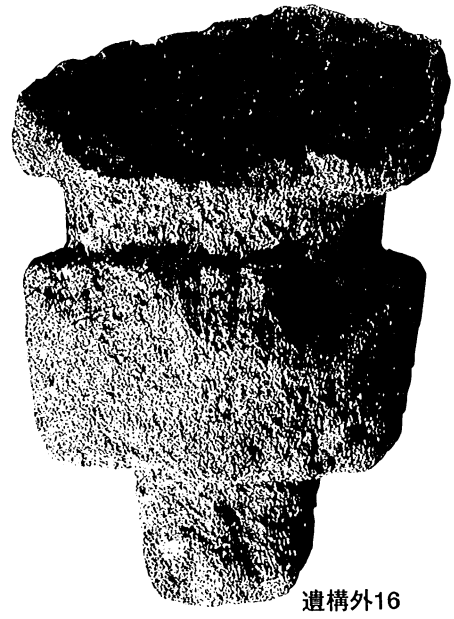
遺構外13

遺構外14

遺構外18



遺構外15



遺構外16

遺構外17

遺構外出土遺物

# 抄　　録

| | |
|---|---|
| フリガナ | トクマルタカゼキニイセキ・トクマルナカダサンイセキ・ニシゼンシャクジサンイセキ<br>シモマスダツネギニイセキ・シモマスダコエドヨンイセキ |
| 書　　名 | 徳丸高堰Ⅱ遺跡・徳丸仲田Ⅲ遺跡・西善尺司Ⅲ遺跡<br>下増田常木Ⅱ遺跡・下増田越渡Ⅳ遺跡 |
| 編著者名 | 近藤晋一郎　千葉孝之　宮内　毅　松田政基　大賀　健　間宮正光　高階敏昭 |
| 編集機関 | 山武考古学研究所　／〒286-0045　千葉県成田市並木町221 |
| 発行機関 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団／〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664-4 |
| 発行年月日 | 西暦1999年３月25日 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | コード<br>市町村 | 東経<br>北緯 | 調査期間<br>(調査面積) | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|
| トクマルタカゼキニイセキ<br>徳丸高堰Ⅱ遺跡 | グンマケンマエバシシ<br>群馬県前橋市<br>トクマルマチ　ホカ<br>徳丸町68-1他 | 10G－26 | 139° 06′ 29″<br>36° 19′ 53″ | 19980423～19990319<br>(1,218㎡) | 北関東自動車道側道道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査 |
| トクマルナカダサンイセキ<br>徳丸仲田Ⅲ遺跡 | グンマケンマエバシシ<br>群馬県前橋市<br>トクマルマチ　ホカ<br>徳丸町75-1他 | 10G－27 | 139° 06′ 47″<br>36° 19′ 54″ | 19980423～19990319<br>(3,402㎡) | |
| ニシゼンシャクジサンイセキ<br>西善尺司Ⅲ遺跡 | グンマケンマエバシシ<br>群馬県前橋市<br>ニシゼンマチ　ホカ<br>西善町1166他 | 10G－28 | 139° 07′ 20″<br>36° 19′ 58″ | 19980423～19990319<br>( 370㎡) | |
| シモマスダツネギニイセキ<br>下増田常木Ⅱ遺跡 | グンマケンマエバシシ<br>群馬県前橋市<br>シモマスダマチ　ホカ<br>下増田町1541-1他 | 10F－4 | 139° 09′ 39″<br>36° 20′ 52″ | 19980423～19990319<br>( 614㎡) | |
| シモマスダコエドヨンイセキ<br>下増田越渡Ⅳ遺跡 | グンマケンマエバシシ<br>群馬県前橋市<br>カミマスダマチ　ホカ<br>上増田町1535他 | 10F－5 | 139° 09′ 44″<br>36° 20′ 53″ | 19980423～19990319<br>(2,449㎡) | |

| 所収遺跡名 | 種　別 | 主な時代 | 主　な　遺　構 | 主　な　遺　物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 徳丸高堰Ⅱ遺跡 | 中世<br>館跡<br>水田跡 | 弥生以前<br>～中世 | 中世面　堀２条、土坑12基、溝３条<br>浅間Ｂ軽石下面　畦畔２条、土坑１基、ピット５基<br>弥生時代以前面　溝３条、土坑１基、ピット15基 | 五輪塔火輪部・羽口<br>火舎 | |
| 徳丸仲田Ⅲ遺跡 | 中世<br>館跡<br>水田跡 | 弥生以前<br>～中世 | 中世館跡検出面　溝４条、ピット23基<br>浅間Ｂ軽石下面　溝20条、畦畔39条、土坑２基、ピット28基、水田跡、竪穴遺構１<br>ＦＡ堆積面　帯状遺構１条<br>浅間Ｃ軽石混土層下面　溝11条、畦畔３条、土坑７基、ピット16基<br>弥生時代以前面　溝19条、土坑48基、ピット10基、不明遺構14 | 石鏃<br>土師器（台付甕・甕）<br>須恵器（坏）<br>土師質焙烙<br>常滑甕<br>瀬戸焼香炉 | |
| 西善尺司Ⅲ遺跡 | | 弥生以前<br>～中世 | 浅間Ｃ混土層下面　溝５条、堀１条、土坑２基、ピット９基<br>弥生時代以前面　溝１条、土坑５基、ピット12基 | 土師器（台付甕・甕）<br>近世陶磁器 | |
| 下増田<br>常木Ⅱ遺跡 | 水田跡 | 平安<br>～近世 | 畦畔・道路状遺構・溝<br>９世紀前半洪水層、畦畔３条<br>近世以降の土坑３基、溝７条（道路状遺構含む） | ナシ | |
| 下増田<br>越渡Ⅳ遺跡 | 水田跡 | 弥生以前<br>～中世 | 中世面　土坑15基、ピット15基<br>浅間Ｂ軽石下面　溝８条、水田跡、畠跡<br>９世紀前半洪水層～中世面　溝２条、土坑21基、ピット多数、住居跡３軒、井戸２基<br>９世紀前半洪水層下面　溝６条、畦畔12条、住居跡７軒、土坑９基、掘立建物２棟<br>シルト上面　方形周溝墓１基<br>浅間Ｃ軽石上面・下面　水田 | 剥片石器・縄文土器（浅鉢・深鉢）・弥生土器（甕）・円筒埴輪・土師器（坏・甕・台付甕・高坏・甑）・須恵器（坏・耳皿・羽釜）・須恵質鉢・灰釉陶器（埦・皿・広口瓶）・政和通寶・五輪塔空風輪・転用硯・鉄刀子 | |

北関東自動車道側道道路改良事業
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

**徳丸高堰Ⅱ遺跡**
**徳丸仲田Ⅲ遺跡**
**西善尺司Ⅲ遺跡**
**下増田常木Ⅱ遺跡**
**下増田越渡Ⅳ遺跡**

印　刷　平成11年3月20日
発　行　平成11年3月25日

編　集　山武考古学研究所
発　行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
印　刷　(株)　文化総合企画
TEL　0476(93)0593